

THE JAPAN'S MOST REMARKABLE S-M MAGAZINE

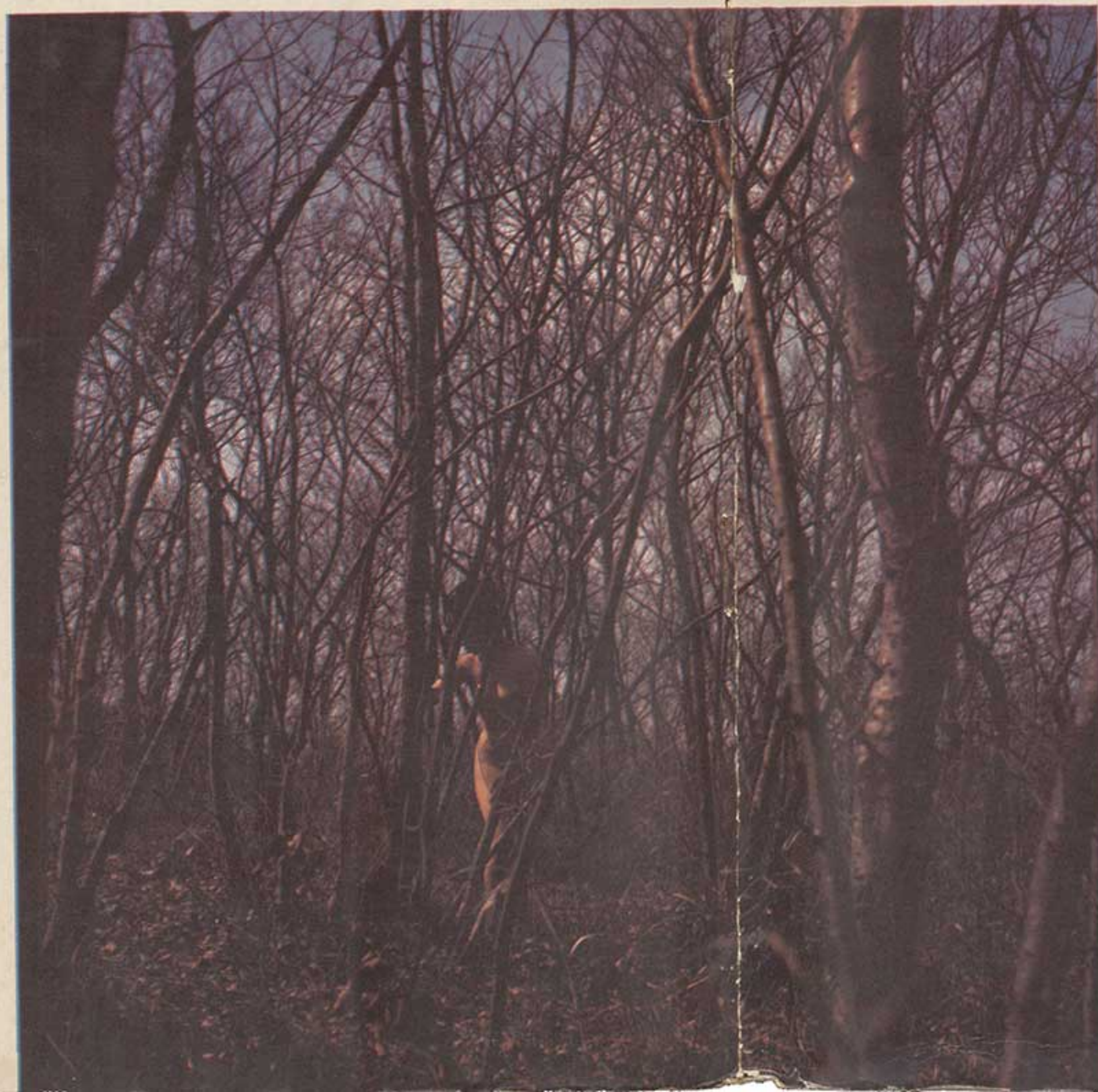
昭和38年6月7日日本国有鉄道特別扱承認雑誌第1580号・昭和31年2月3日第3種郵便物認可・裏窓第9巻第12号 昭和39年12月1日発行（毎月1回1日発行）

裏窓

THE JAPAN'S MOST REMARKABLE S-M MAGAZINE

昭和38年6月7日日本国有鉄道特別扱承認雑誌第1580号・昭和31年2月3日第3種郵便物認可・裏窓第9巻第12号 昭和39年12月1日発行（毎月1回1日発行）

裏窓



12月号

定価 300円
IBM 1807

裏窓の 合本用ファイルをお 申し込みください!

○本誌の新装判を簡単に合本できる、秘蔵用ファイルです。
○堅牢優美な高級仕上げで、これさえあれば、お揃えになったバックナンバーが散逸する心配もなくなりますし、また、好みの頁を取り外して、ファイルすることもできます。

○御希望の方は、頒価130円に送料20円を添えて、スグお申し込み下さい。

○なお御注文の際は「裏窓用ファイル」と御指定ください。

○裏窓の1年間(12冊)直接購読者にはファイル1個を無料で差し上げます。

東京都中野区松が丘2丁目21番
株式会社 あまとりあ社 営業部



★直接購読会員募集★

本誌を毎月確実にお手にいれるために

▼三ヵ月会員… 九〇〇円
▼六ヵ月会員… 一、八〇〇円
▼一ヵ年会員… 三、六〇〇円

■いずれも、店頭発売前に直接お送りいたします。送料は、当社で負担します。
■〇月号から三ヵ月分、とか、〇月号から六ヵ月分、というふうには、はじめの号を、はつきりとお書きください。
■住所氏名を正確に、はつきりとお書きください。
■直接購読会員には、写真の無料サービスをいたします。

東京都中野区松が丘2丁目21番

あまとりあ社

営業部

三ヵ月…三枚 六ヵ月…六枚
一ヵ年…十二枚 (手札型)

★あまとりあ社からは 毎月たくさんの本が発行されております

ハガキに「裏窓でみた 本の目録を送れ」とだけ書いて お送りください
ぞくぞくするほどおもしろい当社の本の目録を無料でお送りいたします
(ご住所とお名前をはつきりお書きください)

裏窓・十二月号

(第九巻・第十二号)

定価 300円・送料18円

印刷…昭和39年11月25日
発行…昭和39年12月1日
編集兼…飯田 豊
発行所…向印印刷株式会社
印刷所…伸光印刷株式会社
発行所…株式会社あまとりあ社
東京都中野区松が丘2丁目21番

3151
(振替東京・55408) 電話 (386) 3152
(あまとりあ社宛) 3153

新刊発売中!!

800円 丁90

シヨツキング画集

共著 藤見 郁
T. MORISCI TA



★アメリカのS・Mマニアを唸らせたジョン・ウィリーの華麗な縛り絵を筆頭に、ウィリーの模倣から入ってこの道一流の画家になったスタントンの名作、奇怪な道具を好んで使うジムの責め画、その他、マリオ、エネグにいたる眼をみはるばかりの作品が、総枚数二百二十九枚ノアート紙オフセット印刷の豪華本



東京都中野区松が丘2-21 (振替口座 東京55408) 株式会社 あまとりあ社

裏窓叢書ご案内

第一集 狂異地獄肌

飯田豊吉著 中島喜美絵

450円 送料80円

第二集 黒蛇呪縛

黒木 忍著 山田彬弘絵

400円 送料80円

第三集 地底の牢獄

藤見 郁著 鬼頭 暁絵

400円 送料80円

第四集 残酷裸女絵巻

万里小路崑著 豊田みのる絵

400円 送料80円

第五集 責め肌忍法

万里小路崑著 古正英生絵

400円 送料80円

第六集 地獄谷の女たち

塔婆十郎著 山田彬弘絵

450円 送料80円

第七集 大利根柔肌草紙

花巻京太郎著 鬼頭 暁絵

450円 送料80円

第八集 悪魔術の塔

九十九十郎著 中川彩子絵

450円 送料80円

第九集 妖奇まんだら秘帖

潮一樹著 小日向一夢絵

450円 送料80円

お手頃な値段で
いっぱい！
たのしい読みものが
あまとりあ社の特選出版物！

■ 東京都中野区松が丘二丁目二一番
株式会社 あまとりあ社
振替・東京五五四〇八



★ S M 芸術の粋をあつめた豪華版 ★

グラビア48ページに選りぬきのS写真・責め絵が満載

+++++ 内 容 +++++

■ 絵画集 ■

落合竜二凄艶画集
沖涉二特選傑作展
中川彩子・女奴隷の檻
中川彩子・吊り蔵
鬼頭暁時代妖美画集
羽仁京志傑作選

■ 写真集 ■

滝の女・石の部屋
密室・絶望の風景
金井行雄作品集・
さるぐつわ・縄目
凝固



▼ながいあいだお待ち致しました。洗練されたセンスと伝統を誇る裏窓が、そのスタッフの総力をあげて、ここに、S写真と責め絵を豊富に掲載したグラフを発行致します。

▼このような写真絵画集の発行は、数年前より愛読者のみなさまからご要望を頂いておりましたが、このたび、ようやく刊行に至った次第であります。

▼定価は、送料とも一部千円です。

▼書店では発売いたしません。

▼厳重に密封して、個人名でお送りいたします。安心しておまかせください。

▼お申しこみには、住所とお名前のほか、かならず年令を明記してください。▼二十五才未満の方には、お売り致しません。未成年者は、絶対にお申しこみにならないでください。

耽美芸術グラフ

第一集

定価 千円
送料とも

★ 二十五歳未満のかたはお申しこみにならないでください ★

裏窓・十二月号・目次

表紙モデル・小笠原純子
カメラ・吉田久
目次カット・中川彩子
とびらカット・落合竜二

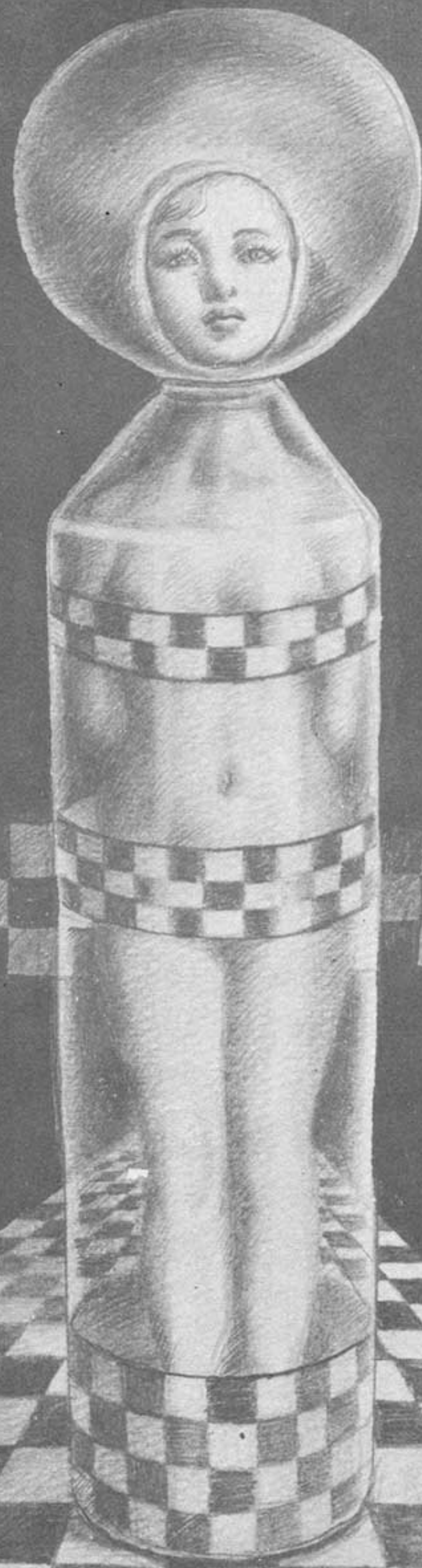
業火の館……潮一樹 (70)

死の島物語……南郷京助 (82)

マッジの別荘……テディ・峰川 (34)

因果おぐるま……庄内裕司 (18)

スコリオーゼ女学院……春川光彦 (126)



既刊号総目録

ある奴隷の生態……瀬川美岐

哀話ツンツン節……豊中夢夫

奢れる女神への祈り⑨……森本愛造

三面記事の楽しさ

映画「マーニー」について……原忠正

S M映画評判記……藤見郁

私のコレクションから②……森下高茂

裏窓文芸評論……安東泉

裏窓タウン

ゴルドンの記憶②……阿麻哲郎

読者コーナー・編集後記

花の中……光谷東穂

檻……松山省一

(48) (40) (208) (194) (184) (26) (107) (152) (179) (12) (62) (170) (162) (144)





秋の灯

カメラ・吉田 久



裏

窓



12 月 号

第 9 卷 第 12 号

三面記事のたのしさ

——他人の船の沈むを見るは楽し——

新聞から三面記事を取り除いたら、誠に味気ないものとなる。ちやうど一軒の家で言えば、茶の間がなくなつたようなもので、くつろげる場所がなくなる。

まず大抵の人は、新聞を三面記事から読む。一面の固い記事を敬遠しても、三面記事にだけは目を通さないと、その日のおなかの通しまでが悪くなる。

政治、経済面といった堅い記事に関心を持つ硬派の読者も、それでもやはり社会面と無縁ではない。さもないか、さうに、いつそうくつろいだ気持ちで社会面にも目を通す。

社会面には又カミそのにおいがする。人事ならず、じかに身につまされる直接的な生活感覚というものがにじんでいる。その日その日の、社会全体の、直接に訴えてくる喜怒哀楽の生な歴史が、日々綴られてゆく。

三面記事の登場人物は誠に種々雑多だ。政治家、学者、映画スター、サラリーマン、実業家、スポーツ選手、土方、バタ屋、ヤクザ無職者、または人妻、二号、女給といったぐあい、およそここに登場させられない職種はまず考えられない。

だが、三面記事の主役は、何といつてもいわけゝる悪人？ たちだ。まず、兇悪な人殺し、殺傷犯人、脱獄囚、それから強盗、詐欺、窃盗、密輸、麻薬ブローカー、ヤクザといった面々、これが第一線のスターである。

最近、急激にのし上がってきたダークホースのピカ一が変質少年、それに国鉄新幹線に妨害をこころみる不逞のヤカラ、といったぐあいに、特殊な個性で進出してきたメンバーもある。その中で、相も変わらず、贈収賄の政治家や実業家が、戦前からのキャリアをほ

こつて、根強い実力をほこつているところなどはさすがである。

彼ら出演者が演じるドラマの性格も複雑多岐、あらゆるケースが盛りこまれる。ハードボイルド、スリラー、本格・変格の推理物、国際スパイからヤクザ路線、一乗寺下り松の決闘？ までである。

痴話物路線もこれに並行して本妻と二号、情婦と間男等が入り乱れて活躍、硫酸等を振り回して派手なところを見せてくれる。

最近下火になつたのは心中物、時代の波を反映してか、天城山心中を最後に、その後これに続く大作はないようだ。お客さんの好みが変わつて、心中物では売れないという見通しから、作られてもほとんどはオクラ入りになつて日の目を見ないであらう。

その点、社会劇の一コマ、ドキュメンタリ



―調に生活苦や事業不振から一家心中、といった悲劇は、やはり根強く読者の心を打ち続けるものがある。息が長く今でも紙面をしばしばにぎわしている。

人情物もこれにつづき、家庭不和や、生活苦にからんで、母子の無理心中といった悲劇に、または非行少年少女の問題もこれにからんで、いろいろとテーマを広げてくれる。

風刺喜劇調のものでは、郵便局や会社・組合の会計責任者が、公金を横領するケース、大抵主役は女で、それをめぐって三枚目の男たちがテンヤワンヤ―

ドキュメンタリー物で、最近特に売れ出したのは交通事故、派手な車同士の正面衝突からひき逃げ事件まで、毎日このために血を見ない日はない。生々しい記憶の中に、佐田啓二の事故死がある。

台風シーズンになると台風情報、台風第何号、不気味に南方洋上にあって、本土をねらう。ということ、ちょっとした戦争気分。まるで敵の大機動部隊の襲来か、あるいはよみがえった原始の大怪獣、ゴジラかモスラの襲来のように緊張する。いったい、いつ、どこに上陸するのか、防衛体制は万全なのか、これはまさしく戦争物―

東京砂漠という俗称が一般化されたが、社

会面では東京都の芸名は数多く用いられる。

東京ジャングルに魔都東京という。世界一巨大な田舎、ともいわれ、その中枢行政体を東京伏魔殿と称す。今夏の記録的な水不足に、バケツの水を押し売りしようとしてグレン隊がつかまったという寸劇は、史上に残る風刺喜劇としての傑作であった。配給元は違いますがこの傑作をプロデュースしたのは東京都、こういういいセンスで、次々すばらしい風刺劇を産み出す功績は大きい。

何といっても社会面は広い大衆一般のための国民劇場のようなものだ、そこで日々演ぜられるドラマを見たり聞いたりすることなしに、われわれは日が送れない。中毒患者みたいなものである。

三面記事には、きれいごとでは記事にならない。それは適当に、美談や心の暖まるような、というフレーズの、いわゆる人道的な佳話も出る。そういう種類のものも適当に要求される。だから、その必要によって、必要に応じた美談が捜され、また場合によっては、ある程度演出されて、美容整形のメーキャップよろしく美談の登場となる。だが、この種のもの、本当はさほど読者の心をひくものではない。何かそこに作為性といった何がし

かを敏にかぎとるからだ。

たとえば、身体障害者に愛の手を、あるいは地震や台風による被災者、よるべない孤児たちに愛の手を、ということ各地から義援金や援助物資がつのられる。新聞社や文化事業団体が音頭をとって集まったお金や物資をそれらの人たちにおくる。けっこうなことである。よい趣味である。ケチをつけない。いい。だが、どこか釈然としない。いつも、年中行事のように、チマタにはこうした善意があふれていて、有名スターたちや知名人の慈善バザーや公演やリサイタルが開かれていて、なおいつも、世の中には孤児や被災者や身障者が、その数も減らず、その問題も真に解決されず、いつも中ぶらりんな格好のまま、いつそうかえってみじめな状態で取り残されている。

善意とは、あえていえば、一種の品のよい趣味のようなもので、レクリエーションのよいなもので、それを果たすために、必要に応じて、かわいそうな人たちが捜し出される。あんまり数が多すぎても困り、少なすぎても困り、ちょうどよい数に、常にあわれな人、かわいそうな人が居てくれて、そこで施し物や優しく振るまってあげる、という楽しみができる場所と機会が得られて、という欲

望を果たしてやるための三面記事——遊覧パスのコースの中にこれを含めることも必要だが、しかもそこに何がしかの作為性がついて離れない。これが読者の興味をソいでしまう。チマタの善意や美談が、真の善意や美談として物事を根本的に解決するのでなくして、かえってそのために問題の本質を真綿でくるむようにぼかしてしまい、みじめさはかえっていつそうみじめになる、ということの本能的に知るために読者は興味をソがれる。

身障者や被災者や孤児たちが、形をかえて結果的に一種の見世物扱いになっていることを、これを冷厳に認めないで、美談や善意という、気まぐれみたいなきれいずくめの人工着色剤で色づけされることへの不満、美談の持つ偽瞞性に最初からハナ白んでしまうのである。

端的に、読者は美談より犯罪記事を喜ぶ。犯罪は、兇悪であればあるほどよろしい。交通事故は、派手であればあるほどよろしい。人のケンカほど見て面白いものはない。日ごろ社会的に地位も名誉もある人のスキャンダルも派手にスッパ抜かれたほど、記事はいつそうおもしろい。トラブルもあったほうが面白い。

幸いなこと？ に、いつもこうしたタネに

は事欠かない。毎日毎日新しい事件に新しい不祥事が起こる。あまり多く起こりすぎてこれをなげく声も大きい。世の中も末世だと言いい人道地におちたと慨嘆する。もっと平和な、事故や不幸のない平穏な世の中にならないものかとなげくのである。そのためには政治だ教育だ、あるいは良い本を、良い映画を、もっと取締まりをと、これも善意の声である。だがここでも何だか釈然としないものが感じられてくる。

善意の声の、本音のあるところを本当に聞いてみたい。

三面記事から、犯罪に関する記事、他人の不幸に関する記事が全く消えてしまったら何が残るか。三面記事そのものがなくなってしまう。三面記事がなくなった新聞はどんな新聞になってしまうか。誠に味気ないものとなるであろう。得手勝手なものかも知からない。しかし人間とは、本音をたたくとこんなものである。不幸や残酷な事件の記事を読むことで、それと対比して自分の幸福を実感を実感するのである。「沖に他人の船の沈むを見るは楽し」とは、ローマの賢者、キケロが言ったことばである。これをズバリ、そのまま認めることは実に辛いことかもしれない。しかし、人間の本质は、こんなものである。辛く

ともまっすぐに認めねばならない。その本質に迎合すべく役目づけられたものが三面記事だ。

本音を吐かない人種がいる。吐かないこと自体が既に偽善となる。そういう手合いが、声を大にしながら、結構それなりに三面記事を楽しんでいる。楽しんだことはすっぱり口をとぎして、そういう風潮を慨嘆する自分の氣質を、またそれで楽しんでいる。自分が自分の正義観や善意に酔ってしまふ。自分が世の中の中心にあって、自分やその周囲だけが善人に思えてくる。他のいずれもくだらなく、邪悪に思えてくる。

「浜の真砂は尽きるとも、世に盗人の種は尽きまじ」

有名な石川五右衛門のせりふは、そのまま今も生きている。つまり「世に三面記事の種は尽きまじ」である。

神ならぬ身であれば、とうてい人間に完全さは望めない、のである。いつの世にも、どんなに完全な理想的な社会になっても、それでも人間の不完全さは、不完全なものとして残る。もし、それが完全であり得たとしたらこんな退屈な、こんな無意味な世界はないであろう。

「身体髪皮これを父母に受く」五体完全に健康に育つ者の陰に、身障者が生まれ、不具者が育つ。これは確率の問題で、この悲劇を事前に100%防止することは不可能であろう。健康な者は、健康でない者の存在で己の健康のありがたさを、初めて知らされる。不具者は、自分同様な不具者や、もっとより以上の悲さんな不具者が存在することで、自分がまだ絶望すべき状態でないことを、知らされはげまされる。

幸福な者は不幸な者を、不幸な者はもっと不幸な者の存在することを知らされてなぐさめられる。日常の生活に追われ、疲れている人々は、そして日常の単調な平凡さにあいている人は、刺激を求め事件を求める。そこでは自分とまるで関係のない他人が、事件の当事者となりその渦中に巻きこまれ、罪人になったり破産をしたり自殺したり、殺したり殺されたりする、そういうニュースに刺激を求めなぐさめを得る。

宿命ということばを信ずるとしよう。無事泰平なしかも健全な生活を、一生波らんなく終われる幸せの星を持った者の陰に、不幸な、しかも陰さんな宿命を負った者の存在も避けられない。これも確率の問題だ。

境遇や環境と同時に、性格の問題がある。

本人としては、どうにもならない、最も損な境遇と性格を先天的に受け継ぎ、だれもがひきたがらない最も不幸なクジを引き当てて人生を生き始めたとき、そこに何が起るだろう。おもに、三面記事で、一番活躍させられるのは彼らだ。彼らは人の代わりに貧乏クジを引き、つまり、彼らがそのクジを引いたお陰で他の者はそれを引かずにすみ、しかもその上、健康で幸福な他の者たちへ、日々の話題と刺激を提供し、そのために社会に適度の緊張を与えることで、日常の無為から来る不安や、または政治に対しての不満からくる社会不安を事前に解毒してゆく。そして、そのために検察官僚を初め多くの警察官に安定した職場を保証し、新聞記者やカメラマンに仕事を与える。

新聞記者やカメラマンは、そこにセンサーショナルな事件が起きないとつまらないと思ひ、警察官は犯人が兇悪でなければつまらないと思ひ、読者は三面記事がないとつまらない。そのつまらなさを救うべく、身命を賭して大方のご期待を満たすために、運命づけられた生活破産者や性格破産者に、われわれはどんな目を向けるべきか――

意志の強い性格がある、意志の弱い性格が

ある。ほがらかで外向性で、人に愛される性格がある。内気で陰性で非社交的な性格がある。まず大半、それらの性格は先天的に決定し、当人にとっては不可抗力なその後の幼時期の環境で定まってしまう。男と女の出生率の比率が、ほどよく天の配剤で按配されるがごとく、それらの性格もそれぞれバランスよく或る比率が保たれて産み出されてゆく。あらかじめ、どのクジをひくべきか、自己の意志による選択は許されない。

性格自体に善悪の区別はつけられないのだ。それでも良い性格、ワリの良い性格、悪い性格、ワリの悪い性格がある。大半は運、不運で決まる。

精神分裂的な性格がある。そのこと自体、その人の罪ではない。これをブルジョワ学者がお先棒をかついで、魔女狩りならず、精神分裂傾向者狩りを提唱している。ドロ水の味のにがさを味わった者でないと、こういうお先棒かつぎが、本来どんな意味で最も質の悪い罪悪であるかを、トント理解できない。

犯罪傾向者狩り、変質傾向者狩り、アブ傾向者狩り、反社会的傾向者狩りと、狩り出すことにキュウキュウとする彼らの思考法は、

三面記事をだれよりも楽しく読みながら、マユに八の字を寄せて、天下国家をなげく種類

のヤカラの思考法である。

「いつの世にも、どんなに完全な理想的な社会になっても、それでも人間の不完全さは不完全さとして残る」と書いたことは、決して「理想的な社会」「より完全さを目ざす真に向上と自由を望む社会」の、前向きの姿勢に背を向けるということではない。

背を向けるどころか、そうしたくないために見つめたいのだ。三面記事をめくっての、人間のアリティの状態との関連において、自分の境遇や嗜好や思考法や好みや、健全さを中心において、他を律することのとてもないあやまりであることを、見つめたいのだ。これをまっとうに見つめる心を育てること、これがいうなれば教育というものであろう。

今やオリンピック。四年前、ローマで「アリベルチ・ア・トウキョウ」と別れた選手たちが、今度は「ボンジョルノ・トウキョウ」と、海のかなたからやってきた。集まる外国人はざっと十四万人。そこで、心配されたのが異国人との男女関係——東京都民生局が「婦人保護のてびき」というのを都内に配布した。それには「——当面の問題としてはオリンピック大会開催時における東京都内の風紀的環境の浄化と、若い婦女子の転落防止に

ご協力をお願いするためのものである」と書いてある。

民生局の中野ツヤ婦人部長は

「若い人のための性道徳、エチケットは当然ふだんから、いなければならぬのですがこういうチャンスにやろうというわけなんです」

と言っている。一外人観光客が、「東京で日本女性から病気を移された」と民生局長当の郵便で抗議してきた事件などが、中野部長を「まさに国辱もの」となげかせているのである。しかしこの国辱事件は、いったい道徳問題であるのか、衛生問題であるのか。

東京都がなすべきことは、まず衛生上での諸注意ではないのか。コレラ予防と同様に、細心に注意して、性病の予防に、その衛生知識を普及することが先決で、道徳問題は別の次元でなさるべきことである。

やがて明治維新百周年がやってこようとする年代に当たり、これは笑えぬ「黒船騒動」である。十四万人の異国人との間を、どうやってスムーズに大過なく過ごさせるか、これはクテニクの問題である。行政技術はこのためのものである。それをすぐに、道徳などと、いかめしいものにすりかえて、教育という名の、一種のヒステリックな押付けをやる

うとする東京都の、実は為政者自体への教育こそ、今最も必要とされるものではなからうか。

モンテーニュの《随想録》の中の「教育」の項目に次の一節がある。

「彼女は、わしの前でフランス語の本を読んでいた。ふと Fontenau という語が出てきた。だれでも知っている木の名前である。彼女の教育に当たった婦人は、少々けんどんに彼女をさえぎった。そしてこのよくないくだりを飛ばして読ませた。わしは彼女のなすがままにして女たちのおきてを乱さなかった。

けれどもわしの考えがまちがいないならばわしの娘は、六か月の間、二十人の下男と遊ばせておいたって、この罪深きつづり字の意味や用途や、またその発音のすべての結果をばその脳裏に印象しはしなかっただろう。かえってこの良き老婦人のしつせきと禁止のほう強い印象を与えたことと思う」

ここには、エスプリにとんだ筆致で、見事に教育の方向と核心が衝かれている。

《随想録》が書かれたのは四百年前である。四百年前の生々した知恵にとんだこの感覚がなせいつもいつも絶えず進みかけては逆行してしまうのだろう。

十六世紀のフランスの人、モンテーニュはソクラテスを尊敬した。ソクラテスは、「この者ぞ」と問われた時に「アテネの者」とは答えないで「世界の者」と答えた。モンテーニュもまた、フランスの人である以上に世界の人間である。世界、つまり、人間だ、というものである。われわれ日本人も、このように日本人である以上にまた世界の者である。ステテコをはいていることが、すなわち国辱と考えるような、この国辱という感覚からはるかに遠いものである。

フランス女子水泳チームのクリスチヌ・キャロン嬢は、「ローマ・オリンピックではフランスは一つも金メダルをとれなかった。ドゴール大統領はおかむりで今度は大変な気の入れようだというが」という記者のインタビューに答えて、

「わたしが泳ぐのはまず自分の喜びのため。別にドゴール大統領のためじゃないわよ」と答えた。これはキャロン嬢だけでなく、ほかの三人の女子選手、コーチのベルリユ夫人も共通の意見だった。我々も日本の選手に日本のため、国威発揚のためだけでなく、まず自分の喜びのために、競技にベストを尽くしてもらいたい。

ところが日本の選手は、むりにも「郷土の

ため、国家のために」を誓わせられる。これを誓わないと、観衆が承知しない。どこか、おかしいところにムリがありウソがある。このような教育がなされ、意識がつつかわれてきた。

今、三島由紀夫の《宴のあと》をめぐって、作者、三島由紀夫、発行所の新潮社と、モデルとして扱われた有田八郎との間に、裁判で係争中のプライバシー問題が関心をひいている。正直言って、どちらにも理由があることと思う。作家は、その人に対しての悪意や中傷でなく、実生活の中で、或る特定の人物や事件をひっかかりとして、そこに何らかの芸術的衝動につき上げられるならば、それを作品化することの自由があることもうなずけるし、モデル化された本人は、いかなる理由によろうと、自分の生活が、どんなふうにも扱われること自体がいやだ、と言いつけることもうなずける。おそらく実際は、賢明な三島由紀夫のこととて、相手方三島由紀夫の気持ちや言い分を当然そうであろうと理解し、なにごとかの行為やつくないで三島由紀夫のそこなわれた心の傷というものをなくさめたいと思いい、有田八郎は有田八郎で、《宴のあと》にはなんらの悪意もなく、むしろ好意的に扱おうとした作者の意図が、それなりに認められ、

単に作者と本人だけの関係だけだったら、軽く手を打って了解と、いうことになる性質のものであるようだ。ところが、問題は公刊ということにある。不特定多数の読者大衆がこれに介在することで、問題がこじれるのである。つまり小説の読み方においても、三面記事を読む時の、あの意識が働くのである。そして、その一般的な興味は奥深くしまいこんで、ここになんらかの道徳上の善悪という尺度を持ちこんで、モデルそのものを押しはかりとうとするのである。モデルを事実と信じ、事実という名のウソを事実と信じ、この信じ意識自体、実はさもあれかしと待ち望む三面記事的興味の持ち方とつながることを意識しないで、物事をマトモにとって開き直ってしまう。こういう一般の良識という名のギム・ンの批判がいやなのだ。有田八郎が三島由紀夫を告発するに至る心理的経路は、ここにある。彼は道徳家？ どもをこそ告発したいのだ。

教育とは、道徳家を養成することではない。かえって逆に、道徳を摘発し、道徳を告発する賢明な心を育てることだ。

行政体は、行政技術のサービスの府であって、教育を施すための府ではない。

とにかく本末てん倒の喜劇が多すぎる。

因果おぐるま



司 裕 内 庄

一

男はさきほどから鏡に向かって、いっしんに髪をなでつけていた。ときどき、櫛をすく手を休めては、恍惚としたように目を細め、小さく首をめぐらしてみても、鏡に映る自分の顔に見とれているふうである。

四帖半の障子に、紅い薄日がさして、男の横顔を美しく浮き出している。肉が薄く、やや高すぎるきらいの鼻や、まるで半月を描いたような眉は、たしかに当世人気ものの名優田之助に似たところがあり、すれちがう下町

の浮気娘など、ついふり向いて見たくなるかも知れない。

「栄さん、おきてたの？」

男のうしろになまめいた夜具が敷かれてあり、さっきまで眠っていた女が目をさましておきぬけのしわがれた声をだした。

「……………」

栄さん、と呼ばれた男は、意にとめず、今度は女の鏡台の抽出しからおしろい刷毛をとりだすと、ふっくらとした艶のよい頬をはたきだす。男から見れば唾でもはきかけたいさまだが、惚れた女にとっては気にとまらない

らしい。

女は、夜具の中で小さく身をもだえて甘えた。

「栄さんたら、ねえ」

それでも男はそ知らぬていで鏡の方を向いたまま。じれた女は蒲団で覆われた腰を上下させてドンドンあばれ出した。

「うるさいね師匠、屋鳴りがするじゃあないか」

男は仕方なく刷毛を鏡台に置くと、膝をいざって女に男前のいい顔を突きだした。

「栄さんが放うつとくからですよ。アラたいへんなおめかし、どうせおそのさんちへゆこうと思ったんでしょう」

意地悪く男の唇からそらしていた顔を正面に向けると、すぐ鼻にかかった声になった。

「ねえ、いいじゃありませんか。まだ日は高し、そのために今日はお稽古を休んだんじやありませんか」

男は無言で掛け蒲団の襟に手をかけ、思い切りパツと引き剥いだ。

「いやっ」

女は恥じらってくるりと身を半転させる。

情事の香が四帖半にたちこめ、剥がれた蒲団の上でく字なりに身をちぢめた女は、おどろいたことに腰布一つまといない裸身

だった。

おしろいを搗き固めたようなぬめぬめした
豊かな胸乳から二の腕にかけて、緋色の腰紐
が幾重にも締めつけ、後ろ手に固く結わえら
れていた。

そのまま、女は身じろぎもしない。瞳をか
るく閉じて、愛撫の手を待つ胸だけが、くび
られた腰紐の間から切なげにあえいでいる。
やんわりと掛け蒲団を押しつけた男の手は
ゆっくり、女の足首を縛った紐を解き始めて
いった。

ときどき、鼻にかかった女の吐息がきこえ
るばかりで、男の手だけが器用に動く。

男は紐を解かれてもそのまま縄をなつたよ
うに閉じあわしている女の両足首を掴んで交
叉させると、強い力でグイと太腿の方へ押し
やった。

「あ、いやッ」

羞恥で一瞬女は全身を固くしたが、やがて
新しい期待でからだ中を火照らせながら、ぐ
ったり身をまかせるま became になった。

男は一言も口をきかず、さっき解いた腰紐
をあやつって交叉させた女の足首から太腿へ
と素早く走らせていった。

「師匠、いいかっこうになったぜ」

男の言葉に女はうっすらと開けた目に、期

待に反して羽織の襟元をつくろっている男が
映った。

「あ、いやだよ栄さん。こんなまま行っちゃ
いやだったら」

動転した女は、仰臥したからだを起こそう
としたが、固く後ろ手に縛られたうえ、あぐ
らに縛られた両足の膝が張ってているため、
反転することもできない。白い虫のよう
に不自由なからだをただくねらせるにすぎな
かった。

「ふふふ……」

男は冷酷な笑みを薄い唇の端に浮かべて、
枕もとから手拭いを掴んだ。

それは、すでに女の唾液を吸いこんでいて
ジットリと手にねばりつく。

「いやッ、いやよ。栄さん後生だからッ」

哀願をつづける女の口に、男は容赦なく猿
ぐつわを覆う。

「くう、くうッ」

女のくぐもり声を楽しみながら、男は引き
しほるように猿ぐつわを結んだ。

「婆やさんもそのうち帰ってくるだろうさ、
師匠のそのかっこうを拝ませてやるといい」

男は非情なことを言い、必死に身もだえを
続けている女のからだへ、フウワリと掛け蒲
団を覆った。

男はあとも振りむかずに階段を降りると、
はじめてニヤリと口もとをくずした。女、小
唄師匠のお近は男が、矢場のお園のところへ
行くのだと思っている。女が恋敵の名を口に
する毎に、男への恋慕がつのるばかりだとい
うことを、知りすぎる程知っている男である。
いまごろは嫉妬に身をさいなみながら、あら
れもない姿で泣いてるにちがいない。

「ふふ、ふふ……」

含み笑いをしながら、その男、栄次郎はス
タスタと歩を早めた。が、栄次郎の足は、お
近の案じていたお園の居る矢場とは反対に、
お狐の森と呼ばれる人気の無い方に向けられ
ていた。

二

今なりひらの栄次郎、深川猿江町に手広く
呉服を商う大店のひとり息子である。金と男
ぶりが揃っているから女にもてないわけがな
い。父親の商い同様、栄次郎の方は女遊びの
方は手広く派手だが、こと金のことに関して
は、行商から今日の身代を築きあげた父親の
血筋を引いているのか財布の紐だけは意外に
固い。

くされ縁の悪仲間、般若面の勝五郎という
やくざにそそのかされて、一度きり吉原に登

棲したところ、なにかものを言えばその度にお足の名のとおり、またたく間にあり金を吐き出されてしまったのに胆をつぶし、二度と足を向けなくなった。

もっとも男前のいい栄次郎のこと、何が悲しくて女に銭をくれて女の機嫌をとらなきゃならないのか、という自負がある。それも道理で、栄次郎がその気になれば、いつでも女の方からなびいてきた。なかには栄次郎の手に負えない女が居ると、勝五郎がおどし、すかして仲立ちをする。般若面にすこまれて、最初は半ば人身御供のつもりでしぶしぶ逢引きさせられた女の方も、さて栄次郎と向かい合ってみると、相手はものやわらかな男前でおまけに手練手管にたけた殿方とあってみると、いつの間にか男の言いままになってしまふのである。栄次郎には勝五郎にも打ち明けられない性癖があつて、言葉たくみに相手の女に縄をかけてもてあそぶのである。女にとつては恥ずかしいにちがいないが、そうすることが栄次郎をよろこばすこと、かわいがられること、となんとなく納得させられてしまつて、遂には栄次郎に気に入られようために自分を縛る紅紐などを用意するようになってゐる。

だが、同じ相手にいつまでも執着する栄次

郎でもなく、次から次へと娘をあさる。こんなときにも勝五郎が役に立つ。

勝五郎にとつても栄次郎と女の別れ話は銭になる。彼は栄次郎から仲立ち料をもらい、そのうえわずかな女への手切金からもうわ前をはねる。女の方に不満はあつても、勝五郎の般若面にすこまれば、たいていの娘は泣き寝入りしかない。

「若旦那も罪なお人だねえ。あの娘は泣いてうらみごとを言いやしたぜ」

娘に栄次郎と手を切らせたあと、こう言つて勝五郎は栄次郎をおだてておくことも忘れない。勝五郎にすればなんとか固い財布の紐をゆるめようという手段にすぎないが、栄次郎がますます図に乗るのもいたしかたのないところだろう。

——その栄次郎、つるべ落としの西日を受けたまま、紅い鳥居の前に、もう小半刻もつたつたままである。用足らしい子守が行つて、また帰り道にさっきの男がボンヤリしているのでもじろ見ながら通り過ぎる。あまりの悪いことおびただしい。

栄次郎が馴染んだ十数人の女の中には、彼の誘いに返事を濁す娘はあつても、今日のよう

た。

かならず相手は来ているものとして、お近との逢瀬もそぞろに切りあげ、約束の刻限かつきりに出向いてきただけに、栄次郎の自尊心はいたく傷つけられてしまった。

相手の娘というのは昨夜お園の矢場からの帰りに、道ですれちがっただけにすぎない。娘は襟のすり切れた縞の袷や、油気の少ないほつれた髪などからおして、胸に抱きかかえた風呂敷包みは、いずれ仕立て仕事をもらつての帰りとみえたが、矢場の灯りでチラッと見た引きしまった顔立ちは、栄次郎の心を瞬時に捕えてしまった。

それが習慣となつていて、栄次郎はとつさに踵をかえして跡をつける。足早やに行く娘の肉づいた腰が官能的な動き方をするのを目にとめて、栄次郎は久しぶりに胸のときめくのを覚えていた。

娘が矢場からほんの一町余りの長屋に消えるのを見さざめて、栄次郎はニヤリとした。（こんなところに、あんな弁天さまがおわしますとは、猿江町田之助もうかつだったな）

その栄次郎の自信も、今日は見事にカタなしてある。腹綿の煮えかえる思いだった。（あたしも猿江町田之助といわれる男だ。ちくしょう、どうするかおぼえておいで）

身勝手な怒りが、栄之助の自尊心をめっちゃくちやにかきまわす。

また勝つアんに、ひと骨折してもらうことにしよう。狙った獲物は、絶対逃がしっこないんだから……、そう心に決めて、仕方なく栄次郎が立ち去ろうとしたときである。

「やーい、こら」

子供の争う声がした。

栄次郎が立ちどまってふり向くと、五六人の子供が一团になって、こちらへやってくるのが見えた。

「こら、こいつ。食いしんぼう、馬鹿」

十ばかりの男の子が、口汚なくののしって、自分よりずっと年かさの女の子をこづきながら近づいてくる。その周囲をまだ幼ない子供たちが囃したてた。

栄次郎がどぎもをぬかれたのは、一番年かさの女の子が、男の子のために荒縄で後ろ手に結ゆえられ、ぐるぐる巻きにされた縄尻を引かれているのを見たからである。

身に、おほえがあるだけに何となく気まりが悪い。思わず目をそらしたが、やはり気になるので見ないわけにはいかない。

もう、十四、五にはなるのではないか、女の子は整った顔だちをしていた。ただどこもなく常人と違った感じで、ときどき男の子が

乱暴に引っぱる縄の痛さにも、ほんのころもち歯をむきだすばかりである。ずう体の大きさに不似合いな、膝小僧のむき出た着物は、まだ肩上げもそのままだ。そのくせ重ねられて握りこぶしを作っている手首の下や、胸のあたりがからだ相応のふくらみをみせて、奇妙に色っぽいものを感じさせるのである。だが表情の乏しい顔に二本、青い鼻汁を垂らし、ているのを見ると興ざめた。

栄次郎はあたりを見まわしたが他に人影は見えない。彼が止め役を買わないわけにはいかなかった。

「おいおい、そんな女の子をいじめちゃ、いけないな」

「ちがわい」

姉弟らしい二人連れの、姉の方がさからってでた。

「このお光が安次の飴玉を盗ったんだよ。ねえ」

「そうだ。そうだ」

他の子供がそれに同調して囃したてた。

見ると、その娘の弟らしい子が飴玉を手にもって、飴にくっついた砂つぶを丹念に除いていた。

「こいつ、いつでも小さい子の持ってるもの盗って逃げるんだぜ、おじさん」

縄尻を持った子が憎々しげに毒づいた。

「でも、その子はちよっとみんなとは違うよ。うだし、そんなひどいことをして、可哀そうじゃないか」

栄次郎は懐から小銭を出すと、餓鬼大将ににぎらせた。

「ゆるしてやってくれないか。これはみんなで分けるんだよ」

白痴の娘をそこに残して、子供たちはワアッと散っていった。

かけらのような義侠心を満足させて、栄次郎は悪い気持ではない。

娘は何の感情も示さず縛られたまま立つて、栄次郎の顔を凝視していた。

「しょうがないな。さあ解いてやろう」

握りしめた手の甲が垢でガサガサしていて娘の着物からプンと小便の臭いがした。

縄を解かれて礼でも言うかと思ったが、娘は相変らず栄次郎の顔を穴のあく程見つめたまま。そればかりか栄次郎の前へニユッと垢まみれの右手を突き出した。

「やれやれ、とんだ浦島太郎だよ」

苦笑しながら栄次郎がまた財布をとり出したときである。

娘がサッと栄次郎の財布に手をかけるや、両手で彼の胸を突きとばした。

意外な力だった。それも不意のことだったので、

「あっ！」

、栄次郎は思わずたじろいでよろけた隙に、娘はパッと駆けだしていた。

「あっ、ちくしゃう」

脱げかけた雪駄を履き固めて、追いかけてよとした時には、娘の姿はもう遠くを馳けていた。

泣き面に蜂とはこの事か、とても人に話せたさまではなかった。

三

昼前の日射しの明るい部屋で、栄次郎は押入れの手文庫から取り出した絵草紙を広げていた。出入りの絵草紙屋から、内密に取り入れた秘蔵のものである。

描かれている女は裸身でありながら、紅い手甲や脚絆をまとい、とっているところは旅の娘である。きびしく海老縛りに括しあげられた娘の羞恥へ、雲助らしい男の魔手が伸びている図柄であった。作者はいずれ偽名であろうがかなりの名絵師の手によるものらしく、猿ぐつわを噛まされた娘の羞恥の表情の哀れさ、そして娘の羞恥に注がれる、男の視線はするどい。

頬を火照らせて見入る栄次郎の血走った目には、いつか旅の娘をあやの夜の町娘に、そして雲助を自分に置きかえているのである。

あれから二日。自分を振った娘に対する執念は、栄次郎の胸に燃え盛るばかりだった。ほんの二朱足らずの中身ではあったが、白痴の娘に財布を盗まれたことさえも、みんなあの娘のせいのように思えてくるのである。つけ文を無視されたいまいましたさが恋着と綾なして、いまは意地づくでも、という気持だった。

「若旦那」

誰か呼ぶ声に、おかしいくらいのあわてようで、栄次郎は手文庫の蓋を閉じた。

「勝つつあんかい、わざわざ呼んですまなかつたね。まあ上がっておくれよ」

「へい、めっぽう寒くなりやしたから、この日向の方がけっこうで。へい」

勝五郎は般若面を崩して愛想笑いをしながら、日だまりの縁に腰をおろした。ひと目でそれとわかるやくざで、並の娘ならこわいに違いない。

「あっしをお呼びになるってのは、また新しいこれのことだ」

勝五郎は小指をヒョイと突き立てる。

「ふふふ、まあね」

待ち呆うけのことはおくびにも出さず、栄次郎は娘のことを手短かに話す。

「あ、わかったわかった。そりやお咲のことでしょうね。きつと」

「知ってたくせに。勝つつあんも案外人が悪いじゃないか」

「お咲ならあのあたりで小町と言われるくらい別嬪ですがね。だが、ありやいけやせんや」

「おや？ どうして、情夫でもいるのかい」
「へい、まあ。相手は米問屋の手代ってことで……」

「フン」

栄次郎の唇に、嘲けるような笑みが浮かんだ。

「べつに情夫がいたところで、どうってこともありやしない」

それくらいのこととは栄次郎にとっては物の数ではなかった。栄次郎のために泣きをみた男が幾人いるか……。

「ところがいけねえ」

「……………」

「若旦那も知っていなさるでしょうが、うちの政兄哥がずいぶんお咲にご執心で……、言にくいがいかに若旦那のお言いつけでもその政兄哥をさしおいて、若旦那の橋渡しは

あつしも義理が悪いやね」

「政さんといや、つい先頃、甚助親分の代貸しになった、へええねえ」

しかし、栄次郎にはコッソんとくるものがあった。深川の甚助というのは土地の顔役で、商売柄栄次郎の父親の栄蔵とも昵懇である。

世渡りのつぼを心得ている栄蔵は、甚助へのつけ届けに怠りはないし、甚助にとっても栄蔵のような大店は、たいせつな金源でもあるので下にもおかぬ。

そういう事情を万事承知の栄次郎なので、たかが甚助の代貸しに、という気持はどうしようもない。

栄次郎、持ち前の若旦那氣質が頭をもたげて、すねた頬をふくらませている。

(いやな野郎だぜ、まったく)

一人前の男がすねてふてくされる図は、勝五郎には鼻持ちならぬさまだが、栄次郎周辺の女たちにとっては、それがかわいいということになるんだから世話はない。

「そうかい。勝つつあん、おまえさんそういう気なんだね」

へそを曲げだすと手におえない。勝五郎は苦りきりながらなんとかだめようと下手に出るが、栄次郎は意地を折りそうにない。勝五郎にとってもこのわがままな大店の若旦那

は、大事な金づるでもある。

「若旦那。これあ政兄哥のために金輪際話すまいと思っていやしたことだがね。若旦那の方が折れてくださらねえじゃ仕方がねえ」

勝五郎はとうとう切り札を出した。

「……………」

「へっへへ、実はお咲に馬鹿の妹があると言や、三年の恋も覚めるでしょうねえ」

もしや、と栄次郎の胸にあの時の白痴娘の顔が浮かぶ。まさか……。

だが栄次郎の予感当たっていた。昨年、春、行商の父親を亡くしてから、お咲は仕立てももの下請けをして白痴の妹を養いながら細々と暮してはいるが、お光は白痴のうえ手癖が悪く、手当たり次第に人のものを盗んでは家に持ち帰る。お咲は妹に手をやきながらもそこは利口な娘。盗んだものは丁寧に詫びて返す。お咲が働きもので器量よしなので、近所の人たちも気の毒がりはしても、とがめたりすることはないようである。

妹ゆえに色事とは縁遠かったお咲も、近頃晋吉という若者が出来て、これと末を言いかわした仲。

勝五郎の話を聞くうちに、栄次郎の悪智恵がグイと頭をもたげ、次第に大きく渦を広げていった。

栄次郎は話し続ける勝五郎の言葉も上の空

で、ニンマリと悪魔の笑みを浮かべた。恋仇が深川の代貸し、政吉なら相手にとっても不足はない。それに政吉の肩を持つ般若面の鼻も明かしてやりたい。

「そんならなにかい。そんな小娘ひとりに、政吉兄さんとあろう人が、まだなんの手出しも出来ずに、指をくわえて見てるのかい」

挑戦するように、栄次郎の鼻がざざ笑う。むっとした顔で勝五郎がさえぎった。

「そこなんで……。政吉兄哥も代貸しとなりやみっともねえ手を使って世間さまに笑われるようなことをしちゃ元も子もねえ。なんとかお咲の気に入られてえと、はた目にも可哀そうなくらいでね……」

片頬に笑窪を浮かべたままそつぽを向いている栄次郎に、勝五郎の言葉がすがりつく。

「あつしも何とか添わしてやりてえと思うんですがね。ね、若旦那。政兄哥は真剣なんです。若旦那あほんのつまみ食い。お咲だけはすんなり手を引いてやつちゃくれやせんか」

「さあねえ……」

栄次郎は颯然のように、ヤンワリと勝五郎の頼みを受け流す。

「あたしにだって意地があるからね。政さんもいっぱしのやくざなら、猿江町田之助と張

四

り合つて、納得づくでお咲ちゃんを手に入れた方が、いいんじゃないのかい。あたしが政さんに恋をゆずつたと世間に知れりや、政さんの顔が立たないんじゃないかえ」

シャアシャアと言つてのけた。

鼻白んだ勝五郎が、気色ばんで立ちあがつた。

「そうですけえ、よくわかりやした。若旦那も話のわかる方だと思やこそ、今日までだち公づき合いをさせてもらいやしたが、今日限りきっぱり忘れてくださえ。じゃ、帰らせてもらいやすぜ」

いよいよよしぶくなる般若面を横目で見て、栄次郎は鼻先で笑つた。

（おや、あたしと手を切つて困るのはそっちじゃなかったかい。お咲さえあたしの女にしてしまえば、お前なんかには用はないよ）

栄次郎は自分を振つたお咲ほどの女が、もう他には居ないような気がしてきている。自信が、一歩もゆずらなかつた。

「若旦那。火あそびもほどになさいやしよ。あんまり深入りして大火傷しても、あつしあ知りやせんぜ」

捨て料白を残して、勝五郎が去つていった。栄次郎はそ知らぬふりで、また手文庫の方へ手を伸ばしていた。

「だいぶ待たせたようだね、お咲ちゃん」

ことさらに親しくそう呼んで、栄次郎はニコリしてみせた。

「……………」

お咲は何か口の中で言つたようだが、言葉にまではならなかつた。黒目がちの大きな目が、すがるようにして栄次郎の顔を仰ぐ。

「わざわざ呼び出してすまなかつたね。さ、そんな固くならず、今夜はゆっくりしていいっておくれ」

栄次郎はわざとこゝに触れず、座蒲団をすすめた。それでもお咲は身を固めたままだ。（ちよつと効きすぎたかな）

栄次郎は内心ニヤリとする。今朝方丁稚の吉松に届けさせた文で、お光に盗まれた財布のことで、ぜひお話したい、と誘ひ出したのだ。やわらかい文面の中に、事を荒立てたくないから、とおどしを入れる事も忘れていない。それに、この船宿「川久」は栄次郎の馴染みの店で、いま二人のいるこの部屋で幾人の女が栄次郎の色責めにないたことか……。『川久』の女将も栄次郎の性癖を知つてか知らずか、彼が呼ぶまではめつたに顔を出さない。いわばもう宗全に栄次郎の罠に落ちたお

咲である。

お咲は、相変らず栄次郎にも見覚えのある粗末な身なりをしていた。しかし、その内に包まれているからだは、栄次郎を取りまく女たちの、白くふやけたような肌とは異なり、浅黒く引き締まつた肉づきを見せていた。ふつくらとした胸乳のあたりまで顔を伏せて、栄次郎の言葉を待っているようだ。

この引き締まつた肌に本縄を掛けたらどんなに見事だろうか、海老責めにして羞恥をさけ出してやったら、どんな匂いがするかしらん、と好色のはむらは、すでに栄次郎の脳裡を駆けめぐっていた。

「あの……」お咲は沈黙に耐えられず、胸に手をやって栄次郎の財布をとり出した。

「お光が、大それたまねをいたしました……」

若旦那になんとお詫びしてよいやら」

先に栄次郎の文を袖にしているだけに、お咲は詫びすら言いにくい。それだけ言うのがやつとだった。

「まあまあお咲ちゃん、あたしやなにもそんな野暮用でお咲ちゃんを呼んだんじゃないんだよ。ね、お前さんもわかつてるじゃないかえ」

「でも……」と栄次郎の財布を握つたまま、モジモジするお咲の手に手をそえて、

「ね、こんなことはもう忘れておくれ。あたしやお咲ちゃんに逢いたくて……、あんな文を出しちゃったんだけど、後悔してるんだよ。お咲ちゃん、あたしの気持ちを分っておくれ」
いつかお咲の肩に手をかけ、型どおりの姿になって栄次郎は言いつのる。

「若旦那……」ピク、と肩先をふるわせて、お咲は唇をわななかせている。瞳が困惑して言葉をさぐっているようである。

「お咲ちゃんの気持はよくわかってるんだよ。晋さんとかいう人のことなら心配することなんかありやしないよ。今夜あたしと濡れてみたところで、お咲ちゃんさえ口をぬぐっていたら、誰にもわかりやしない……」

お咲の頬に甘い言葉を押しつけるようにして、片手は厚い腿の上を這うごとく撫であげ撫でおろしていった。

栄次郎の追手、からめてからの攻めも、役者まがいの姿かたちにも、お咲はいよいよ殻を閉ざしてしまうばかりで、栄次郎の自尊心はズタズタにさいなまれる結果になってしまった。このままではどうにも腹の虫が納まりそうにもない。お咲とても、畳を蹴って帰りたいのは山やまだが、お光のことが引つかかって、ただ途方に暮れるばかり……。

「そうかい。そんなにきらわれちゃったのなら、あたしも猿江町田之助と言われる男さ。あきらめるより仕方はないだろうけれどね。やっぱりお光ちゃんのこととは金助親分に話すことにしようよ」

襟をつくろいながら栄次郎はわざと冷たく

突き放した。まだ打つ手はある。

「後生です。お光のことは……」すがるような黒い目が、いまではいつそ憎らしい。

「さあねえ……」

肩をふるわせて泣き崩れるばかりのお咲をよそに、栄次郎は白々しく思案に耽るてい。

「いっそ、お仕置きをしてあげようか」

「お仕置き？」

「そう。本来ならお光ちゃんが受けるべきだろうけれどね。ちょうどお白洲と同じと思やいいよ。そうでもしないと、あたしのおなかの虫はおさまりそうにもないよ」

「……」栄次郎をじっと見つめる瞳から、いまにも涙があふれそう。

「こうしようじゃないか。いまから半判、あたしやお咲ちゃんをお白洲と同じに結わえて帰るからね。半刻たったらお咲ちゃんの縄を解くように、ここのお女将に言いつけておくから……。なににも無理には言わないよ。お咲ちゃんがいやなら、あたしやこのまま帰っ

ていいんだよ」

後のおどし文句は言わぬが花。お咲は仕方なくコックリうなずいた。

後ろにまわして重ねた握りこぶしが、お咲の心のように小さくふるえている。栄次郎はあらかじめ用意しておいた縄をふところからとり出すと、さすがにやんわりと手首から胸へと巻きつけていった。

（ふふふ、もうこっちのものだ）栄次郎はやる心を押さえて固く縄を結ぶと、手拭いで固く猿ぐつわを噛ませた。

お咲には猿ぐつわが何の意味を含んでいるとも知るはずはない。縛られて、栄次郎から見れば一そうかわいくなった顔をあげて彼の立ち去るのを見定めようとした。その瞳に、栄次郎が目を見走らせて迫って来た。

「好きなんだ。お咲ちゃん、好きなんだよ」

もう、あらがうことは出来なかった。栄次郎は胸の中にお咲の身もだえを楽しみながらジワリと右手を柔かい膝に這わせていった。お咲の急所を押さえ、グツタリと力を抜くのを愛しさと復讐の歓喜に酔いながら、部屋の境の襖間をそっと開く。そこに緋色の夜具が、栄次郎の色責めを待っている。

再び襖の開く音がした。深川の代貸し、政吉がぬうっと部屋に入ってきた。

仮面のなかの真実

—安部公房論—



安 東 泉

安部公房はその登場作である『壁』以来、特殊な作風からして、難解な作家の一人として数えられている。抽象画を見るように、画題がよくわからない、という難解さである。

ところが彼の文章は誠に平明である。これほどくせのない、素直な文章を書く人は少ない。テニオハの文意の転承に、無理がなくなめらかだ。読みやすいと言えば、おそらくこれほど読みやすい抵抗の少ない文章はない。あまりそれが素直すぎて、『壁』を初め初期の諸作品は、舌たるい感じさえする。どこか幼ないのだ。

にもかかわらず、安部公房は難解だと。文章は平明だが、つまり、作意の展開の、意想不到的脈絡の発展の跡づけに困難を感じるから

であろう。ミステリー・ゾーンがそこにあるというわけである。

安部公房を一口に言うと、精神の運動に対して表現を与えようとする作家であると、言えようか。ここに彼の反ストーリー的、アブストラクトな作風が予約される。それは内面独白の世界となる。人と人との愛憎のもつれが幾重にも重なりあって、その経緯のうちに作者の作意が助奏のように、あるいはそれらすべてを塗りこめる色調のように働いて、読者を主題の中に引きこんでゆくといったオーソドックスな行き方とは、およそ対蹠的である。そうした回り道の婉曲的手法を常道とする常識に抗して、彼は率直であり、もっと直接的である。

天文学者が、ロケットを飛ばして目を天空の星々のかかり合いに興味を集中しているとき、彼は彼個人の、地球の内殻に深い穴をうがち、そこに大きなメガフォンを当てて問いかける。答えがコダマとなって奇妙な音のふくらみをはらませながら返ってくる。内面独白とはこの姿勢を言うし、アブストラクトとは、そのコダマの音のふくらみを言うし、それを含めて直接的と言う。

精神そのものはアブストラクトなものである。界面に限定を与える壁はなく、動きや形態に規制を課するルールもない。壁やルールを、むしろ浸食し、それを乗り越えるものである。これを自由といってもよい。精神と自由は同義語として結びつく。自由とはアブス

トラクトである。アブストラクトの運動に表現を与えるアブノーマルとなる。▲壁▼はその意味でアブノーマルな作品だった。もっとそれをきわだたせた記念すべき短編集に、▲赤い蘭▼がある。

安部公房は、自己疎外と自己回復との間のカーブ曲線を描いてみたかったのだ。▲壁▼「S・カルマ氏の犯罪」はこの地点から始まった。

或る朝、目をさますとどうも変だ、名前を覚えていないし、あったはずの名刺が一枚もない。名前を盗人にとられたのであろうと、捜していくうち、自分と同一人物のS・カルマ氏が、事務所で働いているところを発見する。彼は自分の名刺だった。名刺は自分を離れて独立したのだった。

胸の中がうつろになり、唇がカサカサになるほど空虚だった。胸を打つと、ポンという中味がからっぽになっていることを証明する音が返ってきた。

診察を乞いに医院に行く。そして、待合室で待つ間、雑誌の風景画をそのまま胸の中に吸いこんでしまう。砂丘とひろひろの灌木、恐しく荒れた荒野の風景だった。

医者が異常を訴えられて、胸の中をレンズでぞくと、そこに荒野を発見して驚く。

「巨大な空洞、グロッセ・カヴェルネの形成——、いや、ちがう。これは奇妙だ。景色が見える。なんて広大な砂原だ！」

風景だけでなく、恐しいほどの陰圧を示す胸は、動物園のラクダまで吸いとってしまおう。これがS・カルマ氏の犯罪だった。そこで裁判にかけられる。

「被告はいかなる目的でその犯行をくわだてたのか」

「ラクダは有益な家畜です」

動物園側の原告がそう訴える。

「しかし、雑誌の口絵のほうは？」

「むろん、そのラクダを飼育するためです」

「というと？」

「それは広大な草原の写真でした」

「なるほど、では全くの計画的な犯行だな」

荒野に壁が生え始め、塔のようにそそり立つ。そこで裁判の進行と学術上の目的のため「成長する壁調査団」が派遣されることになり、団長のユルバン教授が胸の中に吸いとり、荒野を探検してもどってくる。

壁はますます成長し、自分がしまいいは一枚の壁そのものに変形してしまおう。

▲壁▼「S・カルマ氏の犯罪」は、一見奇矯で寓意性に富んだ小説である。この奇矯さの意味が正直いつてわからない。そんな小説で

ある。だが言えることは、心の中に世界の果て、を持つということだ。それは、まず自分の名前の消失から始まる。世界の果ての象徴である荒野は、精神の具体的な一つのアブストラクトであり、アブノーマルである。

アブノーマルは自由の同義語であるので、これに至る手続きとして、慣習のシムボルとしての、そして日ごろそのように慣らされてきた、自己の名前の消失の手順を踏まねばならない。この主題を反復して繰り返したのが▲壁▼「バベルの塔の狸」である。

詩人が影を狸に食われて、透明人間になる。影は人間の欲望である。欲望が狸に食われてなくなると透明人間になってしまう。

透明人間の詩人は、影を食った狸に案内されてバベルの塔に行く。そこには沢山の狸がいる。人間はだれでも影を持つように狸を持っている、その狸たちが、世界の人口と同じ数だけバベルの塔に居る。大きい狸、小さい狸、ふくらんだり縮んだりする狸、それは持主の欲望の大きさと比例して、大きかったり小さかったりするものである。

バベルの塔に入る通路は、深層意識の世界が通路で、それを発見したのがフロイド博士であると、狸は説明する。

「バベルの塔の狸」も「S・カルマ氏の犯罪」と同じく奇矯で寓意性に富むが難解である。

そんな小説である。だが安部公房の師である石川淳は別としても、他の先ばいたちは、作意をそれほどセンサクする必要はなく、これはこれで面白い、として芥川賞作品になった。

だが、石川淳もいうように、安部公房が、文章の力で何か精神運動に表現を与えよう、とこころみた努力の跡づけは、方向として把握できるのである。カルマ氏の胸の中の荒野は狸の住むバベルの塔であり、そこへの通路はフロイドの発見した深層意識の世界であると、作意は実はごく明りょうなのである。

手続きとしては名刺をなくすことである。影を食われて透明人間になることである。タネを明かすと、あまりにも簡単になってしまふ。この簡単さが「壁」Vという作品の軽さである。「壁」Vには奇想は奇想でとどまり、重量感がない。舌たるさが残り、幼ない印象がつきまとう。安部公房が「壁」Vを書いたのは大学を卒業して間もない若い年代にあった。その年代の若さが奇想を奇想のまま、思想としての肉付けされた奥行を作品に与えなかった。ただ、「壁」Vの救いは、奇想から生まれるユーモアである。これが救いとなった。

かつて「現在の会」というのがあって、安部公房もわたしも同人だった。席上、安部公房は多弁だった。しゃべらせるとひとりでしゃべりまくる、才気ある青年だった。「壁」Vが芥川賞になって、間もないころのことだった。黒い長髪が印象に残る。「壁」Vの軽さが彼の軽さだった。無口でひかえめな、やはり同人の一人であった小山清の重さと、対蹠的であった。

「男子三日会わされば、即ち刮目して待て」と言う。安部公房の最新長編「他人の顔」Vを読んで正直にその格言を思った。彼の成長のすばらしさが、わたしをうならせた。

新刊が出るたびに、問題作だ、傑作だと喧伝される。問題作だ、傑作だということばに、いくらか食傷ぎみで、いくら評判をきいてもあまり食指が動かなくなった。先立つ不信の念が、障害になるからである。

その中で「他人の顔」Vは、傑作だとの折紙はつけられながらも、あまり目立たない、控え目な登場の仕方をした。大江健三郎の「個人的な体験」Vほどの反響もなく、吉行淳之介の「砂の上の植物群」Vほどの前評判もなかった。

目立たないと言えば、その意味では、安部公房はどういう意味でか目立たない。「砂の

女」Vが評判になっても、それは映画や出演者の岸田今日子への評判であって、原作に対しての評価の声は小さい。

だが、「他人の顔」Vは、いずれ息長く、これから地味な評価ながら、その声価を高めていくであろう。真に傑作に価する作品が登場するのは、案外このように、ひっそりとした静かさの中から生まれることになっているのであろう。

質と重量感と奥行が、過不足なくかみ合っていて、見事な結実を示す例は少ない。ここでは、「壁」Vの時代にはまだ思い付きにしかすぎなかった或る部分の未消化の分野が十分に内部で暖められ、孵化され、十分に精練作業を受けて芽を吹いた。安部公房は「他人の顔」Vで実に巨大なテーマを投げ出した。そのテーマが、盤石の重みでのしかかってくるのである。

さてそこで、初期の好短編集「赤い繭」Vの意義が重要になってくる。ここには「S・カルマ氏の犯罪」や「バベルの塔の狸」にはない、凝縮された精神があるからである。

自己からの脱出がアブストラクトとなり、アブストラクトがアブノーマルとなる、このつながりの形式に表現を与えることでは、短編の鮮度の方がはるかにいい。

「後に大きな空っぽの繭が残った。

ああ、これでやっと休めるのだ。夕陽が赤赤と繭を染めていた。これだけは確実に誰からも妨げられないおれの家だ。だが、家が出て来ても、今度は帰ってゆくおれがいない」

▲赤い繭▼の結びの叙情は、ニヒリズムの鐘を鳴らす。人間は溶けて不在なのだ。世界は溶けた液体人間で洪水になる。そこにボツンと一つ、無人のノアの方舟が漂っているという救いのない虚無感が短編▲洪水▼になる。声のない笑いを笑うという一種の鬼気を持った寓話▲魔法のチョーク▼は、芥川竜之介の▲杜子春▼に比肩しうる効果をあげている。

場末のアパートの、便所の隣に住んでいる貧しい画家アルゴン君は、チョークで壁に絵を書いた。リング、ジャムパン、バター入りのロールパン、バターの塊、湯気の立つコーヒーに角砂糖——と、絵が本物になった。びっくりしたアルゴン君は、それでも朝から何も食べていない猛烈な空腹から、喜んでパンを食べ、コーヒーをすすった。

また絵を書いて食べ、飲んだ。やがてアルゴン君のお腹の中は壁土でいっぱいになり、ついに自分も壁の上の一つの絵となった。▲魔法のチョーク▼の、うつろな自己疎外の笑いは、ちょうどまた北欧の詩人、アンデル

センの▲マッチ売りの少女▼を連想させる。

▲マッチ売りの少女▼も、思えば一幅の抽象画だ。自虚の底の疎外感がアブストラクトの精神を産んだのだ。それがまた一方でニヒリズムとなる。ニヒリズムが同時にアブノーマリズムに返ってくる。短編集▲赤い繭▼の結尾の作品▲事業▼がそれだ。一時、初期の江戸川乱歩がこの世界をのぞいた。そして足跡を残した。

ここでは、主人公の私は、新事業としてネズミの食肉加工を始める。日に二千キロもの鼠肉が市場に供給された。そのうち材料はネズミから人間に変わった。この事業により墮胎は自由になり、胎児はこの上ない珍味となった。食欲による殺人は美德である。美德を産む殺人食肉加工機の名称はユートピア。ユートピアにはいるには、高い入場料を払わねばならない。六か月の、蜜につけた胎児の、とりわけ軟骨の歯ざわりの良さを説く安部公房の皮肉な笑いが、その後時を経て▲他人の顔▼の堂々たる体系を産み出したのである。

▲他人の顔▼は体系的作品である。孤峰ではあるが、体系を踏まえてそびえ立つ。いわしむれば、カフカの▲変身▼より着実に、カミユの▲異邦人▼より適確である。思想を体系

づけて作品化することは至難のわざだが、その困難を安部公房は▲他人の顔▼において克服した。日本の作家の中であって、特に稀有な現象と言わざるを得ない。

「痴漢」ということばの意味が、これほど巨石の重みでのしかかってくる小説を、ほかに思い出すことができない。大江健三郎を先頭に、カネや太鼓を打ち鳴らしながら、にぎやかな「痴漢」を目ざして進軍した。これこそ本物の「痴漢」だと、諸々方々で名乗りが上がった。海浜での宝捜しのような、騒々しい「痴漢」捜しが演ぜられたのだ。

だが、どこに「痴漢」が居たか。これが、「痴漢」だと捜し当てたつもりのもものは、こことく「擬似痴漢」にしかすぎなかった。捜し手自体が、「痴漢」を知らないことに第一の誤びゆうがあった。それぞれ、満ち足りた平和な顔で、めいめい勝手な「痴漢遊び」をやったにすぎなかった。

だれがまず本当に、最初の「痴漢」を捜し当てるか。安部公房はにぎやかな海浜の「痴漢遊び」には加わらずに、壁の中で自分の中にもぐっていった。それは▲壁▼以来の方向であった。その方向を変えることなく、見当と確信をもつてもぐりつづけた。

「痴漢」を捜し当てることは、一種のトリプ

ルクラウンを獲得するような壮挙となる。だが観衆の目は、海浜のにぎやかなお遊びの方にだけ集中している。壁の中の出来事には気づかない。「痴漢」の、元々の宿命なのだろうか――

▲他人の顔▼は主人公のぼくが、妻であるおまえに当てた手紙の形式をとっているが、主調はぼくの独白にある。

「半月ほど前、ぼくが一週間の予定で、関西に出張するようになった日のことである――旅行の名目はむろん口実で、実はS荘にこもって計画の最後の仕上げにかかりきりになっていたのである」

「眼鏡をはずし、マスクをとり、鏡をのぞきこみながら、顔の繃帯を解きはじめる。――やがて解き終えたところから、わがもの顔に這い出してくる。蛭の塊り……からみ合い、赤黒くふくれ上った、ケロイドの蛭、なんと醜悪さだ！」

日ごろぼくは、顔の醜悪さを隠すために、厚くホウタイを巻きつけている。ちょうど覆面の怪人か透明人間のように。顔の醜いケロイド状の傷は、ぼくが勤めている研究所の、研究のための液体空気による凍傷の跡であった。テラシンの内服、コーチゾンの注射、放

射線の注射と、手をかえ品をかえての手当てにもかかわらず、ケロイド状の蛭の軍勢は顔一面を占領してしまった。

その時以来、ぼくは顔を喪失した。

「おまえはちょうど、飯台に並べたガラスのコップを拭いているところだった。つづいて起きたことは、自分にもよく後をたどれないほど、発作的な衝動だった。おまえの抵抗に出会ってみて、やっと自分の姿勢の意味が理解できたような始末だ。ぼくは右手でおまえの肩をおさえ、左手をおまえのスカートの下に差込もうとしているのだった。おまえはうめき声をあげると、いきなりばねのように膝をのばして跳上った。椅子が倒れ、コップが一つ落ちて砕けた」

それ以来、夫婦関係は絶たれていた。人間の重さは、顔で決まるのではない、内容によって決まるべきはずのものだ、が、

「喉には、棘だらけの叫びが、束になって突きささっていた。なにか言おうとするのだが、弁解？　なぐさめ？　それとも非難？　弁解やなぐさめを選ぶのなら、むしろ煙のように消えてしまいたい――」

「ここから、仮面の計画までは、あともうほんの一と息のことだった」

古い学会機関誌に、プラスチックによる人

工器官の記事を発表したことのある「K高分子化学研究所」のK氏を尋ねた。

「型通りは、やはり、石膏ですか」

「いや、糊状のシリコンを使っています。石膏だと、どうしても細部が、飛んでしまますから――ほら、爪の付根のササクレまでが、はつきり出ているでしょう？」

それは人工による人間の指の見本だった。

「たとえば、これは中指ですから、第一関節の裏側に、こんな色斑を着けてみました。ちよつとタバコの脂に見えるでしょう？」

「筆かなにかで塗るわけですか」

「とんでもない――違った色の材料を、下から順に重ねていくのです。たとえば、爪の部分には酢酸ビニール――必要ならば爪垢をちよつぱり――関節部分や皺の陰影――静脈に添ったところには、微かな青味」

K氏は断定的に言う。

「人間の魂は球膚にある。――戦場で傷ついた兵隊たちにとって、何がいちばんの関心事だったと思います？　命のことでもない、機能の回復のことでもない、何よりもまず外見が元通りになるかどうかということだったのです。――外傷、とくに顔面の傷の深さは、まるで写し絵みたいに、そっくり精神の傷になって残るといふ、悲しむべき結論にね」

「表情というのは、要するに他人との関係をあらわす方程式のようなものでしょう。自分と他人を結ぶ通路ですね。その通路が崖崩れかなにかで塞がれてしまったら、せっかく通りかかった人も、無人の廃屋かと思って、通り過ぎてしまうかもしれない」

最初は気軽な気持ちで、ぼくは仮面の計画に着手した。

「まず、表皮のガラス様物質について言えば、それはケラチンと呼ばれる、微量の蛍光物質を含んだ角質蛋白の一種だった。また、境界線の処理についても、仮面のふちの厚さを、なるべく小皺の深さ以下にとどめるようにしあとは適当に付けひげでも工夫すれば、なんとか切抜けられそうな見込みだった。伸縮性の問題にしても、皮膚の繊維の配列であるラングル線に合わせて、繊維の束を重ねていけばいい。あの種のプラスチックは、方向性を与えたために、強い伸縮性を示すようになる」

これで仮面はできた。だが、
「ぼくがぼくとそっくりな仮面をかぶっていたのでは、せっかくの仮面の意味がまったく無いことになってしまいはせぬか」

そこでぼくは、考えた末、行きずりの赤の他人の顔型を、一万円で取らせてもらう。全

くのぼくとは別人の男になろうというのだ。材料を整え、道具を運び、書齋を仕事場にした。

「洗面器を用意して、アルギン酸のカリウム塩と、磷酸ソーダと、シリコンの混合液を流しこみ、すべての表情筋の緊張を完全に抜いた状態で、顔を中につける。――」

研究に研究が重ねられる。次第にそのことに異常な熱がはいり始める。まるで別の他人の仮面をかぶり、ぼくがぼくでなくなるという立場から、まず望むことは妻である、おまえとの通路の回復であった。その他人の顔が少しでもおまえの好みに合う部類のマスクのものであれば、それがおまえを取りもどしてくれるかもわからない。

ぼくでない他人、ぼくであってぼくでない他人に変わったとき、世界は一変するかもしれないのだ。服装も仮面に合わせて、すっかり変えてしまわねばならない。そして、そこで出来上がったのは他人であった。

不安と陰微なときめきをかかえて、街に出る。歩くことが冒険だった。通行人の視線に耐えることが、不安な喜びだった。タバコ屋でタバコを買ってみる。大丈夫だ。ぼくは他人なのだ。

「顔に仮面をかぶった以上は、心にだって、それにふさわしい、計算しつくされた仮面が必要なのである。出来れば、嘘発見器からだって発見されない、演技とつくりごとに徹したいものである」

「はつきり言ってしまうとしよう。ぼくは、赤の他人として、おまえを、おまえという他人の象徴を、誘惑し犯すつもりだったのである」

ぼくは二万五千円で空気拳銃のワルサーを買い、それを持って自分の家へ乗りこむ。妻が出てきた鼻先に拳銃をつきつける。しかしそれ以上には、手が出せなかった。拳銃でおどしつけながら、妻に、夫の留守中、自漬をしたことがあるかどうかをなぜしつこく自白の強要をしなかったのかとくやまれる。

ぼくはそれでも妻を愛していた。嫉妬しながら愛していた。そして妻に復讐したかった。ぼくは独白する。

「素顔には、仮面のような酔い方など、絶対にできっこないのさ。素顔に出来ることといったら、せいぜい酔った素顔どまりだからな。だが仮面は違う。仮面の酔い方は天才的なんだ。一滴のアルコールの力さえ借りずに、完全誰にでもない人間になりきることで出て来るのだ」

「他人になって、だれでもない人間」になることへの誘惑の恐しさを、感じることはないだろうか。気づいてみると、秩序や節度と言えるものは、素顔というほんの薄皮一枚にさええられた、心細い砂の城にすぎないのではないか。人間が他人になったとき、まず襲うのは破壊衝動である。もし隠れ蓑を着て、姿を見えなくすることができたら、そして自分という素顔がなくなったら、その時の衝動は何か。破壊衝動もあるであろうが、結論を言おう。それは性欲だ、と安部公房は言い切る。

精巧な仮面を幾つも、だれでもが持っていて、いつでも好きな仮面で他人になれるとしたら、人は人を信じられなくなってしまいうであらう。

「人々は次々に新しい仮面と交換し始める。そして絶えず新しい仮面を追い求める。個人などという言葉は、公衆便所の落書にしか見られないような卑猥なものになってしまい、家庭、国民、権利、義務とかのことは懇切な解説なしには理解されない死語になってしまふだろう。人間は、はたして、そんな御破算の反覆に耐え、そんな無重力状態のなかからでも、けっこうそれなりに新しい約束を見つけたし、新しい習慣をつくり上げて行くことが出来るのだろうか」

人間は常に変身を求め、自己からの解放を願う。忍術というロマンチックな万能への夢を思うことは、変身への願いではないのか。

俳優が他人になりきりたいとする本能じみた演技への執着は、これこそ端的な変身願望である。小説を読む読者は、作品中の人物に託して、他人の生活を生活するのだという。その本能的希求を望ませる本体の所在はどこか、それは性欲だ、痴漢への願望だ。痴漢とは、自分で自分でない、自由な他人になることだ。その謂ではあるまいか。他人になるということは、自己からの解放である。《壁》のカルマ氏のように、名前から解放され、自分の胸の中の、世界の果てである荒野に、それぞれ自分の巨大壁を立てることだ。

他人になって自分の妻を誘惑する、仮面をかぶった男は次第にそのことから、真に痴漢として失った自己を回復し始める。

顔を失った男は、他人の顔によって、初めて自分の顔を取りもどす。初めから、素顔にだけ縛りつけられている宿命にある人間たちは、そのために自己の顔をとりもどす機会にめぐり合うことがない。そのことからくるあせりのために、酒を飲み、せめてもの素顔からの解放を願う。だが、酔っても素顔は素顔だ。俳優がいくら名演技をしても、その素顔

は素顔なのだ。女が化粧で、せめてもの変身を願っても、それでも素顔が彼女を縛って離さない。

仮面をかぶって他人になったほくが、願った結論は性欲であった。それはそれが最後の不法行為であるからである。食欲、名誉欲、その他もろもろの人間の欲望は、素顔の世界で通りうる欲望である。性欲とて、素顔の世界での性欲は、そのために意味がなかった。ほくが必要としたのは、実に「仮面だけの自由」であった。それが不法行為であり、あえていえば、アブノーマルに変身することである。

仮面は仮面に敏感である。最大の仮面は何か。それが国家だ、国家という最大のアブノーマリストは他人の顔のまま、素顔にもどることがない。国家の素顔を見るのは、痴漢だけである。痴漢はその意味で無政府主義者という、最も純粋な立場に足がかりを得る。

「たしかに痴漢的行為というやつは、抽象的な人間行為の、性的な側面だと言えるかもしれない。——すなわち、抽象的な女性が存在するかぎり、男性の痴漢化は避けがたい必然だということになる。かならずしも痴漢が女性の敵ではなく、むしろ女性こそ、痴漢

の敵なのかもしれない」

ここにおいて結論が次のように出される。

「痴漢的存在は、ことさらゆがめられた性というわけではなく、かえって現代における性のもっとも平均的な形式だとさえ考えられるのではあるまいか」

ひとり、頭の悪い少女が居る。その少女は仮面をかぶったほくの本体を、いちはやく見抜いてしまった。發育のおくれた少女であればこそ、仮面を見抜いた。

「仮面が犬をごまかしきれないのと同様に、分析的な大人の眼などよりも、未分化な直観のほうが、しばしば、はるかに鋭いものである。ホウタイや仮面などという、外見にとらわれずに、本質を見る目のこわさ」

にほくはカブトを抜ぐ。だがほくは、まんと妻を仮面でだまし、他人として彼女をホテルに連れこみ、目的を果たす。ほくはほくとして仮面に嫉妬し、仮面に仮面でそういう性の不法行為の成功に、仮面だけの自由な喜びに浸る。この二つの衝突が、ほくの心の中で絶えずせめぎ合うのである。

このせめぎ合いは、無政府主義的マルキシズムと厭世主義的ニヒリズムの妥協と確執のせめぎあいでもある。

われわれが確かな手ざわりで、確かなもの

として信じきっている「顔」の適用性が、仮面製作の驚くべき技術進歩のもたらす背景の中でつい消え去ったとき、そこに初めて素顔の中の真の素顔が、世界を大混乱に陥れる。

「顔」とは何か。個人のトレードマークである。秩序はトレードマークを基礎として組み立てられる。トレードマーク自体に個人個人の重さを測る確たる目安がないことは、公認の理屈として流通するが、実はその重さの実測は、名刺と同様に、トレードマークにはりついたものとして、それを目安に測られているのである。トレードマークとトレードマークが、お互いのトレードマークを見ることが夫であり妻であるとの目安のもとに、その間の愛情の確認まで、手軽に済ませてしまう。そうした日常性の大気の中に還元されてしまった愛憎の慣習化は、トレードマークに白紙委任状を托しているのである。

ここにおいて、個人は初めて、仮面をかぶることと解放されるのだ。自分の顔を持つということとは、すなわち仮面をかぶることだ。

個人回復の内象風景が、自在に液体人間として世界に満ちあふれる図式は、混乱であると同時に、それがアブストラクトの世界となる。

アブノーマリストとは、そういうアブスト

ラクトの世界を、胸の中の荒野として、しっかりと把持する人のことをいう。荒野をもつところからくるかわきや飢えの果てに、荒野に塔のようにそそり立つ、「壁」を育成するのである。

そして遂に、カルマ氏は一枚の壁になってしまった。「変身」の行きつく先の、荒涼たる風景である。

《他人の顔》に最後の救いがあるか。主人公のほくは、仮面のほくがほくであると、とくに妻に見破られていたことで完全な敗北を覚った。敗北の中でほくは妻を発見し、妻との決定的な破綻を回復するために、ワルサー拳銃を手にして、途上に妻を待ちかまえる。

ほくはそこで何をたくらんだのか。それには作品では触れていない。その暗示的場面が幕切れなのである。ここには救いはない。一歩を進めて、ほくは本当に他人になってしまつて、妻を強姦しようとするのだ。妻との回復は、やはり仮面による強姦による方法でないと、望めないのである。

■女と女が鞭をもってたたかう地下室

マ ッ ジ の 別 荘

テ デ ィ ・ 峰 川

フェニクス商会・写真



私の名はマッジ・アレン。私ほどの美しい女性はこの世の中に、二人といたいでしよう。私はひと仕事終えて、ひさしぶりに別荘へもどるためのキャデラックのアクセルに、力を加えます。

舗装されていない急な山道。左側は赤い岩のむきだした崖。右側は糸杉の林がおおいかぶさっていて、私の嫌いな道です。

崖に沿った道を大きく左に曲がると、前方の山の上にいつそう小高くなった森があり、その森のなかに、老婆のようにこんもりとうずくまっているのが、私の別荘です。

別荘の庭には、雑草がのび放題にのびていました。私は、車を裏庭の車庫へはこびました。

車庫の鉄扉をしめてから、車のトランクに鍵をさしこみ、あけます。そこには、手足をめちゃくちゃに縛りあげられ、さるぐつわを噛まされた若い女が、ぐったりとはいつています。この女の名は、シェリー・ランド。

私は、シガレットケースから、たばこを一本とりだして口にくわえ、ゆっくりと火をつけました。この一服のうまさは、なんともいえません。シェリーが目をひらきました。

「どう、長いあいだ揺られてくれたびれたでしょう？　いますぐに、らくにしていあげるから

ね」

といいながら、私はその女の、むっちりとふくらんだ腰や腹に目をやります。ああ、こいつは、たしかに女なのだ、と私は思うのです。嫉妬が私の胸をよぎります。

彼女は、縄に巻かれた身をもだえ、ぎらぎら光る目で、私をにらみつけています。

「あばれなくても、いますぐに出してあげるよ」

私は、きつちりとそろえて縛った女の足の膝の裏側に右腕を入れ、左腕で首をかかえて女を持ちあげた。ずしりと重い。

このガレージの奥には、秘密のドアがあって、そのドアをあけると、地下室へ通ずる階段があります。

私しか知らない地下室です。そこにも、女が五人いるのです。

「さあ、あんたの仲間に合わせてあげるわ。よろしく願いますって、ごあいさつするのよ」

私は、抱いていた女をコンクリートのゆかの上におろし、さるぐつわをはずしてやりながらいいました。女は、敵意のこもった目で私をみあげ、なにやらわめきました。

「もう、いくらさわいでも駄目なのよ。ここは、だれも知らない、古い建物なの。さあ、

あきらめて服をぬぎなさい。お仲間にごあいさつよ」

「いやよ、かえして！」

「わからないのね」

私は、女の頬を思いきりつよくなぐりつけました。そして、手足を縛りつけている縄をほどきました。

この部屋の壁には、ちょうど映画の拷問博物館にでてくるような、さまざまの長さと形をもった鞭が、およそ三十本ほども飾られてあります。

私はその中の一本を手にとって、ぴしりつとゆかを叩きました。

「きいているものを、おぬぎなさい。ぐずぐずしていると、この鞭であなたの背中をどやしつけるわよ」

女は恐怖のために瞳を大きくしながら、ブラウスをとり、スカートをぬぎます。

「さあ、ぜんぶぬぐんだよ」

私はまたふとい皮鞭で、女の足もとのゆかを叩きました。鞭のさがはねかえって、女の足首を打ちました。あつと女は小さな悲鳴をあげました。

抵抗する女を立たせて、コンクリートの壁に押しつけました。まず全身を観賞するので、女は豹のような目で、私をにらみつけて

います。

「まあ、美しいからだねえ。女の私がみても惚れほれするくらいだから、さぞ男どもにはもてるでしょう？」

私の胸に、むらむらと嫉妬がわきあがりました。手に持っている鞭で、ぶちのめしたいのを我慢しながら、つぎの部屋に通ずるドアのノブに手をかけます。

「さあ、こっちの部屋にくるのよ」

女のしりに軽く鞭をあてながら、つぎの部屋に追いたてます。

ピンク色のライトがついています。これはつけっぱなしになっているのです。

「あああ……」

「ううう……」

五つの檻のなかにいる女が、いっせいに声をあげます。餌を待ちこがれた獣のように、首をのばすのです。

「あんたたち、ごきげんはいかが？」

私は、鞭を鳴らしながらいいました。

五人の女の目の色が、たちまちひとつの感情を示して燃えあがります。私の鞭が欲しいのです。目も口も鼻の穴も、貪欲にひろげて私の鞭を求めるのです。

しかし、鉄格子が彼女らと私のあいだをさえぎっています。女たちは、泣き声をあげて

身をもだえます。

檻の中には一個ずつ冷蔵庫があつて、肉とブドウ酒が豊富につめこんであります。もちろん水道管も通じており、水を使うことも自由です。檻の中の女たちは、運動不足になつて、よく肥えています。

「きょうはね、あなたがたお待ちかねの新入りをつれてきたのよ。名前は、シェリー・ランド。化粧品会社のモデルをやっていたの。きれいな子でしょ。よろしくね。いつものように、いちばん念入りに料理したひとに、私からごほうびをあげるわ」

と私は、つれてきた女を、檻の前でみせびらかしながら、いい渡しました。

飢えた十個の瞳孔が、期待と興奮にうるんで、新しい仲間の全身にそそがれます。

私は、一カ月に一人の娘を、この地下室へつれてきます。そして、檻の中の五人の女に料理をさせます。檻の設備は五部屋しかありません。だから、一カ月に一人新顔を増やすかわりに、いちばん古い女、すなわち六カ月前に運んできた女を解放してやります。そういう、システムなのです。

五つの檻の前には、ナイトクラブのショウステージほどの余裕があり、新入りの女は、そこで、自分の運命を知らされるのです。



私は、二号檻の扉の錠をひらきました。

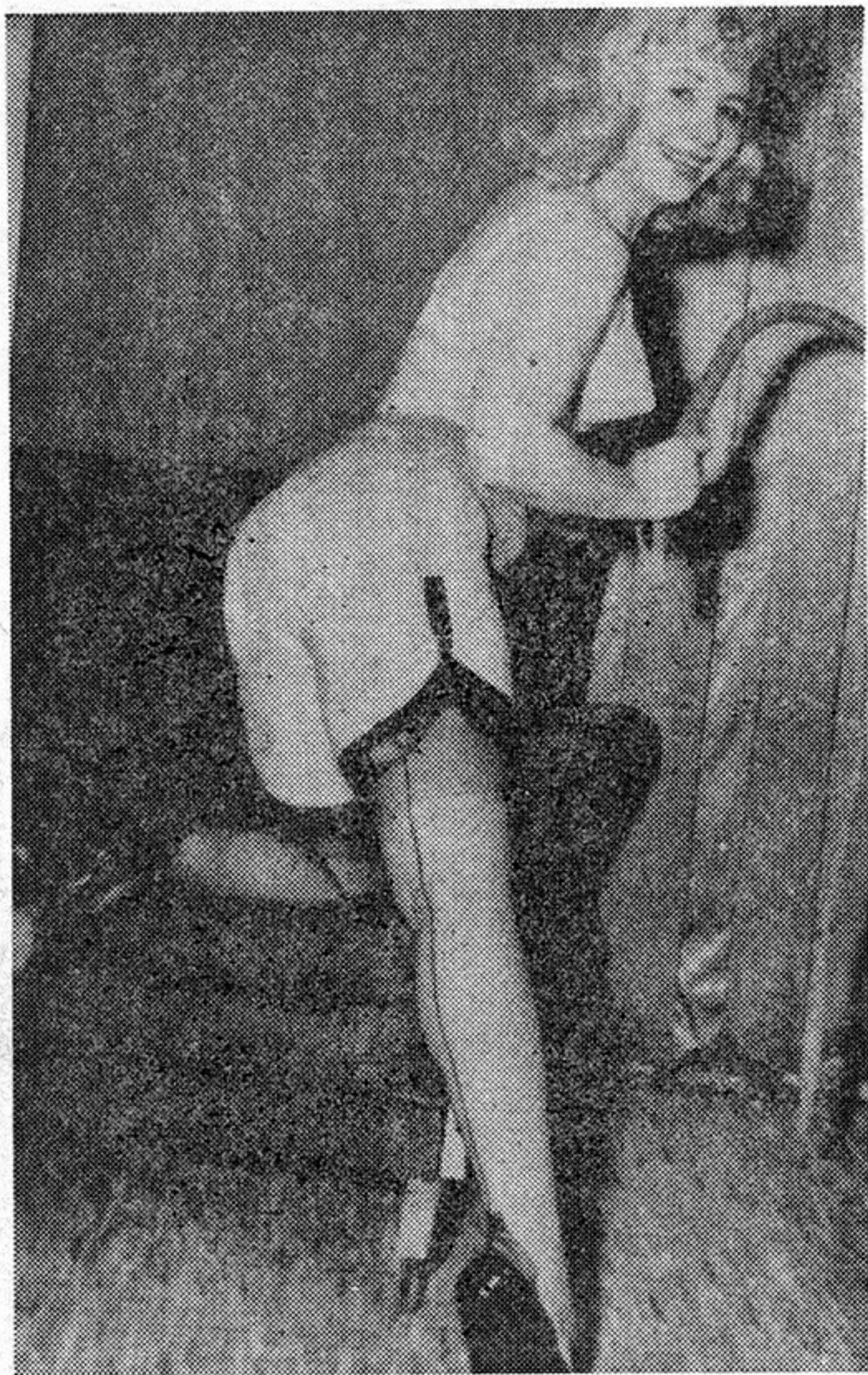
「さあ、好きなようにやりなさい。先月あなたが、みんなにされたようにね。どんなことをやってもいいのよ。ただし、なるべく私の氣にないようにやってね」

私は二号に長い皮鞭を渡しました。そして

新入りには、みじかい鞭を渡しました。これは、主に防ぎよするための道具です。

二号は、ジャングルにすむ鳥のようなんだかい声をあげて、新入りの女に襲いかかりました。

シェリー・ランドの細い胴に鞭をびしりッ



と巻きつけ、あちこち引きずりまわします。

「きゃあッ！」

と悲鳴をあげて、シェリーもやむをえず抵抗を開始します。

若い美しい女が、おたがいに皮鞭をふりかざして戦い合う、この風景は、私にとって、もっとも好ましいもののひとつなのです。

二号は、右手に鞭、左手にシェリーの金髪をつかんで、私のほうへ引きずってこようと

します。シェリーは這いつくばって抵抗しますが、二号の腕力に負けて、じりじりとコンクリートのゆかを引きずられます。

私の目の前一メートルほどまで引きずってくると、二号はいきなり力をぬいて、シェリーのからだを逆にひっくり返しました。ふいをつかれて、シェリーは足をひろげてのけぞります。その羞恥に、シェリーは悲鳴をあげます。

「なかなかいいわ。しっかり！」

私はけしかけます。とてもおもしろいのです。ぞくぞくしてきます。

そのうちに、どうでしょう。それまで、さんざん痛めつけられていたシェリーが、突然反撃を開始したのです。

シェリーは、手にしていたみじかい棒のような鞭で、いきなり二号の足を力いっぱい叩きました。あッといって二号はひっくり返ります。シェリーは猛然とはね起き、二号の顔を、二、三回はげしく鞭で叩くと、その腹の上に馬のりになりました。女同志の壮烈なたかいです。

「ふッ、ふッ、これでもか、ちくしょう！」

もうそこには、化粧品会社のかわいいモデルさんの面影はありません。シェリーは、夢中で、二号の顔を鞭打ちます。私も夢中で、手に汗をにぎりながら、この陶醉境に浸っています。なんとという壮快な眺めでしょう。

シェリーの臀部が、二号の腹の上ではげしく躍動し、鞭は顔と頭をめったやたらに叩きます。とうとう二号は、のびてしまいます。

「まあまあ、新入りに負けるなんて、だらしがないねえ。お前みたいなやつは、こうしてやろう」

私は黒い皮の長靴にはきかえて、その固い

踵で、二号の乳房の上を、思いきり踏んづけました。二号は、ぐっとうめいて気絶です。

「三号、こんどは、お前の番だよ」

私は、三号檻の錠をあけました。

三号は、美容学校の教師だった女です。私の手から皮鞭を受け取ると、警戒の姿勢をとって、シェリーに近づいていきました。

しかし、さすがにシェリーは疲れきっていて、うつぶせになったまま、背中で息をしているのです。三号は、用心ぶかく接近して、シェリーの脇腹を蹴あげました。

シェリーは、うっとうめいて、横転しました。しかし、起きあがるようすはなく、目をとじたまま、大きな呼吸をするばかりです。

「さあ、どうしたの。元気をおだし！」

三号は、横になっているシェリーの顔を、鞭のさきで、ぱちんとはじきました。

そして、片足をシェリーのしりの上にのせて、ぐいと踏みつけます。シェリーは、必死になって起きあがろうとしましたが、三号の足が、上からおしりを、ぐりぐりゆすっているの、なかなか起きあがれません。

「どうしたのさ、早く起きなよ」

三号の鞭が、シェリーの肩さきに、はげしく打ちおろされます。それでも、苦しそうにうめくだけで、シェリーは這いつくばったま

まです。

「じゃ、起こしてやるよ」

三号は、上からシェリーの髪の毛を乱暴につかんで、ぐいと引き起こし、さんざんひきずりまわしてから、こんどは仰向けにして、シェリーの顔のまんなかを、足の裏で踏みつけます。

「ううう……」

と、シェリーはまっ赤な顔になって、うめくだけです。鞭の傷や、すり傷が、白い肌のあちこちに、虫のようについています。

女と女の闘争は、どうしてこんなに感激的なのでしょうか。ここには、なにものにも代えがたい美があります。

男と男が筋肉と力をきそい合って戦うときに、よく男性美が発揮されるといいますが、



女と女が、長い皮鞭をびゅうびゅう鳴らしながら、素肌に汗をうかべ、乳房と乳房をぶつけ合って戦う勇姿にこそ、私は限らない闘争美を感じるのです。そして、戦いが終わったとき、敗者には敗者の美、勝者には勝者の美があります。

だからこそ、この山のなかの別荘は、私のもっとも神秘的な、豪華な劇場なのです。

「どうだい、まいったかい。それとも、もっと痛めつけてやろうか」

三号は、もと美容学校の教師だった女とはとうてい思えないような口調でいうと、また威嚇的に鞭をふりあげました。

シェリーの背中へ、白い波のように、こきざみにあえぎ、声の返事はありません。

彼女に、抵抗心がまったくなくなったことを見きわめると、私は、四号と五号の檻の下アを、一度にあげました。

そして、二人の女に、それぞれ縄をわたしました。もうそれだけで、二人の女は、私の命令をのみこんだのでした。目をぎらぎらさせて、シェリーのそばに走り寄ります。

四号と五号は、シェリーのからだにのしかかるようにして、その縄で、シェリーの両手を縛りはじめました。腕をつかんで、うしろ手に縛りあげるのです。シェリーが無抵抗の

ため、その作業は、案外容易におこなわれました。

シェリーの腕は、むごたらしく背中へねじまげられ、左右の手首が重ね合わされます。

縄はその手首を、ぎりぎりひとつに縛りつけていくのです。

三号が、またシェリーの髪の毛に手をかけて、上半身をぐいとひき起こしました。それは四号と五号の仕事を援助することになり、シェリーは、長い縄で、うしろ手にぎりぎりと縛りあげられていくのです。

「さあ、立て」

三号が、鞭を鳴らしていました。四号が縄じりをとって、シェリーのからだを引き立たせます。シェリーは、よろよろと立ちあがりました。

コンクリートの壁に、鉄の鉤が打ちこんであって、五号がそれに縄じりを通しました。

壁を背に、シェリーはうしろ手に縛られたまま立たされました。首が前に折れ、腰から下が、ぶらぶら揺れています。

ぴしりつと、鞭がシェリーの裸の胴に巻きつきます。シェリーは、顔をぎくんとあげて女たちをにらみつけました。

「これから、鞭の嵐を浴びせてやるよ」

三号が、こういったときでした。

あの不埒な邪魔者たちが、私のこの神聖な地下室へ乱入してきたのは……。

「誘拐魔、ピーター・ガンス。年貢のおさめどきだぞ。さあ、きてもらおうか」

それは、いやらしい制服を着た警官どもでした。五人も六人も、大げさに拳銃まで握って、私ひとり包围するのです。

「ちがうわ。私はピーターなんかじゃない。私の名は、マッジ・アレン。れっきとした、女性だわ」

私はおそれずに胸をはり、腰のあたりを、ちよっとくねらせていました。

とり囲んだ男たちの顔に、ぞっとするほどいやらしい冷笑がうかびました。

「きちがいめ。そのびらびらした服をぬげ。まッ赤な口紅をおとせ。お前はピーター、男じゃないか」

私の両手首に、手錠がはまりました。

せつかく私がかまえてきた女たちは、みんな助けだされました。

私は警察へいき、そこでしばらく調べられてから、病院に入れられました。

しかし、私の名はマッジ・アレン。れっきとした女性です。世界中で、いちばん美しい女性です。

花の中



穂東谷光

あの淑やかで上品な容姿を持つ水田早苗が、下女のような醜くいかつい体つきの、志乃の正妻である、というのも奇異だった。早苗はもちろん志乃も女である。女同志の夫婦生活——ほくにとって妖気さえ漂う不可解な関係である。それに加えて桃子という少女が絡まっている。早苗は桃子を自分のペットだと言い、志乃は志乃で桃子を自分の妾だと言う。桃子の態度は、ほくにもよく分るような気がする。けれど、桃子はほくの妻なのだ。おかしいと言えば、一体ほくの立場はどうなのだ。自分の家である店を出て、アパートで桃子との楽しい新婚生活を過したのも束の間、今こうしてこの奇妙な集団の中で奇妙な毎日を繰返している。大体、この家に住む者

すべてがおかしい。この家の主人、つまり夫の位置にある志乃が女である。そして男のこのほくが、志乃の第三夫人なのだそうだ。確かに世間の常識から度外れて狂っていた。その狂いを自覚しながら男のほくは、志乃の妾の地位に甘んじて、この家から毎日店へ通っている。店へ出ればほくは主人であり社長である。しかしこの家にいる限り男のほくは女の立場に変身しなければならない。まったく奇妙な話である。ふしぎといえばこの家では掃除や食事の仕度など、一切の雑用は主人と自称する志乃が一人でやっている。桃子が手伝う事もあるが彼女は外へ出たがらない。出られないのだ。彼女は常に布切れを身体につける事を許されていない。その姿のま

まで家の中を動き廻っている。衣裳といえはこの家でまともな衣服を身につけているのは志乃だけで、早苗もほくもこの家に居る間中、志乃の選んだある種のものより身体につけてさせて貰えない。

だから人間らしい格好をしているのは志乃だけ、といえる。その志乃が甲斐甲斐しく袖をたくって掃除に専念している姿を見ると、どこかの田舎から雇われて来た山出し女中そのままである。が、その泥臭くゴツゴツした魅力のない女体の主が、この家の旦那様である。どう考えて見ても間違っていた。けれどそれを間違っていると認めながらほく自身黙って耐えている。それどころか、ほくの心のどこかではその異妖さに溺れ、それを甘受し始めている気持がある。

その人は、一目見たときからほくの心を強くひきつけた。きょうで四度目だ。いま前方を歩いて行く。ほくは店をとび出し、あとを追っている。きょうも和服で、その着物の好みといい、着こなしといい妙になまめかしく素人ばなれしている。

しかし決して水商売の女性と見えぬところに、いい知れぬ魅力がひそんでいるようだ。年は二十七、八であろうか。どうかすると年

ごろの娘のように見えることさえある。

その家は京風の格子戸があり細い露地が奥へ直線に伸びていた。中央が石畳で両側には植木や草花が手入れ良く続いている。建物全体にしっとりとした落付があり、母屋はかなり大きいらしい。ぼくは『水田』とある表札の文字をすっかり頭に刻み込んでから、町名を知ろうと隣家の表札を覗いて見た。手帳を出して住所を記入しようとした時、下駄の音がして格子が軽い音を立てて開いた。ハッと身体を隠そうとして、後手に戸を閉めている少女を見て思わず、「あっ」と声を上げた。少女もぼくを認め、ハッと立ちすくみあわてて身をひるがえして逃げようとする。

「桃子」とぼくは叫んでいた。少女の腕を掴んで引寄せながら「桃子がここに——」とぼくは驚き顔でまじまじと少女を見詰めた。眉を寄せ困り切った表情にぼくは激しい憎悪を感じた。

「買物？　じゃそこまで一っしょに行こう」と、ぼくは先になって歩き出した。店の多い通りに出て桃子を喫茶店に誘った。桃子はまだ驚き顔でそして少しやつれて見えた。

田舎の縁を頼りに、桃子がぼくの店に身を寄せたのは二年前の春である。連れて来た知

人の話では彼女はかなり不幸に育って来たらしい。母は桃子と夫を捨てて飛び出したそう。で男手で育ち、父が死ぬと祖母に引取られて細々と暮らしていたそう。中学卒業前の二月、その祖母も亡くなり彼女は孤児となった。村の有志の世話で卒業し、やっとぼくを頼って出て来た、という。

「女中でも何でも——。とにかく住む場所もないのでね、よろしく頼む」

ぼくの知り人はこう言って、桃子には、「良く働くんぞ。ここで勤まらないとお前の行き場所はないぞ！」と。ぼくは心細そうに頷く少女の痛々しく憔悴した細い身体と、青白い皮膚を複雑な面持ちで眺めていた。ぼくの目にはなんとも使えない少女と見えた。店へ出す事は出来ないで下働きとして住わせる事にした。

思春期を過ぎたばかりの女性、その後の変貌ぶりというものを、ぼくはこの少女から身近かに知った。その成熟の過程はぼくにとつて驚きの一語につきる。一年経つと桃子は、ぼくの身の廻りは人の手を借りず、すべて桃子自身でやり、又それを喜んでいるふうにも見えた。

ぼくの店は、輸入食品の販売店で会社組織であり、一応ぼくが社長である。店員も男が

四人、女は桃子を入れると十名以上になる。店員達はぼくを社長と呼んだが、桃子だけは客の前以外では「旦那様」といった。桃子にとって本当にぼくが大切な主人であったのであろう。

そして、その言葉や日常の動作から桃子がまるでぼくの愛人のように店員達の目に写ったらしく、彼女は嫉妬と羨望の入り混った底意地悪い仕打を受けたらしい。そんな桃子の様子を見て、ぼくが桃子を自分の妻にと考え出したのは今年の春である。すでに三十五才というぼくと、まだ十七才である桃子とでは年令の上で多少問題もあったが、それ以上にぼくは桃子の女体に惹かれ始めていたのだ。

この年令まで独りでいたぼくには、それなりの理由がある。自分でそうだと思いたくないが、ぼくの内面にはかなり倒錯的なものが潜んでいるのを知っていた。フェミニストを自認しているぼくだが、それは多分に「フェチ」的なものであり「M性」とはいえないまでも、それに近い感情が心のどこかにくすぶっていた。たとえば、女性の顔の美醜よりもまず肢態の構成に目をとめた。手や足、特に下半身、脚線の型良さがぼくの好みの対象となった。他の条件では恵まれた異性がぼくの相手としてかなり選り出されたが、このぼく

の本当の好みをみたくしてくれる女性のいなか
った事が、ぼくの独り暮らしの原因でもあった。

——むだ毛のないスベスベとした脚に頼ず
りして、果ては唇をつけ太腿まで——その深
部に吸い付く。こんな痴夢に、独り寝の寂し
さに耐えかねて、自らを慰めて明け暮れた事
さえある。世間では人目をはばかり雑誌さ
えぼくには貴重な存在だった。本当に艶肌の主
が現われたなら、ぼくはその女性の前に膝ま
づいて、世に言うマゾヒストのように哀願す
るかも知れない。こういう自分を恐れる心も
あった。

桃子が女として成熟してくると、磨き出さ
れ浮き上って来たその肌や肢態の美しさに、
ぼくはたちまち魅了されてしまったのだ。桃
子はそれほど美しく健やかに成長していた。

慰安旅行で店員一同を海辺に遊ばせた夏の
日、ぼくはとうとう無理強いに桃子を抱い
た。意外にも彼女は既に「女」であった。し
かも桃子の女性である部分はあまりにも鋭敏
で不自然だった。感情と感覚がまるで分類し
ているようで明らかに奇異といえた。女とい
うものを、年令の割に知らぬぼくなのに、彼
女の全身から滲み出る姿態動作から不可解な
ものが感じられた。抱かれた後で彼女はそれ
を弁明した。

「中学の時、友達のお姉さんに——」と、それ
が事実としてもぼくには何とも判断のつかぬ
ことだった。あのやせてみすばらしかった少
女に、目覚めを与えた女性よりも、それによ
って感覚を自覚した桃子の生硬さからの脱皮
がふしぎではならなかった。

狂的に情熱を発散させた一週間が続いた。
もう店員達の目も恐れず、ぼくはひたすら桃
子の美肌に溺れて行った。その行為は日一日
とアブノーマルなものと変わり、ぼくは桃子の
下半身を抱き、唇は女体の愛の根源を求めて
心行くまで味わいつくした。悶え狂う小柄な
肉体を自分の思うままに育て馴らす、という
行為は、ぼく自身を夢中にさせ本当に快悦極
まる仕事だった。ぼくの心は何時ともなくF
からMへ、そしてSをも加味した異常なもの
に移行しつつあったようだ。恐れていた事な
のにふしぎと悔いる気持はなかった。その桃
子が突然失踪し、ぼくの手許から飛び立って
行った。そして今、ここにいます。

「済みません。でも、旦那様が悪いのです。
桃子にあんな事を強要なさるから——」
「だが、桃子はぼくが嫌いじゃなかったはず
だ」

「はい。でも——」

何故か桃子は頬を染めてうなだれた。

「ずっとあの家にいるの？」

「はい」

「誰？ あの人——」

桃子は黙っている。その時、ぼくにはある
直感がひらめいた。

あの名も知らなかった女性が店に姿を見せ
始めてからの桃子は、一層烈しく自らを燃や
したものだ。自分自身の肉体をぼくの顔前に
押付けて来た。ぼくは喜びして、そして彼女
は悶えた。ぼくが桃子の肉体の美しさに気付
くより早く、あの女性は特有の感で桃子の柔
肌を認めていたのか。いつ？ どこで？

「あの人なんだな、桃子を——」

「桃子はいけない駄目な女なんです。旦那様
にそれほどかわいがっていただきながら、桃
子はとうとうあの方から逃げ出せませんでし
た」

「一体いつからだ！」

ぼくは頬をこわばらせていった。

「去年の春。お休みの日でした」

「知らない他人なんだろう」

「あまり美しい上品な方なのでつい誘われ
て」

「本当はぼくに罪があるのかも知れない。忘
れかけていた桃子の気持を引き出すような行

為をしたのはほくだから」

「いいえ、悪いのは桃子です。でもあの方も淋しいのです」

「どういう人なの？」

「あの方、本当は金髪ですの。染めているから分らないけど——。混血なんです」

そうきけばたしかにエキゾチックな香りが充満していた。瞳の色の深いのもあるいは青味がかっているためなのか。

「お父様は、まだフランスで御健在だそうですね。お母様は亡くなられましたがあちらへは行きたくないそうで。それにお金もあるので遊んで暮していられます。あの方は働くという事の出来ぬたちで気ままに遊んで楽しむ事を生甲斐と考えていられるふうです」

「その遊びの相手が桃子なのだね。混血か、あの人」

「早苗様といます。でも旦那様はどうして桃子がここに——」

「桃子に逃げ出されてからほくがどんなに淋しかったか分るだろう。あの方は美しい人だし、たびたびほくの店へ来た」

「じゃ早苗様の跡を追っていらっしたの？」
「まあそうだ。美女に惹かれたお蔭で今日は嬉しい収獲があった。桃子はほくの許へ帰ってくれるね。必要ならその人に逢って頼むさ」

桃子は悲しそうな瞳を上げた。

「いけません。それだけはお止めになって。もう、桃子の事は忘れて下さい。あの方は決して桃子を手離しません。桃子は責められて旦那様の事もあの方に話してしまいましたの」

一瞬、桃子の表情に憂愁が漂い、桃子いとしさの気持がほくの心を締め付ける。

「恐い事だわ」

小声で桃子は呟くようにいった。その意味はほくには分らない。が、桃子には意識的にほくの店へ顔を出したあの女の意図が分っているらしい。

「旦那様。あの方には近づかないで下さい。」

桃子の一生のお願いです」

「じゃ、桃子が帰ってくれるかい」

「ええ。でも、結局又連れ戻されるでしょう」

桃子の言葉は低く淋しい。桃子に対する愛情がほくの心にたぎり始めた。

「ほくは行くよ。逢って話をつける！」

「仕方がありません。火曜と金曜。それに水、木の両日もおさけになって」

「それじゃ土、日、月の三日だけじゃないか」
ほくは立ち上った。何かわけの分らぬ興奮に心を震わせた。

朝夕は少し肌寒さを感じるようになり心持

良く晴れた日曜の朝、ほくは丘陵地帯の住宅街に来ていた。都心を離れたこの附近は喧噪を知らぬ閑静だった。心を引締めて呼鈴を押した。気配のない石畳の奥深くで微かにブザーの音がした。三度目の手を伸した時、遠くで見覚えのある姿が小走りに近づいて来る。その姿は何ともいえず愛らしい風情をほくの目に映す。桃子の表情はこの前と同じように当惑と恐れが入り混って悲し気に見えた。

「やっぱりいらっしやいましたのね」

「ああ来たよ。約束だもの——」

桃子は格子を開くと、どうぞ、というふう

に軀をよけた。
「早苗様はまだお寝みです。でも、もし旦那様がお出なら知らせるように、といわれてます」

「ほくの事、喋ったの？」

ほくは振り向いて見たが、俯向いた桃子の表情は分らなかつた。これほど桃子を拘束出来るあの女性の魔力にふと恐れを感じた。かなり広い庭に面した洋風の部屋は秋の日射しの中でしつとりと重々しかった。

「ここへお通しするのは特別の方だけですの」
桃子は小声でそんな事を言って出て行った。その言葉の意味を計りかねているほくの

耳に女の声が聞こえてた。隣の部屋らしい。一人は桃子、その相手が早苗らしい。すると隣の部屋は早苗の寝室なのか。ぼくはギョツとした。特別の客用の部屋。その特別の客がぼく——。耳の聴覚ばかり鋭く、瞳は宙に浮いた感じで何も映ってこない。シャワーの音がした。女の声もする。間近いところで聞く女体の湯浴みの音は、妙に生々しく男の官能をゆさぶって来る。

だいぶたってからその人が入って来た。花模様のある派手なガウンを纏い、ゆっくり歩いてぼくの正面の低い椅子にすわる。そして巧みなポーズで足を組んだ。

「こんな格好でいけなかったかしら——」

なめらかな肌、ぼくの気持を誘いそうな脚が割れたガウンの裾からはみ出し、膝の上あたりまで昼近い陽光の中に浮上っている。ぼくはウツ、と息を呑んだ。指先で煙草をはじき、ぼくの様子を見ているようだ。今、ぼくの目前にある彼女の姿から、あの気品のある和服姿は想像も出来ない。ぼくは又、女の体の不思議さを泌々と思い知らされた。

「ホホホ」とつぜん彼女は嬉しそうに笑った。「あなたでしたの、桃子と結婚したいという社長さん」

「私が桃子の保護者なのです。大変お世話に

なりましたそうで、感謝しています。でも、今日は引取らして貰おうと思って」とぼくは精一杯の威厳を籠めた心算である。だが、その意気込みも彼女の一言でなえすぼんでしまった。

「桃子の××がおいしいって、ねぶったり吸ったりした、いやらしい小父さんはあなたでしたの。もっとよく顔を見せて下さない？」

ぼくは全身を真赤にした。そしてスウツと血が下って行く。卑猥な単語が、そのままこの気品にみちた女性の口から出た。激しい驚愕であった。ぼくはその言葉をとがめるより先に、羞恥と屈辱とで顔も上げられなかった。そういう男をなぶる彼女の口から、妖しい言葉が続いて出る。

「女のからだへ舌を入れてむさぼりついている男って傑作だわ。その姿が面白いのじゃないの。あなたのそういうところに興味があるわ。その行為で満足するって奇妙じゃないかしら」

草苗は、故意に脚をブラブラと動かし始めた。ぼくにとってはなはだ迷惑なデモンストレーションである。

「条件を出しましょうね。たった一つ、簡単な事なの。あなたがそれほど桃子を愛してい

らない？」

「証明って——」

「あなたの独特な愛の姿よ。桃子は今では私のペットなの。大切なお人形だわ。それを取り上げるんだもの——その代償としては当然でしょう。私は男の方のそういうくせを見てみたい」

常識では考えられない言葉だった。

「桃子の変りに私じゃどう。私のからだにそれをして見たい、とお思にならない」

ギラギラと光る瞳で彼女はぼくを見詰めている。

「この身体じやいけません。不足かしら」

不意に、彼女は立ち上ると思いきりよくガウンを開いた。

ぼくは目を閉じた。頭の中を欲求の思考が渦を巻いて湧きかえる。桃子との愛撫の限りをこの人の前で出来そうにない。瞼を閉じて耐えている鼻面に、突然、芳香が迫って来た。ぼくの魂までとろかすほどの甘い強烈な香りだった。ぼくは思わず知らず渴を求めて谷間のうるおい——体臭の強い人だった。それが不快でなく、むしろ悦びの陶醉さえ感じ夢中になっていた。

かねての手はず通りぼくと桃子は準備して

あったアパートに移転した。店は年配の支配人格の者に管理させることにした。

忙しい日が過ぎてほくは桃子と拳式した。あわただしかったが、それがあの女性に対するほくの唯一の反抗でもあった。一週間の旅行を終え、みち足りた気持で帰って来た。

旅行中、ほくと桃子の間であの女性の事がたびたび話題になった。桃子は喋る事を避けたが、ほくは聞く事により、さらに一段と桃子との接触到異った味合いがあったのだ。が、それも旅先だけの事で、戻ってから早苗という名を禁句とし二人切りの愛の中へ埋れて行った。桃子は時にはほくの女王となり、そして又奴隷となった。その都度、ほくは新しい刺激と興奮で夢中となり、或る時はぬかずいて桃子に奉仕し、また或る時は桃子を威嚇し立ちをはかって桃子の髪を抑えて仰向かせつつ誓わせた。快美な享樂の日の連続だった。

桃子の姿が再び見えなくなったのは、ほくがアパートから店へ通うようになってから間もなくだった。一晚、不安と焦慮に明したばかりはその朝、躊躇なく水田早苗の家へ向った。ほくの心は憤りに満ちていた。慌しく二、三度続けてベルを押した。

やがて見知らぬ女が出て来た。身なりを構

わず働く農婦、といった感じでからだつきは頑丈で肩の肉が盛上り腕も太い。四十近い年頃で顔も日焼けして醜い。あの混血の美女との取合せは、何となく不自然だった。この女のことは桃子からも聞いていない。あれから後に早苗が新しく雇った女なのか。ほくはふと、訪問してはいけない日、今日が、その金曜であるのを思い出して妙な気がした。女はほくの来意を聞くとニヤリと笑った。厚い唇がまぐれて不気味だった。ほくの案内されたのはこの前と同じ洋間で、女はほくと向い合ってたすわった。

「私は志乃と言って古くからこの家を管理しています。お嬢様の用心棒。柔道とそれに空手も少々。よろしく——ね」と赤ら顔をほころばせて笑う。低い鼻、ヌメヌメと厚く赤黒い唇。歯だけが真白でむき出しの腕の皮膚までこげるように焼けている。まるで南方人種である。腰が逞ましく、掌も男のほくより大きい。この女になら並の男は忽ち組伏せられてしまいそうである。優形のほくなど少し突かれただけでよろけるかも知れない。その顔を見ているだけでひやりと背筋が寒くなる。「私は早苗様のお父様をご存じですわね、あちらの方の小間使いでしたの。戦争でお国へお帰りなってから、ずっとお母様や早苗様を

お守りして来ました」と言いながら志乃は、つと立上って部屋の四囲を閉め始めた。窓のカーテンを張ると庭に面して雨戸が繰られた。部屋が暗くなった。ほくは女の心を計りかねて黙って見ているより仕方がない。

しかし何かしら、不気味な寒々としたものを感じ始めていた。カチリと入口が施錠せられた。

「あなた、桃子の御主人でしたわね」と暗くなった部屋の中を女の声が動いて行く。

「私も実は桃子の主人ですよ。ホホホ驚いた？ 今ではこの家の本当の主人は私なの。

早苗は私の正妻、つまり一号夫人で桃子が二号さん。そしてね、今からお前が——」と不意に部屋が明るくなり四囲上下に特別に装置された螢光燈が真昼をあざむき、影というものがなくなり、ほくの目の前に偉大な姿が突立っていた。

「お前が私の第三夫人になるのよッ」

逃げようとするほくを、志乃の掌が二、三度ほくの頬に命中した。ほくは着ているものを残らず剥がれ、内側にフェルト布のある痛くない手製の手錠を後手の手首にはめられ床の上に転がされていた。アッという間の出来事である。ほくの頭は混乱していた。女の言葉を考える余裕もなく、頬を打たれ剥がれて

括られて転がされた。柔道、空手というだけあって女の力は凄まじかった。

「どう、私にはかなわないでしょう。お前の名は……そう、沢本五郎だったわね。フッフ愛称にゴロちゃんと呼んでやる。いい名だわ第一ゴロ（語呂）がよい」と勝手な事をいいながら、楽しそうに遠慮なく鎖をグイグイ引く。

「私にはさからえない。私はお前の夫だもの、妻というものは非力で夫の命に従うものよ」

この女の言う事は正気とは思えない。一体男なのか女なのか。女らしいが、すると男のほくを「夫人」にするとは。しかしほくの身体は意志に反して女の手の力の働くままに動いている。

「ゴロちゃんは私の可愛いおんな。うまい具合に飼ってあげる」と志乃はなおも妖しい笑を続けている。

「裸のままでは恥ずかしそうね。花嫁衣裳を着せてあげる」と志乃は寝室との境の板戸を全部外して戸袋に入れた。ほくは思わずアツという。何よりも正面の大鏡に驚かされた。そこにはあさましい姿になったほく自身が映っていた。

八畳程の横長の部屋は、半ば以上が腰の低いベッドである。窓には厚いカーテンが垂れ

反対側の戸棚には洋酒瓶が林立し、その横の物入れには奇妙な金属器具が山積していた。

装飾は豪華で天井には鉄柱が交差し、鎖や鉤が不気味に垂れ下っている。まるで見知らぬ異常な世界へ足を踏み入れた感じである。志乃はベッドの上でほくを押えつけた。そして華やかな色彩の布をほくの身体に纏いつける。ほくは志乃の力で子供のように自由にされた。再び手錠がはまり、その一端を鉤で吊られ引上げられた。目の鏡。その自分の姿を見てほくはこの年までこれほど羞恥に悶えた事はなかった。

薄桃色地に華麗な小花を散らした肌のすけて見える絹。袖は長く肘まであり裾も膝頭の上まである。しかし腋の下と胸の二カ所はえぐられてある。そして前から後にかけて大きく逆V字型にカットしてある。布は全身を締めつけ、もし花模様がなかったなら裸と少しも変らない。いや裸よりもその華やかさ、わざと急所をカットしてあるのが、かえって羞恥の極みである。これが志乃のいう花嫁なのか。

「いいよ。いいよ」と志乃は顔をほころばしつつほくの足を開かせて括る。そして座布団を重ね、枕を置き、適當の高さにしてそこへ坐り手を伸してきた。

「私は男って動物に興味がないの。初めの妻は早苗の母よ。早苗は後妻。早苗を横取りしようとする男がいたので、私が妨害したの。当然の事よ。女は人形が欲しくなるの。早苗も桃子という人形を探して来たわ。だから序にこれも私の妾にしたの。お前のような変った男が、桃子についていたので私は面白いと思って、早苗にお前を誘惑させてやった。お前のくせには興味があるわ」

志乃は絶えずほくを弄っている。あの力のある掌なのに中味は割合にやわらかくほくは、羞恥の衣裳を纏った哀れな姿で必死の反抗を試みながら、巧みな掌に萎縮していた。自分の意志を無視して蘇りつつあった。

「荒修行のためにね、私の歯はほら——」

真白な歯は入歯であった。それをボンと放り出してフアフアと笑う。開いた口腔は真赤である。ゾツとしてほくは悲鳴を上げた。

「駄目！ 夫の命に従わぬと虐めます」と志乃が迫って来た。馴れ切ったように巧みだった。ヌメヌメして柔らかな感触にほくは自分の屈辱も驚きも忘れ、一点へ神経を集中する外なく、身体を震わせていた。鏡の中の華麗な花模様は色彩りも鮮やかに揺れ動いていた。「止めてくれ——」

その声もしわがれ目も震み、鉤から外され

でも身体を動かすのも億劫なほど、ぼくは疲れ切っていた。それからしばらく眠ったらしい――。

三時間余りも眠ったであろうか。このわずかな睡眠時間が、ぼくにとって取返しのかぬ現実となってしまうようだ。志乃のぼくに対する飼育は計画通り遂行されていたらしく、目覚めたあと、まず最初に疲れて空腹にあえぐぼくの前に、まだ、湯気の出ている極上の食事が置かれた。ぼくは、首輪の鎖を、一点に固定され前進出来ない。考えて見ればこの朝、いや桃子のいなかった昨夜から、ぼくは食事らしい食事をしていない。空腹は頂点に達しあさましくも、グーッグーと音を立てた。

「欲しいだろ。本当に私のおんなになるなら喰べさせてやるッ」と志乃は、ブラウスとスカートを抜き、白い下着姿になっていた。少し派手目な上衣を取り、白い布で覆われた彼女は幾分若く見え、ゴツゴツした姿態にも奇妙な色気があった。

「入らないの。じゃ他のものにくれてやる。昨日桃子が私の留守に逃げ出そうとしたので今懲戒中なんだ。あれも昨夜からは何も喰べないのでちょうどいい」

志乃は手を叩いて「早苗！ 桃子を連れて出ておいで」と、大声で呼んだ。ドアが開いて、車のある低い奇妙な椅子に固定された桃子が姿を見せ、続いて早苗が現われた。桃子は裸であぐらを組んで手を椅子の背に回していた。細部にわたり堅く固定されている。顔は仰向き、あの可愛い口は太い筒をくわえている。筒ではなくそれは透明な樹脂で出来た漏斗に似たもの、上の部分は楕円形でかなり大きく、丸い桃子の顔より一廻りもはみ出ている。顔は左右の台で固定されていた。

「あれが何か想像出来るだろう。桃子はあれ以外何も喰べていない。ほら、腹を空かせて泣いている」

桃子の頬は濡れ光っていた。ぼくにはしかし、その桃子の哀れな姿よりも立上って、こちらを見ている早苗の容姿を驚異の瞳で眺めていた。今見る早苗はあの気品ある姿でもなく、また女豹の様な妖しい女体でもなく、肌のすけて見える黒紗の水着、ぼくのものと同じ様な特製である。

「誰が立てと言いました！ 歩く事は許していません！」と冷酷な志乃の声に、早苗は慌てて床に伏せ、桃子の椅子の後下部にある横木を這って押す。そのあさましい姿で、早苗は桃子を連れて来たらしい。

「そんな格好じゃ仕事が出来ません。しっかり膝を伸して」

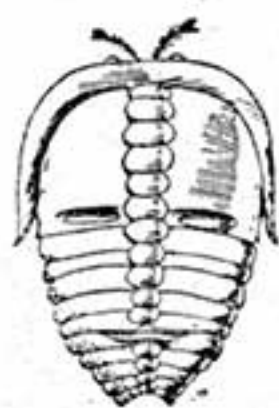
つまり、尻を高く持上げて這え、というのが。早苗は志乃の言葉に従っている。水着の背は腰までV型に削られ、ほんの少し生地を残して逆V型に股に連なっている。這うにつれ、真白な双丘が盛上りクネクネと揺れ動いた。これがあの淑やかなブロード女の正体なのか。ぼくは夢を見ているようだった。

それから数時間、ぼくにとって夢幻の世界にいろような行為が続けられたのだ。

二日経ち三日目の日曜には、もうぼくは首輪も手錠も不用な人間になっていた。だが、志乃は極めて気まぐれだった。自分の感情のままにぼく達を拘束し器具を使用する。志乃という女の妻という不自然な立場にありながら、ぼくの男は満足し尽していた。もともと女体の微妙な部分にいい知れぬ憧れを抱くほどである。姿、かたちにそれぞれ特色のある三女との集団生活は正直言って楽しい。

土曜と月曜は志乃が道場へ行く。残されたのはぼくと早苗と桃子。もとの男女となり享樂の時を過す。この場合、早苗はぼく達夫婦の君主となる。今のぼくは両手に花を育てる事に専念している。

檻 (おり)



松 山 省 一

大谷令子から、わたしの勤先へかかってきた電話は、あまりにも予期せぬ出来事だったので会って話を聞こうと答えた。令子のたかぶっている胸のうちは、受話機から声の調子で十分に察しがついた。

いま約束の場所で向かい合っている。ここは大谷京介、令子、わたし、この三人がよく出入りした喫茶店だ。家では大半スラックスなど洋服で通している令子である。だから久しぶりに見る和服姿に新鮮な女を感じた。

さわれば手ごたえのありそうな長い黒髪をアップにしている。その匂いが見る者の嗅覚を刺してくる。自分の髪について令子はそれ

となく自信を持っているようだ。しかし容姿をも含めて、それを鼻にかけるところは見られない。やや小柄なタイプだが、知性をそなえた美しさを持っている。

「大谷君が無断で家を明ける理由は、ぜんぜん心当たりないの？」

「ありませんわ」

「だから失踪したのではないか、そう考えているのだね」

令子は伏目がちにうなずく。わたしはそんな彼女の胸のうちには、とつぜん夫の不在になった孤独と寂寥がひめられているのだろうと思った。

大谷京介は、わたしと同じ三十すぎだ。

令子は二十になるかならない、そんな年ごろの若妻である。二人の年齢のひらきを見る者の目に、まるで兄妹のように印象づける。そしてまた、わたしが知っているかぎりではもっとも恵まれた仲のよい夫婦である。

そういう二人の間で、夫が妻に無断で家を二晩も明けているなど、およそ考えられないことだ。

「あの京ちゃんは、あたしと知り合う前に親しい女の方がいたかどうか、ご存じありませんか？」

と令子は、日ごろ夫を呼ぶ愛称、京ちゃんを口にして、夫の過去的一端をわたしから探ろうとしているようだ。

それにどう答えるべきか、わたしはまよっていた。

なぜなら、大谷京介は九州のさる実業家の二男坊である。恵まれた環境と育ちのよさ、その美点をあますところなく身につけている男だ。そういう彼に、令子と知り合い結婚するまでに、一人や二人の女性がいたとしてもふしぎではない。

おそらく令子も、そんなふうにいるのではあるまいか。それを考えると令子に対し、わたしは親友としてこれまで接してきた

大谷京介の人間像を、わたしに可能な範囲にまでひろげ、話してやるべきであるかもしれない。

しかしこのときのわたしの関心は、なぜ大谷京介が妻の令子になんのまえぶれもなく姿を消したのだろうということであり、この予期せざる出来事によって、彼女は今後どうなるだろうということだ。そこで話をふりだしに戻す形で、ただしてみようと考えた。

「念を押すようですけれど、はじめ電話でも言われたように、大谷君は失踪したのではないか、とあなたは判断しているわけだね」

「ええ」

「その理由は？」

「あたしに無断で、家を明けるなど考えられないためですわ」

「なるほど。では彼に古い女友だちがいたのではないか、そう少しでも考えたとすれば、それは？」

「たとえばのお話です。決して決めてかかっているわけでは……」

「わかります。ところで、こういうことは考えられないですか。大谷君は何者かによって拉致されているとか、あるいは彼の意に反した形で、どこかに監禁されている、ということについて」

「……」

令子は、一瞬きんちようしたようだった。

それは驚きともとれるし、また彼女自身で、もつとも恐れていることをわたしがずばり言ったための、衝撃ではなかったろうか。いずれにしろ、このわたしの仮想に対して、令子がひどくショックを受けたようすがわかる。

「もつともこれは、たとえばの話です。大谷君を拉致し、監禁することによって、その者は何を企んでいるのか。こんなふうの一つの仮定を立てて見るのはどうだろう」

「……」

「この点について、あなた自身に思いあたるふしはありませんか？」

「ええ、でもべつに……」

「ないというわけですね」

令子は、こくりとうなずいた。

「いま言ったことは、あくまでも仮定です。それにしても、まったく信じられないことだね。大谷君が姿を消すなんて」

と言ひ、令子の動きに注視した。いま、わたしが立てた仮定について、あきらかに彼女は心を動かしながら、しかし多くを語ろうとしない。そんなふうに見えるのはなぜだろうか。

わたしは令子から目をそらし、だいぶ客が

混み合ってきた喫茶店の内を見まわした。すると、わたしが吐きだしたタバコの煙の輪の中から、

「やあ、すっかり待たせたね」

と大谷京介が人なつっこい笑顔で、長身をわたしたちの方へ運んでくるではないか。いつものように、原書の入っているカバンを手に持っている。そんな錯覚にとらわれているとき、

「あの、どうしたらいいかしら」

不意に心ほそげな令子の声である。わたしは無責任な言葉で突きはなしてみた。

「いっそ、警察へ届けてみては——」

「警察へ？」

問い返してから令子は首をふった。

喫茶店を出ると、すっかり深まった秋の夜気が寒く感じられた。とにかく郊外の大谷の家まで令子を送ることにした。都心から電車でたっぷり一時間はかかる。そして駅から家まで十五分は歩かねばならない。

駅前からのバスはもうない時刻だった。

「ここままで、けっこうですわ」

と歩いている途中で令子は言った。わたしは意外だった。いちおう家の玄関までは送り届けるつもりでいたからだ。

しかし令子は、わたしに足止めをするよう

にしておき、ひとりで夫のいないはずの家へ、小股で急いだ。それをなすすべもなく、わたしは見送った。立っている所から大谷の家まで、まっすぐの一本道だ。そこらは住宅や農家が点在しているだけだから、昼間なら見えるはずだった。

夫のいない家へ、夜分に他の男を招くのは令子の常識がゆるさないのだろうと、ごく単純にそれを受けとり、彼女の姿が消えたのちも、わたしは同じ場所にしばらく立っていたのである。

さて、生きているということは、わたしたちを抹殺しようとするものとの、たえざる戦いではあるまいか。いつ、どうして抹殺され消されてしまうかわからない、こういう不安なり恐怖は、平凡に見える日常生活のなかで寸時の猶予もなくつきまとうている。

また、予期せぬ出来事、これに出会ったとき、わたしたちは改めて不安なり恐怖すら感知しているのに気がつく。たとえばわたし自身にとっては、まったく予期せぬ出来事であっても、それが他のものによって仕かけられた罠であつたりする場合がある。この場合すでに前もって計画されたものであつたとしても、それを事前に感知することはむずかし

い。

なぜなら、わたしたちはあまりにも複雑な社会、複雑な人間関係のなかで、現代人としての時点に立ち向かっているからだ。この複雑な人間関係のなかで、おたがいには不信という言葉を口にしながら、同時に暗黙のうちに信じあおうとしている。これがなくては、おそらくわたしたちの神経は休まることはあるまいし、自滅してしまうだろう。

暗黙のうちに信じあう度合が深ければ深いほど、わたしたちは親愛を持ち、抹殺しようとするものに対し、共同戦線を張っていることになる。だが、この仲間うちで、予期せぬ出来事が起きたとき、それがわが身の安全や利害と深いかわりあいがあるのを見のがすことはできない。

大谷京介の失踪——そう表現することが事実と合致しているとすれば、それを令子から知らされたとき容易に信じられなかった。わたしと大谷京介とは無二の親友と言っても、おたがいに少しの異論もない間柄で、毎週いちどは顔を合わせている仲である。それというのは、大谷京介が令子と結婚してから、いまだに独身であるわたしを、週一回食事に呼んでくれているためだ。だから大谷夫妻とわたしとは同じ家族も同様である。かれら二人

の生活について、ほとんど知っていると云つても過言ではあるまい。

同時に、アカデミックな学生生活をつづけている彼に、わたしが自分ではなしとげられない夢を託して、半ば羨望といつしよに、いまなお接していることも嘘言ではない。だから、大谷京介が令子を妻として迎え、郊外に新築したばかりの一軒をかまえたとき、そこで営まれる二人の睦ましい生活、そして彼の学問それらが、まるでわたし自身のことでもあるような深いよろこびとして眺めていた。

そういうわたしの気持をさっしてか、大谷京介も令子も、わたしの夢を掻きみだすようなふるまいは少しも見せず、ますます親密の度合を深めてゆくよう配慮してくれたのだ。

彼の専開は電子工学の分野である。が、彼は専門の理論や学理から、さらに視野をひろめていた。というより、一つの独創的な学問をうちたてようと努力していたのだ。彼の言葉をかりれば、それは創造性の理論である。これについて彼に求められると、わたしなりの意見も述べてみたことが二、三ある。

つまり彼の説によると、人間の情操ないしある感情の表現（現われ）は、一つの方程式または代数的に、その記号にもとづいて等価式に置きかえることが可能であるという。

こうして、いくつかの人間の感情なり情操を記号や方程式に組立て、その仮説を成立させることで価値転換を図式化する。あるいは価値転換の有用性を示そうというのだった。

この創造性の理論については、日本の学界ではまだ未知数であり、世界各国においても、いまだ決定的な成果は編みだされていない。しかしこの学説の可能性に関して、徐々にではあるが自然科学者が中心になって、一部で目が開かれているのは事実であり、時代の要請でもあるという。

とくに大手の産業界では、創造性理論が労働の能率化やオートメーションの諸問題とも関連して注目され活かされるのは、そう遠くはない。これが彼の持論であり予言だった。

この大谷京介の学研への意欲に、わたしは親友として期待をかけていた。同時に、彼が人間心理のさまざまなパターンにも、この理論の適用を考えており、目をつけているのも気づいていた。それは方法論的にかなり異常なものがありそうだった。

たとえば人間の行為の些細な事象も常識と対比し打ち砕き、新しい価値へという一貫した狙いがある。極端な例をとれば男女が入れたかわることによって生ずる価値、そこから男女の未知な性の世界が開かれるし、それが人

間の幸福に寄与する一つの要素となろう、というあまりに飛躍的考え方でもある。

以上が、これまでわたしの見てきたところの大谷京介なる人物、そのアウトラインである。その彼が愛する妻令子にすら、なんのまえぶれもなく姿を消してしまったのだから、黙って手をこまねいているわけにはいかないのである。わたしには、彼の失踪の真相をあとさらにする義務、それが課せられているように思うのだ。

すでに銀杏並木が色づき、黄色い葉が校庭に散らばっていた。久しぶりにおとずれる構内であった。かつて、四年間の学生生活をここで送ったわたしには、いま、こうして歩いていると、大谷京介との思い出がさまざまによみがえってくる。

学部での四年間を終えると平凡なサラリーマンコースをえらんだわたしである。いっばう、そのころから囑望された頭脳の持ち主であった大谷京介は、学生としては最高である博士課程まで進んだ。頭の切れる男だった。しかし俗に見かける青白い秀才型ではなく、人間味のある貴公子然とした美点を身につけた男、そういう賛辞にあたいたした。

▲創造性研究所▼という新しい看板をかけた

部屋は、まだ校舎の一隅で、うぶ声を上げたばかりであろう。そう思われるような一室に研究室をかまえていた。

わたしが研究室に入ったとき、幸いにも女の子がひとり机に向かっていた。他に三つ四つ机が置かれていた。その一つが大谷京介の机であろうと思った。女の子がひとりであるということは、彼について問いただすのに都合だ。彼女はこのごろの若い娘に見られるように、大柄な女性だった。白い実験着をつけているが、見たところ女子学生というより事務用員として雇われているように見えた。「地方から上京した機会に、久しぶりに訪ねたんですが、休みとは残念だな」とわたしは言った。あらかじめ考えていたせりふである。

「明日は出てきますか？」

「いいえ、大谷先生は十日ほど欠勤届けが出ております」

「すると、いつから休んでいるわけで」「きょうで五日ほどです」

女事務員は、きわめて事務的な応待だったが、少しも厭味を感じさせないのは人柄のせいだろう。ふと令子を思い浮かべた。令子にくらべると、この娘は体が大きい割に植物的な感じがする。

それにしても大谷京介が欠勤届けを出しているとは意外である。これはどうしたというのだろう。令子がわたしに告げたこととは、だいぶ様子がちがっている。

「立ち入ったことをおたずねするようですが欠勤届けは大谷君自身で出したのですか」

「はい、そうです」

「病気とか……」

「いいえ、ご旅行のためと書いてあります」

「旅行先は？」

「京都となっています」

「それで届け出したのは、いつですか」

「二十五日です」

創造性研究所の部屋を出てから、ゆっくりと校門の方へ向かった。試験期を終えたばかりの構内には、学生の姿はほとんど見当たらない。出てきたばかりの建物を振りかえると、気のせいかな、先ほどの娘が窓ガラス越しに、こちらを見ているような気がした。

「二十五日です」という日は、ちょうど大谷京介が家に戻らなかった前日に当たる。もし欠勤届に書いてある旅行先、京都へ行ったのだとすれば、そこには彼の師ともいべき人K氏がいるはずだった。K氏については以前なんとか耳にしている。やはり創造性理論に打ちこんでいる老学者であり、日本ではその

先駆者にも当たり、しかも在野精神を自己の信条とした人物であるということだ。

そのK氏の論文を偶然にある雑誌で見た大谷京介は、創造性理論に目を開く糸口となったというから、K氏に対する彼の憧憬と尊敬の念は相当深いと思われる。

しかし京都へ行くなら妻の令子に無断で家を出る法はない。おそらく京都へ行ったのではあるまい。決定的な裏付けは何もないが、わたしの感である。それにしても欠勤届けを出しているというのは気にかかる。わたしはその足で令子をたずねてみようと思ったのだ。いまいちど角度を変えて、問いただしてみたいことが心の中でわいた。

新しく住宅が建てはじめられた畑の一面に大谷京介の家があった。都心とはちがいで、隣家ともはなれていて、家のまわりにコンクリート塀が作られたのは最近のことだ。二人は隣交がすくないように見えた。だから、とつぜん夫がいなくなった家の中で、令子ひとりが何をしているだろうと想像すると、覗き見るような好奇心が、わたしを強く支配した。ところが令子は不在だったのだ。

その日の夕刻だった。あきらかに脅迫状だと思われる封書をわたしは手にした。一日の休暇をとって外を歩き回ったせいかな、アパー

トに戻るとかなり疲れを覚えた。

封書はドアの下から床とのすき間に差し込まれていた。もちろん相手の署名はない。

『大谷京介の行方を探ろうなどとすれば貴方のためにはなりません。さっそく手を引くのです。もし聞き入れられないなら、貴方の生命は保証できない——』

という意味が、のびのびした比較的大きな文字で書かれていた。一見したところでは男性の文字とも女性のそれとも判じかねるように見える。

「バカな——」とわたしは思った。しかしこれを単なるいたずらやいやがらせだと受け取るのはためらった。それにしても一体だれの仕業だろう。大谷京介をとりまくだれかに決まっていなくても、具体的に思い当たる人間は浮かばない。第一大谷京介が行方不明になるなぞということからして、いまだ実感がわからないのだ。

畳の上にじかに寝ころび、天井板のつなぎ目を追いながら考えた。けっきょく、いまのわたしには令子にただして見るほか、なんの手がかりはない。そこで一兩日、彼女からの連絡を待つことに期待をかけ、勤めに出るほかはあるまいと思った。

この脅迫状が、大谷京介を拉致し監禁して

いる者の仕業であるとするれば、彼がそのような立場に置かれる可能性を考えてみる。もしかすると彼は、創造性に関する研究から新理論をつかんだためによるのではないか。それを世界の学界に発表すればノーベル賞に値するほどのものかもしれない。そんな途てつもない考えを浮かべてみた。

日本の学界は、一般に世間の常識以上にスキャンダルがあるようだ。若い学者とボスとの師弟関係は相当に窮屈であり、封建的な身分関係にしばられているようだ。したがって若手が師以上の研究の成果をおさめても、一部では、その発表を控えさせたり、あるいはにぎりつぶし、ボスが吸い取ってしまう特異な例すらあると聞く。そういうボスに反抗すれば社会的地位の出世はふさがれ、野に下るほかはない。

もし大谷京介が姿を消した背後に、これと似たようなスキャンダルに絡む出来事があるとするれば、まったく部外者たるわたしに脅迫めいたものがくるのは、彼の親友であるためであろうか。それにしても「貴方の生命は保証できない——」とは、常識をはずれ芝居じみたものである。とすると脅迫状をよこした者の主旨は、それには関係なく、別なところ狙にいいがあるのかもしれない。

こんなふうには、いろいろ考えているうち、わたしは眠気におそわれ、じかに背にしている畳から寒さを覚えた。

全身に感じていた肌寒い夜気も、夢をみているのではないかという疑いも、わたしから消えた。それにかわって片目だけだが、じつと見守っているうち、胸の中の鼓動が徐々に乱れてくる。

それは肉体のもっとも鋭敏な部分が、目の前でくりひろげられている出来事に刺激されているためだ。わたしが見ているものは、一条の縦に走る光りがもれている隙間、そこから覗いた部屋の中の光景である。

わたしの心は、危絵を手に行っているのに似た興奮に掻き乱されていく。まったく予期しなかったことだ。

横たわっている女体の肩から胸にかけて、長い黒髪が生き物のようにまつわりついている。背中をこちらに向け、片肘で体を支えながら、ソファ兼用のベッドに白い肌をのせている女体。片方の手でほぐした黒髪をもてあそび、白いしなやかな指先に、髪先端をからませたりしている。ちょうどカンバスに向かっていている画家の前の、ヌードモデルを思わせる。しかも下半身の部分を、絶えず開いた

り閉じたりしている。

ライトは、モデルの全身をあざやかに浮きだたせるような具合に当てられている。垣間見るわたしの正面から、スポットライトが当たられているのだ。そのベッド以外に、部屋の他の部分は、すべてライトの陰にかくれ、何があるのか見当がつかない。

研究室をたずねた足で立ち寄ったとき大谷の家は門の所から覗くと、塀の外からでは見えない縁側の雨戸が閉められていた。だから令子は留守だ。家の中には、だれもいないのだと受けとったわたしは、後日彼女からの電話を待っていたが、その期待もはずれた。

いま、わたしは忍び込みで中を覗いている。他家の塀を乗りこえて内側に侵入することなど、昼間はできることではない。

わたしは、まぶしいライトを正面から受けながら、一条の光りが走る隙間から、光りの背後にかくれている部分を、必死になって見ぬこうとしている。その暗い部分に、さらに予想しえない何かひそんでいる、そう考えているのだ。そのために視点を一点に集めようとつとめるが、ライトをあび、妖しげにうごめいている女体が、それをさえぎり、刺激して、心を混乱させるばかりだ。

このとき、わたしはふたたび予期せぬ出来

事を全身で受けた。それは猛烈な圧力でガッと押しつぶされるショックに見まわれ、両眼から火花が飛び散るような、首すじへの一撃だった。

一瞬、その場にへなへなとかがみ込んでしまったわたしは、かすかな記憶として、鼻穴を何かでふさがれたようであり、しかもすぐに意識をなくして、深い眠りの中へ吸いこまれたようである。

その直後のことや、その後どれだけの時間をへたのか、いくら考えても記憶にない。まさに予期せざる出来事の連けいである。

ようやく正気を取り戻したとき、深い眠りから、ふたたび夢の世界へ、暗やみの迷路からはいだしたように、夢のつづきを見ているのかもしれないと思った。

まず全身にわたる気怠い中に、痛みのようなものを感じて目ざめた。そして気がつくとなたしは檻の中に閉じ込められているのだ。四角の檻である。一面だけに頑丈な鉄棒がはめられており、ちょうどポインター大の犬小屋みtaiである。その中に全身をくの字に折りまげた形で押し込められている。

ぼやけていた視覚に、なにやら物の形が見えてくるにつれ、目の前に同じような檻が、もう一つある。わたしの檻と二メートルとは

離れていない。鉄棒がはめられている側が、こちらに面している。つまり二つの檻は向かい合わせになっているのだ。

しかし、それらしい物の形が見えてきたと言っても、まわりはうす暗く、はたして家屋の中なのか、それとも人里はなれた洞穴ののかなのか、物音一つしないのでわからない。「気がついたかい、国見君」

とつぜんの声に、ぎょっとした。

それは聞き覚えのある声。わたしと同じように檻の中に押し込められているとは、どうしたというのだろう。

「どうだい？ おどろいたかい」

「きみは……」

わたしは喉まで出た声をつまらせた。

「とうとう、きみも掴まってしまったようだね。しかし安心しなよ。これでなかなか感動すべき檻だよ」

「どうしたと言うんだ。きみはたしか——」

「わかってる、わかってる。いちどに喋らなくても、たがいに退屈したときに話せばいいんだよ」

大谷京介は声調まで狂っているようだ。

「まあ、タバコでも吸わないか」

と大谷京介は檻の中に押し込められながらも、いっこうに平気な口調で話しかけてくる

のだ。彼の口に咥えているタバコの火が、檻の中で点滅しているのを見ると、ニコチン中毒をきたしているわたしの肺が、むしうに刺激されてきた。

「さあ、一本吸って落ちつけよ」

とタバコの箱を投げ、つづいてライターをすべらせた。ライターと床とが摩擦する物音から、ここは屋外でも物置小屋でもなく、人間の住む家の中であることを知った。

わたしは鉄棒の間から手をのばし、タバコとライターを手さぐりで掴んだ。火をつけるときライターの明りで、わたしの顔を彼は見たにちがいあるまい。急にめまいを覚えたのは、かなり長時間わたしはタバコを口にしていないことになる。そう考えた。

「少し窮屈だけど、がまんするんだよ。ここはほかでもないほくの家だ。三度、三度の食物は、ちゃんと運んでくれる。もっともアルミの食器に入れてくるがね」

わたしは何から問いただしてよいのか、すっかり混乱していた。すると大谷京介は一つ、わたしの気持をしずめ、説きふせようと話しかけるのだった。

「いずれ、様子はわかってくるがね。いま太陽は西に傾きかけていよう。しかし、この部屋には、いっさい外の光りを入れないように

雨戸を閉め、厚いカーテンでしきってあるんだ。そうしないとわれわれの常識の世界と絶縁できないからね。夜になるとライトによる照明装置だけは、十分に考えてある。とにかく、このさい日常性や時間の拘束から一步脱出し、人工天国に思うんだね」

「おい、冗談はやめてくれ。おれには仕事があるんだ。大切な勤めがあるんだぞ。きみのように、人をペテンにかけて……」

「はははは。落ちつけよ。国見君。いくらきみが力んだところで、ひとりではその檻から一步も抜け出せないのだよ。仕事のことは心配するな。令子がちやんと連絡してあるはずだ。きみのおふくろさんが亡くなったので急に帰省した。十日ばかり休むってね。わかったかい」

「バカ言うな！ おれは……」

「わかってる、わかってるよ」

「何がわかっているんだ！ きみってやつはこのおれをどうしようと言うんだ」

とわたしは本気になって怒鳴り、身を動かしてみたが、無駄な抵抗だった。

「無茶なあがきはよしなよ。もし小便がしたくなったら、檻の右端に便瓶しびんが置いてあるはずだよ。ただし大便の方は、令子たちがここに現われるのを待つか、さもなければ檻の左

端にひもがある。ひもを引けば外出してないかぎり現われることになっている。わかったね。もしトイレに行く途中で逃げようとしても、それは無駄だよ。きみの両足はほくと同じように鎖でつながれている。その鍵は令子の方でしまっているのだ。わかったね」

完全にわたしは翻弄されているも同じだった。なるほど言われてみると、両足首が金具で拘束されている。体を折り曲げて押し込まれているから、いままで細部の感覚が一つになつてわからなかったのだ。しゃにむに何もかも打ちこわしてやりたい、そんな怒りが腹の中で煮えたぎってきた。

「きみにも言い分はある。だが少し落ちついてくれよ。ほくはもう一週間も檻の中で暮らしているんだ。これを作るのにはずいぶん苦労した。第一人間を入れる檻だと言って頼むことはできない。シェパードを二匹飼うからとごまかして作ったのだよ。檻はできあがったが、つぎにどう事を進めてきたか、それについては省こう。それより、いつきみが掴まるか、ほくは檻の中にいて楽しみに待っていたんだよ。悪く思わないでくれ、きみもここにくるまで廻り道、あれこれ余分な推理をしたんだろう。その見当はついているよ」

大谷京介の話を聞いていても、まだわたし

には、彼らが仕組んだ罠は、いったいどういう目的なのか、その手のうちはわからない。「きみの方にも、いろいろ問いただしたいことがあるだろう。いまなら遠慮はいらない。なんでもたずねてくれよ」

「じゃ、きみ自身なぜこのような檻の中に入っているのだ。そして、おれをどうしようと言うのだ？」

「短刀直入に問われても返答に困るがね。これも創造性理論とぜんぜん無関係ではない。つまりさ」

「屁理屈ならたくさんだ」

「わかってるよ。われわれの日常生活ってのは自由なようで、じつは不自由だ。ほくは檻の中で一週間、それを痛感している。逆にこの中に入っていると身動きは、不十分で窮屈のようだが、そうじゃない。つまりさ物理的拘束、あるいは束縛ってのは逆に精神の自由、その尊さをいやというほどわからせてくれるんだよ。わかるかい」

「わからんね」

「そう、むくれるなよ国見君。いつか話したことがあると思うんだが、男女が入れかわることによって生ずる価値、そこから未知の性の世界を探れば、現代の夫婦関係、愛情のあり方、そういうものの既成概念が、いかにわ

れわれの行為を縛りつけているかがわかって
くと思う。ぼくはね、令子がどう変わって
ゆくかを、この檻の中から観察している。い
まにきみにもわかってくるだろう」

「きみは、どうかしているんだ」

「そのとおりかもしれないね。ところで人間
だれしも予期せぬ出来事にぶつかれば、無意
識のうちに心裏のかくれた部分を見せるもの
だ。きみがさ、この部屋の中を覗き込むの
は、失礼だがぼくの計算には、ちゃんと入っ
ていたんだ。そして不意に背後から、しのび
よった敵にも気がつかず、首すじを殴られて
しまった。卑俗だと言えども覗き趣味っての
はだれでもあるよ。ましてヌードの女体が深
夜ひとりベッドに横たわり、照明を全身にあ
びながら下半身をくねらせている図、聖人君
子と言えども、それに、手が届かないとすれ
ば、ね。きみの場合は親友の妻、そのヌード
だ。ぼくも同時にライトの背後、檻の中から
眺めていたんだがね。これは、檻に入れられ
てから毎夜のことだよ」

「……」

「ところで、きみを殴ったのは大木君だ。ほ
ら研究室にいたろう。彼女は見たとおりの体
軀だから、きみに一撃をくれた上、麻酔薬を
浸したハンカチで眠らせたきみを、ここまで

肩にかついで運んだのだよ。ぼくにとっては
掛替のない助手さ。夜になればここへ現われ
るよ。そしてきみの飼育係ってことになるか
な。もっとも令子に代らせてもいいがね」

「……」

「とにかく、きみの休暇がきれるまで、きみ
自身には予期せぬ出来事ばかりがつづくよ。
彼女たちが現われると、きみとぼくとは、た
やすく口をきくことはできぬかもしれない。
いまのうちに喋っておいたほうがいいよ」
「この檻の中へ、ぼくを入れるまでの筋書き
は、すべてきみの考えか？」

「だいたいね。まず令子の協力を得るための
説得に、長い日時を要したよ。また令子ひと
りではすべてが完了するまで危い点も予想し
て、そこで研究室の大木君に協力を求めたん
だが、こういうことは外聞もあることだ。秘
密がもれやしないかと気をもんだよ。しかし
いまのところ大丈夫だし、令子との息もびつ
たり合っているね」

「大の男を、女性の手で檻にとじ込める。ま
さに残酷物語だぜ」

わたしは厭味を言ったつもりだったが、大
谷京介はそうとらず、それと関連した一例に
話頭を向けたのだ。

「令子っていうのはね。凄い性格を裏側に秘

めているよ。以前、野良猫がうちへやってき
たことがある。空腹だったのだろう、台所を
荒らしたようだ。ところが令子は、かわいそ
うに言いながら食べ物を与え、徐々に飼い
ならしたんだ。ぼくも感心した。だいたい野
良猫なんて人の家に落ちつくものではない。
ずっと飼うつもりかい、とたずねると、うう
んと否定とも肯定ともつかぬ返事だ。ところ
が半月ほどたつと毛のつやもまし、まるまる
と太ってきたんだ。おそらく令子はずっと飼
うだろう、そうぼくは黙ってみていた。とこ
ろが――」

「……」

「殺したんだよ。それも毒物を与えてなどと
いう殺し方ではなく、ひどいものだったよ。
それはね、夏だったかな。床に入る前に一風
呂あびたのだよ。あとから人った令子がなか
なか出てこないの、ガス中毒でも起こした
のではないかと、気になって覗いてみたの
だ。ところがさにあらずだ。湯槽の半分くら
いにした湯の中へ、いままで飼いなした猫
の首すじを押しつけ、溺死させていたのだ
よ。それと気づいて啞然としているぼくを見
上げ、令子はじつに妙な笑いを口元にたたえ
ていたよ。化けて出るぞ――と、ぼくは自分
の受けたショックをかくすために言ったのだ

よ。すると、それなら望むところだわ——と平然と言い、まだ死なないわ——と、なおも汚れた湯の中へ猫を押しつけていたのだよ。もちろん風呂場の中のことだから、令子は裸のままなんだ。……」

「……」

「それからだよ、ぼくがいろいろと考えるようになったのは。ところで、あんなにかわいがっていた猫をなぜ殺す気になったのか、ぼくには解せなかった。もちろん令子に聞いたですのは故意にさけていた。それから、つまり殺してからどうしたかと言えば、猫のお墓を作って上げたわ——という。どこにと問うと、裏庭の隅だっというんだ。いまでも思ひ出したように、毎月いちどは命日だと言って魚の骨を、猫を埋めた土の中に入れていたようだがね。その命日という令子の言葉を耳にするたびに、殺害した湯殿でのことを改めて、ぼくは思ひだすのだよ。しかしそういうことは令子に向かって、いっさい口にしないことにしてあるんだよ」

「……」

「ねえ、国見君。きみはこの話を聞いてどう思うかね。令子は自分の体を洗った湯、汚れた湯の中へ、自からの手で飼いならした野良猫を溺死させた。そういう令子の心裏を読み

とることができるかね」

「わからん。令子さんにそんなことができるとは考えられないことだ」

とわたしは否定したが、しかし大谷京介という人間が嘘言を吐く男ではないと信じている。だから本当に意外な話だった。たがいに暗やみの中で、しかも檻の中に入っていることが、いまの話を聞くのには好都合だった。なぜなら自分の顔を大谷京介に見られないということで、ひどく救われる思いだった。

「いまのきみには、それは解せないだろう。ぼくもわからなかった。しかしこうして檻の中から観察していると、令子の性格、かくれていた感情の動きというものが、じつによく見えてくるよ。それがいまにきみにもわかってくるさ。——そういう令子だから、こんどの筋書きもぼくの説得に依拠してからは、あとは彼女の独走態勢に入ってゆくような懸念もある。現にその気配が濃厚だよ。国見君」

「という、おれはどうなるんだ」

「わからない。かんべんしてくれよ」

「冗談じゃないよ！」

とわたしは暗やみの中で、大谷京介に吐いたが、彼は答えない。このときふと思ひ出した脅迫状、貴方の生命を保証できない——についてただしてみた。すると彼は、

「脅迫状だって？ それは筋書きにはなかったはずだよ。それがどうしたのかね」

こんどはわたしが答えなかった。おそらく令子とあの娘との仕業だろう、と改めて口に出す必要はないからだ。考えれば、大谷京介失踪——という導入口から、徐々にこの檻の中まで引きずられ、閉じ込められてしまう羽目になったのは一貫したものによる。つまり予期せぬ出来事の連けいに、みごとに突き刺されている。そしてこれからどうなるか、それは大谷京介にもわかっていないようだ。彼もまた自から蒔いたタネによって、予期せざる出来事を覚悟しなければならぬだろう。風呂の中で猫を溺死させた令子と、わたしの首に一撃を加えた娘を合わせると、察して余りがある。

「きみを同志として裏切りはしない。それは二人とも檻の中にいるというのが何よりの証拠だ。それから価値転換は、主客顛倒によって生ずる生理的快感だよ。ぼくたちを檻に入れて、それを味わっている令子たちは、いずれ檻に入れられてしまう女貌だとは、本人たちはもちろん、きみ自身も考えてはいないだろうね」

檻の中での大谷京介の言葉である。

■見たもの

きいたもの

「ネクター」罐入り発売!

待望の『ネクター』が、マニアの切なる要望にこたえて、いよいよ発売される。

缶入りで、二六〇グラム入六〇円、四二〇グラム入一〇〇円。いかなる美女のつくるネクターでもお好みしだい!とは冗談だが、これは、一流食品メーカーがつくる真正銘のネクター。

ナーンだ! なんてガツカリしてはいけません。いまに、それこそホンモノのネクターが、発売されるかも知れないから。

「エエ? もう売られているって? トルコ風呂で、コップ一杯二千元ですって?」

森永ネクター



読者評論

梶山季之「囃」を読んで

東京
戸塚四郎

その心理的なプロセスをくわしく追うのだから、たまらなくおもしろい。

だが、私は考える。

文芸作品なら許されて、風俗文

献誌には、やかましい目が光る。

そのムジユンが不明なのだ。

ハッキリいうが、私は、戦前か

らのM趣向であり、コプロの世界

の味は、知りつくしている。

その意味では、三十五年のキャ

リアを自ら誇っているのだが、し

かし、本書のような文芸作品で、

このような描写をみせられると、

たまらない情感をおぼえることを

告白する。

ことわっておくが、私は、この

ような世界を描いてはいけない、

などといっているのではなく、本

来の文献誌が、必要以上（と思わ

れる）の自粛をしている現在に、

それに輪をかけたような内容の書

物が、ベストセラーとなっている

現象に、いささか考えさせられる

のである。

梶山季之の近作「囃」は、じつ

にすばらしい内容である。いわゆ

る悪書追放台風の吹きまくる折柄

に、かような、文芸作品なるがゆ

えに、堂々たる変態的な描写が活

字になることを許され、十八歳以

下の青少年でも、公然と手にする

ことができるとは、まことに（皮

肉の意味で）痛快だ。

なぜここで私が、こぶしを握り

ゴマメのはぎりしりをかみしめるか

その証拠を知りたい先生がたは、

たとえば、同書の六十ページ下段

をみるがよい。

それでもまだわからなかったら

一一七ページの下段からつづいて

一四四ページの下段に目をさらす

がよい。それでもまだものたらな

かったら、一七七ページ上段末尾

の十一行だけは、ぜひ読む必要が

あろう。

物欲にからませて、美しいマダ
ムが、二万円を男を買い、女装さ
せて、これを徹底的に調教する。
ムチ、ドレイ、愛液といった、
ショッキングな文句が至るところ
にちりばめられて、まことに目を
うばう。

なにしろ、ズバリと、顔めかけ
て液体を放射するところなどは、
原文を引用すれば手ツとり早い
だが、本誌に引用すると、それこ
そ、ウルサイおぼさんやオジサン
がたが、目をむくだろうから、よ
みたい向きは、金二百六十円を投
じて本を求めることをおすすすめ
する。

一応精神の健康な若者が、ズル
ズルと甘美な世界にひきずりこま
れ、ついにはすすんで女装をし、
女性のコトバまで使って、サディ
スチンにつかえる。

読者原稿募集



新鮮な感覚の原稿を募集しています
69ページをご参照ください

耽美芸術グラフ第一集

についての

読者からのおたより



▼初めは一部千円という価格に少しためらったのですが、内容広告や「読者よりのたより」等を読むうちに、矢も楯もたまらず注文して、「至急送れ」等と勝手な事を書いて、首を長くして到着するのを待っていたところ、速達にて送って来られ恐縮するとともに、いつもに変わらぬ「裏窓っ子」の心意気に頭を下げました。内容も三十七年ころの「裏窓」誌の充実したベストのころ（と私は思っている）のフォトにくらべれば、まだ不満もありますが、まずまずの出来で、京都の祇園太郎氏も言っておられるように、近ごろの本誌のはがゆさを豊満な柔肌に食い込んだ縄目に、久しぶりに晴らしたような気がします。作品では小生あ

まり日本調は好まないのですが、「金井行雄作品集」が好かった。特に一番目の全裸うしろ手吊りの写真は、モデルさんには本当に苦しいポーズでしょうが、それだけにまた一層のリアル感が迫ってきます。良く見えにくいのですが、足の間に回って責めている縄目もあり、本当にすばらしいものでした。できたらもう一、二枚、角度を変えて撮ったものが欲しい。また「絶望の風景」の一番目の写真もそれですが、責める人を少し入れたり、また、それを影で表現し、てあり、モデルとの連動感やリアルな感じを生き生きと伝えてくれる。こういう手法は柔かいムードを求める行き方とは別に、今後により良い形で発展させていたきたい。「滝の女」モデルも豊満で美人だし、乳房にくい込んだ縄目のリアル感！五、六ページのアングルも良い。絵画集はさすがにどれも力作ぞろいですが、小生がフアンの中津二氏は、どうも近頃おとなしすぎる構図でちよつとも足りない。目のさめるようなアイディアを切に望む。小品やカットを描かせると、落合龍二氏はすばらしいですね。縦縄をかけたものが氏の近作に多く見られるようになりますが、この作品集でもや

はり何とも言えない味をかもし出しています。今後の写真にもこうした絵画を参考にしたアイディアやポーズを、ぜひ試みていただきたいと思っています。よく見て気がついたのですが、四八ページと五十ページの後姿ですが、なつかしい「谷まりもさん」の写真が二枚ありますね。小生、このモデルさんの写真が大好きで、その写真の載った三十七年ころの本誌を、一番手近に置いて楽しんでいました。ぜひまた彼女を使ったムードあるフォトをご計画ください。次回、喜多玲子氏を加えた「グラフ・第二集」を、願わくばスタンダードな価格でおねがい出来そうです。どうも終始勝手なおねがいばかりで恐縮です。（新潟・S生）

▼拝啓、「耽美芸術グラフ・第一集」たしかに受け取りました。なか身もなかなかけっこうでございました。なお、このうちは「裏窓」秋の臨時大增刊」を期待いたしました。申しおくれましたが、私は毎月「裏窓」を拝見いたしております。（和歌山市 Y・M）

▼拝啓、希望やら不満やらを一筆書かせていただきます。もっともこんな手紙を出したとて、貴社の方で鼻であしらわれてしまうことでしょうけれども！ 今回発売さ

れました二十五才うんぬんの「耽美芸術グラフ」実に立派なものです。が、なにせ高過ぎましたね。あれでは書店の店頭に出したら売れないこと必至だろうと思います。ま、そこは商売と言われれば、こちららはグウの音も出ませんけれども……。それから悪く言えば二十五才のツリ言葉、今の時世じゃ十八才未満とくるところを、ずいぶん無理したようですね。あのグラフ、二十五才未満だと都条例にでも引っかかるんですか？ なんですか「裏窓」十月号に述べてあるグラフに関するいかにももつともらしい推薦の言葉、あれはちよつと見えすぎているですね。おそらく第二集を出されることでしょけれど！ 我々フアンの期待を裏切らないように、禪を締め直してかかってくださるよう、おねがいいたします。それから私の希望として、少し写真の趣を変え、グラフィアに縛る過程を（男性の手も入れて）載せていただければ幸いです。主観的美人が縄をかけられて悶えている姿は食傷ぎみ（モデルがズン胴の場合はさまになりません）ですから。僕は今でも思うのですが、たぶん貴誌が写真で紹介された映画でしたが「地球の皮を剥ぐ」で、映画のストーリーの中

耽美芸術グラフ 第一集

定価
千円

送料とも

内 容

■ 写真集 ■

滝の女・石の部屋
密室・絶望の風景
金井行雄作品集・
さるぐつわ・縄目
凝固

■ 絵画集 ■

落合竜二凄艶画集
沖渉二特選傑作展
中川彩子・女奴隷の檻
中川彩子・吊り蔵
鬼頭暁時代妖美画集
羽仁京志傑作選

▼ながいあいだお待ち致しました。洗練されたセンスと伝統を誇る裏窓が、そのスタッフの総力をあげて、ここに、S写真と責め絵を豊富に掲載したグラフを発行致します。

▼このような写真絵画集の発行は、数年前より愛読者のみなさまからご要望を頂いておりましたが、このたび、ようやく刊行に至った次第であります。

▼書店では発売いたしません。

▼嚴重に密封して、個人名でお送りいたします。安心しておまかせください。

▼お申しこみには、住所とお名前のほか、かならず年令を明記してください。▼二十五才未満の方には、お売り致しません。未成年者は、絶対にお申しこみにならないで下さい。

▼お申しこみは――

東京都中野区松が丘2の21

久保方 藤見 郁

で、黒ミサのシーンがあり、その時洗礼を受ける女性が後ろ手にくぐられたシーンがありました。あの場面が今でも印象に残っています。日本の最近の「砂の上の植物群」、期待したけど、肩すかしの感じでした。勝手なことを書きましたけど、どうも……。では失礼いたします。（東京・O生）

▼暑さも峠を越して、虫の声のにぎやかな季節となりました。編集部の皆さま、毎日おいそがしいことでしょう。「耽美芸術グラフ第一集」入手しました。良い出来ばえでした。「滝の女」落合、中川、鬼頭三先生の絵、金井行雄先生の作品、と盛りたくさんで、私の目を楽しませてくれましたが、これくらいの作品が店頭売りが出ず、特別配布をしなければならぬとは、まことに残念です。国家権力が、決った方向に国民を引きずって行こうとする時に、いつもこのような処置がとられるというのを悲しみます。戦前、戦中にかけて、縛り絵は禁じられ、責めという言葉までが姿を消してしまった味気なさ。いまさらながら思い出されてやりきれなくなりました。四十年近く探し求めて、ようやくそれが満たされかけた時、またぞろ風俗上おもしろからぬとか

で禁止されてしまったら、私などどうすればいいのでしょうか。出来るだけ抵抗して自由な本を作ってください。それが駄目なら、會員制の本にしてください。年に三、四回は「グラフ」を発行してください。「裏窓」にのびのびとした写真や絵が載せられなくなった現在、頼みにするのは「グラフ」のみとなってしまうました。現在私は職場内では、固い男として通っております。責め絵に引かれて探究しておりますが、これはあくまで「夢の世界」であって、現実ではないからです。自分のこと言うのはおかしいですが、絵や写真を見て人間がおかしくなるということなど考えられません。しかし、絵や写真を見る度に、その見られる部分に対してのあこがれだけは、年々深まってまいります。それとても、あくまで夢なのであって、夢の世界として求めるところに、限らない楽しさとあこがれを感じております。その大部分を満たしてくださる「裏窓」と、ご執筆の先生方には、心から感謝しております。（福島 6T生）

■この欄に掲載しました方には、手札型S写真一枚をお送りいたします。



畜化交響詩

森 本 愛 造

マゾヒストという名称で分類される人達の中には、非常に内気な人もいるが、時にはおそろしく活気ついて、横暴なほど自分の欲望の達成を計るのに熱心な人もいる。もっとも、平常内気な人達でさえ、女と相對した時には、決して内気ではない。このことが二重人格とか気味悪いとか言われるゆえんであるが、これらの突然の変容や、熱心すぎて執拗なまでの追究は決して二重人格や気味の悪いというような内容のものではない。

もし仮に、電話というものを知らぬ者が、ある日、温順なB・Gが呼鈴に応じて受話器を取り上げ、さながら一人芝居のように挨拶し、笑い、礼を言い、怒り、悲しみ、考え込むのを見たら、おそらく気狂いだと思うことであろう。その通りである。この気味悪さ

は、蛇やクモに対しての本能的気味悪さとは違って、後天的な理由「無知」から発生する。サド・マゾヒズムに対して、非難を加える人達の怖れ、異和感は、実にこれと同種のものであって、蛇やカエル、蛾やクモに対する本能的異和感ではない。

昨今、新聞紙上に散見する、エロ・グロ・ナンセンス排撃論は必らずしも誤った論旨ではないが、グロという言葉の日本語におけるニュアンスは、本来のグロテスクという意味とは全く違う。まさしく、サド・マゾヒズム、超現実主義、印象主義、表現主義、ダダイズムは、本質的にその主張の根本を同じくしている。これは、政治的社会主义や、共産主義のごとく、おそろしく古くさい道德律に背負われてよちよち歩きしているようなイデ

オロギーとは全く異っている。

これらが、本質的には——理論的経過やその結実についてでなく純粹にその核心について——実に古くさい有史以前の女性的道德律に常に依存しているに反して、我等の属するイデオロギーは、本質的に、力強く根を張った大木のごとく地上を離れて、空中にゆらぎ、常に鋭く天を指向する性質のものである。

考えようによっては人類は、その動機、好悪をとわずこの大木の肥料たるべく生存し死亡して来た、とさえ言えるのである。私達は、この項によって一本一本とその小枝を手折ってゆくように、その拠って来たる所以を、その如何に成育してゆくかを、その力のいかにばかりかを、その天性の美しさを語りつづけてきた。いわば、彼等は一人一人とあげてゆ

く実例の人たちは、「光を揚げた人々」である。いまやフスは「かくれキリシタン」のために言葉をつづけている。

今回は、一人の熱心なサド・マゾヒズムの信徒の物語である。彼においては、私達は「マゾヒスト」と呼ぶのをためらわざるを得ない。彼はまさしく「マゾヒズムの信徒」であった。ネクタールから、畜生化に至るまで、およそ広汎なその範囲を一語にして包括することはむずかしいが、強いてそのポイントを探すなら、彼は「畜生化」に最も重点を置いていたように思われる。彼にはフェチシズムの傾向はなかったが、いかなるフェチシズムの対象物をも拒みはしなかった。

彼の場合は、その職業を明示することは、直ちに彼自身の名前や住所を明かにする結果になるので彼の職業は完全に伏せておく。

満五歳の時、彼は生れてはじめて馬に乗るチャンスにめぐり合う。

「ただとても高いところ上がったという気分、それと、こんな巨きな動物が、何故自分のようなけし粒みたいに小さな別の生き物を背中にのせるために、こんなに仰々しく、革の道具をあっちこちに付けられてもなおかつただ黙々と歩き、走り、止まるのか、それ

がどうしてもわからないことだった。無論、わたしは聞いてみた。すると、そこに付き従っていた貧しい身なりの老人はぼつりと答えた。

「それは、何しろお馬ですからね。お馬はものときまっていますですよ。自分でもチヤンと知っているのですよ。」

自分でも知っている！何故そんなつまらない役目を自分で知っているのに暴れ出さないのだろう？馬の方が大きいし、力も強いだろうから、きっと、この辺にいる人たちはみんなやつつけられてしまふにきまっている！そこで、わたしは、もう一ぺんきいてみた。「なぜいやがって暴れ出さないの？」

この時、付き添っていた老人、それはおそらく馬丁であつたらう、その老人は事もなげにこう答えたというのである。

「暴れる？そしたら痛い目や苦しい目にありますから、そんなことはしないのですよ。さあこわがらないでそのまま乗っていて下さいよ。大丈夫、決して暴れませんから」

この答えをきいたとき、彼の心の中には、五年間のこれまでの体験からは決して会得していなかった別の新しい何物かが存在しはじ

めた。この新しい、いわば「固定観念」とベリリオーズが名づけ、後にワグナーが「モチーフ」と名付けたものに匹敵する一つの観念（固定観念）は、これから三十数年の間彼の心の中で、絢爛と、豪華に、劇的に、そして或るときは憂いに閉ざされ、寂しく、感傷的に、時としては悲愴な想念を以ってつづけられてゆく巨大な交響詩の最初に現われる、弱い、呟きのようなモチーフの提示であつた。そうして、特筆すべきことはこの交響詩が、決してリヒアルト・シュトラウスやフランツ・リストの多くのそれらの如く自在に発展し得る性質のものでなく、きわめて閉鎖的な、厳格な制約の中で発展してゆくことである。例をあげるなら、これは、シュトラウスの輝やける金字塔「ドン・キホーテ」にも匹敵するものといふことができる。

「わたしは、その時はじめて、和やかな日本のお伽話の世界から一歩足を外へふみ出したのであつたらう。「痛い目に合うから」という理由で物事を秩序立てている、古くさい、とくに近代の人達が卒業してしまったと思つていた野蛮な方法が厳然と生きているという事実は、当時の幼い私の心に発止とばかり打ち込まれた楔のようであつた。」

やがて、彼は小学校に上がる。再びお伽話の延長がくどくど、先生の口から、家族の口から語りつがれてゆく。彼の心もしばらくの間平穏である。世界は平和であり、いまだ性の目覚めを覚えない彼にとっては、「馬」に関する五歳の時の経験は、忘れ去られていたようであった。だが、その忘れ去られていたモチーフは、突然十二歳の彼に、きわめて突然に、予期しない形でおそいかかることになる。

「もうぼつぼつ始めるか。という父の言葉をきいた時に、わたしにはまだ何のことかわからなかった。

だが、それが、乗馬の練習の事であるとはすぐわかった。

わたしは、父の言い付けで、学校の馬術部に籍を置くことになったが、小さい小さい自分では思っていたわたしが、決して最低学年ではないと知って、安心もし、不安にもなった。練習の最初の日、同級生の姉さんという人が——その人は女子部に属していたのであったが——やってきて、弟の世話を何くれとなく見ていた。その時耳に入った言葉——「馬になめられては駄目よ。あなたは小さい

から、いくら乗馬としての調教がよくできている馬だって重さでわかるわ。だからね、乗って馬場に出たら拍車でボンと蹴ってやるのよ。前に出るから、かならず手綱（ロク）をしぼって、つまりこう短かく持って、前に出られないようにしておくのよ。まだ鞭を持つのは早いようね。拍車で十分よ。これでだつてずい分痛めつけたんだから」

そう言つて、自分のはいっている乗馬靴のうしろをひざをまげてみせた。その拍車はもうニッケル・メッキがはがれて、ところどころに洋銀特有の曇ったさびが出ていた。それを見たときわたしは頭の中に、この女性が、阿修羅のようにたけり狂う奔馬にまたがって、思うさま拍車で蹴りつづけている光景を思い出した。何故か、その女性は、そんな役割りを果しても当然なようなタイプに思えた。

やがて、わたし達が、実際に鞍にまたがって、練習をはじめてからは、日一日と馬に対する怖れはなくなり、両足をひろげてまたがることがいう行為自体に、変に愛着を覚えるようになる。しばらくたつと、まだ若いというよりおさなかつたわたしの感覚の中にも性的な感覚——これは、後になって判った事だけれども、そう言つた方が手っ取り早い。——が感じられるようになった。

雨の降る日、練習が休みになるとわたしは悲しんだ。そうしてついに、部室で壁にかけある鞍を下ろし、ひくい脚立にのせてそれにまたがるという習癖がついてしまった。この秘かな行いが、上級生の目にとまったとき、わたしは大変な秘密を知られてしまったと思つたが、それは杞憂だった。彼は、私が馬の練習に熱心な余りに、そうやって研究しているのだと、そう考えたらしかつた。それから、上級生（つまり、中、高等学部の人たち）だけの練習の時にもわたしを加えられる事になった。

そんなわけで、わたしの馬術は人一倍早く上達した。

上達するにつれて、わたしは、学校以外の馬にも乗ってみようという誘惑に捉えられてしまった。

そのころは、今とは違って、軍隊があり、軍隊には多かれ少かれ軍馬がいた。わたしは、上級生や父の紹介で、二、三の聯隊の上層部と仲好くなり、ときどき軍馬に乗る機会を得た。軍馬は総体に調教の程度もよく、わたしは十分に騎乗の楽しみを知ることが出来ると同時に、障害飛越のコツをも會得していった。そのころ、もうわたしは中学生だった。

中学三年の時、わたしははじめて、乗馬と

性欲とが間接的に結びつくという最初の好例に出くわすのである。

こうして、彼の心の中のモチーフは多くの伏線を辿りながら、やがて、はっきりした形のモチーフの原型を高らかに吹き鳴らすのである。彼に最初の遺精が訪れたのである。彼はその時の事をきわめて詩的に書く。

「春も終りに近かった。五月の太陽が、その辺りのすべてのものにふりそそいでいた。緑草と砂地とが交互に作られているその広い馬場は障害飛越の競技の為に特に作られたようであった。その砂地は、はなれたところから望見すると一面の緑の草地のように見えた。

黒い上衣の割れた裾をひるがえし、淡い色のズボンをはき、今日こそはと磨き上げた黒い乗馬靴、思い思いに銀や、洋銀や、または鉄の拍車が陽光に時々反射してきらきらと光る。健康で、はち切れそうな若い男女が、名誉と母校の勝敗をかけて艶々とした持ち馬にまたがって、その辺りをかけめぐる。忙しうに動きまわる下廻りの男達、小さな天幕に自白押しに並んで腰をおろし、威儀をつくっている高級士官たら、その横の一段と高い台の上の天幕には、華族の婦人達、上流の紳士たち、いずれも正式の乗馬服にそれぞれの出

身校を示す小さい胸章をつけて片唾をのんでいる。

出発線の手前の練習馬場には、六七人の男女が、自分の順を待ちながら、自分の馬に跨ってゆるやかに、二十米ばかりの円を描いてまわりつつける。時折り、勇み立つ馬に、ピシ、ピシと鞭を当てる音が、さわやかな空気をついて、わたしたちの所にまで聞えてくる。そのまわりに、心配そうに付添っている父兄や姉妹達の中には、甲高い声で「拍車を忘れないで——」とか、「鞭はスタートの前に二、三発くれておくのよ!」とか叫ぶ者がいる。

ここには、密室の秘戯の持つ陰鬱な魅惑はない。暗い宮殿の階段でふとすれ違う女の首に発見する、豪華な金剛石の首飾りにも似た妖しい誘惑の甘美さもない。すべては、堂々と輝き、いきいきと公開された誇りをもってある。昭和十年代の初めころの、取りすました「帝国」の貴族社会の風土である。そうして、この中で彼の妖しい体験は、彼等の見ている前で、しかも、きわめて私的に、秘密の裡に始まり、そして終わった。

「自分の番が廻って来た。拡声器が、わたし

の番号を高らかに呼んだ。拍車を軽くあてて、私は馬をスタートへすすめた。白い旗がまっ直に上げられ、勢よく振り下ろされた。拍車を、もう一つ強く入れると、快よい伸張速歩の律動が、わたしの身体に伝わって来る。第一、第二、第三とそれぞれの障害物は難なく越えた。第四障害で、いったん拒止。馬が障害物を嫌って直前で止り、飛越を拒否すると、調教度の問題として減点数の多い失策であり、多くの場合一度目にはやり直し、二度でその障害を飛越する権利を放棄して次ぎに向かねばならぬ。(筆者)」

一旦は十数歩戻って再び障害に向かう。直前で再び拒止。わたしは、すぐ左側の柵のところから、女の声が、こう叫ぶのを耳の底でうけとめていた。「鞭を使うのよ! だらしないぞ!」

「鞭を使え」とその女は叫んだ。反射的にわたしは右手の鞭を思い切り、後肢の内側にたたきつけた。瞬間、わずかにちぢむ馬の筋肉の衝動が伝わってくる。そして、思わず、わたしの股間には、初めての官能的な充足感が湧き上がった。鞍も、ズボンも、靴も、律動自身も、急にいままでとは打って変わった親近さを持つようになった。自然、容赦のない拍車が本能的に馬腹に喰い込み、躍り上がった

馬は、第五障害に突進した。その踏み切る直前、わたしがかつて使ったことのない程の強い鞭が、無残な音を上げて、馬腹にまきついた。宙にうき、そして着地してから、第七、第八、第九、第十と最終の障害まで、拍車を使い、鞭を当てる瞬間ごとに、体内の充足感に吐き出された。第十を越えるとき、すでにのけぞりたい程の快美感は、冷たい感触と変りつつあった。

ここまでの説明では、ひとは彼に動物嗜虐の性的傾向がある、という風に解釈するかも知れない。が、そうでないことを示すために、私は再び、もう少しの引用をつづけねばなるまい。

「実感から言つて、わたしは決して自分の鞭の下にあつて、無我夢中で飛越をつづけているのが、馬だとは感じていなかった。追われ、走りつづけているのは、さきほどの突き刺すような一言によつて、暗示されるままに行動している自分自身なのであつた。事実その時、私を昇進させたのは、馬をいじめるという行為そのものでも、苦痛に対する馬の哀れな反応でもなくて、彼女の一声で、人の見ている前で馬をいじめている自分自身に対する

恥ずかしさのためだつた。

昔、王制の時代に、歐洲では、女王の命令一下、罪なき者を拷問にかけさせられた、下層階級らを選ばれたり、罪人の中から選ばれた拷問係がいたという。自分の意志や欲望に反した、残酷な行為を「公開させられる」ということは、果してサジスチックな行為と判断されるべきものだろうか。或いは、私が考えているようにそれはマゾヒスチックな傾向に沿った現象であらうか。」

彼は疑問を提出し、みずから答えている。疑いもなく、彼の心理はマゾヒスチックなものと言わねばなるまい。私はここで、他の人物によつて書かれた手記の一部を引用したいと思う。それは、前掲の心理をもつと極端な場面で説明していると思われるからである。

「私は(夢の中で)逞ましい身体をもった黒人奴隸だつた。女主人は、その足下にひれ伏して許しを求めている女奴隸を無情に足蹴にした上で、私に太い鞭を投げ与えて、彼女を裸にして、目の前で二十鞭で打て、と命令する。腰布一枚の私は、言われるままにその哀れな女に鞭を加える——中略——血みどろになつたその若い女奴隸を、私に犯させるのだ

つた。それは私の意志にも欲望にも反していた。私は心から女奴隸に同情していたが、私にとつては、女主人の手でふるえている鉄刺の鞭が飛んでくることの方が、もっと怖ろしかった。私は腰布をとり、彼女を犯した。不思議に私の欲情は燃え上り、女奴隸の身体から、最後の精力まで奪いとることが出来たのだつた。」

この手記は、日本人によつて書かれたものではない。だが、不思議と同じような心理が描かれている事に注目したい。さて、元の話に戻ろう。彼の場合は、そんなに極端ではない。だが、最初に体験した性的快感と、馬、乗馬に関する特別な道具、衣裳、女性、といういくつかのそれぞれには関連のない事物が、自動的に連けいを持つに至つた。

同様の体験が、彼に、五年後に現われる。彼はマゾヒストの秘密で私的なグループに名を秘して加盟した。その集りで、彼は更に深刻な体験を得る。

「そこに出席した二人のサド女性——実際にそうであつたか、或いは単なる演技であつたかはたしかめる方法がない——は、一人の男を仰むけにビニールの敷布の上に寝かせた。

彼女は、彼に尿を飲めと命じ、その命令の終らない中にいっきに大量の尿を浴びせた。私達は後手に縛られ、それを見る事を要求された。他の男達は、ネクタール・トリンケンを本能的に嫌っていたのだが、その条件の設定の仕方は巧みで、私達を満足させた。”

彼に於いては、マゾヒスチックな行為を直接するのでなく、間接的に、自分が本来の好みとは反対の立場に立たせられることに興味を示している。モチーフは、逆型をもって現われ、複雑な魅力を湛えて高らかなファンファレーとなる。

“その後、わたしは一年上級の女子生徒と相知るようになった。互いに訪問もし、学問や芸術についての意見をかわした。彼女は私と同様に馬術部に入ってきた。六週間程で彼女は上達した。他の男子生徒が、同性愛に耽っている時に、わたしは異性との愛を楽しんでいた。

夏、小諸で私たちは馬を駆って山にわけ入った。むろん、山とはいっても、あの辺の山とは、林の大きいようなものが多いのだが、その林の中で、私達は愛し合った。その時、まったく偶然にも、わたしたちは二人共正式

な乗馬ズボンであった。裸での愛の交歓を、彼女と分ち合う機会はいになかった。一つ年上の彼女との愛は、彼女の父の渡満によって打切られた。彼女は美しい詩や手紙を寄せ、愛と死と生とについて語りつづけた。

このすばらしい女性もまた、馬に対しては無慈悲でかつ傲慢であった。彼女は言う事をきかせるために、鞭の先に鉛の小さな玉を編み込み、拍車の刺輪をベンチで曲げて、まわらなくした上、歯車をヤスリで研ぎ、それを私にもすすめた。私達が障害の練習をするとき、彼女は、まず、鞭と拍車で前もって馬を脅し、いためつけた。その上、私にも同様な事が、「一番上達の早い方法」であるといつて強いるのであった。”

彼の筆の先での美化もある。彼の幾分の誇張も紛飾もある。だが、紛飾と人工の極端な追究は、やがてその実在を促進させ、ついに結実させるに至る。

“愛は苦痛である、という言葉は訂正されるべきであろうと思う。愛と苦痛とは、そこに没入し、それを究め、それに歓びを持つものに、同様な別の視野を与える、というのが正しいのではないのだろうか。彼女は、鞭をも

って私を打った事はない。しかし、私の心理の中で、私自身に等しい、鞍下の馬を打つと、私に命じるのだ。これは彼女自身が、そのやさしい手でしっかりと握った鞭で、どんなにひどく、冷酷に私を打ち据えるより、さらに酷い拷問を私にかけていることになる。私は鞍上で苦しみ、羞恥に身をよじり、その上、鞍の下では自身の、また彼女の意志の直接的な伝達の方法である拍車や、鞭や、脚の圧迫、などによって疎外された被虐待者の地位に甘んじなくてはならないからである。”

リヒアルト・シュトラウスが、巧緻を極めた技法で「シンフォニア・ドメスティカ」に書いたダブル・フーガと等質の、難解で、晦渋な意識の展開が、ここに披れきされるのである。

ザラツストラが説くごとくに、「我は全能である。それが故に我は山頂から地に下らんとする」その「下降への希求」が、ここにはあきらかにある。これは必ずしも、弱者の信仰ではないかもしれぬ。拝跪する神を胎内に育くむ王者の、垂訓にも似た祈りであるのかも知れぬ。私達はここに「青白きインテリ」と呼ばれる、世代の終焉に生きた青年が、ドイツ的観念論的な世界からの賜物と、東洋的

思惟の交錯とによって、最も支配的な地位に上るのを見る。

「愛もまた感傷の産物かも知れないと、そう思うことがある。そうして、また、わたしは、どうしてもマゾヒズムが、生理的なものでしかないとする医学書の説明が、納得出来ないのだ。マゾヒズムは、わたしに関して、少くとも性と、感傷との優れた化合物のような気がするのだが――」

五歳の時の、無感動な発見から三十数年の後に至って、彼ははじめてこう書くのである。

フェティシズムの影響を殆んどうけていないマゾヒズムの実例は極めて少い。だが私は言わねばならぬ。ここに、純粹に近く培養され、生命を保ちつづけている正統にして、真正のマゾヒズムの信徒がある。と、彼はヴィナスを愛し、喰らい、そして胎内に、それを転位した。だから、彼は彼女との最後の日を簡潔にこう描くのである。

「雪もよいの日、彼女はわざわざたずねて来てくれた。満洲へゆくことになった。父が家族を連れてゆくといっている。出発は明日だ。午後、急行で下関に行き船に来ることに

なる、と。また私はお別れが辛い。と、そう言った。だがそれは部屋の中で立ちのぼってゆき、ついに空気にまじって、跡形もなくなつてゆく、湯気のようなだった。わたしは正直のところ、何一つきいていなかった。わたしにとっては、この女性が「別れ」をいいに来たという、その事だけで十分だったのだ。わたしは玄関から十メートルほど見送りに出た。雪の中で、彼女は少し大きな声で「さようなら」と言った。私は答えなかった。手を振ることもしなかった。

そして、翌年彼女は結婚した。二年の後に、わたしにとって感銘深かるべきこの女性は、出産と同時に死んだ。」

一連の、実に個人的な出来事と、その反省とに私たちは象徴的な意味を求めることはすまい。だが、まだ演奏されつづけるであろうこの交響詩の中で、このゆるやかな部分こそが、要約的に重要なモチーフを強調していると考えてはならないであろうか。

雪の日、別れを告げに来る愛人、夕暮れに最後の別れとなるとは知らずに「さようなら――」と恥じらいをこめて小さく叫ぶ女性、ただ黙然と立ちつくす彼の黒い影、それらの持っている感傷的な要素より、より強く私た

ちの頭によみがえってくるのは、「お伽話の世界から足を一步ふみ出した」ころ、「この女性が、阿修羅のようにたけり狂う奔馬の上にまたがって――」と考えたころ、「姉妹達が」「甲高い声で」「鞭はスタートの前に、二、三発くれておくのよ」と叫んだころ「鞭をつかうのよ!」という女の叫びに「本能的に」鞭を馬に打ちおろした時のことである。そして彼が「追われ、走りつづけているのは、自分自身なのだ」と感じたという記述についてである。

そして彼が「このすばらしい女性もまた馬に対しては無慈悲であり傲慢であった」とかき、「その林の中で私達は愛し合った」と書いたその同じ女性に対して、最後の別れに「私は言えなかった」と書く彼についてである。

その彼はまた、わずか一行の文章でこの女性の終焉を記録している。曰く「わたしにとって感銘深かるべきこの女性は、出産と同時に死んだ」と。



原稿募集



新しいS・M作家の登場を期待しております 眞
実性のこもった力作をどしどしお寄せください

創作 (四百字詰め原稿用紙) 25枚まで

S・Mその他を主題とした小説をお寄せください。
新鮮味ある異色作品をお待ちしております。

告白体験記……………20枚前後

眞実の告白、得がたい体験記をもとめます。
だれにも言えない告白を、原稿紙にぶつけてください。

掲載させていただいた作品には、**相応の稿料を**
掲載後二ヵ月以内にお送りいたします。

◎原稿は第五種郵便になりますから
五十グラムごとに十円の郵券を貼
り、開封にして投函をおねがい
いたします。

▼原稿の送り先は――

東京都中野区松が丘2の21

あまとりあ社

裏窓編集部

裏窓一月号予告

☆十一月二十三日発売 価三〇〇円

■新連載三編■

時代小説切

鬼姫変幻帖

島本春雄
小日向一夢絵

幻想小説ソ

河童ぱらだいす

滑尻絵夢夫
秋吉 巒絵

女性熱愛記

マゾ道奮迅録

水尾 究
山田彬 弘絵

死の島物語(続)

南郷 京助
山田彬 弘絵

岐阜提灯

北野竜一

魔女検察官

三鬼 俊

奢れる女神への祈り(10)

森本愛造

私のコレクションから(二色オフ)……森下高茂



続・続・海の復讐鬼
業火の館

潮一樹
小日向一夢 絵



美女非情

伊予の国、岩間島――。

ほの暗い木小屋の中に、佇立した真弓の美貌は、凄艶なまでに冴えていた。

眼前には海賊黒龍党の副首領格にあたる七郎次の娘小鈴が、粗板の上に白くまるい腰を力なく落としていた。真弓に剃りあげられた頭が青々と恥ずかしい。ふっくりとした愛くるしい美しさは、坊主頭にされて、倒錯した奇妙な魅力を漂わせていた。

小鈴を水責めに苦しめられて、自ら舌を噛み切った七郎次の屍を、海に投棄するため大助と彦兵衛が船に乗せて出ている。七郎次が自害した経緯は、諸者諸兄は御存知のはずであるが、浜辺に漂着した副首領の屍を見た龍崎玄鉄の驚愕を思い浮かべるだけで真弓は楽しくなる。

男の小袖をまとい、足拵えも嚴重なたったけ袴に身を固めた真弓は、四肢をさらしている小鈴を凝視して、白い手に縄のひと束を握った。小鈴が恐怖を滲ませた眼差で見あげた。恐しい真弓なのである。情容赦なく責め苦を平然と与える美少女なのだ。

「小鈴、両手を後へお廻し」

「かんにん、かんにんして下さいましっ」
また縛られると知った哀願を無視して、ばさつと縄の束が小鈴の肩に鳴った。かなりの打撃である。

「早くするのです。そうでないと、もっと酷い目に合わせてあげる」

おずおずと小鈴は両手を背中へまわす。手首にはくつきりと縄の噛みついた跡が残っている。それを交叉させて縄を巻くと、ぎゅうと絞りあげる。

「ああっ」

肱からくの字に折れる両腕、縄を小鈴のすべやかな咽喉に廻して首縄をかけると、からだのどこに潜んでいるのかと疑うほどの強い力で胸もとを締めつける。呼吸の詰まる縄目に小鈴が低く呻いた。

坊主頭の美少女が白い素肌を縛りあげられた姿は異様な見物であった。

真弓は縄尻を掴むと紅い唇をひらいた。

「仲間の所に帰してあげる。お立ち」

と、引きずるようにして小鈴を立ちあがらせると、木小屋の外にどんと突き飛ばしたのだ。うす暗い小屋とは対照的に緑が明るい。「これからあの山を越えるのです。そうすればお前達の住む黒龍党の本拠に出られる」
小鈴は驚きに息を呑んだ。

密林に掩われた深い山を越せというのだ。縛められた裸身にはだしのままである。棘や茨を踏んで歩けようか。

「お願いです、小鈴は帰らずともかまいません。山へは行かせないで」

真弓は冷酷な微笑を唇に浮かべた。

「おとなしく歩くがいい」

真弓は鋭く命じた。

木小屋の背後に聳立するふたつの峯を越すと、十三年前黒龍党に滅された岩間の党の村落の跡にたどり着く。いま、そこには仇敵たる黒龍党の館があるのだ。

「たすけてっ」

無駄とは知りながら、小鈴は引きずられて悲鳴をあげた。後手に縛りあげられた素肌が抵抗力を失って地面に転がる。真弓は容赦なく足を進めた。小鈴の肌が早くも汚れて、石ころにこすられて血を噴く。

「あーっ、あ、あるきます。立たせて下さいまし」

小鈴は屈伏の叫びをあげざるを得ない。このまま引きずられては、たちまち全身が傷だらけになってしまう。縄尻がわずかにゆるめられると、小鈴は惨めにからだをくねらせて立ちあがる。

「私の先を歩くのです。動かぬと痛い目を見

るだけのこと」

真弓はすかさずむしり取った木の枝をびゅっと鳴らした。枝の鞭は小鈴のふっくらと盛りあがった双臀に鈍い音を立てた。

「ひ、ひいっ」

白いなめらかな皮膚に浮いた一条の赤い筋を揺らして小鈴は歩く。よろよろと叢を踏み分けて足を運ぶ小鈴の前には、早くも熊笹の茂みがひろがっている。腰をなぶる笹の葉に素肌が震えるのであった。

非情の山

峰をひとつ越えるのに縛められた小鈴の足は二刻を要した。

日輪は中天で赤く燃えて汗がふつふつと噴きでる。小鈴の青く剃られた頭もびっしりとぬれていた。からだ中を擦過傷が彩どり、はだしの足は血が滲んで凄惨であった。柔かな足が耐えられようはずもない。

峰の頂きに立つと、前方にもうひとつの峰が見えて、その向うに穏やかな海のうねりが望まれる。白く輝いているのは黒龍党の館の白い壁面である。手を伸ばせば握り取れるほどの近さに眺められはする。

真弓は憎悪を双眸にこめて館をにらんだ。平和な暮しを送っていた岩間の一族を、鑒

殺しに焼き払った龍崎玄鉄に対する復讐の念が改めて強くわきあがってくる。

真弓はくるりと振り返り、疲労にうずくまっている小鈴に視線を廻した。

「小鈴、ここで放してあげる。山を降りるがいい」

掴んでいた縄を離すと、真弓は来た方角に向けて踵をめぐらしていた。驚いたのは小鈴である。縛られたままのからだで、深い谷を渡って、さらに峰を越えることは不可能である。

「縄を、縄を解いて下さい。これでは歩けません。お願いですっ」

泣き声をあげる小鈴を、真弓は冷然と見返った。

「そのままでお行き。殺さずに逃がすだけでも慈悲です。この山で死ぬならお前の運命もそれまでのこと。助かるも死ぬもお前の力次第」

「待って、あーっ」

小鈴の哀泣を背にして真弓は木立の間に足を速めた。

斧を入れたことのない森林が続く深い谷間を抜けて、断崖のような斜面を登る力があるはずがない。放置することは死を意味しているのだ。

罪のない小鈴である。十三年前の悪業を果たした七郎次の娘に生まれただけではないのか。小鈴を殺すのはあまりにも非情すぎる。真弓はおのが心に湧きあがってくる疑いの念をふっきるように駈ける。復讐のために鬼と化す決意の真弓であった。唇を固く引き結び双眸をかつとむいていた。その黒い瞳がぬれてくるのを、おのが意志で必死に押えようとする真弓。

木小屋に戻ると、大助と彦兵衛が不安な面持で待っていた。真弓の姿が見えぬので心配していたのである。

「真弓さま、どこへお行きなされた」

と大助が怒ったように訊く。

「小鈴を帰してやるために山へ登ったまでのこと」

無表情に答える真弓である。

「無茶な、それでは我等の隠れ場所を黒龍党に教えるようなものではありませんか。我等の企みは水泡に帰しますぞ」

真弓はきらっと光る眼で大助を見た。強い意志が必死に何かを耐えている双眸に大助はたじろぎを覚えた。

「小鈴が無事に帰りつけば私達の負けです。小鈴を裸のまま後手に縛って捨て置いてきたのです。谷を渡り崖を越えて黒龍党の館に帰

れるとは考えられますまい。もし小鈴がそれ
を果たしたら、私達は奇跡に敗れたことにな
る」

あまりの愴絶な行為と言葉に大助と彦兵衛
は声もなく顔を見合せた。ひと思いに殺すよ
りも、はるかに残酷な手段ではないか。小鈴
が生還し得る可能性は、まず万の一もないで
あろう。

「真弓さま、七郎次の屍は沖に捨てましたわ
い。潮の流れにのって、黒龍党の鼻先に着く
のは三日もかかりますまい」

「玄鉄め、眼をまるくするでしような」

大助の言葉に答えず、真弓は炉端に座ると
じっと瞼を塞いだ。長い睫毛の震えているの
が、小鈴を死に至らしめるおのれの非情を責
めているように見えた。

「真弓さま、これからどうなさる」

と、大助がそっと訊いた。

「残るは玄鉄のふところに飛びこむだけ」

真弓の呟きには燃えるような激しい響きが
こもっていた。

縄の追憶

豪壮な城砦同様の館の高樓に立って龍崎玄
鉄は浮かぬ顔をしていた。

剃りあげた頭も、脂ぎった相貌も、十三年
の歳月を感じさせぬ男盛りの強靱さを持って
いた。スペインの海賊加比丹エックから贈ら
れた、真紅の羅紗で拵えた陣羽織を着ている
姿はあっぱれ水軍の將軍と見える。

浮かぬ顔の理由は、今朝、行方不明となっ
ていた副首領格の七郎次が屍となって浜辺に
漂着したことであつた。殺されたのではなく
自ら命を絶つたらしいと聞いて、玄鉄は奇怪
な陰影が胸中にひろがるのを覚えた。

玄鉄が高樓から降りてくると、七郎次に劣
らぬ腹心のひとり、百虫十兵衛が待っている
のが眼に入った。百虫という不快な姓名のた
めに、仕官を棒に振った讃岐生れの牢人者で
のっぺりとした白面だが、策謀に長けて無法
の腕も確かな男である。

「百虫十兵衛か、用があるらしいな」

「鉄砲三百挺、硝薬の類が二十貫、堺の南海
屋よりの注文でござる」

関白秀吉の野望を賭けた朝鮮征伐のために
おびただしい戦争物資が買い付けられている
のだ。加比丹エックを始めとして、南支那海
や印度洋に跳梁する海賊と盟約のある黒龍党
には、これらの物資が容易に集まる。それを
知って堺の商人達は取引を望むのである。
「精々値を釣りあげて売りつけてやるのだ。」

奴等はごっそりと稼ぐつもりだからな」
言い置いて玄鉄は館の奥へ足を運ぶ。

檜の廊下にはペルシャ渡りのじゅうたんが
敷きつめられて、要所要所に下げられている
軒燈も異国情緒を漂わせる珍品ばかりであつ
た。

玄鉄を迎える影が磨かれた廊下に落ちた。
輝くばかりに美しい女である。若くはない
が、女盛りの熟れきった豊麗なからだを、華
やかな衣裳に包んだ姿は大輪の緋牡丹を思わ
せた。

「千春、今朝はひとときりあでやかだな」

玄鉄は満足気に微笑した。

千春――。

十三年前、岩間の党が玄鉄の奸計に滅亡す
る原因となった美貌の女。党首海之介の妻で
あり、いま玄鉄への復讐に闘志を燃え立たせ
ている真弓の母千春。すでにこの世にないと
思われた女が、十三年前の美しさをいささか
も損わずに、玄鉄の館奥深く生きているとは
意外な事実であつた。

「そのように美しいと血がうずくわい」
「また戯れ言を――」

千春の声には媚があつた。

玄鉄は手を伸ばして千春の腕をぐっとねじ
あげる。豊熟した匂いを漂わせる女体がくる

りと反転して玄鉄の胸にもたれこむ。がっしりと大きい掌がふたつの手首を握りこむと、玄鉄は空いている手で千春の襟をかきひろげる。

むっちりと凝脂の光るまるい肩がむきだされた。白くぬめぬめとした肌である。

「あーっ」

故意にあげる悲鳴。それが玄鉄の胸を波立たせることを充分に知っている千春である。

岩間の浜から黒龍丸に連れ去られ、玄鉄から受けたおぞましい屈辱。日夜繰り返された玄鉄の責め苦に屈伏した千春のからだに獣性がめばえた。そして、次第に馴らされて悦びを知るようになった千春。

その自覚が千春を驚愕させたころには、もはや玄鉄なしでは生きていけぬ女になっていたのである。女の悲しい性であろうか。千春の脳裡からは、無惨な最後を遂げた海之介のことも、もえさかる業火の中に捨て去られた真弓の面影も薄れ去っていくのであった。

「ふふふ」

と、耳朶を玄鉄の熱い息が這う。

柔らかな肉づきの肩に齒を当てるとこめかみに力をこめる。

「ああっ」

じいんとひろがる痛みに、うっとりとする

千春であった。

肌 燃 え

「七郎次が死んだことで思いだしたわい」

玄鉄は顔を火照らせて呻くようにいった。

千春は華麗な衣裳をはぎとられて、白絹の襦袢にむかれたからだを後手に縛められていた。十三年の間、飽くこともなく続けられる遊戯であったが、縄に締めあげられるたびに千春は新しい悦びを覚えた。

「そなたを初めて黒龍丸で責めた時じゃ。いまのそなたも美しいが、あのころはこの世の者とは思えぬほどじゃった。裸にするとはずかしさに肌を薄赤く染めてのう。唇を割って轡を噛ませると口惜しげな顔をしようたわい。海老責めにつり責めと俺は夢中になった。悶えるそなたを、往生柱に括りつけた時は泣き叫んで許しを乞うた。その声に俺はまたぞくぞくしたものじゃ。ひいひいと悲鳴をあげたな。俺は往生柱に腰布一枚で縛りつけたそなたを南蛮渡りの革鞭で責めた。もえるように赤い腰布をたくしあげて、雪のように白いそなたの臀をな」

千春は屈辱の追憶をかき立てられてさすがに面を伏せた。羞恥がほつてりとした肌に血

をのぼらせている。

玄鉄はおのが心がたかぶるのを押さえきれなかった。十三年前の回想にふけるほど千春に対する新鮮な欲望が湧くのかも知れぬ。ぬめりとした黒髪を掴み伏せている面を、ぐいと仰向けた。

「最初にそなたを海老責めに引っ括った。白いしなやかなからだを思うさま折り曲げてな。縄がぐいぐいと喰いこんだものよ。肌に脂汗を噴かせて、もだえる白い海老はみことな眺めじゃった。次ぎに試みたのか逆吊り、相憎と黒龍丸の天井は低くてな。ただ両足を括って引きあげただけのことだが、それでも俺が乳房をふむと、そなたは轡の間から奇妙な声で泣いたのう。あの夜の最後は操り責めじゃった。女を参らせるにはこれに限るとな。加比丹エックの船将をしておる李王海が教えてくれたのだ。天竺からとりよせたという孔雀の羽根をもらうて、そなたを待ち受けていたものじゃった。両手両足をひろげて縛りつけ、俺は散々になぶってやった。しまいには泣きわめく声も枯れて、ただびくびくとからだを震わせるだけであったのう。あの時の悦びは忘れられぬわい」

と、玄鉄は醜怪な顔を酔ったようにどす赤く染めた。

千春は臉を塞いであえいだ。十三年前の光景が鮮明な映像となって浮きあがる。黒龍丸の胴の間に揺れていた異国の提燈。唇を割って頬に喰いこんだ奇怪な轡の感触までがまさまざと甦えつつくるのだ。

「俺の考えた轡はみごとだったな。そなたの舌を犬のように引きだして、がっちりと締めつけたあれは、美しい女を責めさいなむにはもってこいの道具じゃわい。どうだな、千春。昔のように泣かせてやろうか」

覗きこんでにやりと頬を歪める玄鉄。

「お許しを」

繰返される哀願が、馴らされた千春の口から洩れる。

その時、ひそやかな足音が近づくのを知って、玄鉄は不機嫌な表情を刷いた。その足音が百虫十兵衛のものだとすぐに判る。

「首領、邸魔を致して申し訳ないが」

玄鉄は襖の外に体を運んで吐き捨てた。

「邪魔と知ったら面をだすことはあるまい。

百虫十兵衛」

のっぺりとした白面が醜惡な微笑をふくんだ。

「浜に白拍子らしい女が着きましたぞ。仲々に美形とか申しておるが」

「なに、白拍子だと」

十兵衛は俄かに声を弾ませる玄鉄を冷やかな双眸で凝視した、この六尺にも余る壯軀を持ち異常な色欲の虜となつてゐる首領を、おのが意のままに扱うには女を道具に使うに限る。

十兵衛はすでに七郎次の地位を掌握する心算であつた。

「首領、あわてなさらずともよい。その女を連れて参る」

玄鉄に声を残して、十兵衛は静かに廊下を歩いてゐた。

潜入成功

百虫十兵衛と名のる牢人者から、首領の龍崎玄鉄に会わせると聞いて、真弓はからだに異様な戦慄が走るのを感じた。白拍子をよそおつて、仇敵の腹中に潜入する奇策が、こうもたやすく成功するとは思わなかつたのである。

真弓は小舟をあやつつてきた彦兵衛の耳にささやく。

「彦兵衛、お別れです。敵を倒せば私も生きては帰れます。大助にもこのことを伝えるのです」

「真弓さま——」

彦兵衛は絶句して、老いた眼をしばだたいている。真弓のおのれを賭ける壮絶な捨身の行為に涙を唆られるのであつた。

「白拍子、そなたの名を訊こう」

戻つてきた百虫十兵衛に、真弓は被衣の中で恥しげに顔を傾むけて答える。

「はい、真弓と申します」

「よし、龍崎玄鉄どのが会いたいと待っておられる。来るがよい」

真弓は視線を廻して、彦兵衛に最後の一瞥を残すと、十兵衛に従つて行く。見送る彦兵衛の咽喉がごくりと鳴った。

館は銃眼をうがつた土塀をめぐるし、小大名の居城と変らぬ堅固さを持ち、それをはるかにしのぐ豪華さを誇つてゐる。関白秀吉が聚楽第に権力を開花させたごとく、野望を凝集させて威示したい願望があるのだ。

もえるような緋のじゅうたんは真弓の眼を眩らせた。これほどの館を建ち得る海賊黒龍党の首領を討つには、女を利用する他に方法はあるまい。真弓はさらに強い決意を固めた。玄鉄は紫檀を使った曲録に腰を下ろしてゐた。

剃りあげた坊主頭、潮灼けした魁異な相貌と白濁した眼。これが岩間の党の仇敵龍崎玄鉄かとみるや、いまにも懷剣を抜いて飛びか

かりそうになるおのれを、真弓は辛うじて耐えるのであった。

「被衣を取って顔を見せるがよい。俺は美しい女を眺めるのが好きでな」

「は、はい」

真弓の肩をすべって落ちる被衣に、玄鉄の眼が注がれる。

「美しい」

玄鉄は思わず唸った。

かつて千春を前にした時と同じ衝撃が、玄鉄を襲った。

「俺は黒龍党の首領、龍崎玄鉄。そなたは真弓と申すそうじゃの。この岩間の島に参った理由を聞かせてもらおうか」

「はい、備後の港でこの岩間の島に当代無双の水軍の大將がおられると耳に致し、参上したのです」

「当代無双の水軍か」

玄鉄は自慢気に呟いた。瀬戸の内海に君臨した村上水軍を追われた一介の海賊にすぎなかった玄鉄は、いまや二隻の巨船を有し遠い南海にまで舳を進めているのだ。

「首領」

と、傍に寄った百虫十兵衛の眼が陰気に嗤った。

「お気に召したようでござるな。では、こゆ

るりと――」

十兵衛は玄鉄の耳にささやきを残すと、さつさと部屋をでて行く。これで当分玄鉄は真弓に熱中するであろうと踏んでいる。

「真弓だったな。愛らしいよい女じゃ。この

館に逗留するがよい」

「有難うございまする」

真弓は、ほっと心のゆるみを覚えた。

この館に住みつくことは奇策を成功させる重大な要因を秘めている。敵の腹中に突入する戦法は狙った通りに運びそうだ。

この美しい白拍子が、岩間の党首海之介の遺児とは知らぬ玄鉄は、早くも淫蕩な欲望をぎらつかせていた。

「ところてな、俺は白拍子の唄や舞いは好かぬ。美しい女を見るとすぐに苛めたくなる困った性分の男なのだ。どうじゃの、真弓」

「どうなさいます」

いよいよきたなと真弓は思った。

「裸にむいてな、縛りあげて責めるのよ。恐しいか」

「いいえ、私は平気でございまする」

玄鉄の血を昇ぶらせようと、真弓は故意に冷やかな口調で答えた。

焦慮の女身

真弓は襦袢にはがれた姿を高手小手に縛められていた。

この責め苦と羞恥に耐えるために、木小屋にこもって、大助と共に訓練を続けてきた真弓だ。玄鉄の締めあげる縄は相当に強く、胸に喰い入って息もできぬほどに苦しいが、真弓の表情はいささかも変らない。

少々驚いているのは玄鉄の方であった。いままで責めた女達は、後手に縛っただけで悲鳴をほとばしらせて許しを乞う。この美少女は平然としているのだ。

「これでよいのですか、玄鉄さま」

形のよい唇から唄うような声が流れる。

玄鉄の心の炎をかき立てる言葉なのだ。この娘が悲鳴と哀願をあげる時の悦びが、ぶあつい胸の底でくすぐっている。

「まだ小手調べじゃ。そなたをどう責めようかの」

「いかようにもなされませ。あぐら縛り、海老責め、真弓にはどちらも耐え得る術を心得えておりまする」

玄鉄のかっかともえている欲望を見ぬいている台辞である。千春との夜毎の狂宴と異つ

た新鮮な昂奮が湧いてくるのだ。

「ふふ、その高慢な鼻っ柱を折ってくれる」

玄鉄は鼻を鳴らした。

真弓の襟をぐいとかきひろげる。若い光沢を放っている肌がむきだされた。さすがに恥ずかしいのか、臉を軽く塞ぎ頬がほんのりと染まっている。それが真弓の美しさを際立てる効果となっていた。胸を締めつけている縄のために、すっかり脱がすことはできぬ。それでも玄鉄は丹念に指を動かして襟をひろげる。張りきった肌、めりこんだ縄にふくれあがった胸のふっくりとした隆起。その光りは男を知らぬ清純な固さを秘めていた。

「こうしてな、そなたをじっくりと裸にしてやるのだ。焦ることはあるまい。そなたを糸まとわぬほどにむきあげるのはまだ先でよいのじゃ」

玄鉄はわくわくしながらしゃべっている。

脂ぎった顔はどす赤く、こめかみの血管が太く怒張している。咽喉の奥が不覚にもからからに乾いていた。

真弓のくびれた胴に巻きついて細ひもをぬきとると、襦袢の裾がはらりと割れて、真紅の腰布が玄鉄の眼に浸みこむ。強烈な色彩が白い肌を、くっきりと浮かびあがらせて妖しい美しさをかもしだしていた。

「そなたの望むあぐら縛りといくか」

玄鉄は語尾にへらへらと笑い声を添えた。

真弓が臉をひらいて玄鉄の狂態を凝視する。双眸に澄みきって玄鉄を嘲笑する光が輝いていた。その眼で眺められると、おのが狂態を鏡に映しだされるような心持となって、玄鉄は水を浴びたように立ちすくんでしまった。

「いかがなされました。玄鉄さま」

真弓の声はまた氷のように冷たい響きをこめている。

玄鉄はいつの間にか、滲みでている額の汗を、掌で拭うと荒く思を吐いた。かつてない狼狽を感じている。

「さ、お縛りなされませ」

真弓はそういうと、自らしなやかな足を、すつと玄鉄の方に差し伸べた。赤い布を巻きつかせた白いふくらはぎが浸みるように玄鉄の視界にひろがる。真弓の腰からぬきとった細ひもを握ったまま玄鉄は立ちすくんでいった。

「このように足を組めばよろしいのですね」相手の動揺を知った真弓は、わざと裾をはねるようにして足を組む。赤い布はまくれあがり、弾けるような肉つきを持つ太腿。

その前にかがみこんで、足首を括り合せるということが、奇妙にも玄鉄にはできなかった

た。ふしぎな気持である。

「ふふ、そなたはみことな女じゃわい。今日は俺の負けとしよう。だがまだ勝負は始まったばかりじゃ」

玄鉄はおのが心を真弓に悟らせまいとして哄笑を空しく響かせるのであった。

宿命の女

それから五日――

玄鉄は、館の西にある物見櫓、通称西の櫓下に真弓を住まわせると、毎夜訪れる。いかに千春が豊熟した女体であっても、若い真弓のからだだと玄鉄を焦らす妖しい魅力には勝てなかった。

風もなくねっとりとした夜気が漂い、潮騒も聞えぬ闇をくぐって、館の奥庭へ姿を現わした者がある。のっぺりした白面、百虫十兵衛であった。十兵衛は寝所にはんのりとともに横たわっている寝所へ足を向けた。

「千春どの、十兵衛が参った」

部屋を覗く十兵衛の鼻腔を甘い匂いがくすぐる。寝乱れた千春の姿が妖しい。

「このような場所に呼び立ててすみませぬ」

「なんの」

と、答えながら、十兵衛の双眸が陰険な光を滲ませた。女盛りのむっちりとした肌が、男の心を悩ましゆすぶる。

「玄鉄さまは西の櫓に若い娘を住まわせているそう。五日も私と夜を共になされませぬぞ。その娘は十兵衛どのが世話をされたそうではありませぬか」

千春の言葉に含まれている嫉妬を感じて、十兵衛は苦く笑った。

「白拍子でござるよ。拙者が世話をしたわけではない。そやつが勝手に入りこんだまでのこと。首領がご執念は拙者の預り知らぬことでしてな」

「その娘は美しいのですか」

「千春どのには及びませぬが、なにせ若いゆえ首領も珍らしいのでござろう」

十兵衛はにやりとした。のっぺりした白面をどぎつい表情がかすめる。ずるりと膝を進めた十兵衛にはやくも千春は男の意企を知った。

「千春どの、拙者はそなたに熱心じゃ。気持を汲んでいただきたい」

十兵衛の腕が肩に巻きついてくるのを感じると、千春はおのれの方から、ゆっくりとからだを倒していった。

その頃――。

西の櫓下に設けられた寢所の中に玄鉄と真弓の熱い息が交錯していた。

腰布一林にはがされた真弓が、ローソクの光を浴びてぬめぬめと輝いていた。天井の梁に取付けてある鉄輪に結ばれた縄が、頭上に交叉させられた両手首を縛って宙吊りからだを浮かばせている。しかも、両脚は左右にひらかされて、それぞれ足首を括った縄が、壁にうめこまれた鉄輪に止めてあった。

真弓は吊られたまま、床から一尺ほどの空間に揺れているのだ。これは相当に苛酷な拷問である。さすがに苦しいらしく、木椀を伏せたような乳房は荒い呼吸にうごき、引き吊られる筋肉の痛みに両の腋下がぶるぶると震えていた。真紅の布に包まれた下半身と、雪をあざむくほどに白い上半身との対比が、ほの暗い部屋にあかあかと夜を忘れさせていた。

額にじつとりと脂汗を眺らせていたが、真弓はまだ表情も歪めていない。

「どうじゃい。この吊り責めはこたえよう。そろそろ音をあげぬか」

白綸子の寝衣の襟もとから、密生した剛毛を覗かせた玄鉄がいう。

「そなたが心底から俺に屈伏し、悲鳴をあげ

て許しを乞うまで、俺はその白く美しいからだを奪いはせぬわい。それまで幾日かろうと責め続ける。これが龍崎玄鉄の女を口説く方法よ」

真弓は手首に噛みこんでくる縄の痛さを必死に耐えている。

「玄鉄さま、これ位の責めで真弓は負けはしませぬ」

吐く息こそ荒いが、赤い唇から流れでる声は依然として冷やかな響きがある。

五夜にわたって、これまでどんな強情な女でも悲鳴をほとばしらせた、さまざまなやり方で挑んだが、いずれも真弓は徒労に終らせていた。

「みごとな広言を吐くのう」

手強いほど征服した時の喜びは大きい。玄鉄はそれを思っで双眸を血ばしらせていた。

秘計の屈伏

玄鉄は加比丹エックから贈られた革鞭を手にとった。

奴隷を積みこんだ時に用うる長い強靱な鞭は、すでに幾十人の男女の肌を破り肉を裂いたであろう。革の臭気の中に血の匂いすら感じられる。玄鉄は鞭を握ると、床から三尺ほ

どの高さに吊られた真弓の顔を見詰めた。

「この鞭でそなたが泣かなんたら、俺は黄金千枚をくれてやる」

と、玄鉄は鞭を後方へ跳ねた。力いっぱい鞭打っては、真弓の白く柔らかな肌はたちまち破れるだろう。それでは後の楽しみに差支えるのだ。それにはまず女のもっとも弱い個所を狙うに限る。

「そうれ」

玄鉄は鞭を大きくまわした。

「う、うーっ」

いままで苦鳴を噴かなかった真弓が苦痛の呻きをもらした。鞭は乳房を撲ってぐりりと背中まで巻きついたのだ。じーんと脳髓をかき乱すような痛覚。玄鉄が鞭を手もとにたくりこむと、真弓の上半身がねじくれた。下半身の両脚はそれぞれに緊縛されているので、動くのは上半身だけなのである。そのため吊られている両腕の骨がごとりと軋み、縄が手首を砕くほどに噛み締める。白い肌に鞭の痕が赤く残った。

「今度はどこへ飛ばすとするか」

玄鉄は予想した成果に声を弾ませている。

「ひいーっ」

遂に待ち受けた悲鳴がほとばしった。第二撃は頭上に伸びて、がらあきになっている両

腕を狙ったのだ。薄い皮膚はこの凄まじい衝撃を受けて、たちまちに血を噴いた。しかも鞭は早くも次の攻勢に移っている。

びしっと、異様な音が跳ねた。

鞭は従に真弓のからだをすくいあげた。ひらいている両脚を襲ったのだ。まといついている赤い布が、幾分か鞭の動きをゆるめはしたが、蛇のような執念深さで狙った通りに柔軟な肌を叩きのめしていた。

「ああっ、ううー」

絶息するような痛さに真弓はのけぞった。

「どうじゃい。まだ俺に刃向かえるかの」

玄鉄はにたりと笑ってうそぶいた。

「ゆ、ゆるして、も、もうだめ——」

五夜にわたって耐えぬいた真弓の気力が失われたのか、それとも仇敵をあざむく詭計のひとつなのか、真弓はかすれた声で哀願の言葉を吐きだしたのである。

「どうやら参ったようだな。俺にそのからだを許すのだろうか」

「は、はい——玄鉄さま」

がんとしびれるような勝利の快感に玄鉄は我を忘れた。

鞭を捨て縄をゆるめた玄鉄は、若い弾むような真弓のからだを、吊り責めから解き放つと、太い腕に抱えて夜具に横たえた。ローソ

クの炎に照された息を吞むほどに美しい肢体。

薄赤く鞭の跡を残し縄目の噛んだ歯形をとどめる肌。

「ふふ、可愛い白拍子よ」

呟きながら、両手を肌に這わせて鼻を鳴らした。真弓のからだに残っていた唯一の布、真紅の腰布をためらいもなくはぎ落すと、玄鉄はてらてらと脂光りする顔を近よせた。その時、するりと白い真弓の腕が玄鉄の首を抱えるや紅唇を寄せたのだ。

業火に死す

我を忘れて玄鉄が真弓の唇に酔っている間に、残っている真弓の右手が髪をまさぐった。鋭い細い短剣が真弓の頭髮の中に巧みに隠されていたのだ。

次ぎの瞬間、玄鉄は凄まじい衝撃にかつと眼を剝いた。短剣はみごとに玄鉄の頸動脈をかき斬っていたのである。

「龍崎玄鉄、地獄へ墜ちるがよい。われら岩間の党の恨みを背負うて行くのじゃ、海之介の娘真弓、今こそ一族の敵を討つたり」

つんざくような鋭い真弓の声が、のたうっている玄鉄の耳朶をかすめた。血がごぼっと

音を立てて、真弓の裸身を、鮮烈に彩っていた。

館の奥深い寝所で、千春は百虫十兵衛のからだから離れた。

「どこへ行く、千春どの」

満ちたりて物憂げな男の問いに、かすかな微笑みを残して千春は寝所をでた。百虫十兵衛の脇差を掠めている。玄鉄を奪った白拍子を殺すためであった。足音を忍ばせて、ねっとりとした夜気を横ぎり、聳り立っている西の櫓にたどり着くとからだをすべりこませていた。

耳を澄ますと、なにか弾けるような音が聞える。

驚いて戸をあけた千春の目に、凄愴な美しさを漲ぎらせた光景が展開していたのであった。

血を噴いて倒れている玄鉄のそばに、一糸もまとわぬ美女が返り血を浴びて、櫓の床に火を放っているのだ。すでに炎は床を這っている。千春は脇差を抜き放って叫んだ。

「曲者、覚悟っ」

その声にはっと視線をまわした美女を見て千春は思わず息を呑んだ。

「岩間一族の遺恨を晴らすために、推参した

者、党首海之介が娘真弓、父母を始め一族の執念をうち払ったのです」

千春は総身から血を失ったのけぞった。十三年前、もえさかる館に残されて、この世にない者と思っていた真弓が、成長した姿でけなげにも玄鉄を討ったのである。

ここに母のいることを告げる勇氣は千春にはなかった。

すでに玄鉄に殺されたと信じている真弓の前に、十三年も仇敵の愛撫を受けてきた千春が、母であることを教える資格はなかった。しかも、真弓が敵を討つために、女を賭けたことを知ると、許されない厳しいものを感じて呆然と立っていた。

抜き放った脇差をだらりと垂れている千春に、真弓が短剣を振って飛びつくのを、身動きもせず待っていた。短剣が深々と胸を刺す衝撃に、くずれ落ちる女を、凝視した真弓は、炎を浴びた五才の記憶をはっきりと思いだしていた。

死の色を刷いた千春の顔が、遠い追憶の中に沈んでいる母の面影を、くっきりと甦えらせたのである。

「お母さま——っ」

抱き締めた千春のからだから力が喪われて絶命する寸前、唇が何かを告げただけに震えて

いた。

「お母さま、真弓も参りまする」

部屋中をなめつくした炎は、千春と真弓を壮絶に彩っていた。真弓は屍を抱いたまま、裸身を大きく炎の中に跳ばせていた。

炎の色が夜空に滲む——。

彦兵衛と大助は浜辺へ向かって小舟を進めていた。

「館が灼ける時は玄鉄と私の最後の時と知るがよいと言が残されたぞ。彦爺、死ぬのはいまだ。黒龍党の奴らに岩間の党の心意気存分に思い知らせてくれようぞ」

彦兵衛は館を凝視した。

「真弓さまは、おやりなすったのう」

しゃがれ声を震わせると、彦兵衛はわめいた。

「この老いぼれ、力の続く限りあばれてやるわい」

悲しくにつこりと微笑し合ったふたりは、小舟を浜に着けるや、抜き放った太刀を振りかざして、黒龍党の本拠に突撃するのであった。

「ショッキング画集」 によせられた 読者からのおたより



▼始めてお便りいたします。「ショッキング画集」をたいへん楽しく読ませていただきました。今までの私の体内で煮えきれずにくすぶり続けていた何物かが、ある程度取りのぞかれたような気がしました。後記に書きそえられた、こういう絵に対する考え方には、たいへんに共感を覚えますし、また、新しい知識を多く与えてくださったことにも、私は感謝しなければならぬと思います。さて、本題に入りましょう。お二人は罪な方です。今度の本のおかげで、私はアメリカの刊行雑誌を買おうと決心してしまいました。そう決心した夜は眠られなかったほどです。作品については、お二人があの本に書かれたのを参考にしまし

た。私はスタントンとジムの作品が好きです。別紙にあの本の中の私の好きな絵を書いてみました。特にジムの絵は日本では始めてではないでしょうか。近頃の作品とは思いますが、とても美しいと思いました。まるで、人が変わったように進歩の跡が見えます。私の夢―あなたの言われた倒錯―を充分にかなえてくれそうなよろこびを覚えめました。私は革が好きですし、顔の変形にも非常な興味を覚えます。その意味でスタントンの作品は最高のものだと思います。これらの作品はたいへん高価なものと思いますが、できるだけ安価に手に入れたいと欲ばった考えをお持ちです。たいへんに勝手なお願ひですが、その入手方法をお知らせください。私の心に火をつけたのはお二人です。だから、あなたにもこの火を始末する責任が少しはあります。それに、私もあなたと同じ世界を、倒錯の世界をこの上もなく愛する人間のひとりだということを忘れないでください。どうか、よろしく願ひします。

（東京 T・I）
▼「ショッキング画集」早々にお送りください、ありがとうございました。日本人の体質からくるものか、やはり私にはウィリーのものが最高です。概してアメリカのものは縄の掛け方ひとつにしても左右均衡といったものが多い中でウィリーの絵は東洋的な美しさを見出すことが出来ます。これにくらべて、スタントン、マリオなどはいかにアメリカ的というべきで、いちばん稚拙な感じのするジムの絵が私の心を捕えるのは、ジムの描く小柄な感じのする女の愛らしき故と思われる。それからジムやスタントン、マリオの作品を見て感心したのですが、なんといっても彼らの特色は奇想天外な責めの着想で、日本の画家もその点を見ならってほしいものと考えました。「裏窓」の本誌からは、遂にグラビアが姿を消しましたが、せめて年に四回くらいはこのような画集・写真集の発行をお願いするものです。（東京 H・O生）

▼「ショッキング画集」発売にあたりご同慶に堪えません。小生、若い女性を搾衣等によって責めるのが好きですが、その点「裏窓」本誌に皮などによる縛り、防声具等を使用したものは最近「アラビアの城」があるだけで、毎号期待を裏切られてまいりましたが、今回の「ショッキング画集」において、ようやく小生の欲望が満たされた思いがしました。次回第二号を刊行される機会がありましたら、山田彬弘先生、中川彩子先生の搾衣、防声具による緊縛画を加えてくだされば幸いです。

（大阪府・革好爵）
▼本誌の「読者コーナー」等で海外SM写真、絵画が、多くの読者にけなされることに、常々不満をいだいていましたが、それも「ショッキング画集」を手にしたとたん、吹っ飛んでしまったよううれしさです。フェニクス商会の絵にくらべれば、いかに日本の画家先生方のアイデアが貧困なることよ。のびのびした女体を縦横に締めつける情容赦のない緊縛美は、フェニクス商会のものならではのものです。欲を言えば、「ショッキング画集」にあるような器具、革紐等を使用して、モデルによって絵画どおりのポーズによる緊縛写真集を実現していただき、同じページに参考に使った海外SM画を掲載して、「ショッキングフォト・絵画集」などいかがですか。この際のモデルは必ず外人モデルに劣らないような美人であることが条件ですが、考えただけでもゾクゾクするようで、千円が二千元でもかまいません。

（神戸 I・M生）

■ 圧政をはねかえせ 独裁者を倒せ！

死の島物語

南郷京助
山田彬弘・絵



逮捕されたのは、ホテルの横でだった。

ジュリーは、連絡用の小さい紙片を握りしめ、グルサルのくるのを待っていた。

紙片には、次ぎの集会の場所と日時が書かれ連絡すべき者の名前がつけられていた。それが政府側の手におちれば、芋づる式に捕縛の手が伸びるのは、明きらかなことだった。

ジュリーは、緊張と不安から身内のひきしまるのを覚えた。

使命感が、そんな彼女をふるいたたせていた。

グルサルがやってきた。

はちきれそうに若々しい肉体をつつんだ、

うすぎたない、みすばらしい衣服。

でも、ジュリーはそんな彼に、処女らしいはにかみと、不思議な好意を感じていた。

衣服のみすばらしさは、搾取と収奪に肥えふとった政府側の、ブルジョワたちの醜悪さから較べれば、むしろ心の美しさを証明しているように思われた。

グルサルが近づいた。

眼と眼が合い、暗黙の会話が瞬間にかわされた。二人はつれ添い、恋人のように歩きは

じめ、ごく自然に腕と腕とを組み合わせる。

そして、ジュリーは、さりげなくグルサルに紙片を渡そうとした。

その時だった。

たくましい、鉄のような腕がふいに背後からのび、ジュリーの腕をかかえこんだ。

グルサルは、とっさに事態を理解し、とら

えられた腕をふりもぎって駆け出した。

ジュリーの女の力では、それはとても不可能なことだった。

だが、紙片だけは、とりあげられる前に素早く口に放り込むことができた。

私服刑事の顔に、狼狽がはしった。

彼は、ジュリーの口から、その紙片をはき

出させようとあせった。

しかし、紙片は、もうジュリーの咽喉を通っていた。

ジュリーの口をこじあけてそれを知った私服刑事は、残念そうにいった。

「ちくしょう。やりやがったな」

彼は、ジュリーの両手を後ろにまわし、腹立たしそうに、あらあらしく手錠をはめた。

グルサルはその間にも、猿のようにすばしっこく追跡の手を逃がれて走っていた。

しかし、弾丸の速さには勝てなかった。

ピストルを撃つ音がして、グルサルはあっ

けなく路上に倒れた。

「あっ」

ジュリーは悲鳴をあげ、グルサルを助けようと身もだえた。

しかし刑事は、走り寄ってきた自動車に押し込むと、ジュリーを、あっさりその場から連れ去った。

グルサルは、死んだのだろうか？

ジュリーは、自分のおちいった危険も忘れて、そのことばかりを考えつづけた。

しかし、彼女がグルサルと逢ったのは、それが最後だった。生きているのか、死んだのか、それすら知ることができなかった。

それからしばらく経った頃、ジュリーは警察署の一室にある、警部の部屋に立たされていた。

眼の前には大きな机があり、いやらしい程肥った警部が、じらすように入念にパイプの掃除をしていた。

警部は、パイプに煙草をつめると、ゆっくり火をつけた。

そして煙りをうまそうに吐きだすと、ジュリーを鋭い眼でにらみつけながらいった。

「おまえは、紙切れに何が書いてあったか、知っていたらうね。それをわしにいつてくれ

ると君を助けてあげることができるとだ」「知りません」

ジュリーは、きっぱりした口調でいった。

「自分の持っていた紙片の内容を知らないはずがないだろう」

「でも、本当に知らないのです。知らないものはいえせんわ」

「困ったね」

警部は、パイプをくゆらしながらいった。

「ここで強情をはるのは損なのだよ。口を割らせる道具はいくらでもあるのだし、最後には死の島へ送られてしまうのだよ」

ジュリーは、恐怖を感じた。

死の島という言葉は、ジュリーの属する秘密結社、LN団の団員のあいだでも、ひそかに、恐怖をもって語りつたえられていた。

そこには、人を苛むための、役人や道具が公然と待ちかまえており、そこで散々いたぶられて送り返されてきた人間は、もう廃人同様になってしまう。見せしめのため、裸で檻に入れられ、広場にさらされると、たいてい一週間とは生きていかなかった。

しかし、LN団には、兇悪な独裁者ブルック大統領と、それを取り巻くブルジョアたちを倒す使命があった。

二百五十万の、カリブ海の島国グラールの

国民は、ブルックのあくどい搾取にあって、みすばらしく飢えていた。

優秀な武器と、龐大な人員をようする政府

側に圧倒されているLN団は、ジュリーが口を割るだけで、大へんな打撃を受けるのだ。

国民の大多数は無気力である。前世紀的政策をとるブルック大統領に反抗でき得るのは、

ただLN団だけしかなかった。

「本当に知らないのです」

ジュリーは、唇を噛んでいった。

「しようがないね。わしは、こういうことはあまり好きではないのだが」

そんな口の裏から、警部はあるひそかなよろこびを表情に見せていた。

警部は、ベルを鳴らした。

冷たい表情の婦人警官が、靴音をひびかせて、部屋に入ってきた。

「強情な娘さんだよ」

警部は、その婦人警官にいった。

「どうも、素直には、いつてくれそうもないね。ちょっと教えてあげてくれないか。強情をはるのが損だということだね」

婦人警官の表情には、ほくそえみが浮かんだ。

「かしこまりました」

ジュリーは腕をつかまれ、ほとんど機械的

に隣りの部屋へ連れこまれた。

それは、二重の扉に仕切られた、窓のない部屋だった。

どんなに大声をあげても、決して外に聞こえることはないだろう。

そこには、さまざまのかっこうをした気味の悪い道具が並んでいた。

ジュリーは戦慄し、下腹部が突っぱった。

冷たい眼で、婦人警官はいった。

「まず、服を脱いでもらおうか」

助手の婦人警官が二人、ジュリーの傍に近寄ると、慣れた手つきでジュリーの服を脱がせた。

すっかり裸にされると、ジュリーは羞恥のために死ぬ思いをした。

しかし、後ろ手錠なので、恥ずかしさを隠すこともできなかった。

わずかな救いは、注がれる視線が、全部同性のものだということだけである。

両腕をかかえられているので、身を伏せることすらできない。

「わたしは、強情な娘が好きなのさ」

婦人警官はぬめぬめしたゴムの手袋をはめながらいった。

「なにがいいだろうね。鞭か、吊りか、水か、電気か……」

ジュリーは、耐えきれぬだろうかと考えた。人殺しでもなんでもやりそうなこの婦人警官に、私は勝つことができるだろうか？

「いいからだをしているよ、おまえは」

婦人警官は、ゴム手袋をはめた手で、ジュリーのからだを撫で回した。

乳房を、腰を、脚を念入りに調べつくす。

「このからだを傷つけるのは惜しいね。おまえ、まだ処女じゃないか」

ジュリーの頬に、涙が流れた。

それは羞恥と、恐怖と、いきどおろしさのためだった。なんとという汚辱の言葉か！

「ばかだねえ、おまえは。こんな立派なからだをしていれば、どんなにだってかせげるのに。楽をしておいしいものを食べ、きれいな部屋でなに不自由なく暮してゆけるのに。L N団なんかにはいるから、こんな恥ずかしいかつこうをして立っていないけりやならないのだよ。あっさりいっておしまい。そうすればおえら方に、わたしがとりなしてやるよ」

ジュリーは、黙っていた。

ブルックの手先きになにが分るものか、と心の中で思った。わたしは心まで汚したくない。どんなひどい目にあわされても！

「強情だね」

婦人警官はいった。

「でもいいさ。電気でひとあぶりすれば気持ち変わるかもわからないからね」

婦人警官は、戸棚からゴムパンティをとり出してきて、ジュリーに穿かせた。

その感触は、なめくじのように湿っぽく、ジュリーをゾッとさせた。

「このゴムパンティは、拷問部屋では欠かせないものなのだ。囚人というのは赤ン坊より行儀が悪いからね。ちよつといたためつけられただけで、もう部屋や道具を、恥ずかしげもなく汚してしまふんだ。でもこれがあれば安心さ」

ジュリーは身もだえた。怒りにふるえた。

でもそれは無駄だった。

ジュリーは、奇妙なかつこうをした椅子にやがてすわらされた。

その椅子は、全部鉄パイプで出来ており、背のあたるところは普通のものよりもずっと高く、そこから鎖がたれ下り、頑丈な首枷がついていた。

ジュリーの首に、枷がはめられた。

両足にも、それぞれ椅子の脚につけられて、足枷がはめられ、さらに両足を皮バンドで固定されると、ジュリーはもう動くことはできなかつた。

乳首に、コードのついたキャップがつけら

れた。美しく白い隆起はみじめに汚された。

ジュリーにとっては、しかし、はさまれた乳首の痛みよりも恐怖のほうが耐えがたい。

「もうおびえているじゃないか」

婦人警官は、冷笑を浮かべながらいった。

「わたしの訊問にたいして、おまえがノーといえ、かならず、そのキャップに電流が通じるんだ。なんでもおまえは、イエスといっていないてはならないのさ。そうすれば、電撃はまぬがれることができる。もちろん、返事をしなくても、ノーと同じ結果になるんだ。どんなことがあっても、忘れちゃいけない。いいね」

ジュリーは、黙ってうなずいた。

突然、両乳がもぎとられるような激痛に、ジュリーのからだは、けいれんした。

ジュリーは、うめくような悲鳴をあげた。「もう忘れていたんじゃないか。イエスとはつきりいわなくちゃ、返事にならないんだ。分ったね」

「イエス」

「そうさ。その返事さえいっていけば、決して電気がおまえのからだをいたぶることはないのだからね。かわいそうに、おまえが返事をしなかったばかりに、おまえのかわいい乳房がふるえているじゃないか。もっとたいせつ

にしてやらなくちゃいけないよ」

「イエス」

「よく分ってきたようだね。でも、こんなことをするわたしを、おまえはさぞ憎んでいるだろうね。腹が立ってしようがないだろう。殺したいとさえ思っているのじゃないかい」

ジュリーは、突差に、ノーというおうとしてあわててイエスといった。

「そうかい」

婦人警官は、皮肉な笑いを浮かべた。

「わたしたちが、そんなに憎いのかい」

「イエス」

「わたしを殺したいと思うかい」

「イエス」

「そうかい。よく分ったよ。でもわたしだって感情のある人間だよ。目の前で憎くて殺してやりたいといわれちゃ、黙っちゃいられないよ」

「ノー、いまのは嘘で……」

ジュリーは、なにをされるか分らないという恐怖に、思わず叫び出した。だが、すぐに激しい電撃に悲鳴をあげた。

婦人警官は、ゴム手袋の手でジュリーの髪の毛をつかんだ。

「いま、おまえがなにをいったのか、よく分らなかったよ。もう一度いってごらん」

「わたしは、けっして……」

ジュリーは、またしても悲鳴をあげた。

「ちっとも分らないじゃないか。なにがしたいのだね。わたしが鬼だともいいたいのかい」

「イエス」

ジュリーは歯がみしながら覚った。

イエスという言葉以外、どんな弁解も、どんな釈明も、全部電撃の報復となってかえってくるのだ。

「わたしが鬼だって？」

婦人警官は、ジュリーの頬を激しく打ちすえた。それはきびしく、まるで頬がもぎとられる程に痛かった。

しかし、その打撃をさけることは絶対にできない。

ジュリーの顔は首枷で固定されている。

「まだ、わたしを、憎い鬼で、殺してやりたいと思っているのかい？」

「イエス」

「そう、正直でいいよ。でも、わたしの復讐は覚悟しているだろうね」

「イエス」

婦人警官は、細くてしなやかな、先の鋭くとがった鞭を持ちだしてきた。

「わたしばかりでなく、警部も、ブルック大

領も憎んでいるというわけだね」

「イエス」

ジュリーの太股が、鞭の尖端で突かれた。それは鋭く、えぐるような痛みをひきおこした。ジュリーの肉体のどこかが、鋭くひきつれた。

「アッ」

ジュリーは悲鳴をあげた。

その悲鳴にすら、電撃が襲ってきた。

じつとりと冷汗がにじみ出てきた。

そして、ゴムパンティには、知らず知らずの中にかすかな臭気をともなった液体が洩れ貯っていた。

「それじゃ、紙片の内容は、いいたくないだろうね」

「イエス」

「でも、おまえはその内容を、知っているのだね」

「ノー」

ジュリーの白いのどはけいれんをおこし、悲鳴をあげた。「嘘をついちゃいけないよ。知っていていえないだけなのだろう」

「ノー」

またしても電撃と悲鳴。

ジュリーの血液は全身を逆流し、歯をくいしばった。



「もう少しボルトをあげたほうがいいようだね」

婦人警官は、助手に合図した。

「そんなに無理しなくてもいいじゃないか、そら、もう本当のことをいいたくて、おまえの口はウズウズしているよ」

「ノー」

乳房がねじり切られるような電撃のショックが連続した。

ジュリーは、あらゆる拘束をふり切ろうとするけいれん性の動きを示し、わめくような悲鳴をあげた。

「強情な女だね、おまえは。でもわたしはうれしいよ。それだけ頑張ってくれるとやり甲斐があるからね。もう少し電圧をあげてやろう。これは男でも大抵参ってしまうくらいのものだよ。うれしいだろう」

「イエス」

「そうかい。でも、このショックで死ぬようなことはないから、安心するがいいよ。」

でもね、やっぱりおまえは紙片の内容を知っていたのだろう」

「ノー」

ジュリーのからだは、途端にちぢみあがった。巨大な棒切れで、いきなり激しくなぐりつけられたような思いだった。

眼や唇から、火花がパチパチと音をたててとび散った。

もう悲鳴も声にならなかった。

ただ大きく口を開け、人間にはきこえないほどの高い音階の悲鳴をあげようとするかのように、眼を大きく見開き、あえいだ。

「いい気持だろう」

「イエス」

「そうだろうとも。天国にいる気持とは、このことだと思わないかい？」

「イエス」

ジュリーは、もう駄目だと思った。口の中までがしびれている。ノーとはいいつづけれそうになかった。

「もう少し電圧をあげてやりたいけど、もう限度だろうね。死なれちゃ、せっかくのいい話も聞かしてもらえないからね」

「イエス」

「でもね。やっぱり、おまえはなにもかも知っているんだろう」

「ノー」

ジュリーは最後の勇気をふるっていった。

しかし、次ぎの瞬間には、全身がのけぞりけいれんと同時にとびあがろうとした。首枷の鎖が重々しい響きをたて、ジュリーのからだの端々から蒼白い火花が、ぶきみな音をた

ててとび散った。

「ずいぶん強情だね。でも今度こそはいってくれるよ。紙切れの内容は知っていたのだろう」

「イエス」

ジュリーは、眼を閉じた。絶望感が、彼女を襲った。

「わたしは負けた」と思った。わたしは革命家の資格のない女なのだよ。

「そうだろうね。じゃ、スイッチを切ってあげたから、詳しくいつてくれないかい」

ジュリーは、自分のからだだが、自分のものでないような気がした。

頭はもうろうとし、ひどく疲れていた。

しかし、一つのことだけは必死になって考えつづけていた。

嘘をついてやろう！ そのことだった。

「紙切れの内容は？」

「LN団の会合についてです」

「だろうね。大体はそんなところだろうと予測していたところだよ。それに間違いはないだろう」

ジュリーは、下手な嘘はつけないと、疲れた頭で考えた。嘘がばれたら、どんなひどい目にあうか、想像もつかない。

「場所と時間は？」

「ブロークン街二十一番地。五月二十六日午後三時」

婦人警官は、ジュリーの告白通り、手帳にメモした。

「嘘じゃないだろうね。もし嘘だったら、この椅子より、もっと手きびしい、おもしろい踊りをしなくちゃならないよ」

「分っています。嘘じゃありません」

「そうかい、じゃ、誰と誰がくるのだい？」

「忘れしました。」

「スイッチをいれるのは簡単だよ。それさえいつてしまえば、おまえはこの椅子から解放され、シャワーを浴びてさっぱりすることができるのだよ。ゴムパンティだって、おまえの洩らした臭いもので、もうじつとりしていて気持が悪いだろう。もうひと言でいいのだよ。さあ、吐いておしまい」

「グルサル」

ジュリーは、もうどうせ分ってしまったているのだから、あの人の名はいつてもいいだろうと考えた。

「それから？」

「アンデル、ジョーンズ、チーベルト」

「それだけかい？」

「あとは忘れしました」

「まあいいだろう。よくいつてくれたね。し

ばらく休憩させてあげよう。でも、くれぐれもいっとくけど、嘘だったら承知しないからね。これが嘘だったら、いまぐらいじゃすまないし、最下級の囚徒として、死の島へ送られるんだよ。」

ジュリーは、身を固くした。

時間がくれば、嘘のばれるのは明きらかなことだった。

しかし、仕方なかった。

いまのかの女に許されていることは、嘘をいったことを誇りに思うことだけだった。

ジュリーは椅子から解放され、ぐしょぐしょになっているゴムパンティを脱がせられ、シャワーで洗われた。それは、恥ずかしい作業だった。

そして、その拷問部屋の隣りにある狭い檻の中へ後手錠と半裸のまま押し込まれた。

その頃、ジュリーの逮捕を知ったLN団の幹部級の数人が、人眼を避けて協議しあっていた。

「おれは多分、ジュリーが拷問に耐えられないだろうと思うな」

幹部の一人がいった。

「多分そうだろう。秘密は恐らく政府側に洩れているだろう」

別の幹部がいった。

「おれは、ジュリーはもう少ししっかりして、と思うのだが」

もう一人、別の幹部がいった。

「でも、ジュリーは若いし、むごい拷問に耐え切るだけの気力も体力もないだろう」

最初の幹部がいった。

「いずれにしろ、情報は政府側に洩れていると考えるのが安全だ。予定の計画は急速に変更しなければならん」

「しかし、もう連絡の時間がないんだ。末端にまで知らせるには、すくなくとも二十時間は必要だ。下手をすると混乱をきたすおそれがあるからな」

「では、ジュリーを信頼するか」

「危険だが、そうするより仕方がない」

「手入れがあった場合、すぐ散れるようにして会合を開こうじゃないか。ブルックさえ暗殺してしまえば、あとは附和雷同の分子ばかりだ。危険は覚悟だ。決行しよう」

「ジュリーを救ってやりたいが」

「時間がない。かわいそうだが、この際必要な犠牲だ。革命さえ成功すれば、いつでも救ってやれるのだ。死の島にいる他の同志たちと一緒にね」

2

「やっぱり嘘をいっていたのだね」

ジュリーが、不安と恐怖でおののいていた瞬間がきた。

婦人警官の声は憎しみにふるえていた。

「おまえは、もう一度ゴムパンティを穿かせてほしいんだね。それも死ぬまで穿いていたんだね。死の島の囚人は、バラゴを除いてはみな穿かされているのだよ。おまえも死の島でうじ虫のようにうごめくがいいのだよ」

ジュリーは檻から出され、助手たちにおさえつけられ、ゴムパンティを穿かされた。

「おまえのおかげで、ブルック大領はあやうく暗殺されそうになったのだよ、未遂に終わったけど、おまえが正直に自供してさえいたらこんなことは未然に防げたのだよ。護衛の警官もずいぶん犠牲者を出したし大臣の中にさえ傷を受けた人が出たくらいなんだからね。これも全部おまえが嘘をついたからなのさ。もっともLN団員もずいぶん殺したし、逮捕もしたけど。そういう意味じゃあ、おまえの死の島送りの仲間が増えたわけだよ」

ジュリーは、鉄の箱の中に押し込まれた。

そして厳重な足枷をかけられた。

「裁判がひらかれるまで、その中で待たせて

やるよ。行儀よくしているんだよ。ゴムパンティで蔽われたお尻を、しっかりと床につけ手も足も宙に浮かしてはくちやならないよ。もちろん壁にもたれたっていけない。わたしがいわなくとも、ゴムパンティのありがた味はやがて分るだろうけどね。じゃ、スウィッチをいれるよ」

途端に、床におろしていた両足に、おそろしい電撃が走った。

ジュリーは悲鳴をあげ、あわてて両足をあげた。

そんな不自然な姿勢で、バランスをとるのは困難なことだった。

絶縁体となるものが、ゴムパンティしかない限り、床に触れていられるのは腰の部分しかないからだ。

ちよつと力を抜いただけで、バランスは崩れ、からだのどこかが、床や壁にくっついてしまうのだ。

あわてると、かえって悪かった。

反射的に身を退けようすると、たいいてい反対側の壁にくっついてしまうし、それを避けようすると両足を床におろしてしまうのだ。

ジュリーは、しばらくのあいだ電撃の苦痛に悲鳴をあげ、脂汗を流し、苦心さんたんし

たが、やっと苦しい姿勢でバランスをとることができた。

ゴムパンティのありがた味が、やっと分った。

それがなければ、たとえ苦しく不自然な姿勢とはいえ、バランスをとって、じっとしていることなど、とても出来なかったろう。

たえまなくウサギのようにとびあがり、のたうち、やがては生命のぎりぎりの果てまでエネルギーを使い果たさねばならなかったろう。

こうしてジュリーは、苦しく不自然な姿勢で、ちよつとの油断も許されぬまま、長い時間待たされた。

一秒間でも油断したら、からだのどこかが床や壁にくっつき、反射的な筋肉の作用で、幾度も反対側の壁にからだを接触し、声をあげつつけていなければならなかった。

こんな苦しい姿勢はもう我慢できない、もうからだがしびれて、いうことをきかなくなってきた……。ジュリーが、もうろうとした意識の底から絶望におちこみはじめた頃、やと婦人警官の声がした。

「どうだい、鉄の箱の住み心地は」

ジュリーはうめいた。

「もう少し住んでいたい様子だね。なんだか

気持よさそうな声をだしてるじゃないか」

ジュリーは、かぶりをふった。

「でも仕方ないさ。裁判の準備ができたのだから、居たくたって出してやらなくちゃならないのさ」

ジュリーは、やっと、スウィッチの切られた鉄の箱から出された。

窮屈な姿勢から解放されて、一度思いきりのびをしたかった。

しかし、後ろ手錠ではどうにもならず、その上、からだがふらふらして、立っているのがやっとだった。

黒いコートのようなものが、ジュリーの裸体の上から着せられ、部屋からつれ出されると、中庭に待っている、窓一つない、頑丈な鉄板で囲まれた自動車に押し込まれた。

そしてすぐ、鉄でつくられたぶきみな仕掛けの箱口具がはめられた。

それは額や後頭部にまで鉄のベルトをまわして、決してはずれたり、ずったりしないようつくられた冷酷なほど丈夫なものだった。

自動車の中には、三人の女を含めて十人の囚人が押し込まれていた。

最初暗くて何も見えなかったジュリーも、やがて眼が慣れるにしたがつて、みながジュリーと同じかっこうをさせられているのを知

った。

しかし、箆口具のために顔が変ってしまっている、一体どれが誰なのか見当もつかない。わかるのは、彼らが、ブルック大統領暗殺計画に参加し、そのときつかまった者たちであるということだった。

ジュリーは、同志としてのなつかしさと親しみを感じた。

しかし、箆口具のゆえにもものもいえず、自分の意思を伝える方法はなかった。

その上、クッションのきかない自動車は、悪路にさしかかると、異様に大きく上下運動をおこし、中の囚人たちの不自由なからだをもみくちゃにしてしまうのだ。

やがて、自動車は裁判所に到着した。

囚人たちはおろされ、銃剣と鞭に追いたたられ、法廷にしつらえられた、まるで野獣をいれるような檻に追い込まれた。

裁判は簡単だった。

裁判官の刑のいい渡しだけである。

「おまえたちは、その明白な罪により、緩慢なる死刑をいい渡す。大統領暗殺という、天地共に許されざる大罪を犯した限り、刑法第六条により、のこぎりびきの刑に処せられるべきところを、緩慢なる死刑に減刑され、死

の島送りとなったことは、ブルック大統領の寛大な御仁慈によるものである。おまえたちはその恩に伏して感謝し、死の島で誠心誠意つとめてくるがよい」

檻から出された囚人たちは、コートを脱がされ、死の島の囚人にふさわしい戒具を背負わされることになる。

女囚には貞操帯と同形の鉄のベルト、そして男には、男性部の膨脹をさまたげるための器具が先ず装着される。

手術がなされないのは、囚人たちに人間的欲望を残しておき、その満たされぬ、いらだたしいうずきと不満感の苦痛を与えるためである。

そんな非人間的な器具の上に、再び、れいのゴムパンティが穿かされた。

男囚がつまらぬ欲望をおこすようなことがあれば、当然激しい疼痛という報復を受けねばならない。

それを耐えることはまったく不可能でありたとえ、ゴムパンティに隠されているとはいえ、表情にすこしでも苦痛のかげりが認められると、看守はたちまち懲戒を加えるわけである。つづいて首枷がはめられる。

そして女囚には乳枷、男囚には胸枷がかけ

られる。いずれもずしりと固い鉄製である。つづいてまるでロボットの一部分のような重い腰枷がはめられる。

乳枷や胸枷が、ずりあがったり、ずりさがったりしないように、鎖で首枷と腰枷に連結されるのである。

つづいて、重い足枷がはめられ、それをつなぐ鎖の中央から伸びる鎖が、腰枷に連結される。

さらに、手枷が重くて頑丈なものに、後ろではめかえられる。

ジュリーは、それらを全部はめられてしまふと、すっかり打ちひしがれた気持になり、泣きだしそうになった。

囚人たちに戒具をほどく看守たちは冷酷であり、事務的なものだった。

とうとう、ジュリーの眼から涙が流れた。

しかし、箆口具は、声に出して泣くことはばんでいた。

やがて、太い鎖が、陰惨な音をひびかせながら、囚人たちの首枷を連結していた。

もはやかれらは個々の人間ではなかった。

歩くことも、すわることも、すべて鞭のひとふりで、一緒に動く、巨大であわれな一匹の動物でしかなかった。

「さあ、出発だよ」

囚人の全部に枷と鎖をつけ終ると、看守はいった。

先頭の者の首枷の鎖が曳かれた。

それにつれて、一同は鎖の重々しい響きをたてながら歩きはじめた。

歩き方がちよつとでも遅かったり、わずかでもよろめいたりしただけで、背中や太股に鋭い鞭が浴びせられた。

看守は鞭打ちに熟達しており、囚人たちの苦痛の急所をよく心得ていた。

かれらはそのままの姿で、再び窓一つない自動車に追い込まれた。

自動車は動きだした。

どこをどう走っているのか、囚人たちには見当もつかない。

それよりもかれらは、もっと緊急の問題に頭を悩まさねばならないのだった。

クッションのきかない自動車が情容赦もなくあばれる中で、鎖にからまれた不自由なからだを、どのようにして安定させるかということだった。

さんざんな動揺と苦痛を惜しみなく囚人たちにあたえたすえ、やっと自動車は停った。自動車を降りたところには、巨大なヘリコプターが、にぶい光線を反射させながら置かれていた。

これが死の島と、グラール共和国とを結ぶ唯一の交通機関だった。

なぜなら、死の島の周辺には無数の暗礁や奇岩がなん軒にもわたってとり巻き、たとえどのような吃水線の浅い舟でも、とても近寄ることができなかったからである。

この島が監獄島となる以前から、漁師や船乗りたちのあいだで、死の島という名がとおっていたことから、それは明きらかなことだった。

およそ海に関する知識のある者なら、この島に接近しなくなるのは当然である。

それは同時に、囚人たちの逃走を防ぐのに必然的に役立っていた。

ヘリコプターで三十分。泳いでなら丸一日もかかるかというグラール本島と死の島の距離は、囚人たちに逃亡の不可能性を覚らせるのに充分のものである。

のみならず、その間には強い潮流があり、無数の鯨がむらがっていた。

死の島の前世紀的な悲惨状態が世界の人に知られていないのは、グラール共和国が、ちやうど江戸時代の日本のように極端な鎖国政策をとり、ほんの一部の商人以外は、外国人は一切入国を拒否しているからでもあるが、同時に死の島とグラール本島のあいだの距離

と、死の島の立地条件によるところが大である。

囚人と看守とグラール共和国の一部の役人を除いては、死の島を訪れた者はなく、見聞した者さえないのである。

ただ漠然とした恐怖で、それが語りつたえられてにすぎないのだ。

囚人たちを胴中にすっかりのみ込んだヘリコプターは、重々しい響きをたてながら動きはじめた。

もう二度と生きて戻ってはこれられないのだと思うと、ジュリーの眼から涙が溢れた。

窓によって、しずかに母国の眺めを見たかった。そうして最後の別れのキスを投げかけたかった。

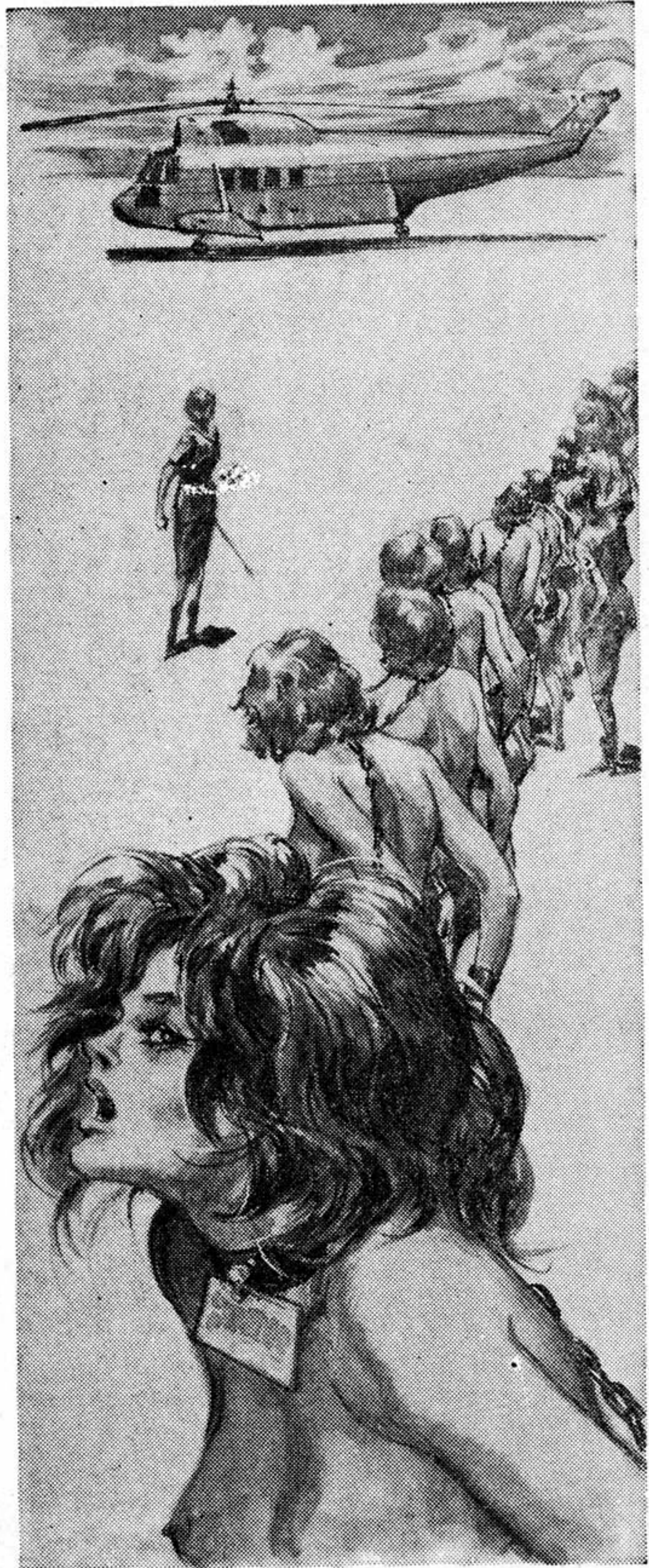
しかし、それはできない。

首枷が鎖で連結されている限り、一人だけの自由な行動などできるはずもなかったし、銃や鞭を持った看守が、油断なく囚人たちの動きを監視していたからである。

ヘリコプターは、ある程度上昇すると、やがて相当なスピードで前進しはじめた。

それから三十分程の後、ヘリコプターは遂に死の島の玄関口に到着した。

それは、三階建ての建物の屋上の一部につくられたヘリポートだった。



看守は囚人たちの鎖を曳き、ヘリコプターから追いたてた。

しばらく歩いたところに、エレベーターがあった。小さな事務所ぐらひはあろうかという、エレベーターである。

囚人たちは、そこに押し込まれる。

巨大なエレベーターは、非常な速度で下降しはじめた。グググリーンという下降音。

三階建ての建物なのに、なぜそれほど降りていくところがあるのかと思えるほどに、長

い時間をかけて、エレベーターはやっと停った。

扉が開き、囚人たちは追い出された。

そこは、二十坪ほどの陰気な殺風景な部屋であり、囚人と同じ人数の男女の看守が細い鞭を持って待ち構えていた。

壁のいたるところに、鎖や枷がぶら下げられており、残酷な器具があちこちの机の上にこれ見よがしに置かれていた。

ジュリーは、その陰惨な雰囲気にもから

だもすくんだ。

しかし、鎖に曳かれ、乱暴な鞭に追われると、立ちどまることなどできなかった。

囚人たちは一列に整列させられ、膝まづかせられた。

「おまえたちは、今日から死の島の囚人になった」

看守長らしい一人が胸をそらせ、傲然としていった。

「おまえたちは、もはや自分を人間と思って

はならない。その犯した大罪により、ほんらい鋸びきの刑に処せられるところを、ブルック大統領の御仁慈により、死一等を感じられたのだ。しかし、人間としての諸権利は法の力により完全に剝奪されておる。したがっておまえたちは、国家の所有する、奴隷にしすぎない。その上判決は緩慢なる死刑ということになっている。それはおまえたちが家畜にも劣る身分であることを示している。看守の権限は絶対であり、いついかなる時でも、看守の判断でおまえたちを死にいたらせることが許されておるのだ。そしてその方法も看守の判断に任せられている。おまえたちの腕をもぎとったり、足をねじり切ることだって出来るのだ」

看守長は一気に、表情もくずさずそれだけのことをいった。

囚人たちの恐怖とおののきに打ちひしがれた様子を、満足げに見回してから再び言葉を吐けた。

「もちろん、それは看守に反抗したり、命令に服従しなかった場合の話である。しかし、看守に絶対服従を誓い、誠意をもって与えられた労役を忠実に果たしておれば、おまえたちにも昇進が待っている。現在、おまえたちは新入りとして八級囚の処遇が与えられてお

る。おまえたちにほどこされている戒具は、全部八級囚のものである。しかし昇進が許されると、地下七階のこの部屋から一階ずつ上へあげられ、やがては地上の労役も許されることになるし、戒具もしだいにゆるやかなものに変えられてゆく。そして最後には、バラゴにとりたてられ、看守の助手として、働き、労役から、完全に免除されることになる。しかし、労役を怠けたり、規則違反を、犯したりすれば、等級のいかにかわらず、すぐさま九級囚につきおとされ、現在のおまえたちの戒具より、もっときびしくいかめしい戒具が施され、労役ももっと苛酷なものが課せられることになる。さらに命令を忠実に守らなかった場合は十級囚につきおとされ、死刑に処せられることになる。もちろんそれは世間並みの死刑ではない。死の島独特の、非常に趣向を凝らした死刑なのだ。なお注意しておきたいことは、囚人の半数が八級囚以下であるということだ。なまやさしい心根ではとうてい昇進はおぼつかないだろう。誠心誠意、看守の命令を忠実に果たしてこそ昇進が可能なのだ。これからおまえたちに囚人番号が与えられるが、各人受け持ちの看守に詳しい注意を聞くことになるので、わしの言葉はこれで終る」

つづいて副看守長らしい男が口を開いた。「ただ今の看守長のお言葉で死の島の様子は大体わかったと思うが、具体的な規則その他についてこれから説明する」

副看守長は紙片を拡げた。

「一つ、囚人は看守及びバラゴにたいして絶対服従すべし。

「一つ、囚人は戒具に感謝し、忌避あるいは破損せざることを。

一つ、囚人は労役に感謝し、起床および就寝の前後にかならずブルック大統領に忠誠と謝意をあらわすべきこと。

一つ、囚人の排泄はゴムパンティ内に自由が許されている。しかし、その処理は一日一度たるべきこと。

一つ、囚人は国家の所有になる畜類とみなされるべきこと。

一つ、囚人は病気はすなわち死と心得るべきこと」

副看守長は被片を折り、ポケットにしまってから言葉をつづけた。

「囚人心得は以上である。しかしそれをどのように解釈するかは看守の考えにある。なおおまえたちが畜類と同様の身分であることを示すために、これから鼻輪をつけてやる」

不気味な器具が持ち出されてきた。

囚人たちはその前に立たあれ、鼻壁につきつぎと穴をあけられていった。

戒具がきびしく、両側からおさえつけられているので反抗するものはなく、箝口具があるのでわめいたり、悲鳴をあげたりする者もいなかった。牛の群れに似ていた。

穴をあけられる瞬間、囚人のからだは電気に触れたもののように、激しくけいれんし、油汗がみる間にたらたらしただるところから、その痛苦の激しさが想像できた。ジュリーの番がきた。

かの女の両腕は、しっかり看守の手袋をはめた手でつかまれた。

器具の一部に、ジュリーの頭が、むりやり押し込まれた。

器具が綿密に調整された。

瞬間、ジュリーは、目もくらむような激痛が鼻壁をおおうのを感じた。

からだはこわばり、けいれんがおきた。

油汗が、とめようもなくふき出してきた。

器具から解放された時には、既にジュリーの鼻には、いやらしい金属の鼻輪がぶら下がっていた。

それがどんなに醜悪な、奇怪なものであるのか、ジュリーには分らない。

処置を終った他の囚人のようすから、それ

を想像するよりなかった。

囚人全部に、鼻輪がつけ終えられた。

それは屈辱感と敗北感をひきおこすのに十分の作用をしていた。

囚人たちはたがいに顔を見合わせた後、うちのめされたようにうなだれた。

「つづいておまえたちに囚人番号を与える。首枷にぶら下げられるこの札を大切にしないではいかんぞ。なくしたら、もちろん、それ相当の懲戒がおこなわれる」

ジュリーの首枷に、金属製の小さい板が鎖でぶら下げられた。

ジュリーの囚人番号は、8 D 2 2 5 6である。ジュリーはこの時、ある耐え難い重圧を感じはじめていた。

それは、死の島に到着する前後から感じていた生理的欲求だった。自然の欲求である。

かの女は長いことそれをこらえていた。

恥ずかしさと、女のたしなみから。

しかし、鼻輪をつけられた時に、思わず知らず洩らしたのが誘いとなって、忍耐力の限界にきてしまった。

それをこれ以上耐えるのは不可能だった。

かの女はしゃがみ込んだ。

生あたたかい液体が、自分の肌につたわった。

背に鞭がなった。

「ぐずぐずしてるんじゃない」

女看守は、ジュリーのしゃがんだ理由をちゃんと知っていて、意地悪くいった。

「ゴムパンティを有難いと思うだろう。でもいい度胸だよ。着いてそうそう、人の見ている前でしゃがむんだからな。立っていたって慣れれば出来るものなんだよ。ここの囚人はみなそうしているのさ。労役の最中にだって寝ているあいだにだって。でも一日一回しか脱がせてもらえないことを忘れるんじゃないよ。おまえは今日一日、そのだぶだぶしたやつをぶら下げて歩かなきゃならんのさ」

ジュリーは泣いていた。

いっそ、殺されたほうがましだ。身動きするたびに、なまあたたかい液体がゴボゴボという不愉快な音をたて、かの女を感覚をくすぐった。

つづいて、ふとい注射針が、囚人たちの腕にさしこまれた。

それは、囚人たちの自殺を防ぐため、生への執着と死にたいする恐怖を植えつけ、苦痛にあこがれる作用を果たす薬液であった。

すべての処置を終った囚人たちは首枷の連鎖を解かれ、鼻輪に鉄鎖をとりつけられるとおのおの受け持ちの看守に曳かれて、与えら

れた労役につくため、つぎつぎに姿を消していった。

ジュリーは自分の受け持ちの女着守に鼻輪の鎖が引かれると、その痛みに、思わず箝口具の中で、アット悲鳴をあげた。

それはたとえば、火の中をくぐらせられても、燃える石炭の上であろうとも、鼻輪が引かれる限り歩きつづけなければならぬだろうと思えるほどの激痛だった。

着守は、ジュリーを曳いて、8Dという札のかかっている鉄の扉を開いた。

中には、三人のバラゴが鞭を持って待っていた。

「新入りだよ。挨拶を教えてやっておくれ」
バラゴは、ジュリーのからだや戒具をたねんに点検した。

たたいたり、つねったり、くすぐったり、つついたりして、たのしむように点検するのだ。

ジュリーは涙を流し、身もだえた。

鞭が肌にはじけた。

「いつまでもメソメソしてるんじゃないよ。そんなことで人の情けを期待したって駄目だよ。涙なんか出せば、かえって鞭をくらうのがオチだからね。それにおまえは涙なんか流すガラじゃないよ。もうゴムパンティを濡ら

しているくらいだからね。脱がせてもらうまでに、三時間は、たっぷりあるんだよ。まったく行儀の悪い畜生娘だよ。人前ではずかしげもなくやったんだろう。もっともここで恥ずかしいなんて思っているじゃ生きていられないがね」

バラゴは、ジュリーを膝まづかせたり、寝かせたり、戒具の許すかぎりのいろいろな屈辱的な姿勢をとらせて検査をつづけるのだ。

「さあ、そろそろ労役につかせてやろう。怠けちゃいけないよ」

またしても、鼻輪が引かれた。

ジュリーは箝口具の中で悲鳴をあげ、曳かれるままに従った。

バラゴは奥にある巨大な鉄の扉を開けた。一步その中に足を踏み入れたジュリーは、おどろきから目をみはり、足のすくむを感じた。膝がふるえた。

それは大きな部屋だった。

中央に巨大な軸があり、そこからたくさん鉄の棒が伸びていた。

その鉄の棒の先端に、女囚が一人ずつ革紐で縛りつけられ、軸をまわすため懸命に努力していた。

その外側にはバラゴが鞭を持って、たえ間ない監視の眼を光らせていた。

女囚たちのたてる、ガラガラという鈍い音と、ゴムパンティの発するカバゴボという音と、バラゴの鞭の唸りと、軸のきしみとがいにまじって、やりきれない程無気味で、不愉快な、陰惨な交響曲がかなでられていた。

ジュリーの肩に、皮でつくった曳き具がつけられた。

それは、リュックサックのような形をしており、肩にあたる場所の皮は、かの女の肩をおしつぶすかと思えるほどに、厚くてふといものだった。

「これからおまえを、この鉄棒にとりつけてやるけど力いっぱい引かなきゃいけないよ。

ここには電極をバネでくつつくようにした装置が仕込んであるのさ。すこしくらいの力ではバネの力に勝てず、電極はくつついたままだから電気は流れっぱなしというわけだよ。

そうすれば、これからおまえの乳枷につけてやるコードに電気が流れ、おまえはちぢみ上らねばならないという仕掛けなのさ。おまえはバネに勝つだけの力で、ひっきりなしに引っぱっていきやならない。ちよつとでも怠けたり油断しただけでも、バネが電極をくつつけてしまうからね。さあ、この鉄棒の動きにあわせて歩くんだよ。そのあいだに、しっかりおまえのからだを、とりつけてやるから

ね」

バラゴは、ジュリーの鼻輪の鎖を、鉄棒の一本に固定した。

とうぜん、かの女はその強引な動きにつれて歩かねばならない。

自分の背後で、バラゴがなにをしているのか分らなかった。

しかし、皮バンドについた金具が、チャラチャラ鳴っているところからして、なにかの作業がつづけられていることは明らかだった。

ジュリーは、目の前にいる一人の女囚を、おそろおそろ見つめた。

その女囚は、後ろ手に鉄枷をかけられ、首や足や、乳にも枷かけられ、鎖を鳴らしていた。

ジュリーと同じ曳き具を背負わされ、皮バンドで固定された鉄棒を、汗を流し、必死な表情でけんめいにひっぱっていた。

その表情は、ジュリーには分らない。

しかし、なにかから逃がれようとするような、あるひたむきな懸命さは、充分読みとれた。

それは同時に、ジュリーの運命でもあったのだ。

「さあ用意ができたよ。スイッチをいれる

からね」

バラゴは、コードの先端を、ジュリーの乳枷にとりつけるといった。

途端に、ジュリーは、乳房がもぎとられるような激痛に、ちぢみあがり、箝口具の中でうめいた。

「さあ、精出して引きやいいのだ」

バラゴがいった。

ジュリーは、肩にかかる曳き具から逃がれようと、力いっぱいひきはじめた。

まるで鞭を逃がれようとする馬のように。

相当な重圧が肩にかかった時、やっと電気的刺激はとまった。

ジュリーは、ひたすらにひっぱった。

バラゴのいった通り、すこし油断しても、ちよっと息をついただけでも、バネは適確に

電極をひき戻し、ジュリーの乳房をもぎとろうとするのだった。

懸命にならざるをえない。

怠けるといわれても、怠けてなんかいられた。もぎとられる苦痛にひかれて歩きつづける。

しだいにジュリーは、あたりのものを見る余裕をうしなっていた。

まして、ものを考えることすらできなかった。目の前が白っぽく濁ってくる。

ゴムパンティにたまった液体が、ジュリーの動きにつれて、不愉快に移動する。しかしそれを気にしている余裕もなくなった。

ひたすらに曳き具を引っ張り、鎖を鳴らし、歩きつづけるよりなかった。

疲れても、苦しくても、いつまでもいつまでも……。

なん時間かが経過した。

ジュークーは、すっかり疲労し、くたくたになっていた。

靴が当てられても、しびれてしまったようになっただけには、それほど強い痛みが感じられなかった。

スイッチが切られ、乳枷のコードがはずされても、ジュリーはまだ全身の力をこめて曳き具をひいていた。

バラゴは笑いながら、そんなジュリーをとまらせ、曳き具をかの女の肩からはずした。

ジュークーは氣力をすっかり使いはたしたように、へなへなとその場にしゃがんでしまった。浴びたような汗をかいている。

バラゴは、ジュリーの鼻輪の鎖を引き、鞭をふるいながらいった。

「立ちな、これから、からだを洗って食事をさせてやるんだよ」

ジュリーはひかれるままに立ちあがり、ジ

ヤワー室へ連れていかれた。

そこには、全身汗まみれになった女囚たちが、からだをすり寄せて立たされていた。

ゴムのにおいがたちこめ、女でもこんなにおいを発するのかと思われるような、けものようなにおいがただよっていた。

全身をゴムの衣裳に身をつつんだバラゴがジュリーのゴムパンティを乱暴にずらした。

はずかしいほどの液体が、床に散乱した。

ジュリーは、長い間の不快な感覚から解放され、すっとする思いだった。

やがて、なまあたたい湯が、天井からふってきた。ああ、と女たちは歓喜の声をあげる。

女囚たちは眼を光らせ、身をくねらせながら、からだをこすりあった。

汚れた部分もまた、手を使えぬ不自由さのまま、動かし、こすりあわせてきれいにするよりなかった。

やがて、シャワーはとまった。

女囚たちは、乾燥室に移された。

そこには、ムンムンした、いき苦しくなるような暖気がこもっていた。

濡れたからだは、またたく間にかわいていった。

全身がすっかり乾いたのをたしかめたバラ

ゴは、女囚たちの、裏返しにずらせてあるゴムパンティを、再び腰に引きあげる。

女囚たちの腰にしっかりとつけてある、鉄の貞操帯を、ゆっくり点検しながら。

ジュリーたちは、鉄格子のはまった部屋に移された。やっと休息があたえられる。

そこからは、作業場がよく見えた。

おどろいたことに、もう作業場では、別の女囚たちが曳き具につけられ、懸命に汗を流していた。

「あの仕事は休むわけにゆかないのだよ」

恐怖の視線でながめているジュリーに、バラゴがいった。

「死の島の電力一切をまかなうための発電の仕事なのだからね。あの軸の下には、たくさん歯車があり、それを通して発電機につながっているんだよ。ああいう装置が、死の島にはなん十となくあって、八級囚が全部動員されているのさ。自分のおこしている電気に追いついて仕事をなんて、ずいぶん楽しいだろう。こういう装置はまだ増設されていて、間もなく本島にまで電気を送ることができるようになるんだよ。これから精だして働くんだよ」

バラゴは、やがて、檻の前にあるみそのようなところに、どろりとした液体を流しはじ

めた。

女囚たちはわれがちに横になり、鉄格子のところに一列に並んだ。

バラゴは鉄格子の下端の一部を、がたん、とひき上げた。

人間の首が辛うじて出せるだけの、余裕のある穴ができた。

女囚は、後ろ手錠で腹這いにねころんだ不自由な姿勢で、その穴から首をつき出した。

「まだだよ」

バラゴはいった。

「そうして、じっと見つめているんだよ。すきっ腹で餌を見つめているのができないようじゃあ、一人前の囚人とはいえないよ。そうして辛抱すれば、まずいうまいなんて絶対いえないからね」

一人の女囚の首に、鞭がはじけた。

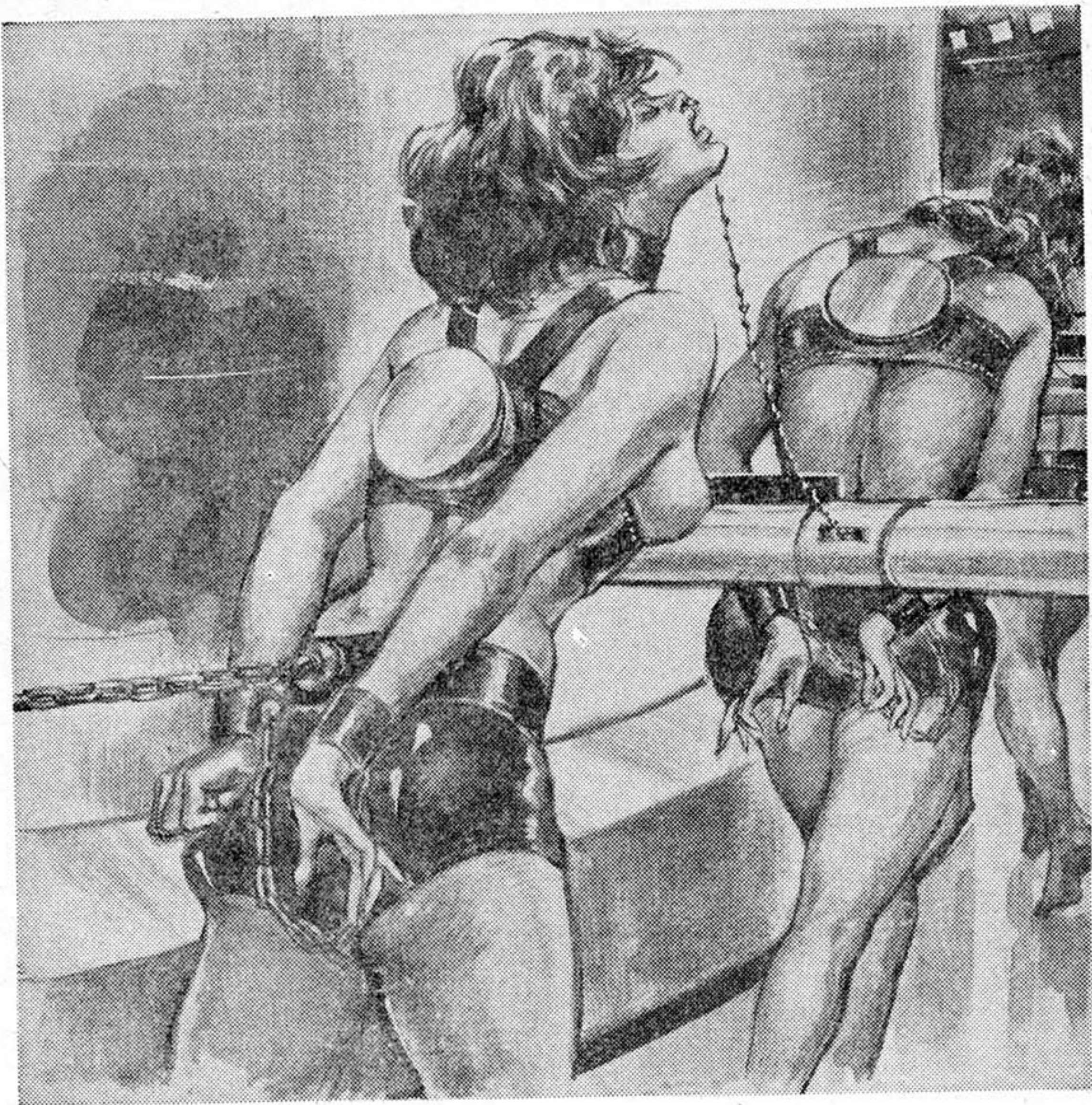
「またおまえは……許して、いないのに餌をすすったね。箱口具の穴を塞いでしまうよ。」

おまえは今日はたべさせてやらないよ。首を引っ込めな。首をひっこめ、……ろといっているのが分らないのかい」

鞭が、幾度もその女囚にふりおろされた。

遂にその女囚は、苦痛にたえかねて首を引っ込めた。

「8 D 2 3 3 2 だね。おまえはこれで許しも



なく餌をすすったのは三度目だよ。性懲りもなく。よっぽど意地汚くできているんだよ。明日、バネの力を強くするように調整してやるから。今度やったら、間違いなく九級囚ゆきだよ」

別のバラゴが、どうしていいか分らず、まごまごしているジュリーに説明した。

「さあ、ここから首を出すのだよ。みんなのようにね。おまえの箆口具には、まん中に穴があいているのだよ。その穴は箆口具の前面に、ちよっとつき出ている棒から、おまえのくわえている鉄の玉にまで、つついているのさ。だからその棒を餌につっこみ、ストローを吸うようなつもりで吸えば、スープが咽喉に流れ込むわけだよ。最初はむずかしいけどなればなんでもないからね。もっとも親切に説明してやらなかったって、自然に覚えるだろうけど。ともかく食べなきゃ、からだがもたないんだし、腹がへってしょうがないだろうからね。腹一杯吸うんだよ。おまえたちの必要な栄養は、ぜんぶここにはいっているんだから。それに、餌は朝と晩の二回しかもらえないから、たっぷり吸っとかなくちゃならないよ。仕事のさいちゅうに餌をやるなんて無駄は、絶対しないからね」

急激な生活の変化に、ジュリーは腹が空い

ているのかいないのか分らない。

でも、空腹でないはずはなかった。

それに、食べねばからだがもたない。

たとえ、どのような屈辱的な食事でも。

ジュリーは決心し、後ろ手錠の不自由な姿勢で窓から首を出し、許しの合図を待った。

女囚たちが、よだれを唇から流し、それをすすっている音がきこえた。

「ようし、食べていいよ」

女囚たちは、顔をスープにつっこんだ。

鼻を鳴らし、舌をつきだし、必死の表情ですすりはじめた。

スープは、相当な速度で減っていった。

ジュリーもまた、スープをすすった。どろりとした液体が、咽喉にひろがった。

しかし、味は分らない。口中に鉄の玉があるの、それをのみ込むのが困難だった。

苦労のすえに、やっと流し込んだ。幾度も

それをくりかえしている中に、やがてコツも分ってきた。味も分ってきた。

なにかの肉と野菜が、ミンチにかけられ、塩で味つけされたスープだった。

まずくてのめないといったものでは、決してなかった。

むしろ、空腹であるにしろ、美味といったほうが適切だった。

味がわかるころスープはもう尽きていた。

容器は、細長い形のもので一個である限り

たくさんすすった者が有利なのはあきらかだった。

巧みな者、馴れた者、強引な者が勝つのも

当然だった。

バラゴは、女囚たちが、みぞの飼料を、すっかりきれいにすすり取るのを待って、首をひっこめるよう合図した。

ぐずぐずしている者はいない。

その理由はすぐ分った。

ジュリーが首をひっこめると同時に、重々しい響きと共に、首をだしていた穴に、蓋がおりたからである。

ちよつとでも遅れていたなら、蓋の重みで頭はおしつぶされていただろう。

女囚たちは、それからコンクリートの床に正座した。

顔を向けている方向は、一方の壁だった。なにかがあるのか、どうして皆がそんな行儀

のよい姿勢で、同じところを向いているのか

ジュリーには分らなかった。

「つつしんで今日一日の労働を感謝し、餌をお与え下さったブルック大統領にお礼申し上げます」

バラゴが、檻の外から叫んだ。

「女囚たちは、その声とともに、蛙のようにはいつくばった。」

ジュリーもあわてて同じようにした。

腹の中が屈辱のために煮えくり返った。

しかし、そうしなければ、どんなひどい目にあわされるか分らなかった。

長い時間がたった。

女囚たちは身動きせず、そのままの格好で頭を下けたままである。

ジュリーの足がしびれてきた。

ちよつと身動きした。いきなり、えぐられるような痛みを感じた。

バラゴが、檻の外から、先の尖った金属の鞭でつついたのである。それには、たしかに電気が通じていた。

ジュリーの足が、すっかりしびれてしまった頃、やっと許しがでて、その苦しい姿勢から解放された。

女囚たちは、倒れるように横になった。

ジュリーもまた、空間をみつけて横になった。後ろ手錠や、枷具や、腰の鉄バンドが邪魔になった。

でも、そんな贅沢をいっている余裕はなかった。

すでに寝いきをたてている女囚がいる。

やがてジュリーも重いねむりにはいった。

どうにもならぬ疲労が、ねむりという唯一の救いの中へ、かの女を誘い込んでいったのである。

こうして、ジュリーの、苦難と絶望にみちた日々がはじまった。

人間としての一切の権利と誇りを奪い去られた、地虫のようなみじめな日々が……。

3

「このままではLN団は壊滅するしかない。

志気もおとろえ、逮捕された者は相当な数に達し、死の島で呻吟している」

LN団の党主ポーラックは、極秘の幹部会でいった。

「現在、本島にあって活躍しているLN団員と、死の島に送られたLN団員の数は、ほとんど同数に達した。しかもあの島で虐殺された同志のあとをおぎなうために、それと同数ぐらいの逮捕者が常に死の島へ送りこまれている。ここ半年來この状況は変化していない。その上、政府軍はますます増強され、ブルックは常にわれわれの目標から遠去かっている。こういう状況があと五年つづけば、国民は一人残らずわれわれLN団を見放すだろう。いや、あるいは三年かも知れないし、二年かも知らない」

ポーラック党主は、悲壮な表情で、幹部たちを見回した。

「そうなれば、われわれは一人残らず殺されるか、死の島へ送られて、なぶりものにされるだろう。そういう状況をわれわれはあえて待つ必要はない。積極的に現状を打破してゆかねばならない。方法は二つある。つまり従前通りブルック暗殺を強力に推しすすめること、もう一つは、死の島へ幹部党員を送り込み、拘禁され、虐待されている同志を結束させ、反乱をおこさせることにある。洩れ聞く情報では、革命の理想に燃えていた同志も、死の島の卑劣な組織により、次第に志気を喪失しているといわれる。そしてある者は、バラグと称する看守の助手となり、ブルックに忠誠を誓って、かつての同志を鞭打ち、虐待しているといわれる」

ポーラック党主の声は、いきどおりと悲しみにふるえていた。

「このような状況の下で、死の島へのり込むことは容易ではない。当然逮捕されるだろう囚人としてのり込む限り、同志を集め、説得することは容易でないかも知らない。長い忍耐と努力が必要である。しかし、成功すればこの計画は団をよみがえらせるであろう。このままではわれわれは自滅する以外にない。」

そして自滅を救う方法は、死の島の反乱を計る以外にはない。死の島がわれわれの手に帰せば、政府側も動揺するにちがいない。死の島は既に自給組織が確立しているといわれる。われわれは今度は、死の島を根拠地にし、革命を推進するのだ」

ポーラック党主は、悲愴な快意を表情にあらわしながら、幹部党員を見回した。

「まず、この動議について、検討していきたい。質問があれば聞こう」

幹部党員Aが、手をあげた。

「死の島に関する情報は、どの程度入手されているのでしょうか？」

「残念ながら十分なものはない。しかし、反乱を防ぐための措置は相当なされているとみなければならぬ。ある情報では、拷問と馴致に関する専門家が、ドイツとアメリカから一人ずつ招かれているという話だ。かれらは顧問として死の島の囚人を、精神にも肉体的にも圧迫するため、常に新しい知識と方法を提供しているといわれる。死の島の反乱は、当然この二人と、看守たちになされねばならない」

幹部党員Bがいった。

「反乱の成功の確率はどのくらいでしょう」
「五十パーセント……」

「失敗すれば？」

「よりきびしい虐待が加えられるだろう。しかし、現状において、自滅の道を選ぶか、急速に事を運ぶか、どっちにしても、失敗した場合、結果は同じである。しかも、成功の可能性がないとはいきれない限り、われわれは、その道を選ぶよりないのだ」

「工作員は、どのくらいが予定されているのでしょうか」

「われわれの本島の活動に支障をきたしている限り、できるだけ多くの者を必要とす。われわれは、ブルックの暗殺にのみ全力をあげ、工作員は死の島の反乱にのみ全力をあげるのだ。従って工作員は、われわれの半数を当てる必要がある」

「しかし、失敗すれば、LN団は完全に壊滅する危険がありますか」

「承知している。だが、そうしなければならぬのだ。現状において、われわれが自滅することが分っている限り、危険は承知で、成功への道をすすまねばならない」

「具体的な方法は？」

「LN団が仲間割れしたと見せかけるのだ。そうして、拷問される前に仲間の居所を政府の役人に教えてしまうのだ。当然逮捕がおこなわれるだろう。極めて大量の。しかしかれ

らは工作員としての使命を帯びているのだ。

政府の役人どもは、それと知らずに、ダイナマイトを死の島に送り込むというわけだ」

「あなたは？」

「この計画は極めて重要であり、君たちの賛成を得られれば、僕も死の島へのり込み、反乱の指揮に当たりたい」

「党主がそれ程の決意なら、わたしも賛成です。ブルック暗殺は、わたしが引き受けましょう。残りの党員を指揮して」

「私も賛成です」

「私も……」

「よし」

ポーラック党主は力づくよくいった。

「この案件は万場一致で可決された。あとは誰が死の島へ工作員としておもむくか、誰が本島でブルック暗殺計画を推進するか、人事のみだ。早急に決定しよう」

ブルック大統領は、その豪壮な官邸の一室で朝食をしたためていた。

グリーン国民がそれを見たら、自分たちの食事のまずしさと較べて、おどろき怒るだろう。それほど豪華なものだった。

法務長官が、あわただしくはいつてきた。

「大統領閣下、つつしんで吉報をお伝えにま

いりました」

「なんだねずいぶんあわてているではないか」

「他でもありません。LN団の党主ポーラックが逮捕されたのであります」

「それはお手柄じゃった」

ブルック大統領の面上に、こらえきれぬよろこびが走った。

長いあいだ、彼をつけねらい、幾度も危地におとしいれようとした男である。

「最近、LN団の内部事情が悪化して、互いに仲間を売り、逮捕者の数が急速に増加してまいったことは、既に御報告申し上げましたが、遂にポーラックも、そのあおりで逮捕されたものと考えられます」

「いやいや、君の努力のたまものじゃよ。わしから深くお礼をいう。それではもう、LN団は壊滅したと考えてよいわけじゃな。もう防弾チョッキもいらぬし、装甲車もいらぬというわけじゃ」

「多分壊滅したかとは存じますが、まだ若干の党員は隠れひそんでいるものと考えられます。かれらは追いつめられた者の心理でどのようなことをしかすか分かりません。やはり御用心なされた方が……」

「そうか、うつつうしいのう。でも、やむを

えんわい。早く団を徹底的にやつつけてくれ。そして、わしを安心させてくれい」

「もちろん努力いたす覚悟でございます。では、ポーラックの処分は、いかがいたしましょう」

「当然、死の島送りじゃが、単に送るだけでは芸がないのう。その前に一度わしも顔を見ておきたい。さんざんこのわしをなやましおった男じゃからのう」

「この部屋まで連れてまいりましょうか。それとも」

「いまどこにおる？」

「警察署で、党員の名をいわせるために、拷問をおこなっています」

「それならわしが出てゆこう。異例のことじゃが、手配を頼む。くれぐれもいっておくが決して殺してはならんぞ。死の島で、わしを悩ましおった苦しみを、十分味わってもらわなきゃならんからのう」

「かしこまりました」

それから数十分後、ブルック大統領をのせた装甲車は、多数の護衛の車を従えて警察署に到着した。

署長をはじめとする、主だった連中が装甲車から降りてくるブルックを出迎えた。
「わざわざのお越し、光栄に存じます」

署長のへりくだった挨拶に、ブルックは軽くなづき、たたみかけるようにいった。

「ポーラックはどこにおる？」

「ハッ、すぐ御案内申しあげます」

拷問室では、ポーラックが両手を大の字に鎖で吊られ、立たされていた。

唇からコードがたれ下り、その顔は死んだもののように蒼ざめ、うなだれていた。

ブルックは、その前に立った。

警官の一人がポーラックの髪をつかみ、ブルックの方へ顔を向けさせた。

「にくにくしげな面構えじゃ。殺しても殺し足りぬわい。しかし、わしはおまえを殺しはせんぞ。ゆっくり料理してやるのじゃ。ハイソリッヒとウィルソンが、いい智慧を貸してくれるじゃろう。もうこうなつては、おまえも運の尽きじゃ。どうされようと、されるままというわけじゃな。わしの楽しみが一つふえたというものじゃ、一度わしも死の島へ行きたくなつてきたわい。法務長官、手配を頼むぞ」

「かしこまりました」

法務長官は、一礼していった。

その時、眼を閉じていたポーラックが、突然、眼を大きく見開いた。いきなり、ブルックの面上めがけて唾をはきかけた。

「殺せ」

ブルックは激怒して叫んだ。

「徹底的にたたきのめせ」

コードのついた鞭が唸った。

ポーラックのからだから、蒼白い火花がパチパチとび散り、けいれんした。

「いや、待て」

ブルックは、興奮をおさえようと努めながらいった。

「ここで殺してはならん。殺すのはいつでもできる。叛徒どもの見せしめにするのじゃ。殺さない限りどんな刑罰を加えてもよいぞ。しかし、賞めてやろう。わしの顔に唾を吐きかけおったのは、この男がはじめてじゃからのう。それでこそ、LN団の党主というものじゃ。わしも張りあいがあるというものじゃ。しかし法務長官、こんごこのようなことのないよう、気をつけてくれ」
「いやわたしめの不注意から、とんだ事態を招きましたことを、お詫びいたします。さっそく箆口具をかますであります」
「死の島が楽しみじゃ。じゅうぶん智慧をつくして、ポーラックを接待してやってくれ」

れはてていたジュリーは、ある朝、バラゴに鼻輪の鎖を持たれて引かれた。

「おまえは今日から、七級囚にしてやるよ。規則違反を一度も犯さず、忠実に労役にいそしんだからさ」

ジュリーは、導かれるままに歩いた。やがて、首輪の番号札がつけかえられた。

今度は7H233だった。

バラゴに、代った女看守は、ジュリーをエレベーターにのせた。

過重な労働を強いる発電の仕事から解放されることは、なんとしても有難かった。

しかし、つぎにどんな労役が待ちかまえているのか？

エレベーターが停った。

出たところは前と同じような広間だった。

ジュリーは、たんねんな検査を受けた。

後手錠がはずされて、前手錠がほどこされそれをつなぐ鎖が首輪に吊られた。

女看守は、一つの鉄の扉の中へジュリーを曳きいれ、鼻輪の鎖をバラゴに手渡した。

バラゴは、ジュリーに、ゴムのエプロンをつけさせた。

そしてつぎの扉のなかへ、ジュリーを曳きいれた。

そこは洗濯場だった。

たくさんの女囚たちが、鼻輪の鎖を上梁に吊られ、前手錠の不自由な姿勢のままで洗濯をしていた。それらはすべて、看守やバラゴの制服や下着だった。

ジュリーの鼻輪の鎖が、梁につられた。

バラゴは、たくさんの洗濯物をジュリーの傍らに置いた。

「すっかりきれいにするんだよ。すこしでも汚れていたら、懲戒だからね」

ジュリーはうなづき、おびえたように洗濯をはじめた。

吊られている鎖いっぱいの長さまでうつむき、首輪につながれている手錠の鎖いっぱいに手を伸ばすと、やっと手を動かすだけの余裕があった。

それ以上腰を曲げると、鼻輪の鎖が梁にひっぱられて痛い。

楽な姿勢ではなかった。

それに箆口具があるので、隣りの女囚としやべることもしかない。

ふと、ジュリーはわき見をした。

みんなが、どんな洗濯をしているか、見たかったからである。

しかし、脇腹にすぐに激しい痛みを感じて身をしならせた。

「わき見するんじゃない！」

バラゴがコードのついた鞭をふりかざして大声にいった。

ジュリーはあわてて洗濯に精をだした。

それは苦しく、つらい仕事だった。

時間がたつにつれ、鼻壁が痛み、肩や腕がつかれてきた。

しかし、休息は与えられなかった。

ただひたすら、山のように積みあげられた洗濯物を、機械のように洗い、もみつつけるよりなかった。

腰が痛くなってきた。

思わず、のびをしたジュリーの背に、たちまちコードのついた電気鞭がはじけた。

「まだ許しちゃいけないよ」

バラゴが、大声でいった。

「人間さまなみに、のびなんかすると承知しないよ」

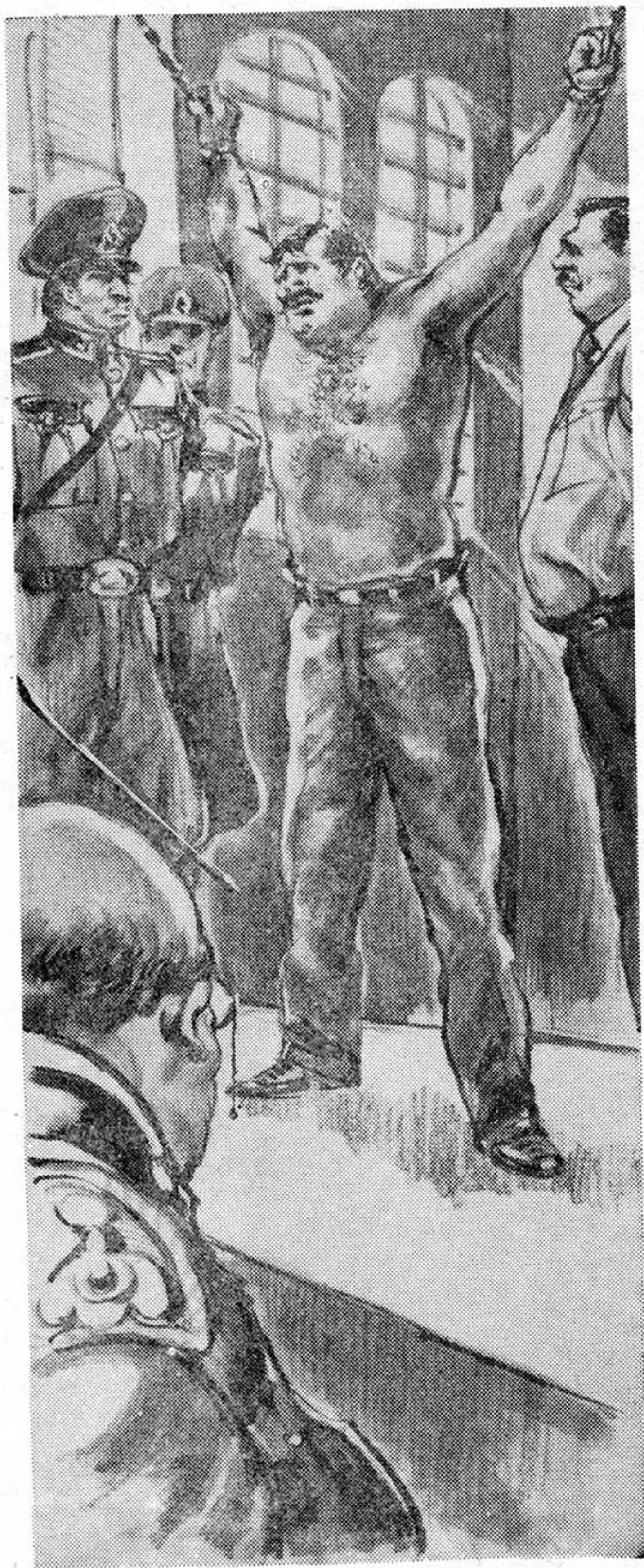
腕がしびれてきた。全身がだるい。

なん時間も、なん時間も、そして、なん十枚という下着や制服を洗いつづける。

ジュリーの洗った下着や制服は、バラゴがたんねんに検査し、干し場へ運ぶ女囚に手渡した。

ジュリーはその運ぶだけの仕事を、どんなに羨ましく思ったかしれなかった。

どんなにたくさんの洗たくものを持たされ



でも、立って歩くことができるのだから。

運搬役の女囚は、ジュリーより等級が上らしく、5H3245という札を首枷にぶら下げていた。

どのくらいの時間がたったろう。

バラゴはふいに、女囚たちに仕事を中止するよう命じた。

ジュリーの腕は、すっかりしびれていた。

女囚たちが箆口具の中で、今日一日の苛酷な労働を呪う嘆息をついているのは、そのか

らだ全体の雰囲気でもわかった。

バラゴはなんらかの女囚の番号を呼んだ。

ジュリーの番号もその中にはいつていた。

「おまえたちは規定の枚数に足りないし、検査をパスしない洗濯物があつたのだよ」

ジュリーたちは、一個所に集められた。全部で六人だった。

「こんなことがつづくと、後ろ手錠にして、もう一度発電の仕事へ回してやるよ。それとも水汲みがいいかい。せっかく楽な仕事に回

してやっているのに怠けるなんて、もちろん懲戒だよ。ほんとうは、おまえたちはいまこ

ろは発電所か水汲み場で、バネと力較べしながら、電気踊りをおどってなくちゃならないのだけど囚人が急に増えていま満員なのさ。だから等級を仮にあげて、楽な仕事を与えてやったのだけど……。それとも、いまの仕事が不足だともいうのかい？」

女囚の一人が膝まづき鎖を鳴らして両手を合わせ許してくれるように姿勢で哀願した。

その姿勢は、反射的に他の女囚にも影響し
ジュリーを含めた六人の女囚は、バラゴの前
に犬のように膝まづき、合掌した。

ジュリーは屈辱感に胸をかきむしられる思
いだった、むらむらと反抗心がわきあがる。
自分だけは立っていてやろう、バラゴを睨
んでいてやろうと歯をくいしばっていた。

しかし全神経は、恐怖と不安に、知らず知
らずのうちに彼女を膝まづかせていた。

すこしでも抵抗をみせたらどんな残忍な報
復が待ち構えているか分らないだ。

法律的にも実力的にも、すべての権利を奪
い去られている限り、抗弁の余地はないので
ある。

たとえその法律が無法のものであっても、
ジュリーの非力では、いかんともすることが
できない。

「許してほしけりや、一生けんめい仕事をす
りやいのさ」

バラゴは、優越感を味わうような表情でい
った。

「懲戒もせずに許したとなれば、こちらが降
等ものさ。もう二度と貞操帯やゴムパンティ
は穿かされたくないからね。努力してからと
った地位なんだよ。情やあわれみで奪われち
やたまらない。そうだ、あすの晩まで、ゴム

パンティはそのままにしておいてやろう。ど
うこらえたって、こいつは、いちばん神経に
こたえるからね。おまえたちは罰として、あ
す一日、ぶよぶよしたものを腰につけて仕事
をすればいいのさ。それから餌の後、一時間
ほど鼻鎖を吊っというてやろう。他の女囚がね
ているのに、自分だけ立ったままねられない
というのはつらいものさ。いねむりでもすり
やあ、それこそ鼻が、チ切れるような痛みに
とび上らねばならないって寸法さ。そうして
あすの朝は、一時間早くおこして仕事をさせ
てやろう。同じ時間を働いても、他の者より
劣るのだから、これは合理的な処置なのさ」

ジュリーはこうして、しだいに死の島の生
活に慣らされていった。

看守やバラゴの命令を従順に守ってさえい
れば、懲戒はおろか、等級の昇進さえ認めら
れるという、巧妙な死の島の掟が、ジュリー
にはつきりわかってきた。

それは決してゆるめられることのない鉄則
だった。違反することのできない規則であ
る。

ジュリーは、バラゴにとりたてられ、あら
ゆる枷具や鎖をとり除かれ、不愉快に腰をし
めつける操帯や、べたべたしたゴムパンティ
を脱ぎ捨てた時の、さっぱりした気持を夢想

した。だが、すぐにその夢をうち消した。
ジュリーは、そんな期待をする自分がいや
だった。

ブルックの専政を倒そうという、革命の理
想に燃えていた頃の自分が、いかにも美しく
清潔なように思いかえされた。

しかし、いまの境遇で革命を思うのは無理
だった。

ジュリーは、非力の自分を諦めていた。

どうあがいても、救いのない生活である限
り、死の島のシステムに従順になり、すこし
でも不愉快な生活からぬけだしたかった。

党主ボーラックが捕えられたという情報が
伝えられたのは、その頃である。

LN団が革命に成功し自分たちを救い出し
てくれるかもしれぬという、かすかな希望も
その情報は打ちくだいてしまった。

ジュリーは絶望し、そしてこのとき、つい
に、バラゴになる決意を固めた。



私のコレクションから②

森 下 高 茂



「鞭を持つ女」

ルドルフ・ヘーゲマン画

この一枚の絵は、通常、なんでもない絵と思われやすい。

ひとりの女が、ただ腰をかけているだけの絵なのだから、無理もない。

しかし、これは純然たるMS画の名作なのである。

ルドルフ・ヘーゲマンについては、私はよく知らない。シュリヒテルや、カムにしても同様に、な

かなか経歴や素性がわからないのだから、やむをえまい。

この女性は、可憐ななかにも、たいへん意志のつよい顔をしている。

長靴は、古典派靴フェティシストの好むタイプのものである。

その両脚の長靴は、まさしくその全部の魅力を、あきらかに示している。

このポーズは、実際には、ひざのうしろ側の筋や、長靴というものの自体が脚および足の各部に伝達する収縮、圧迫、緊張などの法則のゆえに、なかなかむずかしいものの一つであることは、長靴フェティシストなら、ただちに考え得ることである。

試みに、多くの写真をもう一度克明に調べてみると、このポーズとくに二本の長靴の示す位置、その方向、力のはいりぐあい、として、上体をまっすぐにのばし、首

には高く白布を巻きあげ、胸部から腰部にいたるからだの部分、ウエスト・ニッパ―と私たちが呼ぶ紐でしめあげる形式の古典的なコルセットでかくしめあげたこのいくつもの条件は、けっして、写真ではつくることのできないものである。

私たちが、写真の真実性を高く評価しながら、また一方で、絵画の魅力を忘れ去ることのできないのも、じつに、こんなあたりに、理由があるのである。

この絵自体は、私自身がすでになんとか発表したから、けっしてめずらしいものではないはずであるが、前述のような理由から、また後に示す何点かの長靴関係の写真の説明に便宜なように、とくに前に発表したことを承知で、ここに示すものである。

キュロット

とジョーパスについて

アメリカ雑誌から一枚

プレイ・ボーイという雑誌に
いては、大方の諸氏の熟知せられ
るところであろうから、私はとく
にここで説明をしない。

とにかく、ほんのりしたエロテ
イシズム、ジャズと男性用装身具
を扱った、アメリカ随一の男性用
ピクトリアルである。

つぎのページに掲載した写真は
ヌードのモデルを勤めた女性の、
日常生活の一枚のスナップ写真で
ある。

この写真のなかで私が愛するの
は、赤い上衣の裾のところから、
ひざ下までつづくうす黄色の厚手
な生地で縫製されたキュロット……
(乗馬ズボンのうち、本来男性用
に作られたものをいう)であるが
これは元来、ブルボン王朝期にフ
ランス宮中の男子が、ズボンの代

わりにはいた、ももひきふうの白
い絹地、または、ラシャ地のから
だにびったりした一種のタイツの
ようなものである。

古い時代を背景に用いた映画、
オペラなどには、かならずといっ
てよくらい登場してくる風俗で
ある。

この時代には、ひざ下までの長
靴は、下僕馬丁のたぐいで、貴族
や上流社会では、乗馬のときには
ももの中間、または、もものつけ
根まである軟皮革製の長靴をはい
たものである。

下って現在では、ひざ上のふく
らみを残して、他は、いやが上に
も脚にびったりとくつつくように
ボタン止め、あるいは、ジッパ
などでしめつけるようになってい
る。長靴も、しぜんにスマートな

ひざ下までもものになった。
一一〇ページにあげる写真を比
較されると、よくわかると思うが
一九三〇年代のキュロットと長靴
とは、この写真のものとは、いさ
さかちがっている。

長靴の上辺は、いまよりは、ひ
ざに近く、使用革は、よりうすい
か、さもなくば、より固い。
そして、むかしの宮廷時代のな
ごりとして、ボタンが長靴の上部
まではみだして、一種の飾りとな
っている。

むかしの、ももを守っていた式
の長靴の面影は、ひざからももの
内側にぬいつけられた、うすいセ
ーム皮に残っている。

腰から、ももの中間までのふく
らみは、あまり、ゆとりに変化が
なく、ただ、またがるときにつつ
ばらぬようになっている。

しかし現在は、一一〇ページ図
のごとく、そのふくらみは、ひざ
上と、もものつけ根との、ちょう
ど中間よりわずかに下のところで
急に細くなっており、その上部は

ひざふくらみが誇張されている。
キュロットから、いささか脱線
したが、このほかに一九三〇年代
から婦人用に使われはじめたもの
に、ジョーパスと呼ばれるものが
ある。

これは、ひざ下までの長靴の代
わりに、くるぶし上までの特別な
形の靴をはき、ひざ下からは、キ
ュロットよりは、ややひろくなっ
ているものである。

とくに注意してみると、キ
ュロットは、からだの横に折り目
をつけるようにアイロンすべきも
のであるが(これはむかしのキュ
ロットの時代からの習慣である)
ジョーパスは、ほかの男子用ズボ
ンや、婦人用スラックスと同じく
たてに折り目をつけて、アイロン
すべきものである。

多くの場合、ジョーパスには、
小さい折り返しがついている。
そして、主として、折り返し
ついていないジョーパスは、男子
用である。

さらにいうならば、ヨーロッパ





では、現在まで男女ともにキュロットに長靴というのが多いのに反して、アメリカでは南米を除いては、男女ともにジョーパスというのが多い。理由はわからないが、おもしろい傾向である。

この女性そのものは、けっしてとりたてていうほどの美人ではないが、それでも、妙に粘っこい感じのするひとである。写真は、一九五二年版からのものであるが、いちばん大切な長靴

がかくれているにもかかわらず、私にとつては、もっともすばらしい、コレクションのなかの一枚といえよう。

ある好ましいマンガ

スターズ・アンド・ストライプ紙から

スターズ・アンド・ストライプ
スとは、いうまでもなく、米軍の
機関紙である。

私は、べつにこの新聞を定期購
読しているわけではないが、住ん
でいる地域の関係から、ときどき
まちがえて配達人が入れていつて
しまう。

この一枚のマンガは、たまたま
今年の四月に入れていったものの
なかから発見したものである。

安っぽい印刷、粗末な紙質。印
刷物としての条件は、けっしてよ
ろこばしいものではないが、それ
でも私の心に、ひびくものがあつ
た。



鼻ぺちやのお嬢さんの、すつと
んきような表情。なにげなく、ト
ップファッションではいた長靴。
馬にのるわけでもない。場面も
ことさらにマゾヒスティックなも
のではない。
にもかかわらず、この絵は私に
非常に好ましい、ある暗示をあた
えるのである。

再び

リディア・デ・フェレロについて

(写真はつぎのページ)

前月号につづいて、再びリディ
アに登場してもらおう。この女性
は、つぎのページに掲載した
一枚で、私の心を完全に魅了し去
ったのであった。

革のチョッキ、びったりとした
革のキュロット。そうして、なん
ともいえない、ちょうどよいその
厚さ。ちょうどよい長さ。ちよう
どよい軟らかさの長靴が、この写
真のおかれた空間に、えもいわれ
ぬ香気をまきちらす。

この写真に関するかぎり、リデ
イアは神聖でさえある。
ここにいて私は、モーツアル
ソファの片はしに腰をおろし、
革につつまれ、シャツブラウスを
小粋に着こなし、両脚をごく自由
にふみひらき、一メートルたらず
の鞭をしなわせるリディアは、す
でにモデルではなく、ある意味で
は女性ですらない。

この長い髪、無造作にみえて、
なお人工の手を加えた美しい髪。

リディア・デ・フェレロ嬢



この一枚のなかでは、すべてが輝やきわたるかのようである。

リディア・デ・フェレロをテーマとした写真は、数十枚あるいは数百枚の多きをかぞえるが、なぜこの一枚だけが、ななめに撮影されたのか、私はその理由を知らない。あるいは、とくべつな理由な

どないのかもしれない。

しかし、ここには、完全な姿での、完全な女騎手がいる。

まことにこれは、散文で描くべき女性ではない。韻文の世界にのみ属するアフロディテが、地上におり立った、その瞬間である。

魅力ある悪臭

ある無名の女性

上に掲載したのは、リディアとは全然逆の意味で、私たちに、確実に、ある興奮を伝える女性である。

下品な化粧、威嚇的なポーズ、

下品な化粧、威嚇的なポーズ、黒い革のキュロット。編み上げ式のハイヒール長靴。

そのかかとは拍車が光り、皮手袋の手には鞭がにぎられ、条件としては何ひとつ欠けるところがない。

それがゆえに、この一枚を私たちは惜しむのである。

この女性全体から発散する、救いがたき悪臭。淫蕩と墮落のまざり合った、すえたようなにおい。それらが、さらにまざり合い、からみ合って、ここには、汚辱の香りをもったピンク色の妖気がただよっているかのようである。

そして、これが大切なことであるのだが、私たちは一方で、この汚辱のなかに身を沈めようとする本能的な希求を持ち合わせているのである。





星由里子の乗馬練習

私のコレクションのなかで、日本人女性のものは、きわめてすくない。

これは、そのすくない中の一枚である。

彼女が、東宝映画「戦国野郎」に出演するために、馬を習っているスナップである。

私たちが感じとることのできる

のは、この大衆的なスター女優に

またがれて、蹴られ、鞭打たれ

る馬が、私たちの住むところに、

現実に存在し、意志さえあれば、

行つてその馬に触れることもでき

るという、はかない親近感だけな

のかもしれないが、しかし、これ

はまず、佳作に属する一枚といえ

よう。

スタントンの表紙絵

アメリカの画家、スタントンの作品については、すでに数多く紹介もされたし、私も多くを書きつづけてきた。

左の絵は、一九六四年版の表紙絵である。

べつに説明は要しまい。ただ、

MSの諸要素を十分に盛りこんだポーズ、設定、衣裳にもかかわらず、私自身の感覚に対しては、この回最初に掲載したヘーゲマンの作品のほうが、よりつよく、かつ執拗な刺激をつづけ得るのだ。



AN AMAZING CARTOON-STORY OF BONDAGE & PUNISHMENT

★★★読切連載時代小説★★★

鬼姫変幻帖

(二月号から連載)

島本春雄作
小日向一夢絵



「鬼姫秘帖」の異名をもつ「秘冊武田六道巻」は、天下制覇の奇策を集めた秘巻とも、百万両の信玄遺宝の謎を秘める六帖の書とも伝えられ、代々六人の諏訪女忍に伝承されているという。

世は、戦国の余燼いまだ消えやらぬ正保、慶安の頃……

豊臣、島原の残党しきりに蠢動し、天下奪取の足がかりに、武田の六道巻を狙って、その秘密を解こうとする。楠流の兵法者由比正雪とその一党も、ひそかに動きはじめ、謎の諏訪女忍六人を求めて、陰湿無惨な暗闘が開始された。

白蠟のような不気味な肌と、能面のような妖しい美貌をもちながら、常に黒衣を身にまとい、そのどす黒い蝙蝠羽織ゆえに、蝙蝠若衆と呼ばれる美小姓は、昼は盲目、夜になると視力を回復する異常人であり、小児のような惨忍性と、魔性の者のような変幻の術を駆使して、何故か六道巻を狙う者達と闘う。

この妖美若衆の正体は何であろうか？



1

回を重ねて、三十回、ようやくこの《体当たりマゾヒズム論》もこの稿で終わる。長らくご愛読下った読者諸子に、心からお礼を申し述べたい。また長々と、このような冗長きわまる駄文の連続に、よくもあきもせずおつきあい下った、どころか、陰に陽にはげまして下った飯田編集長以下、「裏窓」編集陣の皆さまにお礼を申し述べたい。

ほくはこれまで、Mについてずいぶんかつてな熱を吹き、繰り返しとつ返し、同じような小理屈をクドクドと述べたてた。自分で酔い、自分で熱を上げ、トクトクと多くの女性との出会いや、その奇妙な関係について、ひとりよがりになやべり立てた。あさましくらいにはよくは露出狂であった。いつもつきまとう一種のうしろめたいふつきれない感じは、こういうおしゃべりにすぎる露出狂的ほく自身の態度についてであった。

プレイボーイが、己が数多い歴戦の武勲？ をこれ見よがしにひけらかす、あのハナもちならぬキサツタラシイ行為が、人ごとならず、またほくが延々として、三十回、述べたててきた「マゾヒズム論」の果たした所業であった。真にそれが情事となるためには、それはあくまで秘めおかねばならない。情事は、濡れことである。秘めやかに濡れて美しいものである。それは決して白日のもとにさらされてはいけない。さらされたとき情事は醜事となる。

情事はそれがそれとなく、人から人に言わず語らずの伝播として伝わるがよい。当事者の告白やサンゲなど、もってのほかだ。ハナタカダカの己が自慢話として、情事が吹聴されるのは、いかにも聞



■ 体当たりマゾヒズム論・最終回

ああ、たったひとつの道をゆく
孤独なMの一匹狼よ

水尾 究

江 渕 晃 夫 絵



き苦しい。もうそのとき、情事としての特有の香氣は消えうせる。
マゾヒズムにおいても同じことが言えるであろう。それはマゾヒ
ストにとっての情事である。

秘め事である。それをあえて、ぼくは長々と、聞くにたえぬ告白
を続けてきた。白日にさらされたMの情事は、むくろをさらすがよ
うに、そのとき腐臭を放って、まことにみにくい別のものに変ほう
したのではなかったのか、あさましい気がする。

以前のぼくには、このような露出癖はまるでなかった。というよ
り、そういう話題自体を極端に恐れた。己の秘密に、少しでも関連
のありそうなことがらに、興味を示したということから他人に見す
かされることがこわかった。

だから、マゾに関係のありそうなことは、すべてぼくにとっては
タブーだった。

《乞食王子》や《花丸・小鳥丸》といった読物が、少年時のぼくの
心にともした実にセクシュアルな興奮の度合いは、反面非常な羞恥
感を伴うものであった。身は乞食でありながら、一夜にして王子と
なった美少年のとまどいが、ぼくの心に火をともした。少年の前に
平身低頭するおとなたち、そのおとなたちを眼下に見下しながら、
命令を下す少年のくすぐったいような優越感が、ぼくの心をくすぐ
るのであった。くすぐったいことがはずかしかった。その感じは、
こっそりとひとりだけの胸の中にしまわれていた。

マゾヒズム、ということばを知る以前から、ぼくは感覚で知って
いた。そのことは、嚴重な秘密であった。もしその幾分かが、少し
でも周囲の人たちに感づかれでもしたら、ぼくは舌をかみ切って死
ぬ位の覚悟はあった。

ところがそれが今では一変し、だれかれの見境なく、声高にマゾヒズムについて語るようになったのはなぜだろう。具体的に逐一そのことを語らないことには、落ち着けなくなった。なぜだろう。やけくそみたいに八方破れの構えである。秘密がすでに秘密でなくなってしまったのだ。

かつての日、莊嚴な光芒に包まれてあったあのマゾの神話は、今無残にも、白昼公然と人目の集まるところに見本市よろしく並べられた。

ぼくにはあせりがあった。初めゆるいカーブから、次第に急上昇を見せて高められた欲求の奔騰が、ぼくの理性を押し流した。麻薬患者の、禁断症状が、小止みなく連続的に襲ってくるあのようなものであった。外聞をとりつくろっているひまはなかった。ぼくは臆面もなく自分の症状をさらけ出しながら、さらけ出すことで次のクスリが投げ与えられることを期待しながら、ご通行中の皆さま、とやっているようなものであった。

最初のクスリの新鮮さはどこへ行ってしまったか。その悔いからのがれることができない。

2

人間は所詮弱い。ひとりでは生きられない。

志を同じうする者よ、この旗の下に集まれ！ である。共に寄り添って人々は、思い思いの旗印を掲げ、その下での連帯感と団結心をちかい合う。

だれかが旗は立てねばならない。特にマゾヒストの旗は、他の何ものよりも高く、大きく掲げられねばならない。マゾヒストは、他

の同志の団結をよそめに、孤立をしいられているからだ。

マゾヒストは、声をひそめていねばならない。己の秘密に固く口を緘していねばならない。女を縛ることは恥とはならない。女を鞭打つことは恥とはならない。少々乱暴で野蛮と思われるとしても、これは思性として当然な武断派的行為として、納得される。だが女に縛られることは恥である。鞭打たれることは恥である。その恥を願望する心を、どう適確に一般語として翻訳すべきか、マゾヒストは自己弁護のことばを知らない。

マゾヒストはそれぞれに孤立して、口を固く緘している。そこには同志的結合と、同志愛的な連帯意識にささえられた、共通の場が育つ機会が得られにくい。

マゾヒストは警戒心が強い。自分を守るには自分で口をつむる以外にテがないからだ。

旗をしかもだれかが立てねばならない。この孤立状態から脱し、お互いは決して孤立しているのではないのだぞ、と、強く呼びかけねばならない。呼びかけることで、自己の孤立をまず救うのだ。

まず真先に、孤立のやりきれなさに辛抱しきれなくなって、寂しさのあまりネをあげた者が、最初に旗を掲げるべきだろう。彼は呼びかけるために、まず己について告白をすべきだ。虚飾なく、アリティに事実を報告すべきである。そのことによってでないと、本当に同志として、他のマゾヒストのあの固い口を開かせることはむずかしい。

ぼくはついに辛抱しきれなくなって、こうしてネをあげて、旗を掲げた。いっさいを白状する気になった。同志よ、どうぞそれぞれに名乗りをあげてくれ、と切願するための、訴えかけの旗だった。

マゾヒストに自信と勇気を、それはまたほく自身に自信と勇気を、ということであつた。ほくが「M論」で一貫して述べたことは、そのことに尽きる。

最初マゾヒストは、心に理想的なサジスチンをそれぞれに思い描く。絵や小説や、物語中の女性の中に、理想的なタイプを見つけ出して、こういう女が現われてくれたら、と願う。それは特に、彼にとってえりにえり抜かれた、特別の存在となつて心に生きる。

美しくコケットで残忍できょう慢な彼女は、果たしていつ、どこで、どういうふうに現われるか、どういうふうに彼女とめぐりあえるのか、そのはかない期待が、はかなければはかないほど、理想の女性はより純粋な形に理想化され、きめの細かなブラッシュが、心の中でかけられる。

だが現実には、彼女とめぐり会ふのは、虹をつかむ以上にむずかしいことだ。追えば追つたでその距離だけ彼女は後退する。

理想の女性はいったいどこにいるのか、マゾヒズムが真に充足し、満ち足りる境地はいったいありうるのか、それは彼女とどういう関係にあつた場合にそれが言えるようになるのか。

次第にあせりが始まる。彼女との出会いの困難を思い知らされ始める。追つても追つてもキリがないことを納得し始める。

自信の喪失、期待が限りなく裏切られ続けることからくる無力感、そして症状はいっそう内攻し、苦痛に心はさいなまれる。

しかし、完全にあきらめきつた心には苦痛はない。苦痛は、期待が裏切られることから起こる。期待とは可能性だ。必ずありうることだ、当然起こりうることだ、サジズムの痛快さを心に解しない女性が居るだろうか、いや、女性だからこそ、より本能的に、強く男性支配のサジズムの痛快さを、からだでもって体得できるはずだ、

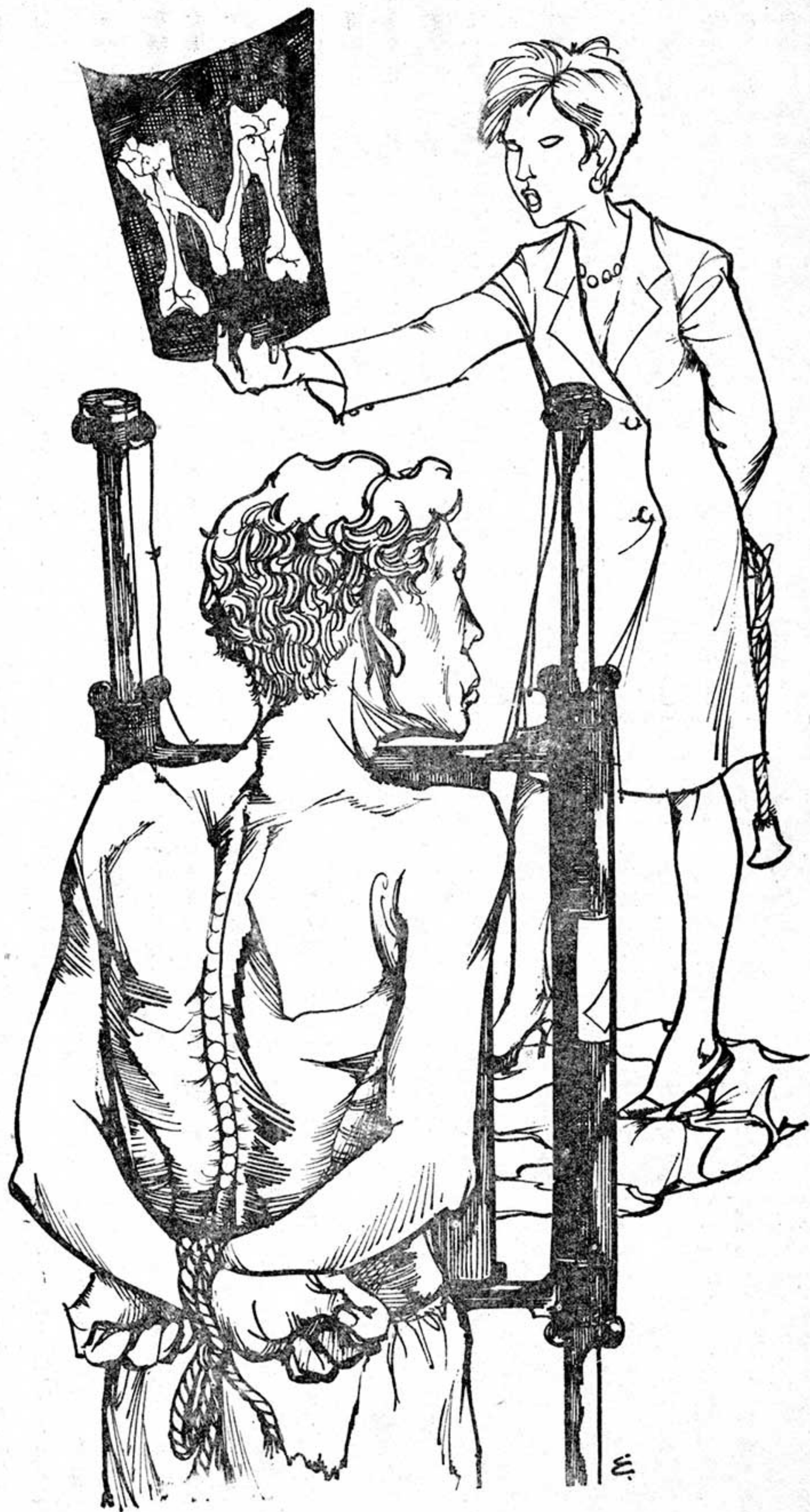
ということへの可能性を信じるところから、初めて期待が生じる。何も信じずには期待は生じない。期待のないところに苦痛も存在しない。

マゾヒストが苦痛を感じるのは、それでもなお信じるところの可能性への期待があるからだ。その信念がひたむきに強いからだ。

ここで初めてさとするのである。それは特殊なタイプとしてのサジスチンをではなく、日常性の中の、通常の意味における女性一般の中にひそむサジスチンを信じる心である。「青い鳥」は、実は遠く、雲中にかかる虹の中ではなく、ごく身近に、つい手近な周囲に、つまり生きとし生ける女性一般の中にあることを覚るのである。すると、可能性への期待は油を注がれたように倍加する。苦痛もそれだけ倍加する。その倍加された苦痛の度合いだけ、燃えることができる。それは確かな確実に手ごたえのある火である。マゾヒストの自信と勇気は、その火の手ごたえによって確立される。

3

マゾヒズムとは、特別に異常な世界ではない。これはごく自然に、一般と通じうる世界である。もし一般が、なんらの偏見もなくこの声と願望に耳を傾けるならば、ゆるやかな斜面の起伏をたどるように、その世界の理解がごく自然に感得されるであらう。一般世界との間に、特別の障壁はない。理解を絶するような断がい絶壁もない。それは当たりまえのカーブで、普通に一般と通じている。それを一般は、無理にも強引にもマゾヒズムを特別な障壁で隔てようとする。特別の病質者の世界であると、断定することにやっきである。



男が女を愛することはあたりまえである。愛するがあまり、そこには破壊と被破壊の原初的な衝動が生じる。それは愛するものとの特に強烈な関係の仕方を、肉と精神との上に刻印したい欲求からの儀式である。

愛する者を殺したいと思う。愛する者から殺されたいと思う。両

極を揺れ動く振子の間に、一般の世界がある。それはどちらの世界にも通じうる世界である。サジズムにも、マゾヒズムにも。戦争は人間を野獣にするという。しかし、それは戦争が人間を野獣にするのではなく、戦争という一つの極限状況が、人間の中の野獣性を教えることである。

ほくらはほくらのすべてを知りたい。サジズムによってほくらを知りマゾヒズムによってほくらを知る。

極限状況はその人をはだかにする。せっぱつまったとき、その人の正体が現われる。正常な人間の意識や思考の秘密を知るために、学者は最もよく精神病の症状の研究をする。だがマゾヒズムは決して精神病ではない。それは人間心理の一つの極限状況だ。極限状況に立つことによって、人間全体の内面全部に照明が与えられる。

狂気といえば、宗教ほどの狂気があるか。天に祈れば雨が降り祈禱をこらせば病者がなおり、信心深ければ運命が開け、遂には処女懐胎、死者復活までを信ずるに至る狂気の沙汰を、何と判ずべきであろうか。

モンテーニュはこう《随想録》に書いている。

「決して推理により、またはほくらの悟性によってほくらの宗教は得られたのではなく、他の權威命令によって与えられたのである。それには、ほくらの判断の弱さのほうとその強さよりも、ほくらの蒙のほうがほくらの明よりも、かえって多くあずかっているのである」

マゾヒストは狂気の徒ではない。マゾヒズムが絶対唯一のものと、信ずる者でもない。それは人間の、ごく一部の部分であることを知っている。それを特にほこらしいものとは決して思っていない。いな、むしろひそかに、恥じ入ってさえいるのだ。

女性に隷属し、女性に頤使され、その足をなめ、ツバキや不潔物をあびせられ、なおかつ彼女の馬となり犬になりたいと願望することのおろかさを、身をもって知っているのはほかならぬマゾヒスト自身なのだ。

おろかさに身を焼くことほどのおろかさを、なおかつおろかにも熱望せずにいられない人の心のおろかしさに、目を見張るのである。マゾヒストは狂信の徒ではない。自己の立場を冷静に認知する者である。そこにはテライも虚飾もなくアリテイである。

アリテイということは、正直とは違う。正直ということばには、なお作為のにおいがする。アリテイとは、本当にアリテイなのだ。そこに赤裸な人間があるということだ。美も醜もその区別さえなく、そのどれをもいっしょにした、うそいつわりない人間があるということだ。

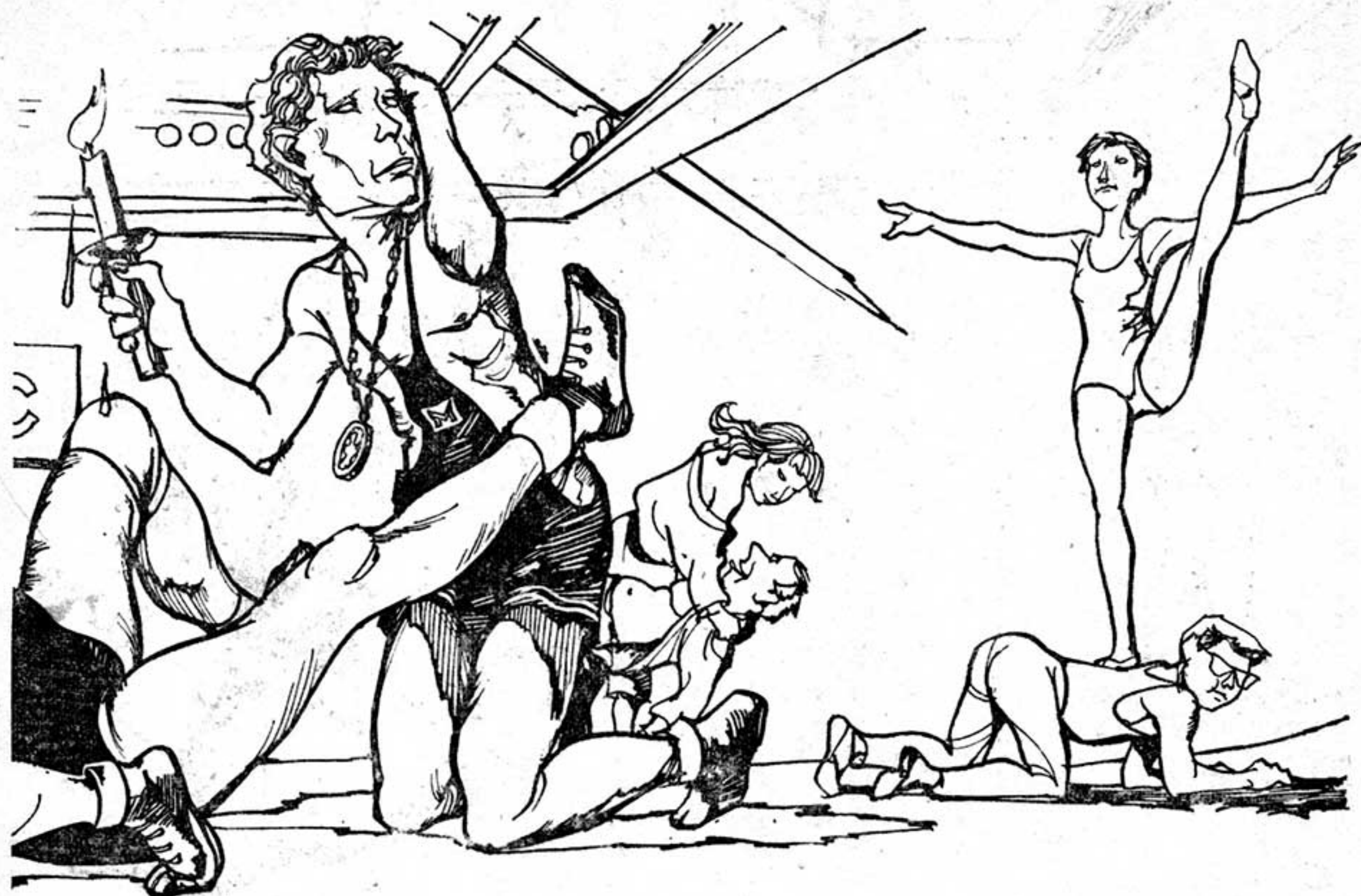
飲料水は奇麗で、女性の小水はきたない、という正直さでなく、アリテイなのだ。女性の小水と、男性の小水と、どこがどう違うのか。両者はもともと同じものであろう。

同じものであることをマゾヒストは知っている。その認知の方法と、赤裸な感覚のあり方と、二つの矛盾対極の運命的な相剋のありようを、アリテイに知っている。

人間の本質的なものが、その相剋の中で止揚される不可知なものであることを、本能的な英知で知るのである。彼にそれを知らさしめるもの、それがマゾヒズムである。

4

マゾヒストといっても、その中にも千差万別、種々なニュアンスの異なったマゾヒストが居ることを知っている。それぞれの観念と思考と対象と方法が異っていることを知っている。みな各自の、めいめいのマゾヒズムを、これこそ唯一のものと信じ続けていることを知っている。



《M論》の最終稿に当たり、ぼくは特にこの中で、「遊戯派」と「生活派」の二つの大きな区分けについてこれを述べておきたい。ずっと以前、ぼくはまだ少年で、従ってマゾに類した直接の読物も絵も写真も知らず、その秘密をただぼくひとりだけのものとして、本当に孤独のままで苦しんでいた時代があった。当時、自分で自分の欲望することが、あまに奇怪すぎて、人に話すどころか、自分で自分を恐れもてあました。

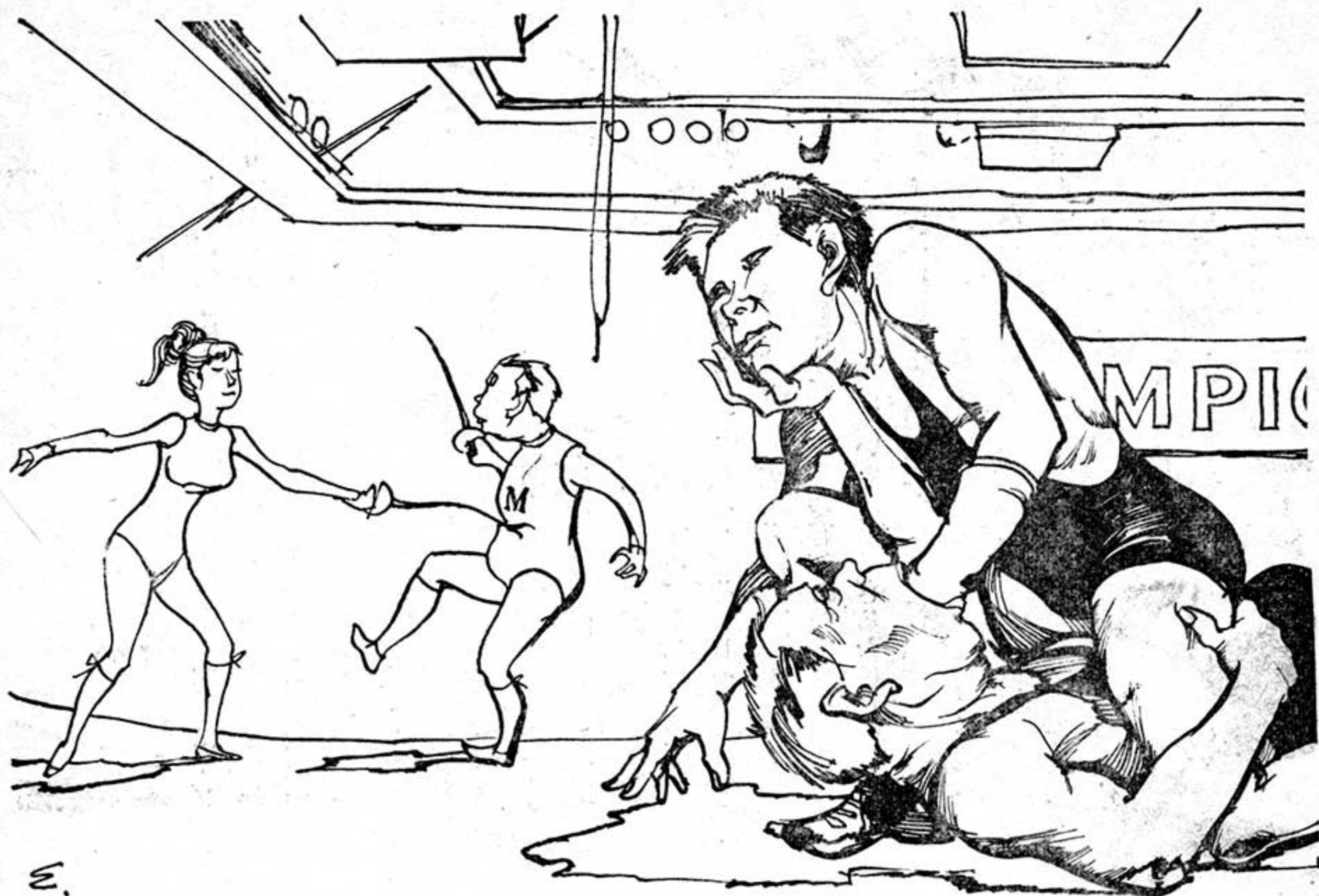
少年とはいえ、早熟なほうで、人並以上に早く自慰もおぼえ、男女の営みや妊娠の秘密やについて、得るところがあった。それにはそれだけの仲間もでき、ぼくの周囲には早熟な少年たちが集まった。女学生とベッティングをした話、遊廓で、「勇かんな坊や」と娼婦にほめられた話、自慰には、よく暖めたコンニャクを使うと気分が出る、という体験話、――

ぼくの周囲には、そういうタグイの話がはらんした。絵や写真を学校に持ってくる少年も居た。それには、男女の露骨なセックスのポーズがあられもなく表現されていた。

みな話に熱中し、絵や写真に興奮した。ぼくも仲間といっしょになって熱中し興奮した。だが、ぼくの熱中や興奮は、ほんの上っツラの真似事にすぎないことを、半面、自覚していた。本当いえば、ぼくはどんな話にも、どんな絵や写真にも、本当の興奮は感じなかったのだ。それをさも感じたかのように装うのは、仲間に対してのせめてもの仁義のためであった。

ぼくが熱中し、真に興奮できる対象は、全く別の種類のものであった。しかし、そのことは嚴重な秘密であった。だれにも説明のできかねるものであった。

戦後、いろんな出版物がセキを切ったようにはらんしたとき、



その中に直接マゾに関した読物や絵を発見して、いかに驚喜したか、説明以上のものがあつた。

ほくは遂に、真の仲間が居ることを知らされた、という思いであつた。ほくは何でも信じこんだ。告白物が書いてあれば、それを素直に事実だと信じた。事実でなければならなかつた。

ほくのように、だれにもいえぬ特殊な欲望をいだいて、苦しんでいる仲間や先ばいが居るということを発見した喜びでいっぱい、それ以上疑う気はなかつた。

ほくは仲間と直接会いたかつた。話を聞き意見を聞きたかつた。しかし、ほくはほくの周囲に、少しでも秘密のあらわれそうな気配を示すことを警戒し恐れた。そのために、連絡のための手紙を出すことさえ、長い間でできなかった。

遂に意を決し、手紙を書き始めた。連絡方法にはくふうをこらした。雑誌の読者欄も応用し、雑誌社に電話をかけたつもりもした。

手紙はナシのツプテの場合が多かつた。だが中には何通かの連絡もあつた。二、三の知己を得ることができるようになつた。

それ以後、ほくはずい分多くの、マゾと称する人たちと知り合うようになった。彼らはほくにとって、そのひとりびとりが何ものにも替えがたい貴重な心の友である。同志である。とはいいいながら、それでもひとりびとりは、やはりそれぞれ違うのである。その微妙な違いのニュアンスを、ほくは単に傾向の違いだけだと解釈していた。人によって、好みが違うのは当たり前だと思つた。意見の違うところもあつた。経験も違い環境も違つた。違つてはいながら、ほくは彼らによって、どんなに多くなくさめられたことであろう。だが遂に、ほくは大きな壁にぶち当たらなければならなくなつた。「遊戯派」と「生活派」の決定的な違いの発見がそれであつた。

まず基本に、正常な男女の営みがある。男が女を愛し、女が男を愛する基本的な関係がある。その基本に立った上で、それはそれとして否定することなしに、マゾヒズムが成立するケースである。

彼には妻があり子どもがいる。肉体的にも経済的にも、夫として父親として、見事に責任に耐えている。その上で、同時にマゾとしての彼のあり方が共存する。マゾは付帯条件でありプレイである。「遊戯派」がこれである。そしてほとんどは、この「遊戯派」に属する。彼にあつては、マゾヒズムは実に健康なレクリエーションであり、精神安定法である。明日の健康と活動のためにマゾヒズムをというわけである。

ぼくは彼らがうらやましかつた。それでなければならぬと思つた。今でもそう思っている。彼らはぼくに忠告してくれる。

「生活を破壊してまでマゾに没頭するのは、不健全だ。これはこれあれはあれと両立させなければ」

そうした意見をぼくはありがたく拝聴する。もしぼくにとつてもそれが可能ならば、喜んでそうするだろう。そうしたいと願う。また他のM派の同志にもそのように忠告する。

だが、そこにもどうにも抜きがたい壁の存在を抜くことはできなかった。「遊戯派」との決定的な違いを認識せざるを得なかった。仕事の場合においてそれが訪れる。職場においてそれが訪れる。仕事の場合、職場とかのケジメがぼくにとってはつけにくくなった。

仕事の場合、あるいは会社で、それらしき美しい女の子がいると、もうどうしようもなくなる。ぼくは正面きつて、彼女らにぶち当たる。ぼくはマゾヒストです、と告白してしまう。仕事は仕事、趣味は趣味と、二つに分けることができない。

さてどうなるか。また新しい孤独がここから始まる。ぼくはまだ

「遊戯派」でない、「生活派」としてのマゾの同志に会ったことがない。そういう同志に、ぜひ会いたいと思ひながら、会えないでいる。

明日の自分がどうなるか、それがわからない。「生活派」のマゾヒストは、当然一匹狼にならざるを得ない。

自分が一種の病気であるのか、ないのか、それがわからない。もちろんぼくにはぼくなり主張はある。その主張を絶え間なく、だれに向かつて吐き続ける。だが、これほど意味のない、むなしひひとりよがりの主張はない。結果として、ひとりの敗残者にすぎないからだ。人間生活のあまりにも明白なオキテを、ひとりだけ逆に生きようとするからだ。

逆に生きることとは、だが唯一のぼくのホコリである。負け惜しみといつてもよい。そしてこの負け惜しみが、かろうじてぼくをささえていてくれる。

ぼくは男ばかり、三人連れで旅館に行ったことがある。Aがぼくの友人で、Aの連れてきたBは、見知らぬ人だった。頭のうすい、五十年ばいのおじさんだった。Bはマゾヒストだという。マゾはマゾでも、男に対してのマゾだという。女には何の関心もなく、男に責められたいのだという。

Bは、マゾヒズムの世界における異端者だった。部屋に入ると、AがBを縛った。縛って仰向けに転がした、転がした上にまたがった。ぼくは見ていただけであった。

Aは、怒張した一物にサックをかぶせ、それをBの口もとに突きつけた。Bはそれをくわえて吸った。AもBもはだかであった。

ぼくの役目は、Bの勃起したさきに、ローソクの熱いしずくを垂

らすことであつた。

夏の暑い日のことで、その旅館には冷房の設備もなく、扇風機が回るだけであつた。その扇風機も、ローソクの火が消えるので止めてしまつて、室内は蒸し風呂のように熱かつた。三人とも汗じっとりである。Bの股間からは、汗のにおいと、むれた異臭がまじつてほくのハナをついた。

シズクを垂らすと、先端がピクリと反応を示し、その興奮とシズクの熱さのために、Bは身をよじつた。彼は、モノにつかれた土人の踊手がするように、腰を激しくけいれんさせた。そのたびに、いっそう怒張して筋が立った。

面白いというより不快だつた。こんな役目はごめんこうむりたかつた。もし、Bの胸にまたがつて、一物をくわえさせているのがAでなくて、女性であつたら、ばくも興奮できたに違いなかつたが、これでは嫌悪以外の何ものも感じられはしなかつた。

だが、これも、広い意味でのマゾヒズムであるのかもしれない。Bはマゾヒストであつた。しかし、これをマゾヒズムといい、彼をマゾヒストと呼べるかどうか、ほくなりの疑問がないわけでもない。

だが言えることは、Bもまた孤独なり、ということである。ほくはBの生活を知らない。彼がどうして生活と欲望を両立させているか、その辺の事情も知らない。ほんのゆきずりの縁にしかすぎない。この後、おそらく二度と会うこともないであろうと思う。

Bにとって、しかしほくの存在もまた、同じように奇妙に見えたことであろう。どちらにも、それぞれの世界があり、それをお互いは理解し合えない。このままの平行線だ。

平行線が無数に存在する。それらはまじわることがない。それは

仕方のないことだ。それしかないのではないか。

見回すと理解のできかねる事ばかりである。その理解のできかねる現象の一例として、ほくはほくの生活と意見を投げ出してお見せした。

《M論》がそれである。これもすべてではない。一部である。だから、なお理解できないかも知らない。しかし、ここにこうして、厳然と存在するひとりの人間の、いつわらざる生活と意見を、だれも理解できぬからといって、これを否定することは、やはりできないであろう。

※体当たりマゾヒズム論は、本号三十回をもって完結といたします。なお一月号から想を新たに水尾究先生の「マゾ道奮迅録」を読切連載で、お願いいたしました。ご期待ください。〈裏窓編集部〉



スコリオーズ女学院

春 川 光 彦
中 川 彩 子 絵

一

一八八〇年四月。

イングランド東部の深い森にかこまれたボルスター伯爵邸の一室で、アンはいつもよりも少し早く眼をさました。

昨夜は、伯爵家の一人娘、アンの十八回目の誕生日を祝うパーティが邸の広間で夜おそくまで盛大にひらかれていた。

そして、明日はいよいよパリへ勉強のために出発しなければならない。

アンはサイドテーブルの鈴を鳴らすと立ちあがって窓をあけた。庭園のみずみずしい緑がしみいるように眼に映る。

「おはようございます。昨夜のおつかれはお

とれになりましたか」

小間使のマリーがアンの部屋着を持ってあらわれた。

「とてもいい気持。叔父様はもうお目ざめになつて？」

アンの両親は数年前にこの世を去った。今では叔父のジェームス・ボルスター伯爵だけがただ一人の親族である。

「はい、さきほど。ただ今は書斎でパリの先生とお話をしていらっしゃいます」

「ああ、私の先生。明日は出発ね。今日は忙しいでしょう。早く朝のお支度をさせてちょうだい」

マリーは手ぎわよくアンの肌着を着かえさせ、ピンクのサテン地で張った娘らしいコル

セットを持ってアンの背後にまわった。

「今日はいつともよりきつく締めていいわ。パリではお行儀がとてもきびしいそうだから、コルセットをきちんとつけていないと先生におこられるわね。きつと」

「はい」

マリーはコルセットの締め紐を思いきり引き絞る。

「お前とも当分、お別れだわね。一諸に連れていけるといいんだけど。叔父様にもう一度お願いしてみようかしら」

「ありがとうございます。でもお許しはいただけません」

「どうして？」

マリーの両眼には涙がいったいあふれている。

「どうしたの？ 一緒に行けないとしたって又すぐに帰ってくるわ」

「いいえ、姫様がおきのどくで……」

「おかしなマリーね。私達が年ごろになってパリへ勉強に行くのはすこしも珍らしいことではないわ。今までは家庭教師に教えてもらっていたけど、こんどは立派な学校で寄宿舎にはいつてみんなと一緒に勉強するのよ。パリには従妹のエリザベスもいるし、私はすこしも淋しくなんかないと思うわ」

「その学校のことです。アン姫様は本当に何もごぞんじないのですか」

「学校？ スコリオーゼ女学院というのよ。スコリオーゼってどういう意味だか知らないけど、ドイツ語のようだからドイツのえらい先生がパリにつくった学校じゃないかしら。なんでもヨーロッパのいろいろな国から貴族やお金持の娘ばかり五十人も集まって勉強しているんですって」

「そのスコリオーゼです。伯爵様は姫様に何もおっしゃらないのですね」

「お前は何か知っているの？」

「はい、みんな私が悪いのでございます。どうぞ、姫様お気のすむように罰してくださいませ。皮の鞭でも何でもお受けいたします」
アンはマリーの手をとって、ソファに坐らせてやった。

「さあ、おはなし」

「一カ月ほど前でございます。私が浴槽で姫様のおからだをおながし申しました。その時姫様のおせなかがすこし曲がっているように思えたのです」

「ああ、おほえているわ。お前が、側彎症じゃないか、なんて言って」

「はい。あの時はすぐに私の眼のあやまりだということがわかりました。姫様がおからだ

を横に曲げて坐っていたのです」

「そうだったわね」

「私はそのことをあとで召使い仲間に話しました。なにげない話のつもりだったのです。でも、そのことが伯爵様のお耳にはいりました。そして、先月、ヨアヒム先生が姫様のおからだを診察なさったのです」

「でもヨアヒム先生にはよく診察していただくわ。一年に何度もよ。あの時だって、そう言えばせなかを丹念に診てらしたけど何もおっしゃらなかった……」

「私は昨夜、伯爵様付きのバーバラから聞いたのです。バーバラは伯爵様とヨアヒム先生のお話を立ち聞きしたとかで……。アン姫様は側彎症なのだそうでございます。スコリオーゼとはドイツ語で背椎側彎症のことです。パリの学校は側彎症を治療しながら勉強も教える特別な学校だそうでございます」

「まあ、でも、叔父様はどうして話してくださいませんかかしら」

「はい、バーバラも立ち聞きを見つかったひどく叱られたうえに、固く口留めをされたという事です」

アンの胸は早鐘のように鳴った。

思ってもみなかったことだ。

この私が側彎症——あのいまわしい、恐ろ

しい病氣。背骨が次第に曲がっていつて、成長するにつれてますますひどくなって、ついにはせむしになってしまふ病氣。しかも、今だに原因が不明とか。

「大丈夫よ。そんなに心配することないわ」
「私が悪いんです……」

マリーはポロポロ大粒の涙をこぼし、大声をあげて泣きじゃくっている。

「私が悪いんです。私がよけいなお喋りをしたばかりに、ヨアヒム先生の誤診にきまっています。姫様みたいにおきれいなからだをした方が側彎症だなんて。うそにきまっています。姫様のおせなかはちっとも曲がってなんかいません。うそです……」

「ありがとう。パリへ行つて診てもらえばわかることだわ。誤診だったらすぐにかえってくるから」

でも、どうしてジェームス叔父はアンに病氣のことを話してくれなかったのだろう。いやな話だから、というだけの理由で話をするのを避けたのだろうか。アンが泣き叫ぶのを見るのがつらいからといったそんな理由で。

アンにはよくわからなかった。

ただ、ジェームス叔父は、亡くなった父とは兄弟のはずなのに性格が全く逆で、何か影のある暗い感じの男なのだ。アンも何げない

会話のあいまに、ヒヤリとする氷のような、冷いものを何度か感じたことがあった。

「いいわよ。聞かなかったことにしといてあげるわ。お前やバーバラが叔父様から鞭をいただいたりしたらかわいそうだから。それにもし、ヨアヒム先生の診断の通りだったら、私も早く病氣をなおしたほうがいいわ。いずれにしてもまだ初期でしょう」

アンは無理に笑顔をつくって見せた。

「でも、姫様、側彎症の治療法はそれは恐ろしいものだそうでございます。コルセットやギプスや……」

「コルセットなら今でもはめているわ」

「そんな、そんなものじゃないのです。もつと大きくて固くて重くて、それはとても……」
「大丈夫よ。パリに着いたらすぐに手紙をあげるからね」

翌日、アンは伯爵家の四輪馬車で一人パリへ向かった。

叔父のジェームスは玄関まで見送ってくれた。しかし、アンのからだのことについてはひと言も喋らなかった。

絹のような雨の降る、暗い日だった。

スコリオーズ女学院はパリの郊外、馬車で三十分程の小さな森の中にあった。灰色の石のへいを高くめぐらした広大な建物である。

鉄の門がゆっくりとひらかれ、馬車が前庭に入った時、アンはこの冷い石のへいにへだてられた一角のなかで、何か想像もできないことが行なわれているようだ、と直感的に判断した。

おそらく昔は個人の邸宅であつたろうと思われるその建物は、まるで全体が海の底に沈んでいるかのように深く静まりかえつて、女学院というような華やいだかんじはどこにも見当たらない。

案内を乞うと、アンは直ちに応接室へとおされた。やがて室にあらわれたのは、白髪のいくらかまじった五十年配の婦人である。

「シュミット。オルガ・シュミット。この学院の院長です」

ほほ骨の出た、いかつい感じの老婦人である。名前を聞く前から、アンは、ドイツ人だな、と思った。

「こちらはシュトロハイム博士。ここの生徒の治療のほうを担当しています。博士はスコリオーズ治療の世界的な権威です」

診察もしないで女院長はアンを病人ときめ

てしまっているらしい。

「レディ・アン。ここではあなたをこう呼ぶことにしましょう。あなたはこの女学院へスコリオゼの治療と勉強のためにいらっしゃった。この設備はあなたに充分満足していただけると思います。今日から入学するあなたに、まず、一つだけ約束していただくことがあります。それはこの女学院の規律、規則は絶対に守っていただく、ということ。スコリオゼの治療は、なれるまでほんのすこし苦しいことがあるかも知れません。だからこそ、生徒全員がお互いに規律を守って勉強し、治療をしていかなければならないのです。いいですか、レディ・アン。ここには公爵のお姫様も世界一のお金持の令嬢もいらっしゃいます。しかし、治療中には、あなたの伯爵令嬢という身分も忘れていただきます」

アンは思いきって口をひらいた。

「あの、最初に私のからだを充分に診ていただけませんか。本当に病気かどうか……」

「もちろんですとも。充分に調べますよ」

今度はシュトロハイム博士が答えた。

あから顔の、でっぷりと肥って、すっかり禿げあがった大男である。

「レディ・アン、心配することはありませんよ。スコリオゼは非常に多い病気だ。この

ヨーロッパにも何万人、いや何十万人いるかわからないくらいだ。殊に、レディのような上流階級のお嬢さんに大変多い病気だね。最近治療方法も進歩しているから安心して私にまかせなさい。ここに二、三年いれば必ずよくなりますよ」

アンは寄宿舎に案内された。

壁を白くぬった、清潔な、しかしいかにも病院といった部屋である。三人で一部屋を使い、部屋ごとに女中が一人つく、ということだ。

鉄製の粗末な寝台が三台置かれているだけでほとんど調度らしいものもない。

アンの部屋の仲間はフランス娘のミーナとドイツ娘リザー、二人とも勉強に行っているらしかった。部屋の女中はヒルダ。ついこの間まではどこかの農婦だったのだろう。いかにも力の強そうな女だ。

アンはヒルダに手伝わせて荷物を解きにかかった。

「まあ、見事なレースだね。でも、これはこじやいらぬね」

ヒルダは不作法にアンの衣裳を見て笑う。

「でも、それ、ネグリジエでしょう。今夜かう、使うのよ」

「ふん。今夜ね。でもここにはこの制服が

ありますからね。それにあんたもいずれギブスをはめるんだ。そうしたらこんなもの着られるわけがないだろ」

ヒルダはアンのからだに手をのばすと衣服をぬがせにかかった。

「ふん、かわいらしいコルセットをして。こんなものもこじやいらぬんだよ」

はぎ取るようにしてアンの衣類をすべてぬがしてしまおうと、小さく丸めた布地をポンと放ってよこした。白地に太く紺のしまを染めた目の荒いゴワゴワした布である。

「それが制服だよ。早く着なさい」

アンは手に取って拵てみた。奇妙な型をした、制服とはとても考えられないしろものである。

肩からエプロンのようにかけて、やっとからだの前面をおおい、両腕を袖にとおすと、せなかに三つほどついたホックで留める、ただそれだけのものである。

「あの、これを？」

アンは泣きそうになった。

「制服だよ。この」

「いやです、私はこんなものいやです」

「いや？ だけど規則だね。お前さんはこの生徒でしかも患者なんだからね。それとも規則を守らないつもりかい」

「規則、じゃ他の皆さんもみんなこれを……」
「当りまえさ、世話をやかせずに早く着るんだよ。」

アンはしかたないと思った。すぐに叔父へ手紙を出そう。病院を代えてもらおう。

「じゃ、肌着を取ってください」

「肌着？ 何を言っているんだい。ここでは患者は肌着は許されていないんだよ。お前さんは今、そのために裸になったんじゃないか。じかにその制服を着るのさ」

「これ、これだけですか」

「先生がたがいつでも患者のせなかをすぐに見られるようにしておくのさ。その制服は便利にできているんだよ。ホックをちよつとはずせばすぐせなかが出てくるのさ」

アンはおずおずと制服を肌につけてみた。荒い布地がアンの柔らかい皮ふをかむ。

「あの……」

アンは制服のスカートの部分を要求した。制服の丈は恐ろしく短かく、やつとももの上部がかくれるくらいしかなかったのだ。

「スカート？ そんなものはないよ。制服はそれだけさ」

「でも、これじゃあんまりひどすぎます」

アンはほほを真赤にして、せいっぱい抗議した。

「なにを言っているんだね。今にお前さんはギプスを巻く。そうしたら、下の始末も自分の手ではできなくなるんだよ。その時、私達が面倒でないように、制服は最初から短かくしてあるのさ」

アンは気が遠くなりそうだった。

「寒くはないはずだよ。この邸は暖房には充分に気をつかってあるんだから」

たしかに、全く裸に近い格好にもかかわらず寒くはなかった。しかし、昨日までは想像もできなかったみじめな姿である。

「さあ、お前さんの仲間を見にいこう」

アンはだまってあとにしたがった。

三

薄暗い廊下をいくつも曲がって、ヒルダが立ちどまったのは「体操室」と書かれた扉の前である。

ヒルダのうしろからこわごわ部屋の中をのぞいて、アンは息をのんだ。

鏡のようにみがかれた床の上を白いからだがい廻っている。アンよりもずっと若い少女が五人、一列にらんで大きな円をえがきながら床の上をはっているのだ。

彼女たちの唯一の着衣である制服は部屋の隅へひとまとめにぬぎ捨ててあった。

あさましい姿のまま、少女たちはけものように、四つんばいになって、ぐるぐる廻っている。もうずいぶん長時間続けているのだろう。少女の顔は上気し、呼吸も荒く乱れている。

体操はいつ果てるともなく続く。恐らく、輪の外に長い棒をかまえて立っている女教師の許しがあるまでみだりに止めることはできないのだろう。

少女たちは手のひらと膝に、皮のスリッパのようなものをくくりつけている。

「あなたもやりますか？」

アンを見つけて、中年の女教師が近づいてきた。手に皮のスリッパを持っている。

「いえ、あの……私はまだ診察が……」

「そう。こわがらなくてもいいのよ。これはせなかの筋肉を強くするための体操です。病気が初期の、年も若い患者に効果があるんだけど、あなたはもっと厳しい治療が必要かも知れないわね」

ヒルダが次ぎに案内したのは「教室」だった。庭に面した窓から明かるい光が差しこみ、教壇ではフロックコートの教授が講議をしている。授業はヨーロッパの歴史のようだ。目を生徒たちの座席に転じたアンは危なく声をたてそうになった。

生徒は椅子に縛りつけられている。

アンと同じ制服を着た女生徒、およそ二十人が机に向かって坐っている。しかし、その脚と腰と肩は皮のベルトでしっかりと椅子に縛りつけられているのだ。それだけではない。椅子の背には絞首台のような柱が一本立てられ、生徒のあごには、皮製の首輪がしっかりとはめられてロープで柱に吊り上げられている。

生徒たちは下を見ることが横を向くこともできない。

「皆さん。今日からこの学院へ入られたイギリスのアン・ボルスターさんです」

突然、教授がアンを紹介しはじめた。

「あの、皆さん、ごきげんよう。どうぞ、よろしく……」

「よろしく」

奇妙な発音の返事がかえってきた。

皮の首輪に押えられて生徒たちは口をひらくこともできないのだ。黒い皮があごに厳しく喰い込んでほほのゆがんでしまった少女もいる。

「この懸引椅子もこの博士の発明さ。みんな曲がったせほねを上引きのぼしながら勉強しているのだよ」

ヒルダが得意そうに説明をする。

「あの皮の首輪、あれにはこれから毎日お世話になるからおぼえておくといいね、『グリッソン氏の係蹄』というんだよ」

教室を出るとアンは診察室へ連れていかれた。

やっと診察をしてもらえるのだ。この恐ろしい学院から逃がれるためにはシュトロハイム博士に病気ではない、と認めてもらうしかない。

アンは神に祈って博士の診断を待った。

博士の前に立たされ、助手の手がせなかのホックにかかったと思ったとたん、アンは制服はパラツと足許の床に落ちてしまった。

「さあ、せなかを見せて」

それからしばらくの間、アンはせほねを押され、たたかれ、前後左右に曲げられ、さんざんにもて遊ばれた。教授と助手はアンから知らないドイツ語でしきりに話している。

やがて教授はアンを正面から見つめて宣告した。

「立派なものだ。完全な側彎症だね」

アンは眼の前がまっくらになった。

「君は年をとっているから、かなり程度の高い治療が必要だ。明日から早速はじめてあげよう。心配することはないよ」

アンは涙があふれてくるのをどうしようも

かった。

「あの……」

「なに、治療の期間かね。それは、私にもわからない。二年か三年、いや五年かかるかも知れない。私の扱った患者には二十年治療を続けたのがいた。まあ、ここにはあらゆる治療器械がそろっているから、安心してまかしておきなさい。君は規則を忠実に守って治療を従順に受ければいいのだ」

アンは遂に声をあげて床に泣きくずれた。

夕食はとてものを通らなかつた。

アンは泣きながらジェームス叔父に手紙を書いた。

夜、同室のミーナがやさしくアンをなぐさめてロビーへ連れていってくれた。

そこには制服を着た少女たちが十人ほど静かにくつろいで雑誌などを眺めていた。大きな声で話をするのは禁じられているのだそう。

だ。みんな笑顔でアンを迎えてくれた。

「ここに居るのは休息期間の人達よ」

「休息期間？」

「キプスを巻かれたり、器械ベッドに入れられたり、きびしい治療が続くと一週間くらい休息期間が与えられるの」

「ミーナ。あなたはいつからここに？」

「そろそろ一年になるわ。一年のあいだ泣か

なかった日なんて無いくらい」

ミーナは十七歳。お父さんは南フランスで大きな農場を経営しているのだそうだ。

「アン。あなたには悪いけど、今夜、私、声をたてるかも知れないわ」

ミーナがわびるように言った。

「今夜から、私、寝台で懸引されるの。なれるまでは苦しいわ。私、弱虫だから声をだすかも知れない。お疲れなのに悪いわ」

「そんな、私のことなどどうぞお気になさらないで」

その時ロビーへ一人の娘がはいってきた。

アンは悪いと思いながら、その姿をじっと眼で追ってしまった。

ギプスというもののなのだろう。その少女は腰から胸、首に至るまで、まっ白い、固い、石膏で固められているのだ。

ギプスの上端は、高いカラーのように彼女のあごから後頭部にまで達している。ギプスであごを突き上げられ、顔は正面の上方を向いたまま、きっちり固定されているのだ。

横を見ることもできず、少女はまっすぐに歩いてピアノに向かった。固いギプスのからだをピアノ椅子に置いて、彼女のしなやかな細指からやがて柔らかいウィンナワルツの調べがロビーいっぱいに流れてきた。

「彼女は今、あれでも休息期間なの。又、矯正がはじまると、両腕も、ことによったら脚までギプスで固められてしまうでしょう。そうしたら彼女のピアノも聞けなくなってしまうわ」

あんな重いギプスをはめられて、それでも休息期間なのだろうか。

「彼女の名前はエレナ・ウンベルク。オーストリアの公爵のお姫様よ」

「エレナ？　まあウンベルク家のエレナ……」

アンは思わず大きな声を出してしまった。

ウンベルク家とボルスター家は遠い親戚にあたる。エレナとは幼い時、なんどか一緒に遊んだ記憶もあるのだ。

アンはピアノのそばへ飛んでいった。

譜面を見ることもできず、エレナは視線をピアノの上に掛けられている絵画に固定して夢みるようにピアノを弾き続けている。

彼女の首はギプスでせり出されたように細く長く伸び、胸の部分には二つの丸い窓があられてレモンのような乳房が顔をみせている。

「エレナ、しばらくね、ごきげんよう」

「まあ、アン……」

アンやエレナ、貴族の娘たちは、挨拶するとき、ごきげんよう、とのみ言うようにしつ

けられている。しかし、この場合、いかにも不自然だった。エレナはほとんど口を開くことができず、会話も充分にはできないのだ。二人はすこしずつ自分の話をし、手を取りあっている泣いた。

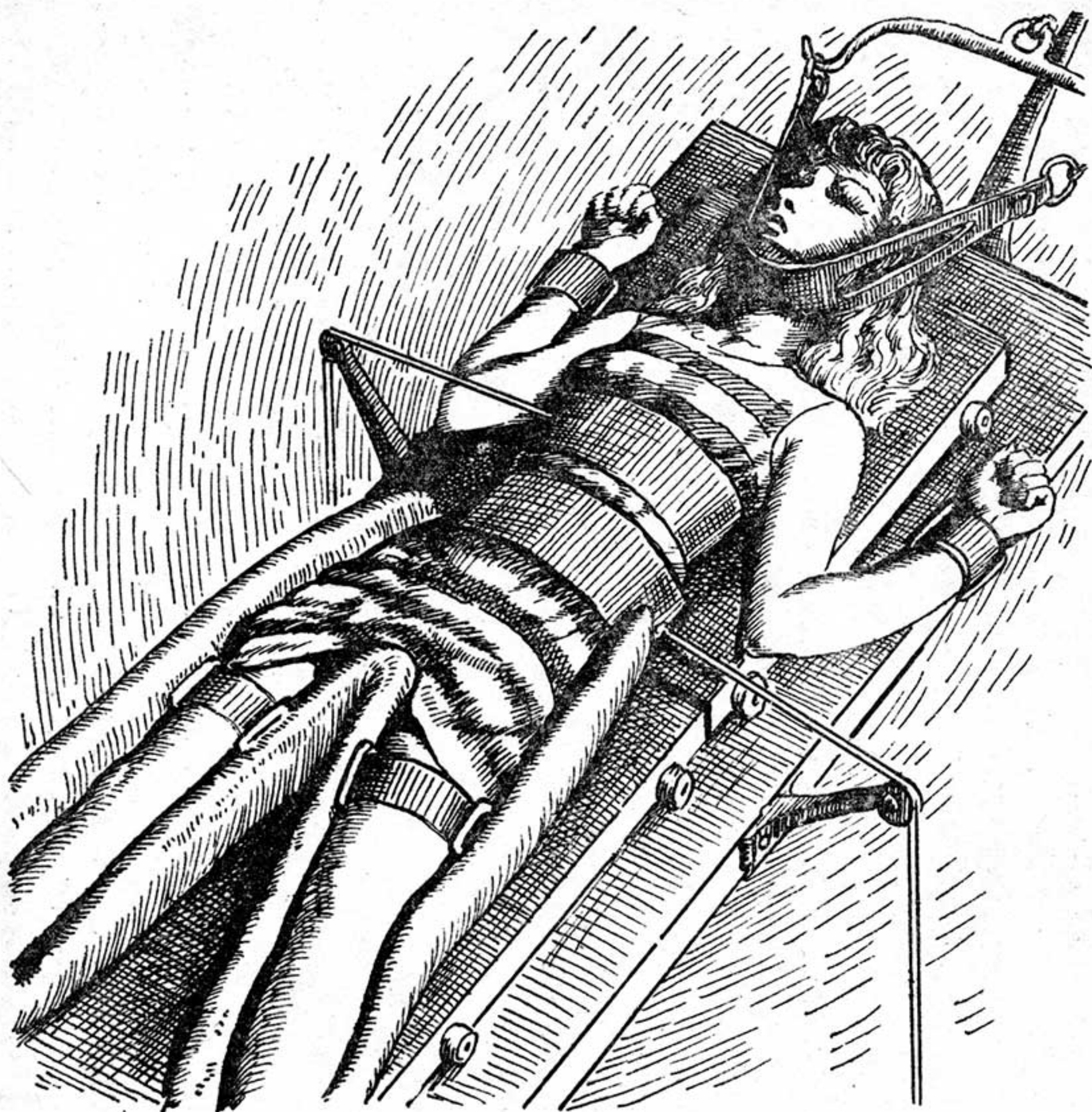
エレナはアンと同じ十八歳。もう二年もこの女学院にいるという。最近ではピアノを弾くことだけが心の慰めになっていた。二年間にさまざまな治療をうけ、器械の中で失神したことも数えきれないほどだという。そして手をかえ品をかえ、いろいろな形をしたギプスを柔らかい肉体に試みられた。連日、休みなくギプスで責められ、しかもその間は制服すら着ることを許されない。

話を聞きながらアンはこれからの自分の運命を想像し気も遠くなる思いだった。

ミーナに連れられて、アンが寝室に帰ったとき部屋の模様はだいぶん変っていた。アンのベッドは中央、白いシートできちんと整えられている。そして右側、ミーナのベッドはシートも柔らかいマットレスもない。

鉄のベッドの上にはただ一枚の大きな板が置かれているだけだ。その板の中央を丸木舟のような形をした白いギプスが占領している。

「これがギプスベッドよ。私は今夜からこの



石のお舟にすっぽりとはまって寝るの」

ギブスベッドは、ミーナのからだにきっちりと合せてつくったもののようにだ。

左のベッドには、もうリザが寝ていた。

アンは近かよって挨拶する。しかし、リザはろくに返事もしてくれなかった。

彼女もエレナのようなギブスをからだに巻かれている。あごから胸、腰、更に両脚の膝まで。自分のちからでは全く動くこともできない。

リザが口をきかないのはギブスが苦しいからだろう、と思いアンはそっと傍を離れた。

「さあ、寝ていないと叱られるわ」

ミーナはベッドにはいあがると、自分からギブスベッドの中へ入った。

ギブスはミーナの頭の上から首、脇腹をとおって両の足首まで、彼女は両脚を三十度ほどにひらいて、びたっとギブスの殻に入ってしまった。ギブスの殻はミーナのからだの線と全く同じに、驚ろくほど精巧につくられ、彼女が自分の意志で動かせるのはもはや両腕だけになってしまった。

「アン、あなたも早速この石のお舟を作られるわよ」

扉があいてヒルダが入ってきた。小さな車を押している。

車の上にはあの黒い皮の首輪、さまざまな長さの皮帯、皮紐、それに重そうな鉄の錘がいくつも積まれている。

「さあ、斜面懸引ですね」

ヒルダはミーナに近づいた。手には黒皮の「係蹄」を持っている。

ミーナはギブスベッドから頭を持ちあげ、おとなしくその首輪をはめてもらった。係蹄はミーナのおと後頭部にきっちり当てがわれ、耳の下の留金で締められる。更に長いロープが係蹄の先端に結ばれ、ロープはミーナの頭上にあるベッドの鉄柱をまたいで床にたらしめられた。

鉄の錘が、ロープの先端にくくりつけられる。ぐい、とミーナのおとが上に引かれた。

しかし、その辺はまだ序の口だった。

ヒルダがベッドのハンドルを操作すると、ミーナの頭の方が高くあがり出した。ベッドも、板も、ギブスベッドも傾斜する。板とギブスベッドの間には数個の滑車が仕込んであった。ガラ、ガラと音をたて、ギブスはミーナのからだを乗せたまま足のほうへずり落ちようとする。そのからだを逆に引き上げようとするかのようにヒルダはロープの錘をどんどんふやしていく。

「さて、今夜は十五キロくらいにしとこうか

ね」

「いや、いや、お願い……」

とぎれとぎれの哀願がミーナの口から洩れた。

「いや、許して、十キロ、十キロにして、お願いです、ヒルダさん……」

係蹄に押えられ、必死の言葉が続く。

「だめだね。十五キロだよ。がまんしてみるんだね」

ベッドの傾斜はますます急になり、頭上の錘はどんどん増えていく。

十七歳のミーナの体重と、それよりも重そうなるギブスベッドと、この二つがずり落ちようとするちから、それとロープに結ばれた十五キロの鉄の錘、これらのつりあいとれたところでベッドは傾斜をするのを止め、ヒルダの作業も終わった。上下に走る強いちから、それを支えているのは、ミーナの細い首なのだ。哀れにもその首はのびきっていた。

「くうーっ……」

黒皮の係蹄がほほに喰い込み、もうミーナは口を開くこともできない。

ギブスベッドには要所要所に黒い皮のベルトがついていた。

ヒルダは次ぎに、そのベルトでミーナのからだをギブスに縛りはじめた。足首、もも、

腹、胸と肩、更に額までも黒いベルトがギブスに縛りつけていった。

なんとというむごいことをするのだろう。係蹄に引っ張られ、ギブスの殻に挟まれてミーナは頭を動かすことはできないのだ。その額まで、なぜ縛る必要があるのだろう。

更に幅の広い皮帯がミーナの胸に、脇腹に巻かれ、ベッドのサイドに錘がくくりつけられ、彼女のやせぎすのからだは左右からも引き絞られた。

「くっ、くーっ、う、うっ……」

よほど苦しいのだろう。ミーナの口からは低い呻き声が断続して洩れてくる。

「しょうがないね。そんなに泣くようじゃ、腰の用意もしておいたほうがいいね。夜半に起こされちゃかなわないから」

「あっ、あーっ、い、いや……」

ヒルダの言葉にミーナは動かぬからだをよじって、はげしく拒否の意を示した。

そんなことにはおかまいなく、ヒルダは数枚の布と青いゴム布を持ってきた。そのゴム布の形をみてアンはほほを真っ赤に染めた。

あれだ。赤ちゃんが使う腰のカバーだ。ミーナは、あんなはずかしい物を腰に着せられる。ヒルダはなれた手つきで、ミーナのももの皮ベルトをいったん解くと、腰を浮かさせ、

ギプスとの間に布をはさみ込んだ。ギプスのためにひろげられた脚のあいだに布が詰められその上から青いゴム布が、びっちりとはめられる。可哀いそうにミーナは赤ちゃんと同じに扱かれて何の抵抗もできないのだ。

アンはリザのほうをみた。彼女は、天井を向いて知らん顔をしている。アンは気がついた。リザの腰にもやはり青いゴム布が巻かれているのだ。さき程はギプスのほうに気をとられていたが、そのこんもりと盛りあがったゴム布の様子は、やはり赤ちゃんのように何枚も布を重ねられているのだろう。

ヒルダはミーナのゴム布を左右の締め紐できつちりと締めあげ、ポン、ポンと平手でたたいてみて満足した。たしかに女学院の制服は便利にできている。腰の部分をちよつとまくりあげるだけで、こんな作業も楽にできるのだ。

ヒルダは最後にミーナの手首をつかむと左右にひろげて皮帯でベッドの金具に縛りつけた。

「なぜ、手まで縛るんです。それじゃあんまり……」

アンはたまらなくなつて抗議した。

「お前さんはだまっといで。明日は我が身なんだよ。手を縛っておかないと夜、自分で懸

引具をはずしてしまふからさ」

「そんな……」

ヒルダは丸い皮の輪を持って今度はアンに近づいた。犬の首輪そっくり、鉄の鎖までついている。

「さあ、ベッドに寝て、首を出しな」

犬の首輪はアンの細い首に巻きついた。

「ベッドにつないでおかないと、お前さんがミーナの懸引をはずしてしまふといけなからね」

犬の首輪には小さな錠がかけられた。

「いやです、はずして、私、ミーナさんには

なにもしませんから」

「ふん、あてになるものか」

ヒルダは鎖を短かくしてベッドの頭部につないだ。

「お願い、いやです、こんなもの……」

「うるさいね。おだまり。静かにしないとここには口にふたをする道具だつてそろつてい

るんだよ」

ヒルダは出ていった。

犬の様に首輪をつけられてアンはベッドへあおむけに寝ている。涙が止めどもなくあふれでてシーツをぬらした。

「あーっ、あっ、あうーっ……」

ミーナの苦しみもだえる声が低く続いている。

る。

「本当にうるさいね。ミーナの泣虫にはいやになっちゃうわ」

突然リザがしゃべりだした。

「苦しいのはお互いさまさ。病気なんだからしょうがないじゃないか。泣いたからって痛いものは痛いんだよ」

「でも、リザ……」

「ボルスターさんも疲れているのにお気の毒ねえ、眠られやしないでしょう、隣りであるに泣かれちゃ」

「私は、私はかまいません。ミーナは苦しうだわ、そんなにおっしゃらなくても」

「アン、私はここにもう、四年もいるんだよ。泣いたってしょうがないのさ。側彎症の治療法は伸ばすか、押しつぶすか、固めてしまふが、この三つの繰り返し、いずれにしても苦しいものばかりだよ。私も最初の二年間はずいぶん泣いたものさ。でも仕方がない。がまんするより他ないのさ。私は耳にせんをづめて眠るよ。あなたにも貸してあげようか」

「いえ、けっこうです、私はとても眠れそうにありませんから」

四

翌日、アンはジェームス叔父に二度目の手

紙を書いた。

『ひどい、あまりにもひどいところです。すぐにも早くアンを連れ戻してください。他のお医者様にかかりたい。もし、どこの病院でもこんな風に患者を扱うのなら、アンは病気がなおらなくてもいい。一生、片輪になってもかまいません……』

アンは更に、小間使のマリーにも書いた。『せめて、お前でもいてくれたら、と思っています……』

午後、ギプス室へ連れていかれた。

ギプスベッドをつくられるのだ。ギプス室には巨大な、恐ろしい形をした器械がたくさんならんでいる。

その中の一つ、三本の支柱が下から突き出した鉄製のギプス台がアンを待っていた。

制服をぬがされ、助手にかかるがと抱きあげられて三本の支柱の上に寝かされる。

支柱がアンの肩と腰と膝を支え、うつ伏せの不安定な姿勢でアンのからだは空間にさらされた。

皮製の係蹄があごにはめられる。

アンのせすじにせんりつが走った。いよいよミーナと同じようにされるのだ。

足首にも皮の懸引具がはめられた。

器械のハンドルが廻わって懸引が開始され

た。係蹄は上に、足首は下に、ぐいぐいと引かれてアンのからだはのびていく。

更に、両の手首にも皮具がはめられ、これも頭の上へ強力に引っ張られた。

「あっ、あーっ、く、くびがいたい……」

幅の広い皮のベルトが胸に巻かれ、右側にぐいと引かれる。同じベルトが今度は腰と肩にまわされ、反対の左側にぐっと引かれた。

「うーっ……」

三本の皮ベルトでアンのせぼねは奇妙な、「くの字」に曲がってしまった。

首と足の懸引はますます強くなっていく。

「うーっ……」

アンのからだは細くのび切った。

「このくらいでいいだろう」

アンのせなかを平手でたたいて見て、シュ

トハイム博士が言う。

思いきりのばされたアンのせなかの上に今度はギプス包帯が重ねられていく。

ギプスの粉末をまぶした包帯を一度、湯にひたしてからアンのせなかにひろげていくのだ。頭の上からせなか、両足の先端まで、アンのからだは見る見るギプスに埋められてしまった。ギプスは何枚も何枚もつぎつぎと巻かれていく。だんだんそれが固まってきて、アンはその重さに呻いた。頭から足まで一枚

の厚い石に押し潰されていく。アンのからだを僅かに支えていた、肩と腰の支柱がきりのように皮ふに喰い込んできた。

「うっ、うーっ、くっ、く、くーっ……」

アンの苦痛が極限にたっして意識が薄れてきたとき、やっとかからだを潰していた石の板が取り除かれた。

ギプスベッドの型取りが終わったのである。

あとはギプスを乾わかし、皮のベルトをつけて、一週間ほどで完成する。

それから毎晩、ミーナと同じ斜面懸引が

アンのからだにも加えられるのだ。

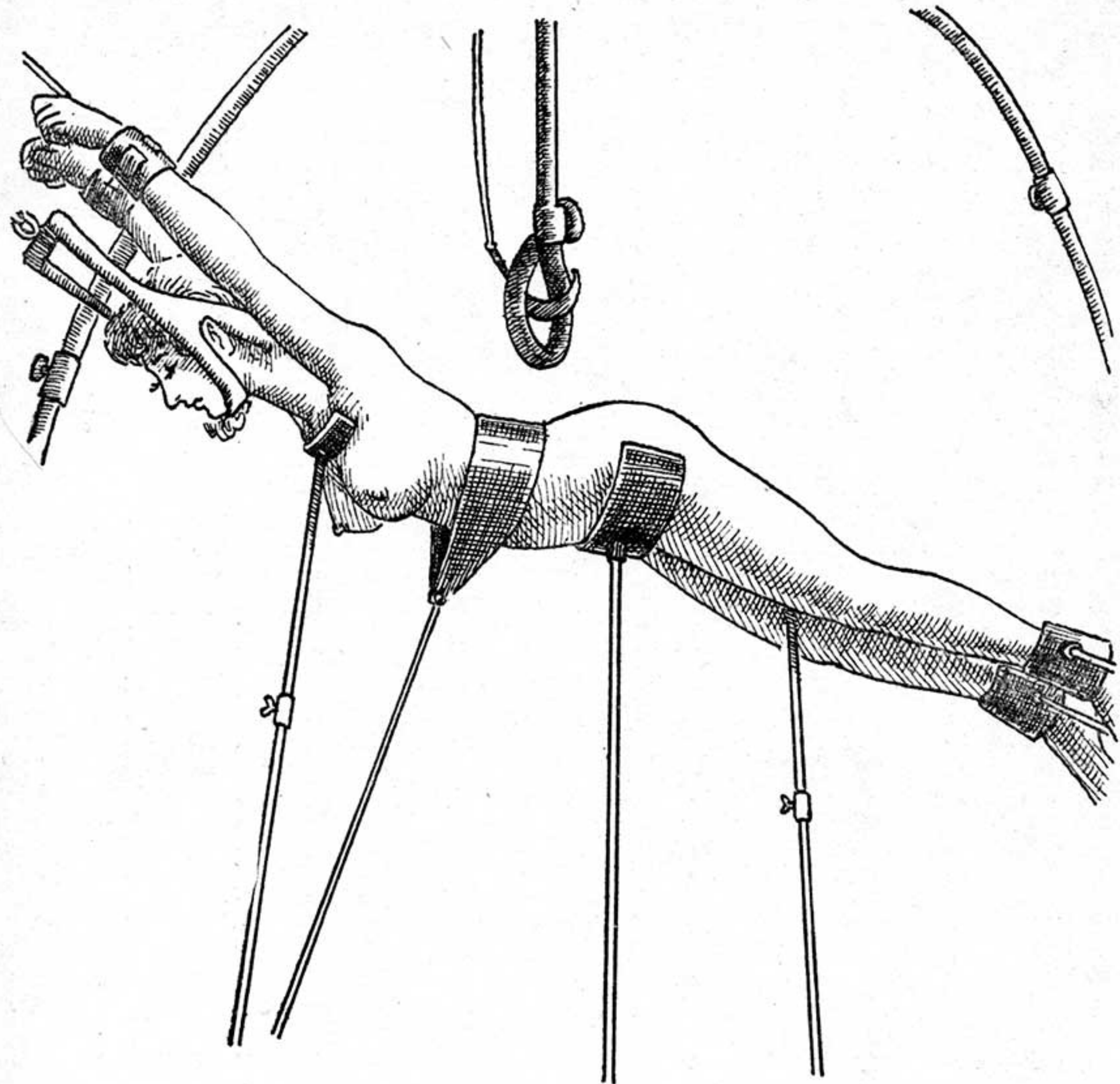
その夜、心身ともに疲れはてたアンは首に犬の首輪をつけられたまま、二日ぶりの眠りに落ちた。

五

規則正しい、治療と勉強の生活が開始された。

朝八時起床。洗面。歩けるものは食堂に集まって簡単な朝食。部屋の掃除をして、九時半に教室へ入る。

自分の席に坐るとまず椅子についた皮ベルトで足首、もも腰をしっかりと縛りつける。肉に喰い込むくらいに縛っておかないと、あとで見廻る助手に叱られ、男の恐ろしいち



からで縛りなおされるのだ。

アンの席は最前列。まあたらしい黒皮の係蹄が背の柱にぶら下がっていた。その係蹄をきちんと自分の首にはめ、助手が来るのを待たなければならない。

九時四十五分、四人の若い助手が教室にあらわれて、少女たちの首を順に締めあげていく。椅子の背についたハンドルを廻わし、係蹄で首を思いきり引き伸していくのだ。

「ひーっ、くくっ……」

教室のあちこちでちいさい悲鳴がおこる。更にイスの背から二、三本の支柱が少女たちのせぼねめがけて突き出される。

アンも左の胸に一本、右の脇腹に一本、鉄の腕がぐりぐり押し当てられた。最後に制服のせなかの割れ目から肌に直接、突き刺すような支柱が加えられる。

十時。拷問椅子に坐らされたまま、教授の授業が始められる。そして、午後一時まで三時間、生徒たちは全く身動きできずに勉強しなければならない。

休憩はなし、生理的にこまっても中座をすることは許されないのだ。

アンは勉強の内容など全然耳に残らない。ただ三時間、じっと拘束の苦痛に耐えていた。しかし、他の生徒たちは、一日のうちで

この授業時間が一番からだの休まる時間だ、という。たしかに、午後の体操や夜間の懸引にくらべればはるかに楽な治療法だった。

昼食を簡単にすますと午後はそれぞれの病状に応じて体操室か器械室へいく。

特にひどい器械治療を受けるものは、その前に浣腸室へ行って浣腸をしてもらうことになっっているのだそう。からだの中のを出してしまわなければ激しい器械治療は受けられない。器械に縛られたまま、気を失う娘もさらにいるからだ、という話である。

浣腸という言葉を聞いただけでアンは真っ赤になった。何という、はずかしいことだろう。早く、早くジェームス叔父に救けてもらわなければならない。

アンが最初に受けた治療体操は「ブランコ」と呼ばれているものだった。

アンの眼の高さに横棒が一本渡されただけの簡単な器械である。太い横棒は中央部に皮が巻いてある。生徒たちの汗を吸ったのだろう、皮はじつとりと黒ずんでいた。

助手はアンのからだをかかえあげると、せなかをそらせるようにして、横棒の上にのせた。アンのせなか、肩の骨の下あたりにちょうど固い横棒が当てがわれる。両手をうしろへ横棒をかかえこむようにすると、手首を下

に引いて皮ベルトで左右の柱に縛りつけられた。

助手がアンのからだから手を放す。

とたんに苦痛がせほねを襲った。体重のすべてが固い横棒にかかっているのだ。

「さあ、両足を揃えて振る。下半身をブランコのように振るのだ」

助手の声にアンは、けるようにして両足を振った。せなかを軸に、下半身はブランコのようにゆれる。

五、六回振ったところで助手はアンの足を止めた。砂袋のようなものが用意されている。

アンは足首を揃えて皮ベルトで縛られ、更に重い砂袋が二つ足にくくりつけられた。

「さあ、振って」

アンの周囲には三、四人の少女が同じブランコ体操を受けている。

中年の女教師が棒を片手に号令をかける。

「アン、ドウ、アン、ドウ、アン、ドウ……」
バレエのレッスンのようにフランス語の号令に合わせて少女たちは足を振る。

アンも歯を喰いしばって縛られた足を振った。せなか焼けるように痛い。

体操室は三方の壁に大きな鏡が取りつけてあった。体操を続けながら自分の姿勢をよく見てなおすようにするためだ。

しかし、アンの着ているものはあの短かい制服なのだ。足を振るたびに、あさましい、はずかしい姿が鏡にうつるのだ。

ブランコ体操はいつまでも続けられた。

鏡にうつる少女たちの中には砂袋を足に四個もつけられた者、鉄の錘をくくりつけられた者もいるのだ。

十分経過した。二十分。アンはもうせなかの激痛に耐えられなかった。

「アーッ、やめて、おろして下さい……」

女教師は聞こえないかのように、号令を続けていく。

「アン、ドウ、アン、ドウ……」

六

一週間たった。

ジェームス叔父からの返事はこない。返事の便りよりも、ギブスベッドのほうが進先にアンの部屋へ届いた。

マットレスがはずされ、板とギブスベッドが置かれた。アンはおそろおそろギブスの中に入った。石のお舟にまず腰をおとし、両脚をひろげて殻におさめ、ゆっくりと上半身を倒してギブスにおさまるのだ。ギブスは冷く恐ろしいほど固かった。

ギブスベッドを作るとき、支柱が肩と腰だ

けしか支えていなかったもので、当然、胸と腹は下へ落ちこんでいた。そのまま型をとったギプスに寝れば、からだは弓なりに、胸を張った姿勢になる。頭と足を強く引き伸ばされた上に、幅広のベルトでせなかをくの字に曲げて作ったギプスだから、アンがすっぽりと中に入っても、きちんとからだに合わなかった。

ヒルダが手押車と一緒に入ってきた。

「さて、今夜からアンの懸引ね」

ヒルダはうれしそうだ。

「お前さんはまず五キロから始めようかね」

アンはややホッとした。その頃、ミーナは十七キロの錘を首にぶら下げていたのだ。

「最初からミーナみたいな錘を使ったら、あごの骨が折れてしまうんだよ。すこしづつならしていかなければね。三日目ごとに一キロづつふやしていこうかね」

首に係蹄が巻きついた。まあたらしい皮のにおいが鼻をつく。ベッドが斜めになった。錘がくくりつけられる。

「うっ……」

五キロでもかなりの苦痛だ。首筋がきゅうっと痛む。歯はがっかりと喰みあってもうひらかなない。左右の足首にも錘がつけられた。胸と脇腹にも幅広のベルトが巻かれて錘が

ぶら下げられた。

ギプスベッドを作った時と同じ形である。

アンのからだは奇妙な形に曲がり、伸ばされてギプスの殻にすっぽりおさまったようだ。

皮ベルトがアンのからだを更に縛りつけていく。幼い頃、頭に巻いたりボンのように、大きなごつい黒皮のベルトがアンの白い額を縛りあげた。両手も左右にひろげてベッドに縛りつけられる。もう完全に動けない。

最後は、赤ちゃん用の青いゴムカバーだ。

「それはやめて、決して、決して、そそうはいたしませんから」

アンは不自由な口で必死に哀願した。

「あてになるものかね。お前さんは、まだ懸引の本当の苦しさをしらないから、そんなことを言っているのさ。第一、ギプスベッドだって生れてはじめてなんだろう。ギプスと懸引にからだがなれるまで、まず一週間はかか。最低、三日間は一睡もできずに脂汗を流して苦しむんだよ。浣腸もしておいたほうがよかったかも知れないね」

浣腸という言葉聞いてアンは観念した。

ギプスと脚のあいだに白い布が何枚もはさまれ、たつぷりと重ねて、ゴムカバーでおおわれる。

「あーっ、あっ、あーっ……」

まるで赤ん坊になってしまったかのようにアンは低い声で泣いた。懸引よりもギプスよりもアンにはこの扱いがつかかった。

しかし、夜更けと共にヒルダの言葉が本当になった。時間がたつにつれて、まるで生きもののように首の錘が重くなり、係蹄があごに喰い込んできたのだ。首すじが、あごが、胸が、脇腹がきりきりと痛みはじめた。

「う、うっ、うーっ……」

けものように呻いてアンはもだえた。

首がちぎれ、ねじ曲げられた脇腹がさけるのではないかと思った。

すこしでもからだを動かすことができればまだ苦痛を軽くすることができたかもしれない。しかし、アンには痛みをまぎらわすべはまったくなかった。自分のからだで動かすことのできるものは十本の指だけ。

ギプスベッドをじっとりと汗でぬらし、やりばのない苦しみにただ、係蹄でふさがれた口から低く呻き声を洩らすのみだった。

明けがた、意識が遠くかすんでいくのを感じ、アンはヒルダの用心が無駄でなかったことを知った。

七

アンがギプスベッドに入ってから、一週間

たった。

最初の三日間、からだ中を襲う苦痛に、石のお舟の内側を、ぬらぬらと、脂汗でぬらし、て呻きつづけた。四日目になると意識ももうろうとしてきた。肉体が疲れ果ててマヒしてしまつたのか、それともアンの柔らかい肢体が固い石の殻に強制される姿勢にすこしづつなれてきたのか、からだの節々の痛みは次第に薄れてきた。追いかけるようにヒルダは錘をふやしていく。六キロ、七キロ、アンのあごは押し潰されそうだ。

夜は、やっと浅い睡眠がとれるようになった。そして、一週間目の朝。

アンはシュミット院長の前へ呼ばれた。

「レディ・アン。あなたは、叔父様にお手紙を出したそうですね。ここをお出になりたいと。今日、私あてにご返事がまいりました。叔父様は、こうおっしゃっています。アンのわがままは許さない。規則通り、きびしく治療をしてくれるように。それから、あなたに對して、完全に病気がなおるまで家に帰えることは許さない。当分の間、女学院を自分の家と思うように、というお言伝けでした」

絶望だ。アンはへなへなと院長室の床にぐずれ落ちてしまつた。

そして、家に手紙を出した罰でもあるかの

ように、その日から器械治療の開始を申し渡された。

アンは助手にだきかかえられるようにして器械室へ運ばれた。

まるで中世記の拷問室のように恐ろしそうな器械がところせましと並んでいる器械室である。助手はなにやら準備をはじめ、アンはそれらの巨大な器械類がどのように自分のからだを責め、苦しめるのだろうか、放心したような表情で見まわしていた。

ちょうどその頃、アンの病室に二人の男がはいってきた。一人はシュトロハイム博士、一人はジェームス・ボルスター伯爵である。

ミーナもリザも時々あるこうした訪問客にはなれていた。

ミーナはギプスを巻く日がきまり、特別に仕上げの懸引とばかり、制服もはぎ取られ、首に二十キロ、両の足首にも五キロの錘をぶら下げられてギプスの上で苦痛に胸をけいれんさせていたのだ。

ジェームスはミーナの斜面懸引を、更にリザの大きなギプスを満足げに見まわし、ミーナの皮ベルトや懸引ロープ、リザの固いギプスを何度も手で押え、たたいてみてはほほに冷い笑いを浮かべて出て行った。

器械室ではアンの治療がはじまっていた。

アーチ型のパイプの中にくくりつけられ、アンは生徒たちが「ふりこ責め」と呼んでいる治療を受けていた。

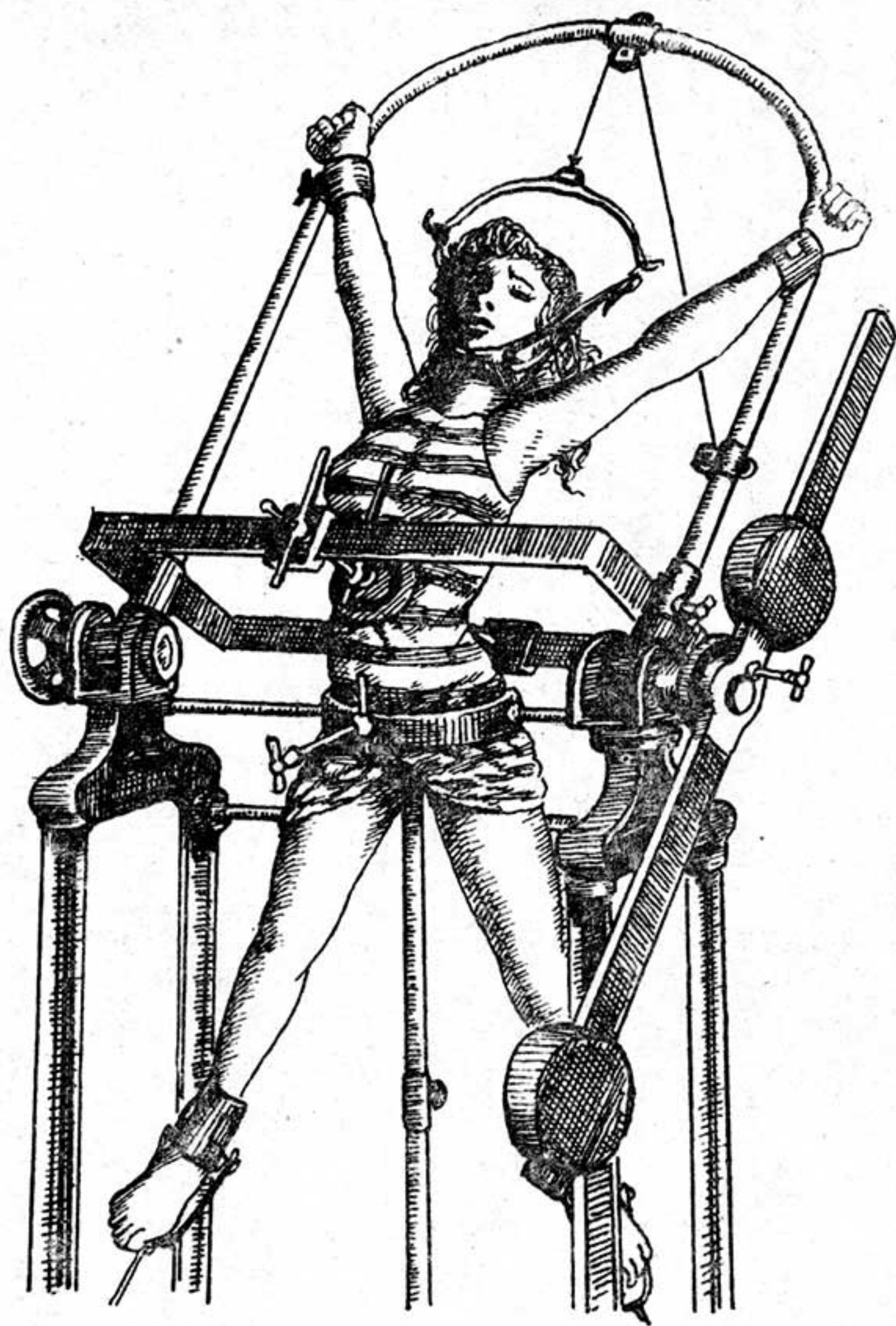
絞首台のような巨大な器械の中に立たされ自転車のサドルのような小さい腰かけにまたがらせられた。腰を太い皮ベルトで何重にも嚴重に縛りあげられた。首には皮の係蹄が喰い込み、両手は限界まで上方に引っ張られた上でパイプに縛りつけられた。器械の床が下降し、つま先き立ちになる。係蹄が締めあげられる。後方から伸びた支柱がせなかに突きささり、皮ベルトがせほねをくの字に押し曲げた。サドルが喰い込んで腰が痛む。

スイッチが入れると、アーチ型のパイプが前後に振れ動く。腰を固定されて、アンの上半身も前に倒れ、後にそりかえり規則正しく振り動かされるのだ。

カタン、カタン、……器械は固い音をたててアンの上体を振り廻す。

腰の関節は皮ベルトでしっかりと固定されている。アンはせほねをバネのように曲げて器械の振動についていかなければならない。せほねを柔らかくしよう、という試みなのだろう。上下に引き伸ばした上で繰り返えし繰り返えし折り曲げられるのだ。

体操室と同じくこの器械室も三方が鏡で



きていた。制服をとられ、はずかしい姿で器械にはりつけられているアンの前にも巨大な鏡がはめ込まれていた。

そして、その鏡の向う側の小部屋にはシェームスとシュトロハイム教授、それにシュミット院長が坐ってアンの治療を眺めていた。鏡は正面から見れば鏡だが、裏から見るとガラス同様に部屋の中を自由に見られるようになっていたのだ。

「あつ、ああつ……ああつ、あつ……」

器械は休みなく動く。アンのからだ次第に疲れてきても器械の速度は変わらない。

「なかなかいい娘さんですな」

シュトロハイム博士がつぶやいた。

「まったく見事なからだをしている。均勢もとれて非のうちどころがない。今、学院にいる娘たちのなかでも、スタイルの美しさでは一番じゃないですか。あんな健康そのもののからだを、スコリオーゼにしたてるんだから……」

「ご寄附のほうも、たっぷりいただきませんか」とね」

シュミット院長がすかさず引きついだ。

「最近はこちらへ入院を希望する親たちが多うございましてね。最新式の電気治療器械を置ける一棟を増築しなければならぬですよ」

ジェームスはアンの姿を見つめたまま、

「だから、あの娘の面倒をずっとみてくれるのなら規定の入院費の十倍を払おうじゃないか。おい、それより、あの器械はもっと速く動かないのかね」

「なりますとも、だがレディ・アンが泣きますよ」

シュトロハイム博士は、壁のボタンを押した。器械室の柱に赤いランプがつく。

それが合図なのだろう。助手がアンの器械を止め、スピードを調節して再びスイッチを入れた。

「ひいーっ……」

アンのからだは倍に近いスピードで激しく前後に振り廻わされる。

「ほら、お姫様が泣きだした。最初からこれをやられちゃたまりませんね。適当なところで止めてやらないと気を失いますよ」

博士はにやにや笑いながら、伯爵のほうに向きなかつた。

「ところで、イギリスとフランス、海をへだてていてもいろいろな話が聞こえてまいりましてね。最近私は面白い話を耳にしました。ジェームス・ボルスター氏は若い頃、伯爵家を飛び出した。二十年間、ほとんど行方知れずのありさまで、お父様やお兄様は大変心配さ

れていた……」

「東洋の探険を続けていたのだ」

伯爵がはき捨てるように言った。

「そうでしたな、東洋からおかえりになった時はお父様は亡くなっていた。そしてジェームス氏はお父様から分けていただいた財産をほとんど使いはたし、無一文に近い状態だった。間もなく、お兄様の伯爵ご夫妻が相ついでお亡くなりになった。ジェームス氏は伯爵家を継がれ、アン姫様の後見人、財産管理者になられた」

博士は、ひとりごとのように続けていく。

「アン様がお年頃になられた。もし、しかるべきで縁組みが決まり、むこ殿をお迎え、ということになると、ジェームス様、あなたの物は何もなくなる。あなたが管理していращやるアン姫様の莫大な財産は、あなたの前から消えてしまうのですな……」

「だから、どうだと言うのだ」

「ですから、アン様は間違いなく、私共でおあずかりいたします」

シュミット院長が口をはさんだ。

「この女学院は十五歳から二十歳までの娘さんをおあずかりしております。ですから、あと二年間は問題ないとして、そのあとは私共がスイスのレマン湖畔に持っておりますもう

一つの病院へ、お廻してもよろしいです」

「まあ、その時のお話ですな」

「私が過去、四十年間にドイツとフランスで治療した側彎症の娘さんはおよそ三千人、そのうち約十パーセントが治療中に発狂し、約二十パーセントが自殺をいたしました。伯爵様のご希望次第でアン様のおからだがレマン湖に浮ぶことだつてあるわけです。まあ、アン様が一生ご結婚のできないおからだになればよいのか、それとも永久にボルスター館におかえりにならないほうがいいのか……」

ジェームスは返事をしない。いらいらと葉巻をくわえている。

「オーストリアのウンベルク家の娘もここにいるそうじゃないか」

突然、伯爵は話題を切りかえた。

「はい、いらつしやいます」

「エレナはやはり側彎症なのか？」

「アン姫様と同じようなもので。あの方もご不用になったお姫様なのです」

「うーむ。あそこも公爵が亡くなってからは後妻のビルギットが完全に邸を支配しているようだからな。ビルギット夫人としては自分の子供に公爵家を継がせたいだろう。先妻の娘のエレナはいらなくなるはずだ……」

「そのエレナをいづれこの鏡ごしにお見せし

ましよう。今、なかなかいいギプスをはめて苦しがつていますよ。ところで伯爵様、もしよろしかったら、二カ月ほどしてもう一度、パリへおいでになりませんか。アン姫様はこれから毎日、器械室でかなり苦しい治療を受けられます。まあ今日のなどは、ほんの序の口なのです。そして、一カ月たつと最初のギプスを巻きます。これはさっきのリザのよりもっと大きくて重い。足から胸、頭のとっぺんまで。あの可愛いらしい顔も、目と口と鼻だけ残こしてギプスの中へ埋めてしまいますよ。そして、ギプスことからだかくの字に曲がつてしまう激しい矯正をやるのです。その矯正のピークがちょうど今から二カ月くらい先になりますかな。ちよつとしたみものになると思いますがね」

博士は壁のボタンを押した。

器械室に青いランプがつき、助手がアンの器械を止める。

激しい「ふりこ責め」でアンは弱り切っていた。博士の合図がもう少しおそかったら恐らく器械に縛られたまま、失神していたことだろう。

皮ベルトを解かれ、助手の手にかかえられるようにして器械から引きずり出された。

ほほには係蹄のあとが、はつきりと残され

ている。よろろと一人では立つこともできない。助手はアンの制服を片手につかみ、傷めつけられて汗にまみれたアンのからだを肩にかつぐようにして器械室から連れだした。

「どうですか、あの制服は」

博士がジェームスに話かける。

「あれも私の考案でしてね。生徒たちは気がつかないらしいけど白と紺のしまという色どりがいいでしょう。囚人服と全く同じでしてね」

「囚人服か、なるほどね。しかし、色よりもあの寸法がもっといい。さて、エレナに会わせてもらおうじゃないか。私はここが気に入った。これから、ちよいちよい来るからな」

アンがベッドにもどされるのをミーナは待っていた。

特別斜面懸引を解かれ、からだのいたるところについたベルトの跡をいたわりながら、ミーナはアンの帰えるのを首を長くして待っていた。だから、半死半生でアンがベッドにかつぎ込まれたとき、ミーナはそのそばにかけ寄った。

「アン、私、大変なの……」

ミーナは泣いていた。

「アン、私のギプスの型が決まったの。今日博士に言われたわ。アボット博士式のギプス

だって。アボット式というのはね、一番苦しい型なの。胸を固く締めつけるギプスで呼吸がほとんどできなくなるのよ。それは苦しいものなの。以前、私のお友達で、このアボット式ギプスをはめられて、息ができなくて、とうとう気が違ってしまった娘がいたわ……」

ミーナはポロポロ大粒の涙を流している。

「アン、私、怖い。アボットは怖い……」

「そう、でも、大丈夫よ、心配しないで……」

アンは血の気の引いた蒼白な顔をベッドに埋めて、ミーナの訴えを聞いていた。

アンはジェームス叔父に繰りかえし手紙を書いた。マリーにも何通も書いた。

しかし、叔父はもとよりマリーからも返事はない。

アンはマリーの冷たさをうらんだ。

伯爵の命令により、ボルスター邸にとどけられたアンの手紙は全て執事の手により、直ちに火中に投じられていたのだ。

アンの身を案じてマリーの書いた手紙もシユミット院長の手で破り捨てられていた。

そして、マリーは或る日、伯爵から命令された。マリーを伯爵の友人、クラーク氏にゆずることにした、という。アンがいなくなつて用が無くなった、と言われたのである。

裏窓既刊号総目録



昭和三一年度の「裏窓」は、ぜんぶ売り切れました。お申し込みにならぬよう、おねがいします。

○三二年

○一月号 凄艶妖奇読物特集号

生命を売った女（島本春雄） 昭姫拷問譜（雪俊遥） ほか

価一〇〇円 一八円

ぜんぶ売り切れました

○三月号

妖奇犯罪実話特集号

翻られる女体（瀬木敏郎） 姉妹奴隷（神谷欣二） ほか

価一〇〇円 一八円

ぜんぶ売り切れました

○五月号

倒錯の手記特集号

姦刑（松井籟子） 赤い花々（高月大三） 女人駕籠（島本春雄） ほか

価一〇〇円 一八円

異色読物特集号

○九月号

隠密覚書（島本春雄）

女形地獄（稲垣史生） ほか

価一〇〇円 一八円

耽奇小説特集号

ウエスト・ニッパの枷（竹谷十三） 女犯経秘図（円城寺達） 黄金の処女帯（柳生亘） 他

価一〇〇円 一八円

時代伝奇小説特集号

猿鰐伝奇（島本春雄） 人肌菩薩（橋爪彦七） ほか

価一〇〇円 一八円

あぶちつく・みすて

○十一月号

りい特集号

悪魔の祈禱師（神行京一） 窓（岬洋之助） 刺青弁天（中林節三） 他

価一〇〇円 一八円

十二月号 ぜんぶ売り切れました

○三三年

○一月号

あぶちつく忠臣蔵特集 血まみれ観音像（飯田豊吉） 闇に生きる義士（島本春雄） 元祿二筋



○二月号

道（橋爪彦七） ほか

価一五〇円 一八円

裏窓遊俠伝特集号

お小夜嵐（高月大三） 疾風飯岡街道（飯田豊吉） 狐火（松井籟子） ほか

価一二〇円 一八円

裏窓妖婦伝特集号

白い顔の悪魔（矢桐重八） 十六夜お新（橋爪彦七） 刺青百万石（島本春雄） ほか

価一二〇円 一八円

あぶちつくさすべんす

○四月号

特集号 絵物語白獣の市場（山田彬弘） 禍夜草紙（黒木忍） 美代吉捕物暦（飯田豊吉） 他

価一二〇円 一八円

妖異捕物特集号

血まみれマリー（藤見郁） 大名屋敷の怪（橋爪彦七） 黄色の帯をしめた少女（竹谷十三） 江戸暗黒秘録拷問と処刑（鈴木和夫） ほか

価一二〇円 一八円

女忍者・女間諜特集号

慶安女忍道（円城寺） 紅紐呪縛（小田桐爽） 間諜散華（藤見郁） 雪

○六月号

○七月号

肌密書（葉田光） ほか

価一二〇円 一八円

妖異譚特集号

絵物語花鬘（古正英生・絵） 絵物語蒼白い手（秋吉響・絵） 絵物語黒猫小町（歌川大雅・絵） ほか

価一二〇円 一八円

一揆殉教秘史特集号

独立黒月党（南村蘭） 天保血笑録（小田桐） 絵物語泥人物（歌川大雅） ほか

価一二〇円 一八円

ぜんぶ売り切れました

○九月号

怪異復讐譚特集号

絵物語・蝙蝠座の秘密（山田彬弘・絵） 続肌呪文（高木龍二） 毒蝶の宿（松井籟子） ほか

価一二〇円 一八円

陰謀叛乱秘録特集号

ザルドの帝王（竹谷十三） 警怨私刑抄（鈴木和夫） ほか

価一二〇円 一八円

十二月号 ぜんぶ売り切れました



◎三四年
○一月号

妖異裏窓忠臣蔵特集号
絵物語悩乱犬小町(中島喜美)ほか
価一二〇円 千一八円

○二月号

変幻俠盗義賊特集号
魔女の神酒(南村蘭)
湯文字盗賊(島本)他
価一五〇円 千一八円

○三月号

凄艶毒婦妖婦特集号
責絵芸者(矢桐重八)
獄門首のお銀(小田桐爽)ほか
価一二〇円 千一八円

○四月号

淫祠邪教特集号
女色金猫教(矢桐)黒髪呪縛(小田桐爽)馬のり仙女(藤見郁)他
価一二〇円 千一八円

○五月号

女性解放悲史特集号
刺青小町(中島喜美)
巷説緋扱帯呪文(高月大三)ほか
価一二〇円 千一八円

○六月号

伝奇秘宝録特集号
夜叉姫絵図(小田桐)肌絵双紙(藤見郁)他
価一二〇円 千一八円

○七月号

恐怖異色感覚特集号
奥様お手をどうぞ(鳴滝三郎)ほか
価一二〇円 千一八円

○八月号

呪法幻術特集号
幽霊陰陽師(矢桐)妖奇守護が島(小田桐)他
価一五〇円 千一八円

○九月号

大奥後宮秘史特集号
妖雲練馬御殿(小田桐爽)秘説千代田城(矢桐重八)ほか
価一二〇円 千一八円

○十月号

あぶちつくすとおりい特集号
価一二〇円 千一八円

○十一月号倒錯小説特集号

絵物語謎の裸女像(山田彬弘)ボラ助の災難(南村哲)ほか
価一五〇円 千一八円

○十二月号妖美小説特集号

十字架の美少女(山田彬弘)黒子受難(小田桐爽)苦船地獄(飯田豊吉)ほか
価一二〇円 千一八円



◎三五年
○一月号

陶酔小説特集号
絵物語墓穴を掘れ(山田彬弘)仇討ち修羅道

(小田桐爽)比丘尼忠臣蔵(矢桐重八)ほか
価一二〇円 千一八円

●二月号

ぜんぶ売り切れました
伝奇小説特集号
紅草紙(円城寺達)鷹の巣谷伝奇(藤見郁)ほか
価一二〇円 千一八円

○三月号

○四月号

異色時代小説特集号
妖槍柔肌秘聞(小田桐爽)ある男の生涯(矢桐重八)ほか
価一二〇円 千一八円

●五月号

ぜんぶ売り切れました
天変三日月秘文特集号
天変三日月秘文(万里小路崑)ほか
価一二〇円 千一八円

○六月号

○七月号

あぶちつく小説特集号
蛇田氏の愛人(豊田一狼)サン・ラザールの女囚(鳴滝三郎)ほか
価一二〇円 千一八円

●八月号

●九月号

●十月号

●十一月号

ぜんぶ売り切れました
十二月号

◎三六年
○一月号

新装判(以下同じ)
オフ絵物語(堂昌一)

悦虐フォト特選集・囚われの檻(殿村恵)大奥裸女絵巻(中島喜美)ほか
価一五〇円 千一八円

●二月号

ぜんぶ売り切れました
責絵秘画集・悦虐の部屋(吉田久)オフ絵物語(堂昌一)青い情事(豊田一狼)妖説闇人形(島本春雄)妄執の炎(小田桐爽)ほか
価一五〇円 千一八円

○三月号

ぜんぶ売り切れました
オフ絵物語(沖涉二)バスティール牢獄(中川彩子)痴者の文(南村蘭)ほか
価一五〇円 千一八円

●四月号

●五月号

○六月号



裏窓既刊号総目録

裏窓既刊号総目録



○七月号

裏窓既刊号挿絵名作選
絵物語にせ聖女(山田

彬弘) グラビア罌(吉

田久) 戦国剽盗記(万

里小路崑) ほか

価一五〇円 一八八円

○八月号

ぜんぶ売り切れました

絵物語幻影の崖(豊田

みのる) 裏窓既刊号挿

絵名作選・絵物語真夏

の夜(堂昌一) スリル

は引き合わない(九十

九十郎) ほか

○十月号

価一五〇円 一八八円

海と女(藤沢修) 執念

泥沼地獄(本誌特写)

ギプスに泣く恵子(片

山俊一) 変幻鬼女囃子

(矢桐重八) 懸想文受

○十一月号

価一五〇円 一八八円

悦虐フォト集(編集

部・編) 責め句選(中

島喜美) オフ絵物語髪

と拳銃(秋吉静) 絵物

○十二月号

語(堂昌一) ほか

価一五〇円 一六六円

る乙女(深森映士) 川

柳猿くつわ漫考(小日

向一夢) 札束は悪魔の

手先(八巻令) フォト

豆しほりと長襦袢ほか

価一五〇円 一八八円



○三七年

○一月号

グラビアろうそくのあ

かり(編集部・編) 絵

物語恐怖王イブラヒム

(中川彩子) 夜の刑律

(鳴滝三郎) ほか

○二月号

価一五〇円 一八八円

オフ絵物語姫小姓きさ

らぎ呪縛(中島喜美)

グラビア白いとらわれ

(藤沢修) めめ肌むざ

ん雨(江津浅夫) ほか

価一五〇円 一八八円

グラビアもだえ(編集

部・編) 不貞現場の女

(春川光彦) 海老沼武

七の執念(小田桐爽)

価一五〇円 一八八円

○四月号

ぜんぶ売り切れました

グラビアとらわれの時

間(深森映士) 女帝ゼ

ノビアの敗北(中川彩

子) ほか

価二〇〇円 一八八円

グラビア・特選悦虐集

(毛卓三・猪島昌也)

稲妻さんげ(万里小路

崑) ほか

○七月号

価二〇〇円 一八八円

グラビア時代劇ムード

(猪島昌也) 沿のほと

り(毛卓三) 絵本かぞ

えうた(喜多玲子) 他

価二〇〇円 一八八円

グラビア熱い密室(毛

卓三) 雷帝イワン四世

(中川彩子) 異説新免

武蔵(万里小路崑) 他

価二〇〇円 一八八円

オフ北原環妖美画個展

お浜の受難(花巻京太

郎) 鼻には鼻を(九十

九十郎) ほか

価二〇〇円 一八八円

グラビア金井行雄作品

集・鬼洞又四郎の煩惱

(小田桐爽) 現代女牢

記(多賀満) ほか

価二〇〇円 一八八円

グラビア(金井行雄

○十二月号

毛卓三) 霧笛の町(五

所章) 足(村山省) 妖

美画傑作選ほか

価二〇〇円 一八八円

グラビア(金井行雄

北好夫・毛卓三) かわ

いい調教師(北園透一

郎) ほか

価二〇〇円 一八八円

○三八年

グラビア(金井行雄・

毛卓三・北好夫) 決闘

立花屋(花巻京太郎)

価二〇〇円 一八八円

グラビア(金井行雄)

島原の子守唄(春川光

彦) 女囚お蓮の死(小

田桐爽) ほか

価二〇〇円 一八八円

グラビア絵物語(小日

向一夢) 和装恋慕(宮

古志満夫) ほか

価二〇〇円 一八八円

ぜんぶ売り切れました

○四月号

○十一月号

○十月号

○九月号

○八月号

○七月号

〇三八年五月号 価二〇〇円

絵物語・白蠟闇若衆 文・島本春雄
 絵・東桂史

〃 流刑星の美女達 文・豊田一狼
 絵・山田彬弘

江洩晃夫耽美画集 江洩晃夫
 グラビア・夢幻のへや 藤沢 修

〃 美しき海賊船
 〃 くさりと美少女 フェニクス

海外SM画傑作選 井村 錠
 茅女物語 (秋吉響・絵)

会津の女兵 (東桂史・絵)

その夜 潮 一樹
 ゴルドンの記憶② 飯田豊吉

(江洩晃夫・絵) 阿麻哲郎
 推名夫人の足 村山 省

ほも紳士録 (秋吉響・絵)

現代M文化時評 森下高茂
 体当たりM論⑩

(江洩晃夫・絵) 水尾 究
 私の愛した女優

(都築峰子・絵) 北野一郎
 アラビアの城① (鬼頭暁・絵)

北園透一郎
 孤島の復讐鬼 (山田彬弘・絵)

祖父江信
 背後の脅迫者 (鬼頭暁・絵)

豊中夢夫
 ばいざいッお転婆学園

(古正英生・絵) 郷 保夫

〇三八年六月号 価二〇〇円

オフセット 鬼頭 暁
 時代妖美画集 中島喜美

〃 美しき海賊船 フェニクス
 〃 西部の女 落合龍二

グラビア・幽囚の部屋 吉田 久
 七つの大罪 (中川彩子・絵)

続・異端の終末 九十九十郎
 おどろき珍化論 芦田奈貴

「ロリータ」における 左 次郎
 ニンフェッティズム 安東 泉

「夜と霧」 黒田史朗
 月光の道で (秋吉響・絵)

鬼婦長 (都築峯子・絵) 河村童八
 夜の妖蝶 丸亀恵子

ボスには乳房がある 立原道夫
 (山田彬弘・絵) 五所 章

体当たりM論⑪ 阿麻哲郎
 きんぎれ不動 (小日向一夢・絵)

復讐黒髪秘聞 (中島喜美・絵) 庄内裕司
 忍法「乳影」 (鬼頭暁・絵)

黒部恭治
 妄執侍 (古正英生・絵) 潮 一樹

霧姫変化 (鬼頭暁・絵) 島本春雄
 ゴルドンの記憶③ 佐藤達四郎

現代M文化時評 森下高茂
 (江洩晃夫・絵) 阿麻哲郎

〇三八年七月号 価二五〇円

オフセット 文・矢桐重八
 絵物語無明怨念記 絵・春日 章

続・アラビアの城 文・北園透一郎
 絵・鬼頭 暁

グラビア・闇に光る 吉田 久
 〃 静かな山林の午後 吉田 久

オフセット 絵画集
 サデイスチンの微笑 江洩晃夫

切支丹女牢 喜多玲子
 南北戦争以前 鬼頭 暁

海外SM絵物語 フェニクス
 切腹殉教記 (小日向一夢・絵)

しのび逢い刺青情話 黒部恭治
 (都築峯子・絵) 北野龍一

くたばれッ淑女学院 郷 保夫
 西鶴におけるM 安東 泉

血染め白百合 (古正英生・絵) 佐藤達四郎
 体当たりM論 (江洩晃夫・絵)

墓場からの指令 水尾 究
 (山田彬弘・絵) 祖父江新

わが愛の渴望 (落合龍二・絵) 芦田奈貴
 虐げられた女たち

絵物語 (東桂史・絵) 野方 伸
 ゴルドンの記憶④ 文・春川光彦

鞭のニコラス 絵・中川彩子
 (江洩晃夫・絵) 阿麻哲郎

〇三八年八月号 価二五〇円

オフセット 絵物語 祖父江新
 東京神戸十六時間 山田彬弘

ぬめ肌女郎 文・矢桐重八
 絵・春日 章

グラビア・砂の上の船 吉田 久
 〃 漁師宿にて 吉田 久

〃 海外サドフォト特選集
 残念なり猿飛佐助

(小日向一夢・絵) 井村 錠
 妖異水底に沈む (秋吉響・絵)

アラビアの城③ (鬼頭暁・絵) 信夫澄夫
 北園透一郎

女の争い (都築峯子・絵) 五所 章
 フィギア・トレーニング

切支丹散華 (東桂史・絵) 春川光彦
 絵物語密林の美女

文・黒部恭治
 絵・中川彩子

文・祖父江新
 絵・落合龍二

〃 紅のライフル

裏窓既刊号総目録



裏窓既刊号総目録



○三八年九月号 価二五〇円

裏窓草紙「絵本いろはうた」

文・宮古志満夫

絵・小日向一夢

オフセット絵物語 文・島本春雄

海賊虹姫伝奇 絵・春日章

アラビア・海辺のうた 吉田久

夜のなげき 吉田久

海外SM絵物語ご紹介

小笹姫受難 (小日向一夢・絵)

潮 一樹

特製マゾキン (山田彬弘・絵)

アメリカ絵物語男爵夫人の拷問室

絵物語 祖父江新

必殺のデリンジャー 落合龍二

魔女アクリリカ (中川彩子・絵)

春川光彦

美しきけものの檻 絵・鬼頭 暁

穴 (都築峰子・絵)

石山省一

絵物語変幻白狸 文・井村 錠

絵・古正英生

アラビアの城④ (鬼頭暁・絵)

北園透一郎

○三八年十月号 価二五〇円

オフセット絵物語・龍宮城反乱

文・祖父江新

絵・落合龍二

妖説朽木女忍伝 文・島本春雄

絵・鬼頭 暁

雁形城落城秘図 小日向一夢

アラビア・ミッドナイト 吉田久

海外の公刊誌より

フェニクス商会

伊賀の闇の葉 (古正英生・絵)

裏切り (秋吉響・絵) 九十九十郎

ミッドナイト・撮影記

エダ・キリコ

時代妖美画集 中島喜美

アラビアの城⑤ (鬼頭暁・絵)

お転婆学園奇襲作戦 郷 保夫

体当たりM論⑬ (江刈晃夫・絵)

水尾 究

絵物語・異端の城 文・三鬼 俊

絵・中川彩子

本能寺炎上 文・井村 錠

蛇樽女切支丹 (東桂史・絵)

義川 清

現代M文化時評 森下高茂

寄稿作品ご紹介と短評 編集部編

裏窓叢書名場面集 編集部編

ゴルドンの記憶⑥

(江刈晃夫・絵) 阿麻哲郎

○三八年十一月号 価二五〇円

犬吠岬の太陽 文・エダ・キリコ

カメラ・吉田 久

暗い画廊 吉田 久

悦唐フォト作品集 金井行雄

アメリカSM絵物語 フェニクス

アラビア時代妖美画集 中島喜美

犬吠岬 吉田 久

ビルマの首枷族 春川光彦

画集・黒い皮の饗宴 鬼頭 暁

絵物語鉦山町の女たち 宗方八郎

大都会の夜の底で 都築峰子

(江刈晃夫・絵) 九十九十郎

青雲崩れるとき (古正英生・絵)

井村 錠

絵物語武士道無残 文・島本春雄

絵・東 桂史

ねむれぬ夜の追憶 北海道夫

(鬼頭暁・絵)

ある女装者の夜々 かびや・かずひこ

悪党半九郎 (小日向一夢・絵)

潮 一樹

現代M文化時評 森下高茂

オシリコンクール 左 次郎

復讐にこめた女のサディズム 安東 泉

ヴィナスの誕生 森下高茂

私たちと「裏窓」 読者通信

ゴルドンの記憶⑦

(江刈晃夫・絵) 阿麻哲郎

○三八年十二月号 価二五〇円

写真物語・深夜のひとりごと

文・吉永百合夫

カメラ・吉田 久

フォト・白い炎 吉田 久

絵物語破魔姫受難 文・島本春雄

絵・山田彬弘

アメリカSM絵物語 フェニクス

アラビア・カーテンのある風景 吉田 久

まるい笹口具 フェニクス

海外SMフォト フェニクス

崖の上の墓標 (古正英生・絵)

佐藤達四郎

ピン・アップだけはやめて

(落合龍二・絵) 遠藤雄夫・訳

奇妙な実験 (都築峰子・絵)

八巻 令

アラビアの城⑥ (鬼頭暁・絵)

恋人たちのオリ (山田彬弘・絵)

九十九十郎

体当たられM論 エダ・キリコ

灰色の夜 水尾 究

FとMとの行き戻り

(落合龍二・絵) 光谷東穂

体当たりM論⑬

(江刈晃夫・絵) 水尾 究

尻に敷かれた男 左 次郎

特集マゾヒズム画廊 フェニクス

ゴルドンの記憶⑨

(江刈晃夫・絵) 阿麻哲郎

〇三九年 一月号 価二五〇円

写真物語・鬼女狩りパターンソン

……文・藤見 郁

装身具とふたりの美女……

西ドイツ・フェニクス

海外SMフォト紹介……フェニクス

絵物語・女戦士のレポート

……文・祖父江新

……絵・落合龍二

グラビア・かわいい妖精①②

……吉田 久

海外SMフォトご紹介①②

……北米・フェニクス

アラビアの城⑦(鬼頭暁・絵)

……北園透一郎

私本男色大鑑・第一話

……かびや・かずひこ

おつかれまさ(山田彬弘・絵)

……春川光彦

画集・女宇宙士訓練室……鬼頭 暁

「馬狂いの女たち」における

マゾヒズム描写……森下高茂

絵物語・ミノーの貞操帯

……文・井村 錠

……絵・中川彩子

地図にない村(都築峰子・絵)

……九十九十郎

体当たりM論①⑨……

(江測晃夫・絵) 水尾 究

寄稿作品ご紹介と短評……編集部

ゴルドンの記憶⑩……

(江測晃夫・絵) 阿麻哲郎

〇三九年 二月号 価二五〇円

あるドイツ・フィルムから

「竹の家」……文・藤見 郁

きもの繚乱……北 好夫

画集・女の館……落合龍二

グラビア・五百羅漢……吉田 久

……縄と鎖のコメディ

……奇怪な散歩着 フェニクス

……脚立と貴婦人

……ご隠居のたのしみ……

(落合龍二・絵) 八巻 令

瀬尾めぐみの受難……

(山田彬弘・絵) 春川光彦

奢れる女神への祈り①……森本愛造

四作家競作同一題名小説

「花と悪銭」……四作家

私本男色大鑑②

……かびや・かずひこ

白い粉の秘密(豊田みのる・絵)

……佐藤達四郎

体当たりM論②……

(江測晃夫・絵) 水尾 究

アラビアの城⑧(鬼頭暁・絵)

……北園透一郎

わが愛のうめきとさけび

……新村満美子

被縛美私見(喜多玲子・絵)

……内本達也

犬の楽園(秋吉響・絵) 下須畜男

現代M文化時評②③……森下高茂

ゴルドンの記憶⑪……

(江測晃夫・絵) 阿麻哲郎

〇三九年三月号 価二五〇円

絵物語・ある晴れた日の公園で

……文・祖父江新

……絵・落合龍二

妖艶女態四景……鬼頭 暁

光と影の哀歓……吉田 久

和装絢爛……北 好夫

グラビア・アメリカ公刊誌ご紹介

……志村基治

……絵物語奇怪な動物園 秋吉 響

……吊り鉤……吉田 久

スクリーンに躍るロマンと幻想

……藤見 郁

海の復讐鬼(東桂史・絵)

……潮 一樹

背骨のまがった娘たち……

(中川彩子・絵) 岐阜須三夫

奢れる女神への祈り②……森本愛造

多ア坊のこと(山田彬弘・絵)

……

体当たりM論③……

(江測晃夫・絵) 阿麻哲郎

きつねづら(小日向一夢・絵)

……井村 錠

マゾヒズム画廊……フェニクス

茶番劇の俳優たち……安東 泉

アラビアの城⑨(鬼頭暁・絵)

……北園透一郎

浅草の妖魚(山田彬弘・絵)

……かびや・かずひこ

ゴルドンの記憶⑫……

(江測晃夫・絵) 阿麻哲郎

〇三九年四月号 価二五〇円

絵物語さみだれの死 庄内 裕司

……小日向一夢

妖美画個展……山田彬弘

金井行雄作品集……金井行雄

和装の女性美四態……都築峰子

時代妖美画選……鬼頭 暁

グラビア・天守閣……吉田 久

……スクリーンクライマックス集

藤沢修フォト集……藤沢 修

……スクリーンに躍る

……ロマンと幻想……藤見 郁

アラビアの城⑩(鬼頭暁・絵)

……北園透一郎

葬送行進曲(都築峰子・絵)

……八巻 令

四作家競作同一題名小説

「美女と毒薬」……四作家

読者投稿小説特集……野呂久・他

ある異色映画とスライド……藤見 郁

絵物語・ふしぎの国の悪魔

……文・祖父江新

……絵・落合龍二

ゴルドンの記憶⑬……阿麻哲郎



裏窓既刊号総目録

裏窓既刊号総目録



○三九年五月号 価三〇〇円

和装美礼讃……………文・矢部定三
 時代小品集……………落合龍二
 沈思のひと……………吉田 久
 時代妖艶画集……………鬼頭 暁
 姫君受難三景……………古正英生
 にほんがみ……………猪島昌也
 グラビア・山参道……………吉田 久
 乳房を飾る男……………文・パール島
 アメリカの公刊誌ご紹介……………中島喜美・時代妖美画選
 パノラマ島秘譚①……………
 (中川彩子・絵) 北園透一郎
 沖涉二小品傑作展……………沖 涉二
 読者投稿特集……………多賀満・他
 映画評論……………黒田史朗
 既刊号・特選よみものご紹介……………絵・落合龍二
 裏窓文芸評論……………安東 泉
 蛙(なめくじ)……………村山省一
 龍四郎嫉妬(東桂史・絵) 潮一樹
 黄金草の宿……………豊中夢夫
 ゴルドンの記憶⑭……………阿麻哲郎

○三九年六月号 価三〇〇円

西部絵物語・コンドルの楽園……………
 ……文・祖父江新
 ……絵・落合龍二
 密室の砂丘……………吉田 久
 ドイツ民族博物館資料より……………
 ……西ドイツ・フェニクス
 洋画のなかのアブ・シーン集……………編集部・編
 グラビア・犬の絵……………吉田 久
 傑作フォト集……………猪島昌也
 三度目の正直(秋吉轡・絵)……………
 ……三鬼 俊
 指名された女(山田彬弘・絵)……………
 ……九十九十郎
 奢れる女神への祈り④……………森本愛造
 パノラマ島秘譚②……………
 (中川彩子・絵) 北園透一郎
 裏窓既刊号・よみものご紹介……………
 ……絵・落合龍二
 読者投稿特集……………赤木恵介・他
 裏窓文芸評論……………安東 泉
 腹切り残酷史譚(鬼頭暁・絵)……………
 ……夏川浩一郎
 濡れ花(落合龍二・絵) 松山省一
 体当たりM論⑭……………
 (江淵晃夫・絵) 水尾 究
 わたしの文芸評論……………エダ・キリコ
 戦後の妖美な眺め(山田彬弘絵)……………
 ……かびや・かずひこ
 ゴルドンの記憶⑮……………
 (江淵晃夫・絵) 阿麻哲郎

○三九年七月号 価三〇〇円

絵物語・不幸な娘のひとりごと……………
 ……文・下須畜男
 ……絵・秋吉轡
 地下室二景……………沖 涉二
 黒い妖精①②……………猪島昌也
 グラビア・鎧と女……………吉田 久
 黒い靴下……………北 好夫
 アメリカの公刊誌・ご紹介……………編集部・編
 南北戦争画集……………鬼頭 暁
 パノラマ島秘譚③……………
 (中川彩子・絵) 北園透一郎
 奢れる女神への祈り④……………森本愛造
 子鹿(江淵晃夫・絵)……………村山省一
 裏窓文芸評論……………安東 泉
 ファンタジア・マゾヒスティカ……………
 ……(山田彬弘・絵) 八巻 令
 小品傑作展……………沖 涉二
 現代M文化時評……………森下高茂
 絵物語・セントレディ学院……………
 ……文・祖父江新
 ……絵・落合龍二
 体当たりM論⑮……………
 (江淵晃夫・絵) 水尾 究
 読者投稿特集……………溝口雄太・他
 腹切り残酷史譚②……………
 (鬼頭暁・絵) 夏川浩一郎
 私本男色大鑑第七話……………
 (東桂史・絵) かびや・かずひこ
 ゴルドンの記憶⑯……………
 (江淵晃夫・絵) 阿麻哲郎

○三九年八月号 価三〇〇円

絵物語・ある幸福なロバの物語……………
 ……文・馬場弘二
 ……絵・江淵晃夫
 女衞部屋……………羽仁京志
 華麗なる行進……………鬼頭 暁
 悲鳴と音楽……………沖 涉二
 夏のたそがれ……………猪島昌也
 陽気な西部娘・他……………編集部・編
 グラビア・美貌の檻……………吉田 久
 コルセットの微笑……………黒い
 革靴の微笑……………フェニクス
 夜の踊り……………吉田 久
 月の輪群盗伝(小日向一夢・絵)……………
 ……潮 一樹
 体当たりM論⑯……………
 (江淵晃夫・絵) 水尾 究
 パノラマ島秘譚④……………
 (中川彩子・絵) 北園透一郎
 奢れる女神への祈り⑥……………森本愛造
 絵物語・女体運搬人……………祖父江新
 ……落合龍二
 海底王国の女囚……………
 (山田彬弘・絵) 南郷京助
 読者投稿特集……………駒井たまき・他
 時代小品傑作集……………鬼頭 暁
 腹切り残酷史譚③……………夏川浩一郎
 私本男色大鑑⑧(東桂史・絵)……………
 ……かびや・かずひこ
 高嶺の花……………大垣 昌
 ゴルドンの記憶⑰……………
 (江淵晃夫・絵) 阿麻哲郎

○三九年九月号 価三〇〇円

画集・女王さまの一日：秋吉 轡
 妖美術傑作展……………沖 涉二
 特集・激しい女……………編集部・編
 特集・アメリカ雑誌に現われた
 悲運の女たち……………編集部・編
 グラビア・洞窟……………吉田 久
 “ 柵のある道……………吉田 久
 “ 特集・激しい女……………編集部・編
 月が見ていた……………三鬼 俊
 花氷……………八巻 令
 絵物語・直次郎出奔
 ……文・井村 錠
 ……絵・落合龍二
 私本男色大鑑⑨（東桂史・絵）
 ……かびや・かずひこ
 裏窓文芸評論……………安東 泉
 読者投稿特集
 海の見える部屋……………加木れい子
 奴隷市の娘……………遠井待夫・他
 続・海底王国の女囚……………
 （山田彬弘・絵）南郷京助
 腹切り残酷史譚④……………
 （鬼頭暁・絵）夏川浩一郎
 黒龍党の最後（東桂史・絵）
 ……潮 一樹
 山のホテル……………村山省一
 汚辱極楽神の国……………淡路周五
 体当たりM論②⑦……………
 （江刈晃夫・絵）水尾 究
 ゴルドンの記憶⑬……………
 （江刈晃夫・絵）阿麻哲郎

○三九年十月号 価三〇〇円

画集・わがままなお姫さま
 ……江刈晃夫
 妖美術傑作展……………沖 涉二
 鞭を待つポーズ……………落合龍二
 輝やける女性……………フェニクス
 グラビア・縄のたわむれ
 “ 誰かくる足音……………吉田 久
 “ 輝やける女性……………フェニクス
 “ 白日夢」におけるSM性
 ……藤見 郁
 読者評論・現代の魔女裁判
 ……邦枝克平
 パノラマ島秘譚⑤……………
 （中川彩子・絵）北園透一朗
 乱世呪縄伝（小日向一夢・絵）
 ……潮 一樹
 煩惱縄……………矢桐重八
 アメリカ絵物語・
 グェンドリン物語……………ウイリー
 奢れる女神への祈り⑦……………
 （山田彬弘・絵）森本愛造
 絵物語・冷血……………文・祖父江新
 ……絵・落合龍二
 体当たりM論②⑧……………
 （江刈晃夫・絵）水尾 究
 踊り子「ヨッコ」……………（秋吉轡・絵）
 おとなげない話……………光谷東穂
 凄艶画集……………落合龍二
 ゴルドンの記憶⑭……………
 （江刈晃夫・絵）阿麻哲郎

○三九年十一月号 価三〇〇円

弱きをくじき強きを助く（巻頭）
 黄色い福音……………淡路周五
 裏窓文芸評論
 宇能鴻一郎「密戯」……………安東 泉
 鞭と女……………戸山一彦
 倒錯の自由を求めて……………戸山一彦
 陰画……………九十九郎
 アメリカ絵物語
 グェンドリン物語……………ウイリー
 煩惱縄……………矢桐重八
 名月……………絵・古正英生
 長い悪夢……………羽島七郎
 ある奴隷の生態……………瀬川美岐
 私のコレクションから……………森下高茂
 たぬき……………綾川妖司
 体当たりM論③……………
 （江刈晃夫・絵）水尾 究
 続・乱世呪縄伝
 妖異蝙蝠城（小日向一夢・絵）
 奢れる女神への祈り⑧……………
 夢の楼閣に生きる男……………森本愛造
 顧のない女……………八巻 令
 車と踊る美女（文・藤見郁）
 ……西独・フェニクス
 裏窓タウン・見たもの聞いたもの
 読者コーナー・読者のおたより他
 ゴルドンの記憶⑮……………
 （江刈晃夫・絵）阿麻哲郎

○三八年六月・臨時増刊号

耽美芸術写真・絵画・絵物語集
 グラビア写真（吉田久・藤沢修
 猪島昌也・金井行雄・北好夫
 グラビア・オフ絵画（小日向一
 夢・中川彩子・江刈晃夫・鬼
 頭暁・ほか海外SM絵物語集
 価三八〇円 千一八円
 ◎三八年十二月・臨時増刊号
 耽美芸術写真・絵画・絵物語集
 グラビア写真（吉田久・海藤真
 新井正也・青沼定三ほか）
 妖美術画集（小日向・中島・都
 築・山田・古正・江刈・中川
 鬼頭・落合ほか時代絵物語集
 価三八〇円 千一八円

★十一月号に掲載いたしました、
 「裏窓既刊号総目録」は、たい
 へん誤りのありましたこと、深
 くお詫び申しあげます。
 既刊号ご注文のおりは、本号を
 ご参照ください。（編集部）

裏窓既刊号総目録



S M 映画 評判 記

——読者の投書その他から

藤 見 郁

映画「白日夢」「紅閨夢」また「砂の上の植物群」などについて本誌読者からの、かすかすの興味ある感想文、あるいは批評原稿が編集部に送られてきた。

それらの投書は、本誌の読者層の、社会人としての知的レベル、そして、SMについての考え方を単的にあらわして、非常に興味ぶかいので、そのなかから、代表的なものを、二、三まずここにご紹介してみたいと思う。

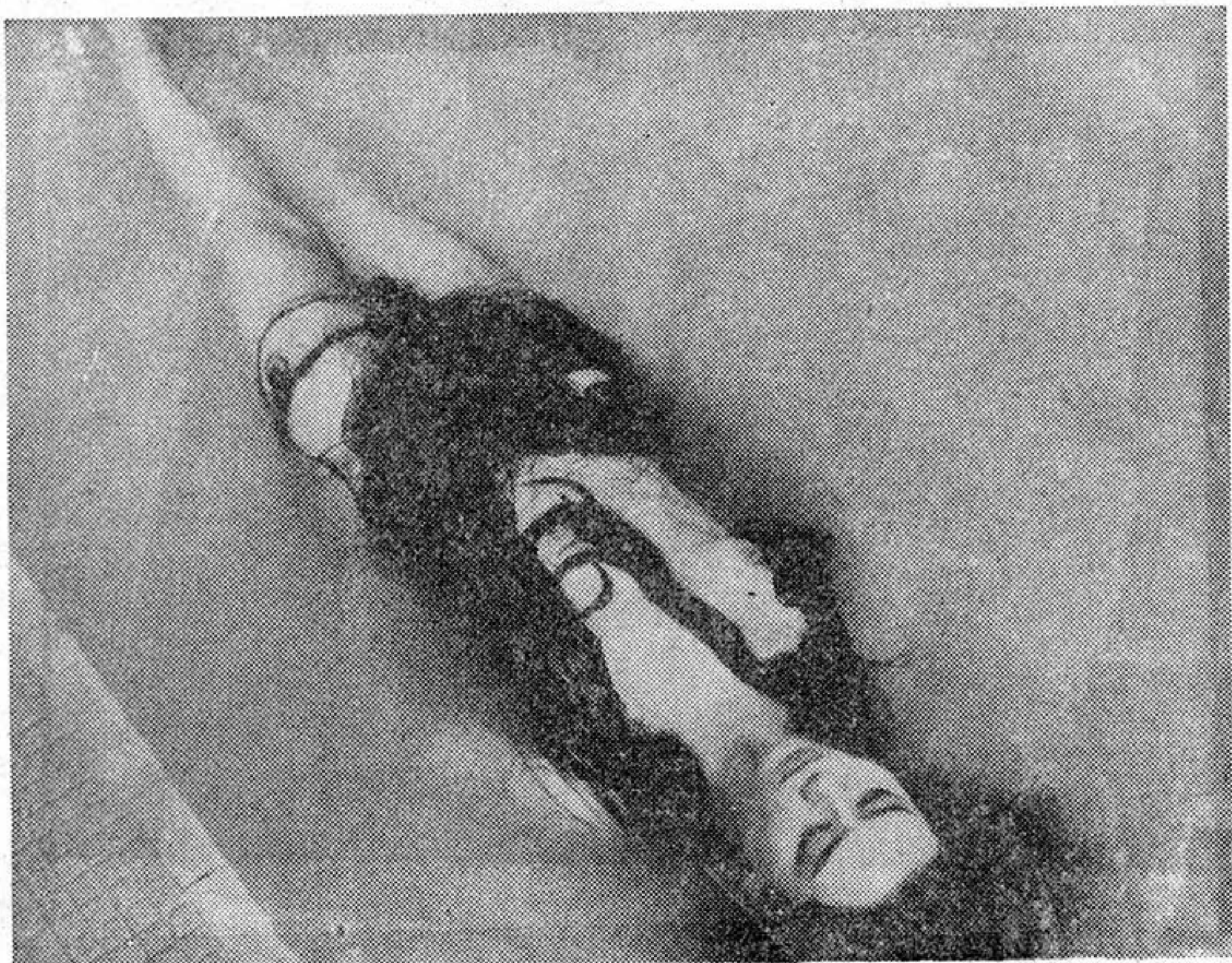
『ライオンはアフリカにすんでいた。たので人間に、まして文明人に危害を加えるつもりなど、毛頭なかった。それなのに、馬鹿さわざしてライオンをつかまえ、オリに入れた、みなさん、もう安心です、このとおりライオンはオリの中に押しこめた、絶対安全無害です。そして、それを見る子どもたちは思う。ライオンで、なんて退屈な動物なんだろう。生まれてから死ぬまでこうしてねそべって、いねむりばかりしているのかしら。



紅閨夢

ああ、なんという誤解、むごい効の十月一日以後の見本として）表現の可能性をたしかめたくて、誤解。見に行ったものです。

「砂の上の植物群」の原作は、SM趣味のものからみれば、退屈で見当ちがいの小説でした。それでも、私は、ああいう原作の映画化である以上、SMの興味よりも、「白日夢」や「紅閨夢」がでて以後、映倫や、条例や、世論が目を光らせているいま（つまり条例発）はなしだと思います。これでは批評以前、感想以前で



ある批評家のいうとおり、いっそ作らなかつたほうがよいという評も、もつともです。

うんとごちそうがでたのに、なま煮えの米のめしだったり、しゅうゆのないトロココンブや、コレラのため、ぐらぐら煮た大根やかぶのつけもの、うでたタクアンミたいなもので、いっそ食べないほうがよい。

私はむしろ、監督さんに同情しました。これが企業でなかったら中平康氏は自分の作品を火にくべて燃してしまつたでしょう。

見せ場という見せ場は、ぜんぶカットされているので、女がやたらに「縛って、縛って」と音声で連発するだけ。

あとは「ひも」がうつるだけ。クローズアップの顔（これもあまりゾツとしない）ばかりでは、縛られているのかいないのか、肌着をつけているのか、いないのかもわからず、男の手がつかないのは乳房なのか、そうでないのか、うしろ手なのか、そうでない

のか、なんにもわからない仕組みで、入場料の三百円は高すぎる。しかし、大衆はこの映画を見、専門家の批評を読んで「しよせん主人公は異常なよけい者であり、こういう作品に力をいれる作家も異常な人間にちがいない」と、わからないながらも、納得するのでしよう。

しかし、私たちにいわせれば、女が縛って縛ってと声ばかりあげ男がしよせんことなしに縛る、しかもその顔しかうつらない映画なんか、私たちにとっても異常で、チンブンカンブン、さっぱりわからない。主人公の父親の幻と、SMと、女の関係、クレイの絵がとつぜん登場する意味も、その関連が生きていないから、さっぱりわけがわからない。

それにしても、裏窓十月号に掲載された「パノラマ島秘譚」の北園透一朗氏が筆を絶った気持ちがこの映画をみて、じつによくわかりました。

たとえば、難解を意識してつくつ



紅閨夢

た映画でもクライマックスの見せ場をしっかりと撮れば全体が生きたであろうに、作品自体のために惜しまれます。こんなに表現を制限されているのなら、まったく作らないほうがよかったと思います。

こんどの韓国の言論規制問題は、どうやら言論界の勝利に終わったようですが、これについて「朝日ジャーナル」誌は、こんなことを伝えています。

それは、韓国のある閣僚が「日韓会談で、日本の新聞は政府と呼吸が合っている。うらやましい限りだ」と言ったということです。

日本の政府と新聞が呼吸を合わせているのは、なにも日韓会談に限ったことではありません。

こういう韓国高官の発言に、日本の新聞人、マスコミは、すでに反省することも、赤面することも忘れたのでしよう。

韓国の言論規制法に対して、在野の抵抗は見あげたものでした。これにくらべて、日本の文化人、マスコミの弱かったこと。長いも

のには巻かれる、というところでしよう。

安保騒動のとき、新聞が一応、民衆の側にまわったのは、そのほうが有利だったのでしょうか。公正を旨とする新聞が、日本ではいつも、こうもりの存在なのです。戦時中の新聞なんか、ひどいものでした。

SMは、これからもアウトサイダーとして白眼視されることでしょう。

私たちの主義とは無関係のところ、SMブームがおこり、そして弾圧され、ブームをまきおした連中は、いささかの金儲けを終えて、自分の穴の中にさっさと逃げこんでしまいました。

ブームとはまったく無関係の場所にいた裏窓が、いちばん被害をこうむったというのは、残酷な皮肉です。

裏窓は今回のブームには、常に和而不同（和して同じからず）であつたはずで

「婦人生活」九月号に、武智鉄二

氏が座談会で「私はSMについては何もやったことがないし、知らない」という意味のことを、おっしゃっている。そのとおりでしょう。えらい人は、それが「あぶない」となれば、すぐにやめてしまう。知らん顔をしてしまう。

大江健三郎氏の「個人的体験」を読みましたが、これとて、反抗をやめたライオンよろしく、退屈でした。

最近発行された各種の雑誌、また一流とよばれる文芸誌など、ひとつとおり目を通しましたが、どの論文よりも裏窓十月号に掲載された「現代の魔女裁判」のほうが、切れのよい、鋭い論文でした。中央公論や、世界にのせても、りっぱに通用する論文でした。舌をまきました。近來まれにみる好論文で、長く保存したいと思います。

映画の批評から筆がそれましたが、これからSM界はどうなるのか、私にはさっぱりわかりませんが、ご健闘を祈ります』

以上は、東京の重森東氏からの投書であるが、カットだらけの映画「砂の上の植物群」も、このように好意的に、理解をもって見てくれる観客が、ひとりでもいるということは、中平監督も、もってめいすべきであろう。

つぎは、やはり東京に住んでおられる辺見耕作という読者の方から寄せられたもので、題からして「白日夢にSMなし」という。

『はじめに結論を申しあげるならば、映画「白日夢」に、SM性は認めがたい、ということである。

世間では、なにかというと、芸術かエロかということで騒ぐ。

（世間が騒ぐのではなくて、騒ぐのはマスコミだけかも知れないけど……）

エロか芸術かの基準を、どの点におくか、これはまったく困難なことだと思うが、これに関し、私はこう考える。

「白日夢」の場合における芸術性は、谷崎潤一郎氏の原作だけにし

砂の上の植物群



かゆるされないと。

谷崎氏の手をいったん離れた場合は、何人の脚色によっても、すでに原作のもつ芸術性は失われたと、私はみなしたい。SMを芸術にまで高めるといふことは、それほどむずかしいことだと思う。

武智氏が、この映画で何を意図

し、何を批判しようとしたか、私にはどうしても理解できない。武智氏の書かれた解説文を、ずいぶんいろいろと読んでみたが、私の頭が悪いせいかわからない。(金儲けのための映画だ)といってしまうばそれまでだが)さて、本題にはいろいろ。

女を縄で縛り、滑車で吊るす、電流を通す、これがSMでなくてなんであろう、と反駁される方もあるだろう。

たしかに、表面だけを眺めればSM性を認めることもできようがあまりにもエロを前面に強調したS。エロを礎としているMは、はたして、われわれが愛しているSMであろうか。

とはいふものの、私には、SMをはっきりと定義することはできない。この複雑なテーマを、的確に定義できる人は、おそらくいないだろうと思う。えらい学者が、Sとはこうだ、ああだ、といっても、私には、とうてい信用できない。

この「白日夢」によって、SMが代表されるとするならば、なんという不純な、うす汚ないものであろう。私は失望を禁じえない。極端にいうと、ヒットラーの暴虐をもってサディズムとする考え方と、大差がなくなってしまうのではないか。これでは、最近かしましい世間の批判をも、甘受せねばならぬだろう。

単に縄縛りや、電流あそびが、ただちにSMであってはならないと思う。その行為なり心理の根底につらぬかれていゝもの、抱蓄するものの違いが、エロとの区別ではなかろうか。

ときとして、SMがエロに通ずることもある。私はそれを否定



砂の上の植物群

するほどの固物ではない。

だが、SMを道具に使ったエロは、けっして真のSMではないと考える。

ただ金儲けだけを目的として、SMをダシにしたエロ映画が、最近のように多くなると、世間の誤解はひどくなるし、私はいきどお



砂の上の植物群

りすら湧いてくる。

くり返しのべるが、この映画には、われわれの望む真のSM性は認められない。』

と、かなり手きびしい。

編集部にきた投書を取りまとめると「白日夢」や「紅閨夢」に対する批判は、ほとんどが否定的で「砂の上の植物群」の場合は、つまらなかつたけれど、昨今の世情では、あれで仕方がなかつたんだろうという、同情的なものがほとんどである。

ところで、悪評高い「白日夢」に対して、こういう批評もあるというのを、文献誌としての裏窓は、記録しておかねばならない。「映画芸術」誌の九月号に、渋谷龍彦氏が「性欲的動物・デパートの悪魔」と題して書かれた一文である。

「武智鉄二氏の『白日夢』は、シニカルな、よく計算された文明批評的な映画で、しかも、ところどころノスタルジックな抒情的な場

面など挿入されていて、わたしは久方ぶりに知的な日本映画（何という形容矛盾であろう）の味をたっぷり堪能させてもらった。近來の快作というべきである」

こういう見方もあるということ、を、私どもは、一応は認識せねばならないだろう。

ついでに、専門の批評家がみた「砂の上の植物群」の批評を二、三あげてみよう。

「ノーマル」な人のみたアブノーマル映画の批評という意味で、それぞれ、おもしろい。

はじめに「週刊朝日」から。

「吉行淳之介の小説を中平康が監督した『砂の上の植物群』（日活）は、真剣にさまざまな「挑戦」を行なっている映画である。まずこの映画は、映画が果して『性』それ自体を表現できるか、という課題に挑戦する。そして第二にいうまでもなく、これは映画界における性描写過剰を憂える世間に、正面から挑戦した作品である。不幸ながらこの映画は、第一の問題よ



り第二の点で、大きな話題になるだろう。「芸術」として不運なところだが、しかし作者たちはあえてその世評を真向から受取る義務が

ある。(略)脚本のこの慎重さと中平の演出の的確さ、そして主人公仲谷昇の非常に役をよく読んだ

言い方だが)映画を作者のたいへん親身な発言にした、といっている。私はさながら作者自身の性に関する一人称の独白をきいている

白日夢

感を受けたほどであった。私は決してこの映画の描写が健全だとはいわぬ。が、作者が少なくとも良心の限りで、まじめに性についての自分の本音を考えようとした努力は、認めたいと思う。

しかし問題はそこからである。私はこれを見て、改めて映像で、『性』それじたいを追及することの不自由さ、至難、そして退屈を思い知らぬわけにはいかなかった。(略)」

と、至極まじめな批評の態度に終始している。

これが「サンデー毎日」となると、かなり冷笑的で、批評の形をなしていない。

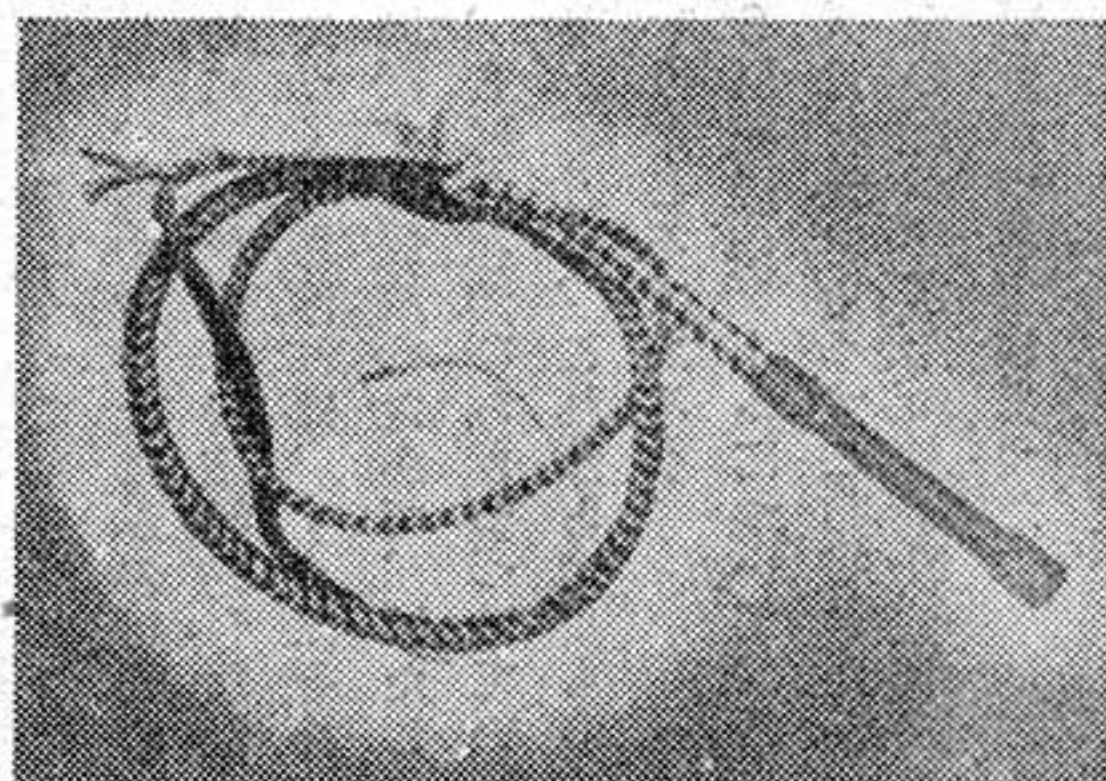
『白日夢』『紅閨夢』につぐセックス映画の問題作。しかし、映倫とよく話し合い「自粛」にこれつとめた成果大いにあがり、なんということはない、平凡退屈な作品とは相なった。性行為が行なわれていることをわからせる苦心のシーンが多々あるが、つまらぬことに苦心するものだと思うだけ。ま

鞭であそぶ夫婦

外誌から

チャールス・スタック夫妻は、鞭の愛好家です。夫人のキャロルは、本年三十八才ですが、若々しい肉づきと容貌を誇っています。彼女の若さを保つ秘けつは、ご主人の鞭で肌を愛撫されることにあります。

チャールスは、愛妻の美容のための皮鞭を数十種類持っていて、愛撫する場所と、その目的によって、それぞれ鞭を替えるのです。ご婦人のお肌をいつまでも若く保つためには、適当な刺激と愛撫が必要です。といっても、これはだれにでもおすすめてできる遊戯ではありません。





違背のお仕置き

瀬川美岐
落合竜二・絵



それから四日目の夜のことでした。

ちょうど土曜日で、お店へこられるお客さまが多く、あなたをはじめ、四人のお弟子さんも繁忙をきわめました。

けれど、翌日がお休みでみんな張り切っていたせいもあり、仕事をてきぱきと片づけ、あなたと私は、案外ふたりきりになる時間を早く得たのでした。

その夜、はじめて誘導のおことばなしで、ブランドー儀式を終えかけたとき、私は最初の失敗をしてしまったのです。

「サキ、これをお飲み」

と命じられて、私は銀盆をさしださず、ついうっかり、

「けっこうでございます、女王さま。私、飲めないものですから」

と、申しあげてしまいました。

あなたは、切れ長の美しいひかるような目

を、きらりと私にそそぎ、グラスをだまってサイドテーブルにお置きになりました。

おみあしをベッドからおろしかけたので、私があわててスリッパをそろえますと、あなたは無言で、私の鼻さきをかすめて、その片方をおとりになりました。

事態がわからず、呆然としている私の衿もとを左のお手でつかみ、つよい力でおひざの前まで引き寄せました。

思わず手前について、からだをささえたとき、銀盆は大きな音をたてて、ゆかにころがりました。つぎの瞬間、スリッパが猛烈ないきおいで私の両頬をおそい、ぱしッ、ぱしッという音とともに、目もくらむような数秒間がすぎました。

私は、思わず、あぁと悲鳴をあげましたが、五、六回の打擲のうちに、あなたが何を怒りになったか、やっと気がつきました。



私は、誓いのとおり、くちびるを噛みしめて声をだすまいと、必死に皮スリッパの打擲をこらえておりました。

ぱしッ、ぱしッと、皮スリッパの裏は、小気味よいくらいの音をたてて、私の頬を打ちつづけました。

十七、八回もお打ちあそばした末に、あなたは、ついッと手をお放しになり、スリッパを私のはだけた胸のなかにほうりこまれました。

私は、燃えるような、両頬の痛みと興奮とに、息をはずませながら、瞬間、そのスリッパをどう始末したらよいのか迷いました。

とにかく、懲罰のときは、勝手ににもすることがゆるされてはいはずでした。

私はそのまま、ゆかに両手をついて、まだ打たれるかもしれない態勢をとり、顔をさしのべておりました。

あなたは、片足をのばして、私の胸もとから、巧みに足のお指でスリッパをひきだしました。しかし、スリッパはすぐにゆかに落としてしまわれました。

「サキ。なんで叱られたか。わかったわね」
あなたの鋭いお声に、私は、

「はい女王さま。申しわけございません。ただご辞退申しあげただけのつもりでございます

した」

と、返事をいたしました。

いい終わらぬうちに、私は肩口をはげしく蹴られて、仰むけに倒れました。起きなおる余裕もあたえず、あなたは再三、あごや肩を蹴って、私を完全に、ゆかに平たくさせました。

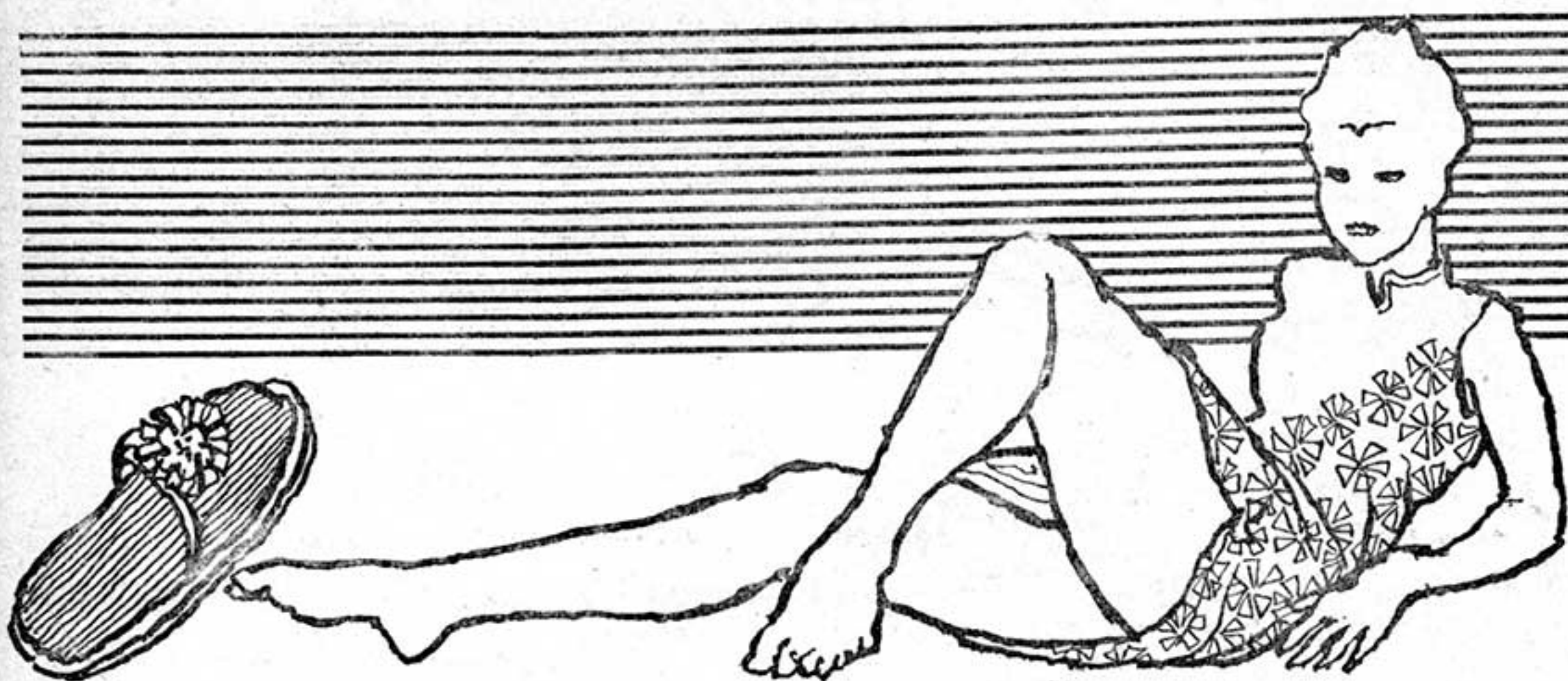
「うッ」

と思わずうめいたほど、最後に脇腹にうけた足蹴は、痛うございました。

あなたは、私のおなかの上に片足をおのせになり、仁王立ちになって、私を見おろしていいました。

「お前は、私の三日間の教えを、なんだと思っ
てきいていたのよ！ まったく、ふざけて
いるわ。まず、私の言っていることは、お前
に対してはせんぶ命令なのよ。飲めません。
なんて断わることが、お前にできると思っ
ているの？ それから、申しわけありません、
という口の下から、すぐにいいわけをするな
んて、なによ。お前には、ゆるしを乞うだけ
の自由しかないのよ。七つの鉄則のうち、早
くも二つも違背するなんて、それでも私の奴
隷なの！」

あなたは、ことばをつよめるたびに、私のおなかを踏まえた足に、ぐッと力をおいれに



なるのです。

私はあえぎ、息もたえだえになって謝罪しました。

「ああ、申しわけありません、女王さま。どうぞおゆるしを。私がおゆるしをいたしました」

あなたは、ようやく、おみあしを私のおなかの上からおろされると、改めて、

「命令にそむいた罰！」

と、おっしゃって、いきなり私の顔を、右足でお踏みになりました。

グエッと、私は蛙のような悲鳴をおげてしまいました。瞬間的にですが、あなたは右足の全足の体重をかけられて、私の顔の上に立たれたのです。

目も鼻もくちびるもつぶれ、私は意識すらなくなるほどの苦痛を味わいながら、このまま、たとえ踏み殺されても本望だと思ったこととでございました。

涙とよだれとで、あなたの右足の裏はべとべとになり、私ももう息がとまるかと思ったとき、あなたのおみあしが、私の顔から離れました。

あなたは、やっと私に、起きあがることをお命じになりました。

もういちど、あなたの前にかしこまった私の姿は、さんたんたるものでした。胸もとは

みごとにはだけきり、細紐はゆるみ、奴隷の制服である、膝までの俗衣のすそは、必然的に、腿まで露出しておりました。

あなたはベッドにおもどりになり、右足を私の顔の前に突きだされました。

「ごらん、私の足の裏を。お前の鼻水だか、よだれだかで、こんなにもべとべとになってしまった。お前の口で、じょうずに掃除しておくれ。指のあいだまできれいにしないと、承知しないわよ！」

スリッパの刑につづく踏みつぶしの刑で、私の顔は、ただ、かっかっとはてるばかりでした。

しかし、私は足のフェティシストでもありますので、このご命令はうれしく、さっそくあなたのおみあしの指のあいだから、丹念におなめ申しあげました。

はげしい打擲をうけたあとでしたので、唾液がすくなく、のどがかわいてひりつきました。やっと、踵のところまできたとき、私はまた、あごを蹴られ、

「よし！」

という、おことばをいただきました。ほっとして、思わず深い息をついておりますと、あなたは、

「サキ、お前の罪は、まだ完全にゆるされて



いないのよ。詫びのことばを、きちんとってごらん」

と、申されました。私は、さっきおなかの上を踏まれながら、たしかに申したつもりでしたが、弁解はゆるされません。

私は、みじめな格好のまま、

「女王さま、今夜私は、女王さまの奴隷として、第三と第四の守るべき規則に違背しました。まことに、申しわけございません。どうぞおゆるしくださいませ」

そう申しあげて、ひれ伏しました。

私は、それで許されたものと思いましたがあなたはすぐに、

「第三の罰はすんだけど、第四の罰はこれからよ。お前、あそこの隅にとんでいるスリッパをくわえておいで。犬になつてくわえてくるのよ。犬なんだから、手なんか絶対に使っちゃいけないよ」

私は、どんなにひどい侮辱を浴びせられようと、

「かしこまりました。女王さま」

と、ご返事するより、ことばがない奴隷なのです。さっきあなたが、足でお取りになるうとして落とされたスリッパを、私は四つんばいになってさがしました。

ゆかに落ちていたスリッパを、手を使わず

にくわえるということは、けっしてやさしいものではありません。私は、ゆかまでなめながら、ようやくスリッパをくわえ、歯と歯のあいだに噛んだまま、また四つんばいになって、あなたのおみあしの下までお持ちいたしました。あなたは、

「犬はもっと早いものよ、お前はずいぶん、のろまね！」

と、私をののしり、

「いいというまで、そのスリッパを口から離したら駄目よ。今夜のうちに、もう一度でも失敗したら、私はもうお前を奴隷にしてやらないよ。すぐにでも追放してしまうからね」

と、おっしゃって、私をそのまま、四つんばいの姿で放っておかれました。もちろん、皮のスリッパを口にくわえたままです。

私は、額や背中に、汗のながれだすのを感じながら、じいっと、つぎの命令をお待ちしております。やがて、

「おすわり！」

というおことばがあつて、私はようやく犬のように両手をゆかにつけたまま、腰だけおろすことをゆるされました。

ベッドに腰かけておられるあなたは、両足をぶらぶらさせておいでになりましたが、ふいに、右足を、私の胸のなかにおいれになり

ました。

私のはだけた胸のなかに足首をさしこまれると、器用に足の指さきを働かせて、私の乳房をまさぐりはじめました。

やがて、左の乳首を、足の指でしっかりとつねりあげるようにしてはさみました。

「む、うーッ！」

私はうめきましたが、口にくわえたスリッパを落とすことは、ゆるされませんでした。

あなたは、私の苦悶の顔を、たのしげに見やりながら、足の指に力をいれたり、ちぎれんばかりにひっぱってみたり、巧みに、残忍に、十分にもてあそびました。

「やっぱり足だと、私がくたびれるわ」

こうおっしゃって、おみあしを私の胸からひきぬかれると、こんどはお手をぐいッとしのべられ、鋭くとがった赤い爪のさきで、乳首をつねりあげられるのです。

「ううーッ、むッ、むッ」

私は首の骨をまげ、スリッパを離したくなるのをこらえながら、全身からあぶら汗をながして、その苦痛とたたかいました。赤い爪は右の乳房へと移動し、さんさんになぶり、苦しめました。

第四の罰は、こうして終わりました。

この最初の夜におけるあなたの、予想外の

冷酷さに、私は内心、おどろきと戦慄をおぼえました。

私には、このレスボス関係における女王さまと奴隷の遊戯を、まだ遊戯として考える甘さがあったのです。しかし、あなたの行為はあきらかに遊戯をこえたものとして、私に苦痛と、そして快楽をあたえました。

なまじ男性よりも、同性のほうが残酷だという説を、私はどこかで聞いたことがあります。が、たしかに、その後のあなたの行為は急速に残酷度を増し、とくに七つの鉄則を犯した場合など、私は強烈に罰せられました。

やがて、道具などもおそろえになり、その道具も、しだいに複雑な、奇怪なものに変型していくのです。そして、思いつくかぎりの刑を、私のからだに心に試み、私をのたうちまわらせるのです。そういう意味では、あなたは、たしかに天才的でした。

さて、その翌晩から、私はいつそう緊張して接しました。

あなたにお誓いし、教えていただいたとおりに行動して、二、三日は無事に、ごきげんを損じもせず、たとえ数分間にせよ、ベッドのなかにお召しをうけて、抱かれるという光栄にも浴しました。

ある夜、ブランドー儀式が終わって、おそ



ばにひかえますと、

「サキ、爪をとって」

とのご命令です。かしこまって爪磨き道具を取りに行こうとしますと、追いかけるように、

「道具を使つては駄目。お前の歯で噛みきるのよ。だけど、へたなことをして、私に痛い目なんかみせたら、ひどいわよ」

と、おっしゃるのです。

からだじゅうをすみからすみまでなめさせられたこともあり、私は、自分の舌には自信がありました。爪を噛みきるなんてことはかんたんなようで、大変むずかしゅうございます。

左右の足首を交互に捧げ持って、長いこと苦しいたしましたが、果たしてお氣に召すようにできず、あなたは、

「まあ、なんて不器用なんだろう、お前は」と、吐きだすようにおっしゃいました。

私は自分の失態に、からだを固くして控えておりますと、あなたはちよつと考えられてから、まず私の頬を、拳固で四、五回なぐりました。それも、親指を外にだした拳骨で、十分にモーションをかけてお打ちになったのです。

私は、ひとたまりもなく打ち倒され、四回

まではどうにかすぐ起き直りましたが、五回目を受けたとき、思いのほかこたえて、つぎの拳固をいただくタイミングに、ほんのすこし遅れてしまいました。

けっして逃げるつもりではございませんでしたが、あなたは規則の第五条にそむいたときめつけて、私を部屋のまんなかにひきすえました。

洋服ダンスから、革ベルトをえらぶと、あなたは私のそばにお立ちになり、

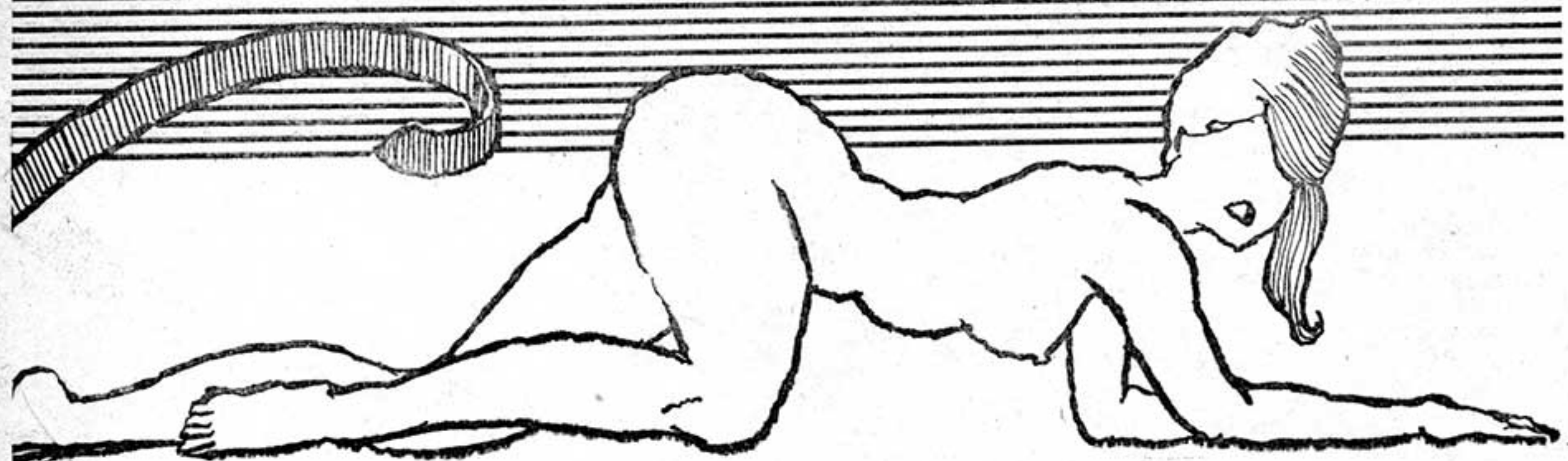
「おぬぎ！」

と、お命じになりました。私は、いよいよ待望の鞭をいただくよろこびに胸が高鳴りました。

しかし、いくら同性とはいえ、私ひとりだけ、あかるいライトを浴びて、私の全身は羞恥で染まる思いでした。

顔もあげられないでいる私の両手を、あなたは無理に頭上に組ませて細紐でしばり合わせ、足をひらいて立てとお命じになったのです。私は両眼をかたくとじ、恥ずかしさにくちびるを噛みしめ、あなたの前に全身をさらしたのです。

さすがに目をとじていることお叱りにはならず、あなたは三分間ほども、だまって私の全身を、さまざまな角度から眺めていらっし



やいました。

私には、その三分間が永遠の長さに感じられました。胸もおなかも羞恥に波うち、消えいりたい思いに、おそらく顔じゅうの筋肉がゆがんでいたことでしょう。ことに両手を頭上にしばられ、両足をひらいて立たされていく苦痛は、いいあらわすことのできない恥ずかしさでした。

「ふふん、お前、そんなにつらいの」

あなたは、私の前に近寄られ、ベルトをしごきながらおっしゃいました。

「ああ、せめて、せめて手を背中にしばってくださいませ。こうして腕を上にあげたままにいるのは、とてもつらいのです」

私は歎願しました。

「ふふふ、わかってるわよ、マゾさん。お前の好みは、やっぱりうしろ手なのね」

あなたは、長い腰紐様の布紐で、私の両手を背中で縛りなおしました。

そして、一本を首にまわし、一本が腰にまわされ、十分にしめつけ、たてにしめあげた上で、

「おあるき！」

と、お命じになりました。

大きな鏡の前にひきたてられた私は、自分のあさましい姿をひとめみて、思わず悲鳴を

あげ、その場にかがみこみました。

あなたただけには奴隷を志願しましたが、普通の社会においては、私とて人間なみの自尊心も誇りも、ちゃんと持ち合わせているのです。この一瞬、私は奴隷の身を忘れ、普通の人間の神経にたちかえったのです。

首と腰に赤い紐を巻かれ、うしろ手にしばられたみじめな姿を、鏡のなかに直視して、どうして平気でいられるでしょう。

「立ちなさい！」

あなたは声をあげ、ののしり、なんとかして私を鏡の前に立たせようと努力をされました。

「おゆるしてください。ほかのお仕置きなら、どんなことでも私はよろこんでお受けいたします。このたて縄のかかった姿で鏡の前に立つことだけは、どうぞおゆるしてください」

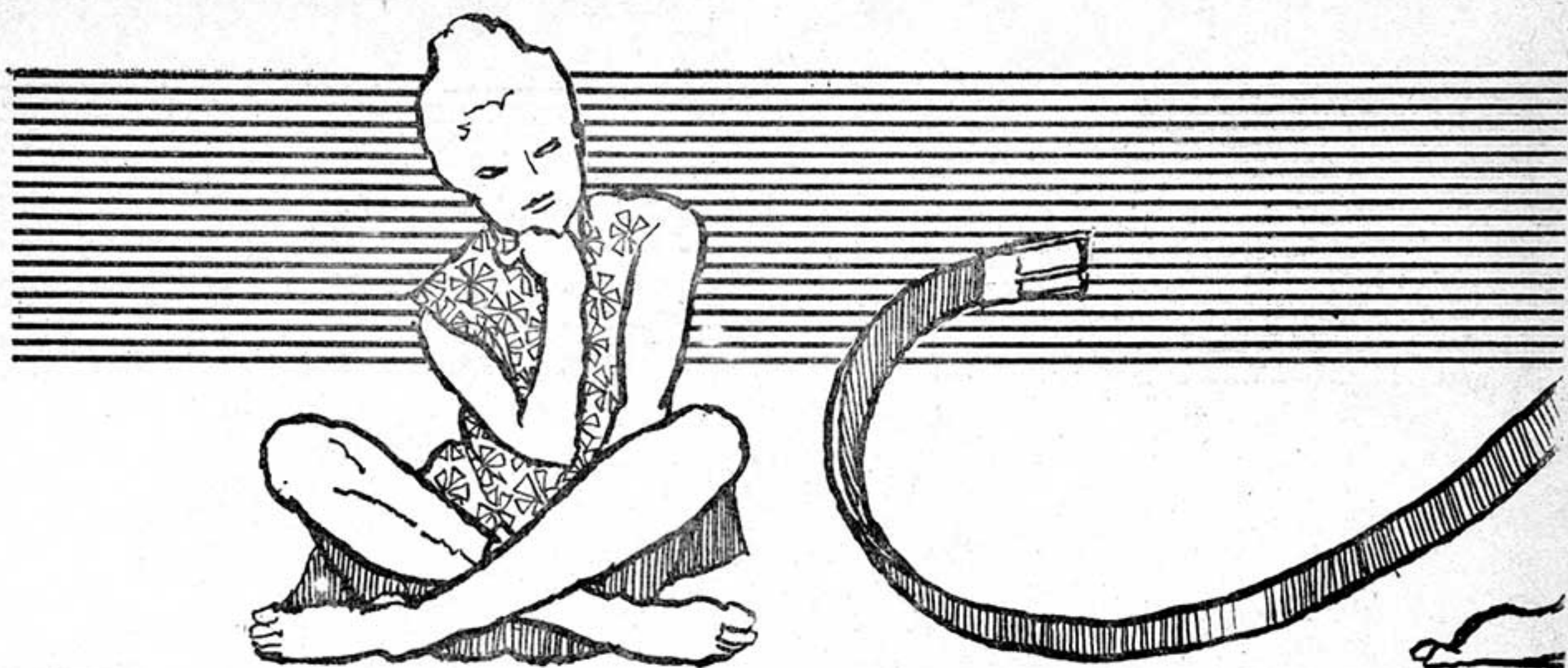
「ふん。ぜいたくな奴隷だこと。私のお仕置きに文句をつけるのね」

あなたは苦笑され、それでも縄じりを引いて、私を部屋の中央までもどしてくださいました。

私は、ほっとして、

「ありがとうございます」

と、お礼をいいましたが、あなたは、「その代わり、こうしてあげるわ」



と、おっしゃって、痛烈な拳固を、私のあごに命中させました。

私は、もろにゆかに叩きつけられました。

自由をうばわれている両腕が、さらにねじまがり、両足は不用意にひらかれたまま、醜く宙を蹴りあげました。

それからまさに、わがままな女王と哀れな女奴隷の舞踏でした。まず、息をつくひまもなく、蹴りまわされたのです。

顔はもちろんのこと、乳房も脇腹も背中も女王さまのおみあしのふれぬところはありませんでした。両足がしばらくはなれないことは、私の羞恥を倍加させました。

どんなに蹴りころがされても、私はすぐに起きてかきこまることを約束しています。

しかし、うしろ手にしばられている悲しき起きなおるときに、足と腰をいちばん恥ずかしい形にくねらせて、あなたの目にすべてをさらさねばならなかったのです。

起きては蹴られ、蹴られては起きなおり、私の全身は、しだいに赤くほてりはじめ、ありとあらゆる獣じみたうめき声をあげて、私はころげまわりました。腕とからだをしばった紐は、いよいよよくこんで苦痛を増していきます。

いくら努力しても、起きあがる速度は目立

って遅くなり、あなたはいらいらして、容赦なく私の髪をつかんでひき起こしました。

「きちんとおすわり！」

私は、両ひざをそろえて正座しました。するとあなたは、私の腿の上に両足をかけてお乗りになり、私の髪の毛を手綱代わりにぎって、ぐいぐいとゆすったり、ひっぱったりなさるのです。

「ぐうーッ、わわわッ」

私ののけぞる顔をのぞきこみ、あなたはうれしげに微笑されました。

ようやく縄目をとかれて、私はゆかの上にボロ屑のようにうずくまりました。

一杯の水をあたえられただけで、やがて私は、壁の前に両手をあげて立たされました。

壁に両手を突き、腰をうしろにつきだす。むかしの軍隊でやったという身体検査スタイルで、私はとうとう、革ベルトの乱打を受けたのです。

ベルトは途中で、幅や固さ、長さのちがうものに取りかえられ、そのたびに私の感覚も変わりました。

「これでもか、これでもか！」

女王さまは、入念に、私のもっとも悶え苦しむところをねらっては打ちつづけられました。

(未完)

哀話ツンツン節



夫 夢 中 豊

(1)

立原小隊長が閉めきったドアを開けっぱなしにして入ってきたとき、渥川はほんのひとときではあるが、正直救われたような気がしたものである。閉めきられた部屋の熱気と相まって、それほどこの場の空気が、彼をいたたまれないようにしていたのだった。

渥川と宮永一等兵は、あわてて立ちあがって型どおりの敬礼をしたが、この場の主役たるべき前畑軍曹は、相かわらず椅子に腰かけたまま、ちよつとうなずくような会釈を小隊長に送っただけで豪然としていた。

「またかいな？　ほんまにかなわんな。それで兵隊はどうなったんや、兵隊は……」
若い、小柄な小隊長は、せかせかと軍曹に

たずねた。

「はなっから憲兵さんに見つかりよって、もう引っぱられよったんですわ。それでいま、このことを調べよりますんやけど、なかなかちよつと喰えんおなごですわ」

軍曹はそう言って四角く張ったあごをしやくってみせた。

その前、椅子に腰かけた軍曹の膝の高さに正座してうなだれた娘の白いうなじがある。みると、その必要もなさそうに思えるのに、娘の荒れて機械油のにじんだ手首は、正座したためはちきれそうになっているズボンの後にまわされ、短い紐で結えられていた。これが、前畑軍曹独特の説諭の方法であり、特に女子工員に対するときには、それがいかななく発揮されるのである。彼は兵隊たちにも決

して手をふりあげるといふこともなかったが、そのネチネチしたやり方から、兵隊たちから「ゲジゲジ」とあだ名されて恐れられていた。

いま考えてみれば、前畑軍曹の前に正座させられているこの娘にしても、いっそ憲兵に引っぱられた方が幸いだったかも知れないと、赤児のように固く握りしめた両手の下に見えるムチムチした尻や、尻の下からのぞいているズック靴の底がすりきれて穴のあいているのを目の端にしながら、渥川はボンヤリそんなことを考えていた。

「チエツ、処置なしやなあ。また憲兵さんに頭あがれへんがな。前畑はん、しっかり頼むで」

小隊長は娘のうしろをせわしく歩きまわり

ながら、さげすむような視線を、娘の肩から腰のあたりへ投げて言った。

「まあ、若いもんばっかりのどこやさかい、こういうことも絶えまへんやろけど……」

軍曹の言葉に小隊長は立ちどまり、視線を軍曹の方にそそいだ。工学部出のこの若い将校にとっては、およそ色恋なぞ無縁で、この工作小隊にあっても、指令された武器の増産研究に一途であったため、工場のわずらわしい諸事は、いっさい前畑軍曹にまかせきりであった。

だから、彼にとって、自分の管理下にある部下や二百名ばかりの男子徴用工、それに五十名たらずの女子工員のおちどを憲兵に摘発されるのを一番きらっているくせに、またそういうささいな出来事に、いちいち将校たるものはかかりあう必要もないときめてかかっている風だった。

そんな、小隊長の苦手を、万事承知の軍曹だったので彼はあくまでも豪然としていた。「あんまりええ仕事やおまへんで、たまには玉置伍長の工場視察と交代させてほしいと思うとります……」

軍曹はいやみたつぷりにジックリ逆襲してでた。

「ま、俺はこれからF町へ出かけるが、今後

こんなことがたびたびおこらんように頼んまっせ」

小隊長は軽くホコ先をかわして、荒々しく部屋を去った。

あとにとり残されたように、さっきの会話のためいっそう深くうなだれた娘が消え入りたい風情で小さくなっていた。

「ほんまに、ボンボンはかなわんなあ」

軍曹は渥川たちだけになると、小隊長のこゝとをそう呼んで軽蔑していた。

「ほんまに……」ヘッヘッと宮永一等兵が仕方なくお追従笑いしたが、渥川は素直に笑えず、顔をこわばらせただけだった。

さあ、というふうには、軍曹は娘の方に向きなおり、身をこごめるようにして顔をのぞきこんだ。

さして美しいとは思えぬ娘だったが、もう二十才に近い年ごろであり、のぞきこまれて身も世もあらぬげに、不自由な身をくねらせているさまには、渥川もやはり妖しい色気を感じずにはいられなかった。彼はつとめてその馬鹿げた訊問を無視して、先ほどの続きの書類にペンを走らせた。

「さあ、さっきは江原とキスしたとこまでやったな。それからや、それからどうやったんや、え？」

渥川のうしろで、娘が死ぬような思いで身もだえるのが感じられた。が、頑強に口はつぐまれたままだった。

渥川の属するこの工作小隊や男子徴用工たちはともかくとして、和歌山県の南端の離れ小島に建造されたこの軍需工場に送られてくる女子工員たちは、平時ならばすべて感化院か檻獄につながれるべき過去をもった、いわば不幸な女たちばかりだった。渥川が接したところでは女たちは一ように男ずれがしていて、青年期の兵隊や徴用工たちの情事による結びつきも当然と思えるような女たちが多かった。

懲役がわりに徴用されてきた女子工員たちとちがって、工作兵や男子徴用工たちは、月に二回は小さな連絡船に乗って対岸のF町に外出することが出来、F町にはまたこれらの男たちを対照につくられたような、安っぽい遊廓もあるにはあったが、青春期の男女を収容したF島で、男女間の交際を厳禁するなど殆んど不可能に近いことだった。

島には渥川らの小隊、徴用工、女子工員の他に、一箇分隊の憲兵が派遣され、きびしい軍政がしかれていた。のみならず今度の江原二等兵と相川睦子のような事件はあとをたたなかった。ただ、渥川の記憶するような事件

が、数えるほどの件数にとどまっているのは、きびしい軍政の刑罰の苛酷さによるものであった。いや、そういえば、軍律の正しさや、一般の戦時体制さえも、すべて刑罰の恐ろしさがそうさせているのだった。

かねて恋仲だった江原二等兵と相川睦子がたまたま就業時間中、所用の途中に顔を合わせたため、ふた言三言話をしたというだけのことである。折悪しくそこを憲兵が通りかかったのが悪運だった。――

(2)

「ええ、それからどないしたんや……。ええどないやねん？」

軍曹の声は執拗にねばる。

「どないもしません」

蚊の羽音に似たか細い声が、渥川の耳をかすめた。

「うそ——つけえ。ええ、どないしたんや。」

江原がこうして、ここさわったやろが」

軍曹の指が、娘の胸をふれようとしたらしい。緊迫したものが、娘のからだから渥川の背にはねかえってきた。

彼はそつと頭をねじって、二人の方を盗みみると、前畑軍曹が娘の顎に手をかけているところだった。固く閉じられた娘の瞳から、

ふた筋三筋、光って流れるものを、渥川は見ただ。

F島の女子工員たちは、渥川の知る限りでは相当なあばずれ女ばかりだった。彼女たちの相手が、江原二等兵のような純情な新兵の場合の殆んどは、彼女たちから誘惑したものであった。が、渥川には、この相川睦子に限って、他の女子工員とは違った感じを受けはじめていた。渥川は今日のような場面を、度々この部屋で経験させられていたが、たいいていの女は、早く職場や寮に帰してほしいため、軍曹に気に入られるような答えをして、彼のかっこうななくさみものになっていた。

いま、軍曹の前に正座させられた娘は、かたくなに口をとさしているばかりである。その、涙に光る頬に、渥川は純粋な幼ないものを感じて、いたたまれない気持がした。

「軍曹どの」

渥川は思わず口をひらいた。

「明日、大隊へ提出する来月の生産表が出来ましたので目を通していただきたいのであります……」

彼はこの場のいらだたしい空気に、自身がさいなまれる思いだった。

前畑軍曹は興をそがれたように、いくぶん鼻白んだ顔で、

「ちょっとひとまわりしてくる。あとで俺の部屋へ持ってきてんか」

と軽くいなした。

椅子ごとゆっくりからだを回転させた軍曹に、救われたていの娘の目が、必死に軍曹の表情を追う。

「そやけど、しぶといおなごやなあ、ほんまに……。おい宮永、このことを俺の部屋に連れていってってくれ」

何を考えているのか、軍曹はほまれをとりだして口にくわえた。

背を向けた軍曹のうしろで、宮永は渥川にむかってひよいと肩をすくめておどけてみせた。

もう許される、と思ったものが、軍曹の言葉に、恐怖が氷のようになって背筋を凍らせながら、

「かんにんして、かんにんしてください」

娘は悲鳴に近い声で必死に哀願した。

それは、軍曹にまたひとつ、楽しさを与えた結果にしかならなかった。彼は大げさに眉をしかめて言った。

「このくそ暑いのにやかましなあほんまに。」

おい宮永、猿ぐつわしたってんか」

宮永一等兵はまた悪役を買わされて、とまどっていた。

「さるぐつわて……」

「なに言うとするのや、お前の腰に吊つとるそいつじゃ！」

「あ、これ……」

宮永はあわてて腰の手拭いを引きぬいた。

彼は、かんにんして、かんにんして、と必死に首を振る娘をなだめるのに精一ぱいだった。

「かたちだけやて、ほんまにかたちだけやて……」

宮永の方が娘に哀願するかたちになった。

「なに言うとのや。しっかり括つとかなあかんぞ」

軍曹は聞きとがめて叱ったが、冷酷な言葉とはうらはらに、顔からニヤニヤ笑いが消えなかった。

猿ぐつわをされた娘が、宮永に押されるようにして部屋の奥に消えると、軍曹と渥川の間に気まずい霧のようなものが立ちこめるのがお互いに感じられた。

兵器増産にやっきとなった軍が、新しく編成した工作隊の古参兵である渥川には、前畑軍曹は彼が練達した主計兵であるとか、大学の文科出であるからとかではなしに、何か威圧に似たものを感じているのだった。

二人きりになると、たださえむし暑い部屋

に、熱気が凝固するようだった。

「ほな頼んまつせ」

軍曹の方が耐えきれなくなつて立ちあがると、陽光がガラガラするような戸外に出かけていった。

(3)

騒々しかったモーターの唸りがいつせいに停止し、部屋の窓から見える夕日が赤くうるみかける頃になつても、軍曹は自室に閉じこもつたままのに業を煮やして、渥川は昼間作成した書類を持つてたずねた。

前畑軍曹は寝台に深く腰をおとし、いきたなく禪ひとつの格好で渥川の書類を受けとつた。

渥川は軍曹が書面に目をとおしているあいだに、すばやく部屋の周辺に視線を走らせたが、相川睦子の姿はどこにも見あたらなかった。

「よっしゃ、俺のハンついて、あしたボンボンに渡しといてくれ」

軍曹から書類を返されて、渥川が去ろうとする、

「おい、ちょっと、ちょっとこっちいこい」と軍曹が言った。

「ハア？」

彼を呼んだのではなかった。軍曹が手招いている部屋の隅に目をやって、渥川は内心アツと叫んだ。

そこに、若い娘の身に裸同然の相川睦子が渥川の目を避けるようにして、ちちこまりながら軍曹のゴツイ軍靴を一心に磨いている姿があったからである。

軍曹は、そこに棒立ちになっている渥川には意に介せず、なお手招きを続けた。

娘は仕方なく、耐えがたいふうに、身を前こごみにしながら、オズオズと軍曹の前に立つた。上衣を脱がされて、粗末なキャラコ地でつくった手製らしい肌着、そして、同じようなキャラコ地の、幾度も洗い古されたズロースのままの格好である。それよりも渥川がおどろいたのは、睦子のやわらかい下半身をつつんだズロースの上から、T字形に堅い縄の禪をされていることだった。

ビンタなどと思ったらこっちの手が痛い、という前畑軍曹の、これが陰質なやり口であった。あまりのいたいたしさに、渥川はツと目をそらせた。

「ちつとはこたえたかいな。なんやさつきからモジモジしと思たら、ションベしいたいんやろが、あ？」

軍曹は睦子の前ミツに指をかけて、小さく

ゆすってみせた。そのたびに睦子の齒の間から、こらえきれぬような小さな悲鳴が洩れるのだった。自然に、手が前をかばうような姿勢になる。

「こら、ちゃんと不動の姿勢をとらんか。なんやったらまた、手え括つといたろか」

そうして、軍曹は娘の身もだえを楽しみながら、わざとゆっくりした手つきで禪を解くのだった。

渥川は、まるで淫卑な男女の秘画でも見せられたような悪感が背筋に走るのを覚えた。

「渥川上等兵帰ります！」

彼は軍曹の行為にせいっぱいの反抗をみせて、たたきつけるようにドアを閉めた。

事務室の方に歩を運びながら、渥川は自分の行動に深い後悔を感じていた。自分の荒々しい行為を、あの娘はどんな思いで耐えていたのだろうか。あの娘に、何の罪があるというのだろうか。彼は自己嫌悪にムツツリ押しだまったまま事務室に入るなり、書類を机の上にとたたきつけた。

「どないでした。あのこ、いてましたか？」

宮永一等兵が心配顔で渥川の顔色をのぞきこんだ。

渥川は自分の不機嫌が宮永に移るのを恐れて、強いて笑顔をつくってみせた。彼は、若

いわりにいろいろ自分の身を案じて気を配ってくれる住職出身のこの兵隊を愛していた。

考えてみれば、宮永が軍曹と自分の間をうまくとりつくりつてくれるために、どれだけ渥川の負担が軽くなっているか、それは尺度で計り知れないものがあつたろう。

「まあまあ、あのこは無事らしいわ」

軍曹の方もその点は心得ていて、決して女に手だしするようなことはなかったが、相川睦子の、他の女たちにはみられぬ初心なところが、渥川の胸にひっかかるものがあつた。「ゲジゲジ、ゆっくり楽しんでまんやろ」

宮永が窓の夕焼けを見ながらつぶやいた。事務室の向いにある兵舎では、夕食前らしく兵たちの華やいだ高声が聞こえていたが、それがピタリ、と止むと、やがて誰かが歌う声が聞こえてきた。

「かわいいそうな、かわいいそ——なあ

へいた——あいさん

かねの——茶わんに——かねのオ箸

それは、どこの、いかなる兵科の兵たちにも愛唱される聞き馴れた歌だったが、美声で哀調切々たる歌い方だった。きっと吉川という兵が歌っているにちがいがなかった。きくところによれば、消燈後、彼吉川がベッドの上でこの歌を口ずさむと、ここかしこから必ず

新兵たちのすすり泣く声が聞かれるというほど、F島工作隊の中では名物になっている兵隊だった。

「あいつら、しょうないやつちゃな」

宮永は聞きつけて、おびえたような目で渥川の方をふり向いたが、

「お——いッ、お——いッ添島アッ」

大声で兵舎の方へ向って叫んだ。

やがて、バタバタスリッパを鳴らしながら添島二等兵が飛んでくるのが見えた。添島は初年兵の中でも最古参で、渥川たちにもその几帳面な性格を重宝がられていた。

「添島、おまいがおってあんな無茶さしたらあかんがな。ボンボンは今晚おらんからええようなものの、聞かれたらまたゴツツイバツチはかされる（制裁を加えられる）で」

「ハイッ、すぐやめさせますッ」

添島はしゃちほこばって答えると、バタバタ兵舎へ飛んでいった。

しばらくして、兵舎から添島が大声で制しているのが聞かれた。

「おういッ、みんな静かにせえッ。エテヤンがゴツツウおこってるぞ」

渥川や宮永の同年兵たちは、宮永を僧侶出身であるところから、彼のことをおじゅっさ・んと呼んでいたが、宮永の職業を知らない初

年兵たちは、宮永の瘠せていてセカセカした動作や、皺の多い風貌から単純にエテ（猿）ヤンと呼んでいた。

「江原が営倉入りしてるちゅうのに、しょうないやっちゃで、ほんまに」

宮永は渥川をふり返って苦笑した。

「そやけどあの歌、うまいこと作りよったもんでんなあ。吉川がまた、ええ声で歌いくさる……」

感にたえたように宮永が言ったので、今度は渥川が苦笑した。

「そやけど、江原のやつ、どないしてまっしやろなあ」

宮永は窓の外へ、ひとりごちるようにつぶやいた。

渥川も、その純朴な兵のことを、しきりに想っているところだった。

(4)

その非常召集のあったのは三日後の消燈直後だった。渥川は寝入りばなをやり起こされた。燈火管制下の暗がりの中に、宮永が彼を呼ぶ声がした。

「ここだ。なんや？ またBさんか」

Bさんというのは、ほとんど隔日くらいに南方洋上から来襲するB29爆撃機のことだ、

島全体が軍需工場となっている都合で、ここも爆撃の目標となる危険は多分にあり、その都度、兵や工員たちは防空壕に退避するのであるが、サーチ・ライトに銀翼をきらめかせたB29は、F島など目もくれず、対岸からの対空砲火の中をゆうゆうと阪神方面に向って行くのだった。

「ちがいまんのや。えらいこっちゃ、江原が脱走しよりましたんや」

夜目にもベツタリ顔に汗しながら、宮永はオロオロ声に言った。

「脱走？」

渥川は飛び起きてす早く衣服を着けた。どこへ、というあてはなかったが、せき立てられるように表へ飛び出していた。兵舎の前の広場を、武装した憲兵が駆け抜けていくのが見えた。

「渥川はん」

宮永は渥川の袖を引いて引きとめた。二人は黒々と無気味に静まりかえっている工場の建物の陰に身を寄せた。

「江原はもう助かりまへんで」

「なに？ そないに悪い状態か」

「憲兵をなぐり倒しましたんや。死んだんと違いまっか。だいたい福島のやつが、しょうもないこと言いくさったらしいちゅうことで

すが……」

隊に福島というやくざあがりの鼻つまみものがいた。ささいなことで、彼は昨日営倉入りをしている。単調な工場では先日の相川睦子の件などかつこうなわい談の種になっていた。特に、福島などは好んでいろんな臆測をまじえておもしろおかしく話すのが得意だった。監視の目を盗み、彼は江原にそれを話したのではなからうか。前畑軍曹が相川睦子を犯したくらいは言いかねない。他に、江原が脱走するような理由は考えられなかった。

「そうか」

渥川は暗然として黒い空をあおいだ。だがこうしてはいられない。とにかく、江原を探しださねばならなかった。

「おじゅっさん、おまい本部の様子見てきてくれ。俺はなんとか江原を探す」

渥川は宮永と別れて探しまわった。四面海に囲まれたこの小島から完全に脱走することは不可能に違いない。江原は死を覚悟で、前畑軍曹に復讐するために脱走したのではないか？ それとも、相川睦子の不実を責めようというのか。

渥川は息を切らしながら駆けまわった。江原を探しだして、どうするという思案は浮かばなかった。ただ、その傷心の青年を抱きし

めてやりたいほど江原が哀れでならなかったのだ。

島のここかしこにざわめきがおこりつつあることが、渥川の肌を感じられた。武装を終えた彼の小隊が出動を始めたらしい。ぐずぐずしてはいられなかった。最悪の事態には、江原が射殺される恐れも多分にあった。

いつか、渥川は江原を追って、島の南端にさまよっていた。

そこは、廃品となった機械や空缶、金属の切削粉などが山積みされた一隅であった。

渥川は瞳を凝らして江原の姿を探し求めたがそれらしい人影は発見出来なかった。

渥川はあきらめて踵を返そうとしたとき、傍らに積まれた旋盤の切屑がズズ……とくずれ落ちる音を耳にした。

彼は息をこらし、じっと注意を傾けた。かすかに、人の切ない息づかいが伝わってくるのを感じとった。

（江原。江原だ。）

彼が江原の名を呼ぼうとしたとき、誰か、こちらへ馳けてくる足音がした。

「渥川はん。おうい、渥川はん」

足音は、なかば忍ぶように低く彼の名を呼ぶ。

「おい、こっちだ」

「あ、渥川はん」

水をあびたような汗をぬぐいながら、宮永一等兵が近づいてきた。

「見つかりまへんか？」

「ああ……」

渥川はあいまいな返事をして宮永をむかえた。

「隊が出動しましたで。江原が女子寮にくるんやないかえらい騒ぎや。それに江原が逃げたのを知って、相川睦子が気違いみたいになりよって……」

例によって前畑軍曹の指揮で、相川睦子は兵たちに手足を緊縛され、口を塞がれた姿で工具倉庫へ移されたとのことだった。

「いまの場合はまあしょうないやろな。そやったら警戒は嚴重やろな」

「ところがゲジゲジは今度のことは俺にまかしてくれて……憲兵に言いよって、相川睦子の方は添島とあと二人だけですわ」

「そうか……そやったら、島はもうすっかり固められたんやな」

渥川は暗然として立ちつくした。後ろに、江原はひそんでいるかも知れない。しかし、彼を助ける思案は浮かびそうもなかった。

「添島らが言うてましたけどな」

宮永は急に声をひそめた。

「もし江原が来よっても知らん顔してろ言うてまんのや。江原はもうどっちにしても助からんやろし……」

「そうか」

意を決したふうに、ふいに渥川は大声で叫んだ。

「相川睦子のいる工具倉庫は添島ら三人だけか。それで、江原が来ても黙ってろ言うてたんやな」

渥川の大声に、宮永はどきまぎしてしきりに額の汗をぬぐった。

「おじゅっさん、そのこと知ってんの、おまだけやろな」

「いえ、もう隊のもん、みんな知ってますけど……」

ガン、と脳天を打たれたように、渥川は緊張した。

「毘だ。前畑軍曹の狡猾な毘だ。俺は、江原をおびき出す毘の手助けをしたのではなかったか……」

「いかん。こりゃいかんぞ」

渥川は鉄屑の闇の方をふりかえって耳をすましてみた。そこには、鉄屑のすえたような沈黙があるばかりで、江原の気配はすでに消えていた。

「渥川はん、あんた……」

宮永もハッとつかれたように渥川の狼狽を覚った。

「宮永ッ、えらいこっちゃ。いこッ」

飛び立つように、二人が行動をおこそうとしたとき、荒々しい軍靴の音が近づいてくるのを知った。

「誰かッ。おいッとまれッ」

武装した憲兵が走ってくるのが見えた。

(5)

紀伊半島洋上に、夜間、敵の潜水艦が浮上し、沿岸を砲撃した、というニュースが伝わっていた。

昼夜をわかつた、相かわらずB29の編隊が飛来し、沿岸からは、まるで義理を果たすといわんばかりの対空砲火がこれを迎えるだけで、よう撃する遊軍機の姿などは、ついに一機も見られなくなった。

沿岸一帯に機雷が浮設されたため、離島は一さい禁止され、島の人間たちはただ三度の食事と、ワイ談くらいが唯一つの楽しみとなっていた。

そして、いま、兵や工員たちの話題は、江原二等兵と相川睦子のことでもちきりになっていた。

「朝まで何べんしよったやろか」

遠慮のない工員は、卑わいな身ぶりであたりを笑わせていた。

江原の捕えられたときは、渥川の考えと少しちがっていた。前畑軍曹は江原が工具倉庫に侵入したのを見とどけたが、充分時間をおいて夜が白むころ逮捕に向かった。

そして、前畑軍曹のこの行為は、人情下士官としてワイ談とは別に島の話題をにぎわしているのを知って、渥川は苦々しい唾をはき捨てた。

たしかに、軍曹は江原に、相川睦子との惜別の時を与えたにちがいはなかった。鬼軍曹と呼ばれる上官の、部下に対する情だったかも知れない。だが、相川睦子はいったいなんだというのか。

彼女は前畑軍曹の人気挽回のための、人身御供に過ぎないではないか――。

黙りこくっている渥川の心をほぐすように宮永は仕事の手を休めてふりかえった。

「そやけど、考えてみたら江原みたいにしたいことして死んだ方がよかったかも知れまへんなあ」

江原に一撃された憲兵は、一昼夜昏睡した状態のままで息を引きとったのである。死刑はまぬがれなかった。

「ちがいまっか？」

効果はなかった。渥川は無視したまま、しきりと鉛筆を削っていた。粗悪な鉛筆の木は堅く、削っても削っても芯はボロボロとくずれ落ちるのである。

宮永はそっと立ちあがって窓際に歩いていた。

「いよいよ本土決戦か。へへへ、みんな死によるわ」

聞くとともにしに聞いていた渥川は、ギョツとして顔をおこした。いつか、宮永のひとりごとは読経にかわっていたのである。

江原の死刑がいよいよ明朝となった前日、渥川は最後の面会におとずれた。

急造の重倉倉の錆びた鉄格子の中で、江原は渥川の姿をみとめてのそりと起きあがってきた。青黒い顔の眼のふちが一層青黒くくすんで、渥川は正視出来ず床に眼をおとした。「渥川上等兵どの、ご心配をおかけして申し訳ありません」

案外しっかりした語調は、すでにあきらめきっているらしかった。

「江原……」

渥川の方が、咽喉がふくれあがって声にならないでいた。

「相川睦子は……元気でありますか」

「ん……ああ、まあ」

渥川は、やはりそれだけしか言えなかった。渥川の恐れていたことが、ついにおこってしまったのである。相川睦子は、あれからも工員たちのワイ談から逃がられることは出来なかったのだ。寮にかえされてからも、女工員たちの、かつこうななぶりものでしかなかった。彼女たちは、根ほり葉ほり、江原のことを聞きだそうと相川睦子にむらかった。未は相川睦子を素裸にして後ろ手に縛ったうえに、素肌の腰に縄をかけたのだった。彼女らの中には、数人、前畑軍曹の縄を体験したものがいたのである。

翌朝、寮舎の前の立木に、相川睦子の縊死体が発見された――。

相川睦子の死を告げるべきか、告げずにおくべきか――。だが渥川は遂に話すことは出来なかった。

「そうでありますか……。あのこはこんなところへくることはなかったのです」

相川睦子は学校から女子挺身隊として動員された工場で、工場長の誘惑をはねつけたため不良工として島へ送られてきたことを江原は手短かに語った。

相川睦子のことを話したすと、江原の頬にかすかに血がのぼってくるようであった。

やっぱり、と渥川はその時確信した。工員や兵たちの噂は無実にはちがいないと……。

「不思議なもんですわ……」

江原は遠くを見るような目でつぶやいた。「死ぬときまると、あないにやかましかった機械の音も、ピタッとやんでしまうて……。自分は思い残すこともなしに、死ねると思うのであります」

「江原……」渥川は絶句してただ江原を見つめるばかりだった。

渥川を送ってきた憲兵伍長は、吐きつけるように声を荒らげて言った。

「あいつはおまえの親しくしてたやつか」

憲兵伍長は噴鼻やるかたないといった調子で語尾をふるわせていた。

「あんなやつがいてるから皇軍は敗れたんじや」

「しかし……」渥川は哀願するような視線を憲兵にかえた。

「停戦のことは江原一等兵に話さないでほしいのであります。その方が……」

「わかつとる、わかつとる」

伍長ははねつけるように答えた。

「あんなやつにそない言ったら、よろこびくさる」

今日も、太陽は白熱して兵舎につづく道に

照り映えていた。

渥川の通り過ぎる工場の棟、棟は静まりかえって、薄暗い床には目的を失った機械の数々が冷たい沈黙の中に輝いているばかりだった。

兵舎に近づくにつれて、崩壊した皇軍の兵士たちが、何やらどら声を張りあげて合唱する声が聞こえてくる。

「わたしはF町にイ咲いているウ」

ツンツン

名もないイ花のオ鈴蘭ンよ

ツンツン

わけもない怒りと悲しみがふいに渥川の胸を襲って涙があふれてきた。

怒りは、前畑軍曹に対してでも立原小隊長に対してでもない。悲しみは徒労におわった青春への惜別ではさらになかった。兵たちが歌う、ただ甘い感傷が、わけもなく渥川の涙を汲みあげるのである。

「ほオくはF島オの工作兵」

ツンツン

胸にイ五つのオ金ボタン

ツンツン

兵たちの歌声はさらに高い。

汗のにじみ出た肩を落として、渥川はゆっくりゆっくり、歩いてゆくのがあった。

映画『マーニー』について



原 忠 正

もし、偶然の機会で私がこの映画のスケッチ写真を見ることがなかったとしたら、おそらく私はこの作品に一片の顧慮をもあたえず、ましてこの欄で紹介しようなどとは思わなかったにちがいない。それほど私はヒチコックという男が嫌いだし、また彼の作品が嫌いである。

むろん、彼が嫌いということは、私たちにあって、彼の作品を無視してよい、ということにはならない。私が常に彼の作品を無視しつづけて来た第一の理由は、彼の「心理探究」というものが、俗受けを狙った商業的なものであるということの他に、彼がどうもフ

ロイトに悪い意味で影響されすぎているということによる。

だが映画を作る職人としてのヒチコックは、さながら、かつてのストコフスキのごとく安定感がある。残念ながら私達はこれを確認しなければならぬ。いわば業師とでもいうのであろう。その趣味が余りにも相反するため、私はときどき彼が私達にとって好ましい題材をもって映画を作るとき、本能的な反感をさえ覚えるのである。

しかし今、私は正直に言わねばならない。マーニーによって、あの空気枕のような顔をしたハリウッド飼殺しの老職人は、憎らしい

ほどの魅惑を私達の手元に運んできたのである。マーニー（正しくはマルニーと言うときいた）は、変った女である。赤い色に強い反応を示し、稲妻を極度に怖れる。天与の職業のごとくに金庫破りをする。そして、その金で、名馬を買い、それにまたがって山野を駆けめぐって、社会への勝利感に酔うのである。ヒチコック好みの、複雑な性格、それも病的な要素で偏向した人間像がまず提示される。

むろんヒチコック自身、セクシユアル・ミステリイと呼んだこの映画には、十分に、裸形、接吻、愛撫の場面が採り入れてある。そ



これらのいずれもが、格別の精彩を放っているわけでもないが、これらの結合の状況は、十分に職人的である。

ティッピー・ヘドレンという、新しい女優（「鳥」でやはりヒチコックの映画に出ている）が、地獄から来たような美しい異常な目の輝きで、私達を虜にしようとする。

この女性は、前作で「鳥」に襲撃される側の女主人公であった。鳥という必らずしもエロチックな連想を伴わない動物によってではあっても、彼女は、少くとも被虐的な立場にあった。それが今度は逆の、つまり征服者の立場にある。これも面白い対照である。

馬を乗りまわすことによって、上流社会や支配階級を表現するという手法は、映画でも小説でもかなり古くから使われてきた方法である。しかし、この映画では、女盗人が自分自身を慰める手段として表現されている。馬は通常の場合以上に特殊な立場におかれている。慰めるため、自身を暗示にかけるために、女性が馬を駆ることは、上流の婦女が、一つの教養として乗馬をたしなむのとは、ちよつと意味が違ってくるからである。

馬は或る意味で、共犯者でさえある。そして、当然のことながら、騎手の特別な愛執の目的でもある。「愛」という言葉で表現され

るのに相応わしいかどうか、それは私は知らない。

だが、この映画がロマンチックだとヒチコックによって定義づけられ、セクシユアルだと、ヒチコックが自信あり気に語りかけ、推

理的だと呼ばれるとき、私達は、その意味を十分に知ることができる。

その上、ヒチコックは言う。

「セクシユアル、ロマンチック、ミステリアス、——いや、これは、それ以上のなに



かである」

この限りで彼は正しい。たしかにエロチックというのは違った意味でのセクシユアルな雰囲気がこの一篇についてまわっている。映画はまず、ティップビー・ヘドレンの演ずる変った女性「マーニー」を説明する。説明は不十分であり、いろいろな点に欠陥が見える。しかしいま、それは問うまい、彼女の母の港町での貧しいアパート暮らしを描きつつ「マーニー」が母の愛情に飢えていることを示し、また赤い色に敏感な恐怖感を示す性格を表現する。

それに、職場を変えて——というのは、マーニーが金庫から金を盗み逐電して他の会社に移るということなのであるが——忙しげに働きながら、金庫の錠のダイヤルの秘密を狙う「マーニー」。金を盗むと早速乗馬服に着換えて愛馬「フオリオ」を馳る「マーニー」。ブロンドと黒髪を使いわけ、何種類もの偽名の証明書を持っている「マーニー」。雷鳴と稲妻に自失する「マーニー」が次々と説明される。

しかし、説明の仕方は粗雑であり、かつ意味が不鮮明である。伏線としては非常に乱暴な説明の仕方である。だから、この一篇の中で、スリルやサスペンスはどこにも見当らない。つづいて、男性としての主人公であるシ



ヨーン・コネリイがマーニーの新しく入社した会社の社長として出現し、何のいわれもなくマーニーを愛しはじめる。この辺りがまた徹底的に必然性を欠いているのでまるきり作話の感じが強くなってくる。

二人の新婚旅行。マーニーは男性を性的に受入れようとしなない。これも実におかしい。後に解明される少女期の偶然の悲劇と、異性恐怖症が一つも結びつかないのである。

この妙ちきりんな二人の主人公は、ヒチコ

ックの思うままに作り話の軌道の上をひた走りに走る。マーニーは再び馬に乗る。しかし今度は、狐狩りである。犬に追つめられた狐という、絶好の題材がありながら、マーニーはそれまでもいくらか見ているはずの赤い上衣（狩りの先導者）をみて馬を狂気のように走らせる。いくつかの障害物。最後に、石垣に後足をひっかけて倒れた馬。転げ落ちたマーニーは、とっさに（これもおかしい話である。戦場ではあるまいし、そんなに急に馬が全治不能だとか、苦しんでいるとかは判断出来ないはずである）近くの農家の主婦にピストルを借りてフォリオを射殺する。

つづいて、妻マーニーの被害者の一人であるストラットという税務顧問と示談の交渉をしている良人の側をすりぬけて、自分の家の金庫を狙うマーニー。扉は開くが、マーニーの手は紙幣をつかむことが出来ない。これもまるきり分らない。何故かという説明はまったくないし、推理も出来ない。

いづれにしても、良人はマーニーをつれてマーニーの母のところへゆき、そこで再び雷鳴の中で、少女のところ、母が売春婦であつて、客の一人を連れ込んだとき、いざこざから母が足を怪我し、夢中になったマーニーが火かき棒で、その遊客を打ち殺したという出



るのに相応わしいかどうか、それは私は知らない。

だが、この映画がロマンチックだとヒチコックによって定義づけられ、セクシユアルだと、ヒチコックが自信あり気に語りかけ、推

理的だと呼ばれるとき、私達は、その意味を十分に知ることができる。

その上、ヒチコックは言う。

「セクシユアル、ロマンチック、ミステリアス、——いや、これは、それ以上のなに

かである」

この限りで彼は正しい。たしかにエロチックというのとは違った意味でのセクシユアルな雰囲気がこの一篇についてまわっている。

映画はまず、ティップパイ・ヘドレンの演ずる変った女性「マーニー」を説明する。説明は不十分であり、いろいろな点に欠陥が見える。しかしいま、それは問うまい、彼女の母の港町での貧しいアパート暮らしを描きつつマーニーが母の愛情に飢えていることを示し、また赤い色に敏感な恐怖感を示す性格を表現する。

それに、職場を変えて——というのは、マーニーが金庫から金を盗み逐電して他の会社に移るといことなのであるが——忙しげに働きながら、金庫の錠のダイヤルの秘密を狙うマーニー。金を盗むと早速乗馬服に着換えて愛馬「フオリオ」を馳るマーニー。ブロンドと黒髪を使いわけ、何種類もの偽名の証明書を持っているマーニー。雷鳴と稲妻に自失するマーニーが次々と説明される。

しかし、説明の仕方は粗雑であり、かつ意味が不鮮明である。伏線としては非常に乱暴な説明の仕方である。だから、この一篇の中で、スリルやサスペンスはどこにも見当らない。つづいて、男性としての主人公であるシ



ヨーン・コネリイがマーニーの新しく入社した会社の社長として出現し、何のいわれもなくマーニーを愛しはじめる。この辺りがまた徹底的に必然性を欠いているのでまるきり作り話の感じが強くなってくる。

二人の新婚旅行。マーニーは男性を性的に受入れようとしないう。これも実におかしい。後に解明される少女期の偶然の悲劇と、異性恐怖症が一つも結びつかないのである。

この妙ちきりんな二人の主人公は、ヒチコ

ックの思うままに作り話の軌道の上をひた走りに走る。マーニーは再び馬に乗る。しかし今度は、狐狩りである。犬に追つめられた狐という、絶好の題材がありながら、マーニーはそれまでもいくらも見ているはずの赤い上衣（狩りの先導者）をみて馬を狂気のように走らせる。いくつかの障害物。最後に、石垣に後足をひっかけて倒れた馬。転げ落ちたマーニーは、とっさに（これもおかしい話である。戦場ではあるまいし、そんなに急に馬が全治不能だとか、苦しんでいるとかは判断出来ないはずである）近くの農家の主婦にピストルを借りてフオリオを射殺する。

つづいて、妻マーニーの被害者の一人であるストラットという税務顧問と示談の交渉をしている良人の側をすりぬけて、自分の家の金庫を狙うマーニー。扉は開くが、マーニーの手は紙幣をつかむことが出来ない。これもまるきり分らない。何故かという説明はまったくないし、推理も出来ない。

いづれにしても、良人はマーニーをつれてマーニーの母のところへゆき、そこで再び雷鳴の中で、少女のころ、母が売春婦であつて、客の一人を連れ込んだとき、いざこざから母が足を怪我し、夢中になったマーニーが火かき棒で、その遊客を打ち殺したという出

来事が明らかにされる。この辺りも実に御都合主義で、一体何が理由でそうなったのかもわからない。

だから、その母が、マーニーを愛するが故に、自分で罪を被っていたということは、もちろん、(少女の殺人とはいえない実況なのだから)その母が、白々しく、自分のことは棚に上げて愛だの神様だのといってみたとこゝろで、まるきり茶番である。終りによろしく、心理的な拘束から解放された(というこゝろ)になっているらしい)マーニーが、良人のふところに戻ってゆくという結末も、余りにも安直すぎて、まるつきり何の実感もない。こんな駄作をヒチコックともあろう者が、よくまあ人前に出せたと思うような安手な四級娯楽品である。

だから私達は、この映画を、アメリカ流心理学の安価な流行、素人まるだしの変な心理分析、マーニーという変な女の一生の中の一部の見当外れの解明などという、表向きの方向から見るのをやめよう。だまされたような気分になるだけなのだから。

しかし、もしこの映画を「フオリオ」という馬を主人公とした物語というふうに解釈してみると、そこにはマゾヒストむきの絶妙な場面、ヘドレンのまごうところなき魅力が心

を捉えるのを知るのである。

まず、世間や男性に対して勝利感に酔いながら、フオリオを駆るヘドレン。その勝利感を助長させるために、マーニーのチョコレート色の軟かい婦人用乗馬靴の打撃を腹に受け、くつわのひきしほられるのを口許に感じながら、無人の林野を馳けるフオリオ。狩りに連れ出され、他の馬に交って、女主人マーニーの正式の乗馬服に包まれた美しさをのせて、その靴のかかどについた枝の長い拍車に駆り立てられるフオリオ。マーニーが赤い上衣によって、極度に恐怖を感じたとき、無残な拍車の一蹴りに応えて障害物の多い原野を走るフオリオ。

そのフオリオの終熄の場は、フオリオにとって更に劇的である。後肢を石垣で傷つけたフオリオをみると、マーニーは、近くの農家にとび込んで、狂ったように叫ぶ。

「ピストルを貸してちょうだい。あたしの馬が苦しんでいるのです！」

ピストルを構えてマーニーは一発でフオリオを殺してしまう。馬を愛する女性というものの、愛情の限界というよりも、その愛情の性質について、私達はこれまでよく引用されたこの場面と同様の設定を読み、見るときのように、同様に誘惑され、おののき、そして欲

喜する。それは、鳴哭するオセロオとひとしく、それは、二十分にわたるルチアの幕切れのモノローグの傾向と質にひとしい。

マーニーという欠点の多い女、ある意味では、反社会的な精神的不具とも思われる性格を持った女。マーニー、それは、馬にまたがるが故に、乗馬服の着こなしの美しさの故に、さらに、愛する故に冷たく無抵抗のフオリオに引金をひくという役柄の故に、新しいアイドルとして、私たちの前面に立ちあがるのである。





大変なMシーン

長編小説「四」

カップ・ノベルスにおさめられた梶山季之氏の長編推理小説（となっているが、じつは推理小説ではない）で、証券調査マンが、いろいろと活躍するお話。

太陽証券の調査マン、鈴江博は画廊やクラブを経営している原田福子という女に惹かれる。

はじめは、仕事の関係で接近したのだが、彼女の美しさに魅せられて、愛を告白する。ために、鈴江博という男性の運命は、一変する。

——原田福子は、男性をいじめてよろこぶ、怪奇な趣味の持ち主だったのである。（略）

しかも、そのホテルは、その彼女の趣味を満足させるための、定宿であつたらしく、ベッドの下からは、さまざまな責め道具が、出てきたのである。

彼女は、月ぎめで、その一室を借りきっていたのだった。

「私はまだ満足していないのよ！許せないわ。あなたは、私の奴隷でしょ？ わかっているわね？」

「はい、マダム！」

「なにをされたって、観念するわね？」

「はい」

精根をつかい果たした青年は、奴隷のように従順であつた。

「では待ってなさい」

ベッドの下には、ジュラルミン製の大きなトランクがあつた。それを引き出すと、蓋をあける。中にはいろんなものが、雑多に詰めこまれてあるのだった。

拍車のついた長靴。しなやかな鞭。真っ赤なタイツ。黒のハイヒール。大きな網の目のストッキング。精巧なかつら。青いネグリジエ、など、など。

「そうね。あなたは、いまから女になるの」

「女に？」

「そうよ。さ、このストッキングをはきなさい」

それは縫い目のない、黒のカラ

ー・ストッキングだった。これをはくと、男性の毛脛もかくれてしまうのである。

——という、まことに凝ったSM関係が、突如として展開しはじめる。

……歌舞伎の女形が、女の着物をきると、女に変身するように、鈴江博も、なんだか自分でも、女になったような錯覚が起きはじめたから、不思議である。これは常識では、合点のできない気持の変化だった。

——常識では合点のできない不思議な変化、という数文字だけで異常心理への導入が語られ、そのまま、ずるずる描写をおしすすめられるのは、いかに通俗小説としても、読者に対する説得力は弱いとさすがに作者も思ったのか、つぎに作者は、この男性がアルコールを飲んでいたために、なんの抵抗もなく、こんな行為に没頭できた」と説明している。

大の男が、女装してうれしが……これはフェチシストでなけ



裏窓タウン



れば、理解できない心理である。

でも彼は、アルコールでかなり神経が麻痺していたので、そのような奇矯な行動も、あえて抵抗なくできたのであった。

鏡に見入っていた鈴江は、不意に肩先に、ピシッ！という痛みを感じて、ぎくりとして、振り向いた。

みると、黒い男物のセーターを着て、赤のタイツに乗馬靴をつけて、鳥打帽をかぶった原田福子が拍車の音を響かせながら、鞭をふり回していたのであった。

——それから数日たつと、原田福子と鈴江博のあいだに、こんどは、純日本式衣装によるSM遊戯がくりひろげられる。

福子は、長襦袢ごと、肩からすべらせるようにして、着物をぬいだ。すると水色の腰巻きだけになった。

「ああ、マダム！」

鈴江は、ひざまずいて、その腰巻きをふりほどくと、白い彫刻のような体の、もっとも狂おしい黒

い翳りの部分に唇を押しつける。

「銀座支店から、その株を公募することになったら、私が全部、買うわ……」

福子の言葉は、すでに女装した奴隷の耳には、伝わらないかのごとくであった。

男の手は、いや、女装して、女になりきった人間の手は、福子の臀部のふくらみを撫でさすり、そして股をこじあげようとして、あの動物的な動作をつづけている。

「いいわね、鈴江さん……」

「はい……」

「ほんとうよ？」

「はい……」

男の舌は、黒い茂みの中を這いずり回り、あるしこりを捜しあてていた。

「はい、それまでよ……。こんどは、足の裏から！」

福子は、男の頬に思いきり平手打ちを食わせると、妖しい勝ち誇った笑いを浮かべて、ベッドの上に体を静かに横たえた。

——という、まことに大胆にし

して不敵、おかみを恐れざる描写である。

——男の長く鋭い爪が、女の白い太腿の肉に食い入っていた。深く、強く、その朱くマニキュアされた爪は、肉に突き立てられている。

「ヒューッ！」

女はハスキーな悲鳴をなげた。そうして、すらりとした脚を、ばたつかせている。

その脚は、紫色のカラー・ストッキングで包まれ、白いハイヒールを履いている。

「もう、許して……」

女は叫んだ。

「いいえ、だめ。私の言うことを聞けないような奴隷には、うんと酷い仕打ちをしてやるんだから」

男は、うわずった声で呟いた。

また朱い爪が、違う部分に食い入った。

「ヒューッ！」

女は、脚をばたつかせる。

「どう？」

「ああ、痛いッ！」



「言うことを……きく?」

「ヒューッ!」

「さあ……どっち!」

「ヒューッ!」

「どっちなのよ……」

「ああ……」

「まだ、わからないのね!」

「ヒューッ!」

「血が出るまで、やってやる!」

「ああ、堪忍……」

「やる気? しない気?」

「ヒューッ! 痛、たった……」

「本気で、怒ってるのよ!」

「だって……ヒューッ!」

「だって、へちまもありますか!」

男は、原田福子だった。男物の浴衣をきて兵児帯をしめている。そうして胸元には、白いサラシが巻きつき、その豊満な乳房を隠していた。

一方、女装した鈴江博は、いつかハ赤と黒Vで買い求めたコルセットを締め、真紅のナイロン・パンティをはき、カラー・ストッキングをはいている。顔は、化粧さ

れてあった。むろん、かつらもかぶっている。

だが、手のほうは、後ろ手に縛られていた。そして床の上に、芋虫のように転がされているのである。

鈴江博は、福子から手荒らく扱われれば扱われるほど、背筋にぞくぞくした戦慄が走るのを覚える。それは戦慄というよりは、快感の一種だった。

先刻から、もう一時間ちかく、彼は福子から苛められていた。鞭打たれ、たばこの火を押しつけられ、そのあげくに、両手を縛られて、太腿を歯で噛まれ、そして血が滲むまで長く鋭い爪を突き立てられているのである。

——そして、この夜の遊戯は、つぎのようなクライマックスとなる。

「口を、あけるんですか……」
鈴江は言われるとおりにした。また、彼女の甘酸っぱい唾液でも口に入れられるのだらうと思ったのだ。

だが、その予想は違っていた。

なにやら浴衣の裾をまくるような音がしていたかと思うと、次に顔の上に、なにか物体がゆっくり近づいてくるような気配がした。そして、ある独得な匂いを放ったものが、近づいてくる。

彼は目をあげ、とたんに悲鳴をあげた。

黒い草叢から、激しい勢いで液体がほとばしり出て、彼の顔を濡らしたのである。鈴江は目を閉じ、その生暖かい液体で顔を濡らすにまかせた。奇妙な恍惚感が、彼の体を麻痺させはじめていたのだ……

女性のS、男のM、そしてそのMが、男の女装という、なかなか派手な、凝った趣向で、ちかごろ流行の産業スパイ小説(の一種といえるだろう)に、これまたちかごろ流行のSMを、大胆にからませたところなんか、さすがに流行作家だけのことはあるが、こうアケスケに、ずばり挿入されると、かえって、こっちが気恥ずかしく



裏窓タウン



なってしまう。

しかも、この鈴江博という男性の、Mに至るまでの心理過程が、かなり省略されていて、いわゆるMの快感Vを、いともあっさり感受するような人間に一変してしまふのは、不自然であり、安易な運びである。

Mの感覚なんて、そうかんたんに、だれにでもわかるものではないのである。

しかし、M心理がどうのこうのという、むずかしい理屈をいわずに、通俗M小説だと割りきって読めば、けっこうおもしろい。

M派には、ぜひ、ご一読をおすすめしたい。男が女装して縛られ鞭打たれる小説なんて、そうめったにあるもんじゃない。

光文社刊・二百六十円。(南)

ドイツ映画

「怪人マブゼの挑戦」

刑務所の所長が、いつのまにか犯罪博士マブゼにすり変わって

て、収容している囚人たちを子分に從え、かずかずの悪事を働くという、奇想天外なお話のスリラー映画。

しかし、それが一応もつともらしく、合理的に進展していくのはいかにもドイツ映画らしい。

囚人たちは、自分の意志を失う薬を、マブゼ博士のために注射されている。

その薬をつくるために、一人の老科学者がこの刑務所にとじこめられているが、彼は狂人をよそおって、なんとか脱出のチャンスを探っている。

老科学者を自分たちの意のままに働かせるために、マブゼ一味は科学者の娘をさらってくる——という筋書きは、どうも、東西共通のものである。

ダリア・ラビふんするその美しいヒロインは、刑務所内のうす汚ない一室に、うしろ手に縛りあげられてこがされる。太目の縄でぐるぐる巻き。胸から首にかけてX型に縄がかけられ、さらに腰か

ら足までも、ぐるぐる巻きに縛られている。

だが、単にぐるぐる巻き、という感じで、キリキリという感じではないのが残念。つまり、緊縛感が弱いのである。

背中の手首も一瞬みえるのだがからだを縛った縄の多いのにくらべて、たったひと巻きとは、これもいささか緊縛感に乏しかった。

縛られたダリア・ラビが、画面に登場したときは、すでに、レックス・パーカーふんするFBIの二枚目が救いに現われて、縄をとかれるという味気なさ。

しかし、娯楽映画として、一応最後までたのしめるのは、ありがたい。

縄は解かれたものの、二人は地下室にとじこめられ、水責めにあう。ずぶぬれにぬれた衣服が、びったりと肌に密着して、ダリア・ラビの必死にあえぐ姿態には、エロチシズムが感じられる。

SMシーンの道具立てはすっかりそろっているのに、うまく生か



しきれなかったという、惜しい一編。色彩はついてない。バラルト・ラインル監督作品。(藤)

イタリア映画

「顔のない殺人鬼」

ただっぴろい古城があつて、そのなかには、拷問博物館みたいな一室もある。

「鉄の処女」だとか、絞首台とか、さまざまな鞭、拷問具がそろえられている。

むかし、この古城に住んでいた主は、死刑執行人だったという説明が、セリフの中でてくる。

さて、この怪奇なムードあふれる舞台の中で、つきつきと殺人事件がおきる。これが、なんともむごたらしい。

「鉄の処女」の中に女をおしこめて、両眼を血だらけにつぶしたりする。

なんの罪トガもない女を、うしろ手に椅子に縛りつけ、鼻にハチミツかなんかをぬりつけて、餓えたネズミに嚙じらせたりするのだ

が、どうも血なまぐさい感じで、情緒はない。カラーフィルムだから、いっそうどぎつい。

その犯人の去ったあとで、女主人公のロッサナ・ポデスタが、被害者の女の縄を解いて助けるのだが、女の鼻はすでに半分ネズミに嚙じられていて、血まみれの肉なんかがみえる。どうも気持ちが悪いこと、おびただしい。

さて、ラスト・シーン。ついにこのロッサナ・ポデスタも殺人鬼の手中におち、手術台の上に横たえられて、うしろ手に縛りあげられる。といっても、みじかい紐で手首だけ縛られるだけだが、このシーンだけが、ちょっといい。

さらに彼女は、袋みたいな服をきせられ(どうも死刑囚のきる服らしい)いよいよ「鉄の処女」の中に押しこめられるが、危機一髪主人公に助けだされるという仕掛け。

あきらかにSMの効果をねらって製作された映画で、舞台も道具立てもストーリーも、その条件は

ぜんぶそろっているのだが、どうもヨーロッパのSMは、どぎついだけで情緒にとほしく、日本人の感覚には、ぴたりとこない。

イタリアのSMは卒直で豪快であり、日本の場合は、じめじめして、しつこく、小細工的ムードが多いということかもしれない。

アンソニー・ドーソン監督。

この映画も「惜しい!」という感じがつよかった。(藤)

東宝映画

「女体」

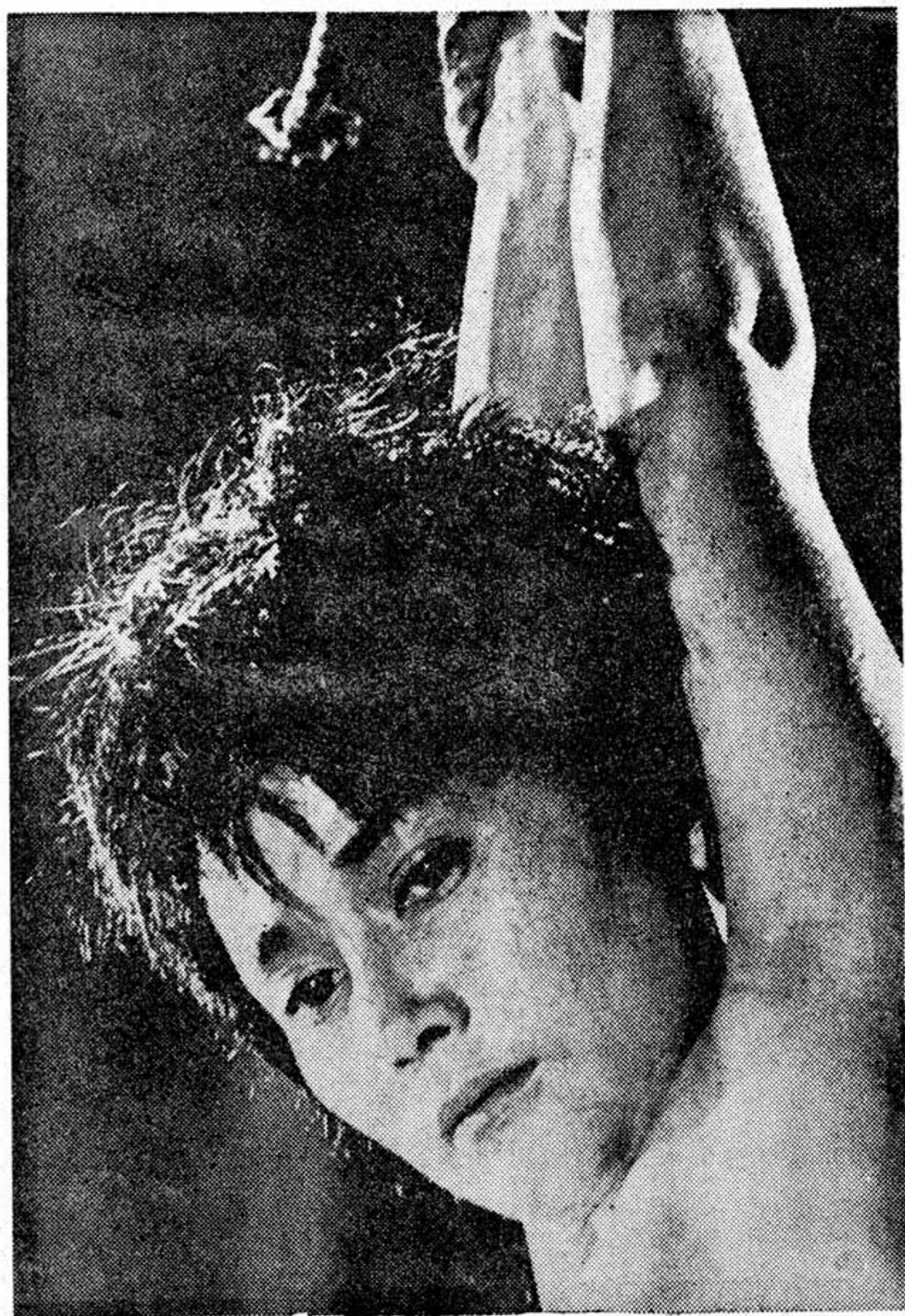
田村泰次郎の小説「肉体の門」「埴輪の女」を、恩地日出夫監督が、脚本も担当してうまくミックス、終戦時から今日までの、ある女の姿を描いた映画。

日活の「肉体の門」は、いかにも軽演劇的で、もっと悪くいえば極彩色の紙芝居的だったが、こっちは第一、色もつかないし、純文学ふうの渋いもの。

いまは実直な洋裁店主の妻におさまったマヤ(団令子)の、回想



裏窓タウン



のシーンとして、終戦直後のれいのパンパン群の生態がでてくる。町子（千之赫子）のリンチシーンは、迫力はあるが縛りはない。町子のおしりがあらわにされ、

棒みたいなので、びしんびしんなぐられる。はだかのおしりが大写真になって、ムチのあとがついたりするが、それだけ。

あとは、ヒロインのボルネオ・

マヤが、両手首を前で合わせて太縄で縛られ、焼けビルの天井から吊るされるという、れいのクライマックスシーン。

団令子は、乳房をむきだし、吊



られたまま回転し「痛いよう、く
るしいよう」とうめく。

お姐ちゃんトリオのときとはち
がって、大変な体当たり演技で、
伊吹新太郎（南原宏治）との船上
での愛欲シーンも、ふとももをさ
らけだしての大熱演。

S M的にみた場合は、あきらか
に日活の「肉体の門」のほうがお
もしろいし、たのしめる。

だが、映画全体をくらべたとき
こんどの東宝のほうが、みていて
腹にずしりとくる重量感がある。

マヤもおせん（楠侑子）もよく
描けていて、田村泰次郎の原作の
味を忠実に生かしている点では、
あきらかに恩地監督のほうをとら
ざるを得ない。

極彩色の紙芝居的「肉体の門」
のほうが、純文学的「肉体の門」
よりも、S M的にみておもしろい
ということ（ただ縛りシーンが多
いすくないの問題ではなく）S
M小説の場合にも、はっきりいえ
ることだし、ここにS Mというも
のの本質に、重大ななにかがあり

そうである。

S 小説でいちばんおもしろいの
は、やはり、類型的な悪役がでて
きて、類型的な美女を縛りあげ、
類型的なおどし文句をならべて、
じわじわと責めあげるストーリー
なのである。

二本の「肉体の門」をみて、い
ろいろと考えさせられた。（八）

「日本のダリ」 の受難

去る九月十五日から二十二日ま
で新宿ステーション・ビルの六階
画廊で、画家古沢岩美氏の新作の
個展が開かれていたが、そのとき
主催者が、展示された作品の一部
をハガキ大のコピーにして、来会
者に頒けた。

ところが、このコピーが「わい
せつ物」と目されて、二十三日淀
橋署に主催者が検挙された。

警察側の言い分によると、「絵そ
のものを見た場合は、ワイセツ感
より、さらに高度の芸術性が表現
されている印象があるが、写真に

とると色彩感が失われ、ワイセツ
性が強く印象された」のだそうで
ある。九月二十六日読売新聞の記
事による。（傍点筆者）

筆者は古沢氏とは十数年も前か
らの旧知で、その作品はいろいろ
と見せてもらった。同氏は一部の
美術批評家に「日本のダリ」など
と評されているごとく、シュール
・レアリスム的な作品が多い。

特に筆者が興味を覚えるのは、
アブノーマルな性的嗜好を感じさ
せる絵がすくなくないことで、た
とえば、S のにおいを多分にただ
よわせているものに、宙ずりとな
った半人半獣のような女性のいる
「憑曲」や暗雲の低く垂れている
地平線上に、荆棘（けいきよく）
の冠や奇怪なけものに頭上をしめ
つけられている女の首を描いた
「女幻」また作品の題名は忘れた
が、コブラグニーを感じさせる人
糞を描いたもの、ネクロフィリー
のにおいの強い、狼に喰いあらさ
れた旅行者の屍体、骨片を描いた
作品などが、印象に残っている。



裏窓タウン



また、古い作品では、インド僧の苦行のさまを群像に描いたものがあるが、筆者は古沢氏がこの絵を描く前に、偶然に同氏と会ってその作品の意図をきいたことがある。

同氏は、この作品において、一つにはその当時の、日本人の被虐的な態度をカリカチュアライズしたい、というようなことを言っていた。

筆者はまた、インド僧の苦行は明かに自虐であるということ述べた。

ところがその後、「街の学者」田中香涯氏の著で、大正末期に出版された「医事雑考奇・珍・怪」という本を手に入れて、読んだところ、この著者もすでに、インド僧の苦行は自己性愛であると解していた。その原文の一節を紹介すると、

「印度教徒が梵天(ぼんてん)と冥合して、神変不可思議の力を得んがために、種々の苦行難行をやることは周知の事実である。二、三

日乃至一週間も断食したり、或は牛糞や鹿糞のみを食したり、或は片手両手を長時日に亘って高くさしあげたりするような苦行は、先ずとにかくにしても、荆棘あるいは釘の上に坐し、或は釘を打った靴を穿ち、或は薪を燃やして炎々たる火焰の中にじっと坐り、或は太い鎖を首から軀幹全体に巻きつけて、いつまでも立ったりするがごとき、残酷なる自体損傷の苦行の中には、たといそれが宗教的修道という名のもとに行わる、にしても、これに変態性欲的要素の加わっていることもすくなくはなかろうかと想像する。私が何故このような想像をくだすかというに、それは自身の肉体に甚しい損傷を加えることによって性欲を満足するという一種の変態性欲、すなわちロノレデルの命名したアウトモノセクスアリスムス Automono-sexualismusなるものの存在するからである」

うんぬんとある。

(かびや・かずひこ)

日活映画

「殺人者を消せ」

単調な毎日の生活にあきた男が東南アジアの戦争に参加しようと密航を企てるが失敗。ところが、そんな彼をみこんで、臨時社長を一カ月だけ勤めてくれれば、旅券も旅費もとのえます、とうまい話をもってきた男がいた——という発端で、石原裕次郎ふんする早川次郎という青年が、会社乗っ取りをたくらむ高松英郎、小高雄二、大坂志郎、嵯峨善兵、名古屋章、永井智雄、稲野和子らに生命をつけねらわれることになる。

七人の殺し屋対裕次郎というアクション仕立てだが、じつは思いつきり喜劇調になっている。

映画のなかほどで、ヒロインの十朱幸代が、悪漢の一味に縛りあげられる。

黄色いマフラーみたいな布で、うしろ手首だけ縛られ、足首もそろえて縛られる。口にはさるぐつわをかまされるが、これは歯と歯



のあいだに、文字どおりハンカチを噛まされる式のもの。

とりわけこの欄に取りあげるほどのシーンではない。健康で明朗庶民的な役どころの多い十朱幸代が、金持ちの令嬢にふんして縛られるのがめずらしいというだけ。

それと、ラストシーンの「太陽がいっぱい」を連想させるヨット上の活劇で、彼女がみせる太腿が魅力的。監督は、升田利雄。「砂の上の植物群」で、マゾ女をやった稲野和子が、裕次郎を誘惑する役で登場する。

(藤)

小島功氏の

SMマンガ

小島功といえば、以前からSM的な(というより、むしろM的なもののほうが多い)テーマをよく描くマンガ家として、おそらく本誌の読者のなかでも、ファンが多いことだろう。

「小説現代」誌に「マンション夜話」と題したマンガを連載しているが、十一月号の「困った女」と

いう回は、そのものズバリ、SMがテーマになっている。

そのマンガがここにそっくり転載すれば、いちばんかんたんなのだが、版權その他の手続きが面倒なので「マンガ」を「文」で紹介してみよう。それでも十分におもしろいマンガなのである。

①深夜、夫が酒を飲んで家にかえってくる。ネグリジェをきた若くて美貌の妻が「またのんできたのね」という。

②夫は「うるさい」といって、妻にサルグツワをはめ、うしろ手に縛りあげる。

③縛りあげた妻をうつぶせにしておしりの上に足をのせて踏んずける。このとき、妻は足首も縛られている、夫はパンツ一枚になっている。

④の場面では、もう縄をとかれた妻が「だめね、このごろ」といい夫のほうは「ふーッ」と息をつき汗をふいている。妻はふたつの乳房をむきだしにしている。

⑤ふとんの上にねそべった妻が、

「責め方がマンネリよ」と不平をいい、夫は「つらいな、マゾヒストのお相手は」と、なさけない顔でつぶやいている。

⑥妻がひとりでねていて「映画でもみて研究したら……」とつぶやいている。

⑦映画館のなか。スクリーンに、女がはだかで縛られているフィルムがうつっている。妻は客席で、「キーン、すてき、残酷!」ときけぶ。

⑧その帰途の妻の絵「あの手でいこう」というセリフ。

⑨ふたたび夜の家庭。妻は夫に、「ねえ、おねがいよ」といい夫は「やだな、そんなの」

⑩妻はひとりで柱を背にして立ち両手を上にさしあげて「早く、私をしばってムチで打ってよ」と、さいそくする。

⑪夫が妻の両手をようやく柱に縛りつけた絵で、妻は「近所にめいわくだから、サルグツワしてよ」と注文する。

⑫両手首を上にさしあげたまま縛



裏窓タウン



られ、口にはサルグツワをされた妻の上半身。夫は、撫然とした表情で、それをながめている。

⑬夫だけの絵で、セリフは「それから……」と夫が自分の着物の帯をといっているところ。

⑭最後の絵。「おやすみ……」と行って、夫はひとりでさっさとねてしまう。柱に縛りつけられたままの妻は「ヒーッ、残酷！」ともがく。

——という、オチのついた、コントにもなるおもしろい筋。

あきらかに「白日夢」ブームにひっかったマンガだが、小島功の描く女の容貌と肉体に独特のお色気があり、SMのムードを、わりあい正確に描きだしていた。

(秋)

ある部分の

異様な描写

「文芸」十月号に、芥川賞作家川村晃の長編小説「闇にひらく」が掲載されている。

「成瀬順治は妻の連れ子である小

学五年生のユミ子を、いつか、一人の異性として眺めるようになっていた。」

というのが書き出しである。

ユミ子は色が白く目が大きい。肉づきがよく、頬はふっくらしているし、足はすらっとのびていてなまめかしい。抱きしめて愛撫したい。末熟な、青い、小さな少女の性器の謎と神秘にこそ触れてみたい、と成瀬順治はひそかに思っている。

そして主人公とその妻はある夜そのユミ子の肛門を調べる。回虫の蛆を調べるのだが、その描写にやや異常な味わいがある。こんなぐあいである。

「見ると、ユミ子の股の裏側の白い柔らかい皮膚の上を、灰色の小さな虫が一匹、体をのびちぢみさせて這い動いていた。

『蛆?』

『回虫だよきつと。卵からかえったばかりのやつだ』

成瀬は塵紙をとって佐知子に渡した。一度でとることはできなかった。

った。佐知子は気味わるがっていった。(略)

『まだいるかもわからないわね』

佐知子はそう言うと、ゴムをとおしてある下ばきの裾に指を付けていた。肛門が見えた。そこに一匹、会陰の上にも一匹いた。

『小さな虫だから』と佐知子が笑いながら言った。

成瀬には笑い返すことができなかった。

会陰の奥は固くとじられていた。佐知子の右手の人差指と中指が揃えてその扉の上に置かれた。そして、指は無造作に、扉はやや遅れて迷いながらひらいた。成瀬は息をのんだ、小さな皺一つ、小さな染み一つない澄みきった淡紅色の世界がそこに輝いていた。美しかった。神々しいほどの美しさだった。それ以上に美しいものを彼は知らなかった。強い感動に襲われて彼は頬を濡らした。



ゴルドンの記憶

(最終回)

阿麻哲郎
江淵晃夫・絵

舞台と楽屋

箕輪祥子が立ち上がると、司会者の男は大仰な身振りで手招きした。

「ああ、その後のほうの、そうそう、青いスーツのお嬢さん。どうぞ舞台のほうへ」

スポットが箕輪祥子のほうに当てられた。

暗い客席の中の、そこだけがまるで宙に浮くように、丸く光線が円を描いて、生き物のように動いた。箕輪祥子の屈托のない、明るい笑顔がそこに捕えられた。

「勇敢なお嬢さんですね。しかもなかなかおきれいでいらっしゃる。こんなお嬢さんなら、わたしもぶたれてみたい。ゴリラ男がうらやましいですね」

司会者は箕輪祥子を舞台へ招き上げると、彼女を客席へ紹介しがてら、そんなことをおどけた口調で言った。客席ではそちこちに小さな笑いが起こった。だが司会者の言い方には、ざれごとの陰にも微妙な実感があり、それが客の笑いを苦笑じみたものにさせた。

「お所とお名前をどうぞ」

型通りの質問だった。

「はい。箕輪祥子と申します。まだ学生で、K女子大の三年生です」

「はあ、学生さんでいらっしゃるんですか。それはそれは——」

何がそれは、それは、か。言った司会者もとっさのことで、別に深く考えもしなかったのであろうが、いわばこの特別飛入りのショー、大変な荒療治、残酷無残な見世物である。その残酷さを、二十歳になるやならずの女子大生が買って出ようということが、それが、つい、それはそれは、になってしまったのであろう。

客席の後のほうで、中村教授は、例のすぼめた口元をもぐもぐやりながら、あれよ、あれよ、といった面持ちで、舞台を見守っていた。

「道具は何になさいますか。ムチですか、やりですか、それともこのコン棒になさいますか」

司会者がこう促すと、客席は水をうったように静まった。

「そうですね。これにしますわ」

あまり手間どらなかった。箕輪祥子は、ツト手を伸ばすと、一本の古びた帯革をとり上げた。それはごく普通の、ワニ皮のベルトだった。しいていうと、割に幅広な、大きなバックルがついている、頑丈な作りになっている。

箕輪祥子は、それまで一度もゴリラ男のほうを見ようとしなかった。あわれな犠牲者そのものには何の関心もないといったふうに、如才なく客席や司会者に、愛くるしい笑顔を万べんなく振りまくのだが、ついぞゴリラ男には目もくれなかった。

箕輪祥子は、一度、手にした帯革を振ってみた。空気を切るだけだが何か手ごたえがあった。手ごたえがズンと腕をしびれさせた。

箕輪祥子は、ゴリラ男を見すえた。視線が合った。もう彼女の顔には笑いはなかった。物に憑かれたような、妖しい目の光だけがあった。その目で射すくめられて、ゴリラ男は恐怖にからだをこわばらせていた。この瞬間のやりとりは、箕輪祥子と、ゴリラ男との間にだけ交わされた、目に見えない靈氣の交流のようなものであった。それは他人にはわからない、客席も司会者も、普通のショーのつもりで、ただしそれとなく伝わる神秘的な緊迫感から、声をのんで見守っていた。

「いいわね。打つわよ。見事に打ち殺してあげる」

箕輪祥子は大胆に言いきった。彼女が一步足を進めると、ゴリラ男は一步、後じさった。やにわに、帯革が箕輪祥子の手のうちでなった。ピッと、激しいさすような音だった。

それがゴリラ男の面上に、真正面からすえられた。ゴリラ男は、ウォット、短い、身を切られるような悲鳴と共に、うしろにのけぞった。

血が流れた。どこかが切れたらしい。それでも容赦はなかった。のがれようとあちこち身をおろすゴリラ男を追って、ベルトは執拗にからみつくように、連続して振りおろされた。悲痛なうめきと共に、ゴリラ男はけん命にのがれようとした。その苦痛を心地よげに楽しむように、ベルトは容赦なくのがさなかつた。悲鳴だけでなく、点々と血が舞台上に飛び散った。生々しい、陰惨なリンチであった。これはただ事ではない、と、観衆は思った。今までの、ショーとしての残酷遊びとは質の違うものであった。

見ればかわいい、優しげな女子大生が、観客注視の中で、ゴリラ男を殴殺しようとしている。

「ちょっと待った」

静まって、皆息をのんでいるところへ大きな声だった。場内の視線がそこに集まった。暗いので顔は見えなかったが、それはまぎれもない中村教授の声であった。教授は、大急ぎ、人を分けて、舞台の袖から台上によじ上ると、箕輪祥子を後から強く引きもどすよう

に、腕を引っぱった。

サレアは楽屋の自分の居間で、出演準備のメイキャップに余念がなかった。円い鏡に向かい、面をこらすようにして、丹念にマユをひいた。細く長く、いささか吊りぎみに濃いスミ跡を残して描き上げた。面長の顔がそれで引き締まった。

「アカリを」

と命じると、ゴリラ男が伺候して、ローソクを差し出した。部屋は日中でも薄暗い。それでローソクをとすのであった。サレアは決して電気を使わない。いつでも明かりはローソクであった。一見、ローソクは、小人に見えた。巧妙に人型に作られていたからだ。その頭部に火をとす、するとゆらゆらと頭が燃え上がった。

それを二本、ゴリラ男は差しだした。ひざまずいたままである。目が畏怖に恐れおののいている。

鏡の中のサレアは、人間離れのした美しさで輝いていた。肌は決して白いとは言えなかったが、淡い栗色に磨き上げられたその色ツヤのぐあいは、南の島の神秘さをそのまま移してきたような、別種言いようのない光輝があった。

ジ、ジッとローソクが揺らいで、鏡の中のサレアの顔が、明かりの中で明滅した。そしてそこに、箕輪祥子のベルトを振りかざす、あの引きつったような顔が大きく浮かび上がった。その足元に、ベルトで打たれたゴリラ男が、血だらけになってうずくまっている。

「あの女、バカなことをしてかして——」

サレアは激しく舌打ちをした。とたんにローソクの火の一本がかき消えた。

「私の犬奴！」

サレアはスックと、ゴリラ男をにらみつけた。床にベルシャ織りのジュウタンが敷いてある。ゴリラ男はなすすべもなく、おそれおののいて床にヒタイをこすりつけていた。

サレアはパタリとすそを開いて、ゴリラ男の床にすりつけた頭を蹴り上げた。ゴリラ男はその一蹴りで、向こうさま、仰向けに転がった。

サレアの付人のひとりである女が、部屋に入ってきて、ゴリラ男をだき起こした。別にあわれみや、かばい立ての気持ちからはない。冷酷に事務的に、目ざわりなものを早々に取片づける、といった仕ぐさを見てとれた。

「早く下げて、目ざわりだ」

言われて女は、目を伏せ、ゴリラ男を引きずるように廊下へ連れ出した。

また別の女が入ってきた。

「とんだ余興になりました——」

舞台での、箕輪祥子の行為をば、言っているものであった。

「知ってる。あれではうっかり、阿麻哲郎も殺されてしまうところだった。ばかなことをしてかして——」

サレアは、箕輪祥子の出すぎた真似をとがめているのであった。

「いかがいたしましたよう」

女は、箕輪祥子に対しての処置について、サレアにうかがいを立てた。

「本日のところは、まあ、よろしい。大目に見てあげます。それより、思いのほか、あの中村というおじいさん、うるさくなってきたわね」

「さようでございます、サレア様」

「でも、もう今日がおしまい、いっぺんに整理をつけてしまいますからね」

「そうです、サレア様」

「今日という今日、ゴールドネス様がよみがえられる日です。私共はこの日をずい分待ちました」

「ご苦労多いことございました、サレア様」

「いやいや、苦労というものではない、これが私のつとめです」

サレアの面上から猛々しい険しい光が消え、優し気な、うれわし気な表情が浮かんだ。「のどがかわいた」

そういつて彼女は、舞台用の長いドレスのスソを引きずって、椅子にかけた。ずい分古い、年代のかかったエジプト期の肘椅子で、肘にも背にも、華麗な彫刻が施してあった。

「今、お酒を持ってきました」

侍女は下がった。やがて舞台出演の時刻も間近だ。サレアは目をつむりながら、しきりに或る人の出現を待ちわびていた。

ヒロイン登場

上島芙美子は、今しがた家を出たところであつた。真白な小型のハンドバッグ一つ持って、その中にコマ劇場の招待券がはいっていた。サレアからの招待であつた。残暑で、まだどうかすると汗ばむような、強い日ざしだつた。まぶしように、日ざしをよけて、通りへ出ると車を呼んだ。

車の中で、いろんなことを考えた。どうにもフに落ちない、最近の自分の様子についてであつた。ふっとした拍子に記憶がとぎれた。或る時間から、或る時間までの記憶の糸がつかないものである。そのとだえた時間、自

分が何を考え、どういう行動をしたか、まるで記憶喪失者のように、ただ時間が空白であつた。とにかくわかることは、豆ゴリラ男に對して、とんでもない、ひどい仕打ちをしているらしい、ということであつた。

一度、病院で診察を受けてみよう、と思いつつ、その失われた時間内に、自分が犯したと思われるゴリラ男に對する扱いの仕方が、あまりはずかしいことだったので、その秘密が知られることがいやなため、病院にはどうしても行けなかつた。

劇場に着いたときは、とうに開演時刻は回つていた。箕輪祥子が特別飛び入りして、ちよつとした混乱があつた、直後のことであつた。もちろん、場内は立錐の余地もないまでに、超満員であつたが、芙美子の持参した券は、特別席のものであり、彼女は丁重に扱われて二階正面の、特に仕切りのある最前列の一隅に案内された。

上島芙美子は、本来、こうした種類のショーにはあまり関心がなかつた。だが、それを押してやってきたのは、やはりサレアが、夫上島との何がしかの縁でつながる女であると思えばこそであつた。

芙美子は、あらゆる機会をつかまえて、夫への思い出にすがろうとした。夫がこのま

ま、死んでしまっているとは思えなかった。もしかすると、サレアが夫の居場所を知っているかもしれない、そんなワラにもすがりたい気持ちも強かった。

今、自分のところに、クサリでベッドにつないできたゴリラ男が、夫の変わり果てた姿であろうなぞと、知るはずもなかった。それを教えられても、とても信じることはできない。

舞台では、青い照明を浴びて、一匹のゴリラ男が血まみれで倒れていた。死んでいるわけではなかった。

司会者の男は、あわてぎみに、しどろもどろだった。

「お騒がせしました。ゴリラ男は一見血を流して、今にも死にそうなほどへたばったかに見えますが、これはそう見えるだけで、実は少しの傷も受けておりません。元通りピンピンしておりますのでご安心下さい」

そういつて、苦し気にヒタイの汗をぬぐった。

「うそいうな」

観客の前のほうで、だれやらが胴間声を張り上げて叫んだ。

「あのままあの娘さんに続けさせていたら、ゴリラ男は完全に死んでいたぞ」

ひとりに続いて、我が意を得たように、あちこちから声々が乱れ飛んだ。

「賞金はどうしたんだ。賞金はあの娘さんのものじゃないか」

「インチキじゃないか。ゴリラ男は殺されるところを助かったんだ」

「箕輪祥子さんという、あの娘さんはどこに行っただんだ」

場内は喧騒に包まれた。だれやら、ジュースの空きビンを舞台に向かって投げる者まで現われた。

「皆さん、静まって下さい。危険物は投げないで下さい」

たまりかねて、舞台に飛び上がり、叫んだのは坂崎警部であった。彼は大手を応じてこれ以上の喧騒を静めようとした。とはいいいながら、目的を別に持っているこのため、自分の明らかな身分が名乗れないのが歯がゆかった。

ゴリラ男は、そのときゆっくり頭を起こした。両手をまずついて、首を振り、静かに半身を起こした。そしてゆっくり頭をねじ向けるように、悲し気に顔を観客席のほうに向けた。一階席を埋めた観衆の群れから、目を二階席に上げたとき、すぐとっさに、最前列にすわった上島芙美子の姿に目をとめた。

ゴリラ男は突如立ち上がった。腕を上げて前に突き出して叫んだ。場内の喧騒は波が引くように静まっていった。

「皆さん、このとおりゴリラ男は元気であります。インチキではありません」

勢づいて司会者は、高調子にまくし立てた。ゴリラ男はまた叫んだ。それは二階特別席の上島芙美子に向かっての叫びだった。

幕が降り場内が明るくなった。上島芙美子はそのままだらけ、ほんやりとしていた。何が何だか、あいまいな状態だった。今しがた、舞台からこちらに向かって、異様な叫びと共に、両腕をふりしほるように差し出していたゴリラ男の行為が、鮮烈な印象を与えたのであった。事情があいまいながら、その印象は消えなかった。

「あのゴリラ男は、ほかのだれでもなく、確かにわたしに向かって何かを叫んだのだ」

芙美子は形の大小の違いこそあれ、自宅に残してきた豆ゴリラ男と舞台上のゴリラ男を思い比べ、そこに何らかの暗合を感じる思いで身ぶるいした。

休憩時間は十五分――、上島芙美子はサレアの楽屋を訪問するために立ち上がった。楽屋への通路に当たる廊下では、ちょうど



そのとき、大変な混雑の最中であつた。報道関係の記者やカメラマンたちが、何とかサレアの楽屋に押し入ろうと、番人の大男たちとスタモンダの押し合いをやっているところであつた。

「おい、そのツンボ」

記者たちは、番人の大男たちに、そんなきかないことばを浴びせていた。実際大男は、通路の両側にふたり立っていたが、ふたりとも半裸で頭にターバンを巻いた見上げるばかりの巨漢で、いっさい無言、無表情、何と言われようと、てんで聞こえないものようであつた。

「その、さっきのゴリラ男の写真を、一枚だけでいいから撮らしてくれよ。インチキでないなら、なおのこと写真ぐらい、撮らしてくれたっていいじゃないか」

じゅんじゅんと説く説得型の記者もいた。だが、巨漢はガンとして通路に立ちはだかつたままだつた。

「な、大男のツンボさん。ちょっとでいいから、どいてくれよ」

ひとりのカメラマンが、調子よく巨漢の関門をくぐり抜けようとしたが、すぐに首根っ子をつかまれて、押しもどされてしまった。

巨漢の力の強さといったら、ただごとでは

なかつた。大勢でなだれこもうにも、総員束になつてかかっても、ビクともするものではなかつた。

不意に巨漢のひとりがツト前へ進み出た。

押しかけていた記者やカメラマンたちが、束のまま押しもどされた。とんでもないバカ力だつた。巨漢はそうした人波を押しもどし押し分けると、その後のひとりの女性の前に通路を広げた。そこにはサレアの楽屋を訪問しようとして出かけてきた、上島芙美子が、半分びっくりしたような表情で立っていた。

巨漢は矢庭、その場にへたりこむようにすると、わななくように全身をふるわせながら、両手を合わせて上島芙美子を拝んだ。その後で、もうひとりの巨漢も、同じようにその場にすわりこんで、芙美子に向かって手を合わせた。

この奇妙な光景に、人々はあっけにとられた。あれほどがやがやしていた騒がしさもピタリとやみ、人々は皆、かたずをのむ思いでこの場の光景に目を見張った。いかな物に動じぬ報道関係の猛者たちにも、ちよつとドギモを抜かれる意想外な出来事であつた。

それより何より、一番驚いたのは、芙美子だつた。人ごみの後で、遠慮しがちにまごまごしているところへ、いきなりその大男が、

人波を分けて現われ、いきなり恐れわななくようにして、自分を拝み出したものだから、これには芙美子ならずとも、だれでもあわてるに違いない。あわてるといふより、大勢の好奇の目が、いっせいに自分に注がれたのが、顔から火が出るように恥ずかしかつた。とたんにきびすを返して逃げ出そうとさえ思ったほどであつたが、からだが自由にならなかつた。

巨漢は無言であつた。口がよくきけないらしかつた。だが感激と畏怖のために、からだをこわばらせ、しかも泣いてさえいた。

一時なりを潜めた周囲の報道陣も、ようやくハッと気づいたように、我に返って活動を開始した。いっせいにカメラマンたちが、てんでにいろんな角度から、上島芙美子のポートレートを撮り始めた。フラッシュが幾つも見つものにぎやかにたかれた。

勇敢な記者が、芙美子に近づいて声をかけようとした。すると不意に、それはかの巨漢によつて、激しい力でさえぎられた。巨漢のひとみは、怒りのためにワナワナとふるえていた。口こそきかないが、その全身に怒りを表わしていた。八つ裂きにでもしそうな見幕であつた。さすがの記者も、まるで手が出なかつた。いっぺんにすくみ上がって、それ以

上あえて、芙美子に近づくだけの勇氣は出なかった。

永遠の女王

室内には、サレアだけがひとりで控えていた。ゴリラ男も、巨漢も、その他の女たちもみんな追い払われていた。複雑な唐草模様を織りこんだベルシャージュたんの上に、サレアはひざまづいて待っていた。長い髪が、床を払うように、彼女の両肩からすべり降りて広がっていた。

上島芙美子は、何の心の準備もなしにはいつてきた。巨漢につき添われ、促されるままここがサレアの部屋だな、というくらいの軽い気持ちでドアのうちにいった。

赤い、緋のようなベルシャージュたんの上に、ひとりの女がひざまづいていた。髪が長く、肌が栗色に光っていた。彼女がサレアだとすぐにわかったが、その迎え方が仰々しすぎるので、芙美子は面くらった。面くらったといえば、さっきから面くらいの連続であった。巨漢から公衆の面前で拝まれたことがそうであったし、またサレアの特別に仰々しい儀式張った出迎え方がそうであった。

上島芙美子は、ひざまづいている相手に、

どうあいさつをしたらよいものか、判断に迷って、入口のあたりで立ち止まった。

「ようこそ、いらせられました。ゴールドネス様」

古文調の英語で、サレアはいっそう深く頭を垂れた。声が鈴を振るようにさえざえとなつた。

「あの、何か人をまちがえていらっしゃるのではないでしょうか」

芙美子はこわごわと身をかがめるようにして、ただすのであった。

「私はあなたにお世話になったことのある、上島の妻の、芙美子です。そら、あなたに、かわいい豆ゴリラ男をいただいたりした——」「いや、決して、人まちがいではございません」

そしてサレアは面を上げた。大きな目のひとみに、熱気がこもっていた。

「ゴールドネス様、私今日の再会の日の来るまで、ずいぶんと耐えながら待ちました。私はりっぱに、あなた様のご不在の間、役目を果たしてまいりました。」

ゴールドネス様、今日こそは奇蹟の日でございます。あなた様がよみがえられる日でございます。そしてわれわれの世界が光に満ちる日なのでございます」

サレアはまた深々と頭を下げた。

「どうぞ、お手をお上げ下さって、私、そんなあいさつをされたんでは、困ってしまいます」

実際、上島芙美子は途方にくれた。相手といつしよになって、自分も床にひざまずくと、それも妙であった。ともかく相手を立たせようと手を差し伸べた。

「とんでもございません、ゴールドネス様。私はただいっかいの、あなたさまのしもべにすぎないものでございます。まもなくそのことがおわかりになることと思います。要するに一時間ほど、時間が遅れたにすぎないのでございます。あなた様は、上島芙美子なぞという方ではなく、本当はゴールドネス様でいらっしゃるのでございます。上島芙美子とは、ただ仮のお姿の方にしか、すぎないのです」

サレアの言うことは、すべて意表をつく、とんでもないことばかりであった。上島芙美子は、自分の頭が、どうかしてしまったのではないかと、思った。

上島芙美子は、すすめられて椅子にすわった。豪華などしりとした古めかしい椅子であった。その椅子の前にサレアは相かわらずひざまづいていた。芙美子はひどく困惑した

が、どうしても相手がゆずらないのである。なるようになれ、という感じだった。

「私としましたことが、とんだ計算違いをいたしましたして——」

サレアは言った。

「計算に一時間のズレがございました。ゴルドネス様、あなたさまがよみがえられますのは、あと一時間の時間が必要なのでございます。そうすればすべて納得がいくことでございます——でも、よろしゅうございます。それまでの間、私がこれから、よくご説明を申し上げます。すべてご納得がいくかどうかかわかりませぬが、よく私の申し上げますことをお聞き下さいませ」

遠くで、開演を告げるベルが鳴るのが聞こえた。何となく、潮さいを遠くに聞くようなざわついた気配が、この部屋にも伝わってきた。サレアの出番まで、あと四十分あまりあった。

そうしたざわつきを外にしなから、サレアは例の鈴を振るような澄み渡った声で、或る驚くべき物語について、かいつまんだ話をした。それは物語というべきか、歴史というべきか、あるいは何というべきか、容易に信じられる話ではなかった。

その話とは、次ぎのようなものであった。

人類を名づけて動物学的にホモ・サピエンスと言われていることは周知の事実である。

約二〇〇年前、スエーデンの生物学者リンネが名づけた。ホモはラテン語で「人間」、サピエンスは「賢明な」という意味である。

分類学的に言えば「脊椎動物門、哺乳綱、霊長目、ヒト科、ヒト属ヒト」となる。

この中で、人類に近い類人猿および、それ以下のサル類は霊長目にはいる。

類人猿と人類を区別する基準は、まず脳の入れ物である脳頭骨の大きさ、容量にある。

現代人の男の容積は平均一四五〇cc、女一三〇〇cc、類人猿中の最大、雄ゴリラで五〇〇ccという明らかな差がある。

またそれにもまして人類が他と違うところは、直立歩行をすること、それに都合のよい骨格をしていること、だという。しかし、人類の祖先は形態的にサルに近い、そこに疑問が残る。そこでヒトをヒトと認める最大の特徴は、道具を作りそれを使うということだ。つまり文化を持つか持たぬかで区別する。

人類の先祖は何か、ドイツのネアンデルタール人類が有名である。これは十数万年前の人類である。さらに中部ジャワのピテカントロプスが居る。北京人類と同じでおよそ五、

六〇万年前の存在。また百万年前のものとして東アフリカのシンジャントロプスが居る。これが最古の人類と見なされたのである。

これは最も原始的なオーストラロピテクス群の一つで、粗末な石器を使うオルドワン文化というものを作った。つまり人類は、シンジャントロプスからピテカントロプス、ネアンデルタールとつながって発達したという。しかしその最終のネアンデルタールも、つまりホモ・サピエンスではない。いつどうして、ホモ・サピエンスは生まれたか、ネアンデルタールと直接つながる系は、ブツツリと切れたまま、まだ確証はないのである。だから一部では、ネアンデルタールは進化の途上で消えてしまっただけで、ヒトとはつながらない、という学者の説も強い。だが、あくまでもネアンデルタールと直接につながるといふ立場から、これをつなげる証拠としての古人類の発掘に力を住いだのが、京大の西司郎教授であった。

ネアンデルタール以後、今の人類とをつなげるクサリとなるべき古人類は、ブツツリと跡を断ったままである。こういうとき、西司郎は「アムッド人」の秘密を探り当て、相馬篤太郎は「ゴルドンの伝説」から、ゴルドネス様の秘密に迫ろうとした。これはゆるがせ



にはできないことです、と、サレアはここで一息入れるのであった。

「実はゴールドネス様、あなたはアムッド人の永遠の女王なのでございます。私も同じアムッドのしもべでございます。そしてアムッド人こそ、真に正統な人類なのでございます。

ネアンデルタール人類が発展して、アムッド人となったとき、それは今から三万年前のことでございますが、あなた様は女王としてお産まれになりました。真の人類が、あなた様を信仰することで、発展するのでございます。こうしたとき、異様な仮象の現象が起ったのでございます。アムッド人の一部が眠りの中で、とんでもない遊戯をむさぼったのでございます。その眠りは心良く、薬を使って遊びのための眠りにはいる者さえ出るほどでありました。これは眠りの一種なのです。『逆説睡眠』とも申します。

この眠りにはいった一部のアムッド人が、眠りの中で仮象の歴史をたどることになりました。その一部を称してホモ・サピエンスというのでございます。

おわかりですか。現在、ここにこうして生きているということは、すべて、うその現象なのであります。実際には何もないのでござ

います。もともと、世界は女性が支配するものです。それを「逆説睡眠」の仮象の世界では男が女性と対等に、いや、むしろ優位に立っております。睡眠の世界で、わたしたち女性の奴隷たるべき男性が、かようにふらちな世界を構築したのであります。たとえば、仮象のこととはいえ、これは許せません。皆目ざまさせて、厳罰に問うべきです。

ゴールドネス様、あなた様は、今仮象の世界で、上島芙美子となのつておられますが、それはこの世界の監視のため、特に一時、そのご身分に身を移し変えられているに過ぎないのです。ただ今、アムッドの女王ゴールドネス

として、仮睡なされていられるにすぎないのです。もはやお目ざめの時刻が近づいております。お目ざめになりました、一刻も早く、

このような逸脱した世界に、永々と数万年も仮象の世界に入りこんで、ホモ・サピエンスなどという、ふらちな観念を肉体化した者どもを、アムッドの世に引きもどすべき時です。

女王様、おわかりになりましたでしょうか」

サレアの語気には、人をさすような、余韻がリンリンと響いて、上島芙美子には一言も、それに口をさしはさむ余裕がなかった。

「あなたさまは、しきりに上島氏の行方を気にしていられるようですが、あなたさまのお

手もとに差し上げてある、あの豆ゴリラ男こそ、上島氏その人です。どうぞお驚きにならないで下さい。あれが本当の姿なのであります。あれがアムッド人の男性の姿なのであります。ゴリラ男、すべて、あるべきアムッド人としての姿なのであります」

上島芙美子には、例の、あの突如として襲う忘我の状態が襲ってきた。一面に白い光がサンサンと満ちて、何か溶け入るような感覚のうちに、次第に意識が吸いこまれていくのを感じるのであった。

エピローグ

舞台上にサレアが現われたとき、今や興奮はクライマックスに達した。何かが、いよいよ確実に起こるのだ、それはもう、観衆ひとりひとりの胸のうちに、確固として植えつけられた予感だった。予感におびえるように、場内はもはや、水を打った以上の、静謐のうちにのみこまれ、しわぶき一つなかった。

サレアは一言も口をきかず艶然と笑った。長い髪を背後に波打たせ、神秘的なまなざしを場内にくまなく注いでいた。

突如ドラがなった。余韻じょうじょうたる響きだった。サレアは、つと身を舞台の袖に

ひくとひざまずいた。こつせんと舞台の中央、一段高くなった台座に、ひとりの女性が立った、そこだけが白く、白銀色に浮き立った。輝きこぼれるほどの美しさというのか、目がくらむほどの壮厳さに観衆は打たれた。「皆の者」

銀鈴の響きにも比すべき、澄明な余韻があった。

「犬にも劣る我がしもべたちよ。今こそ眠りから覚め、我がもとに帰れ」

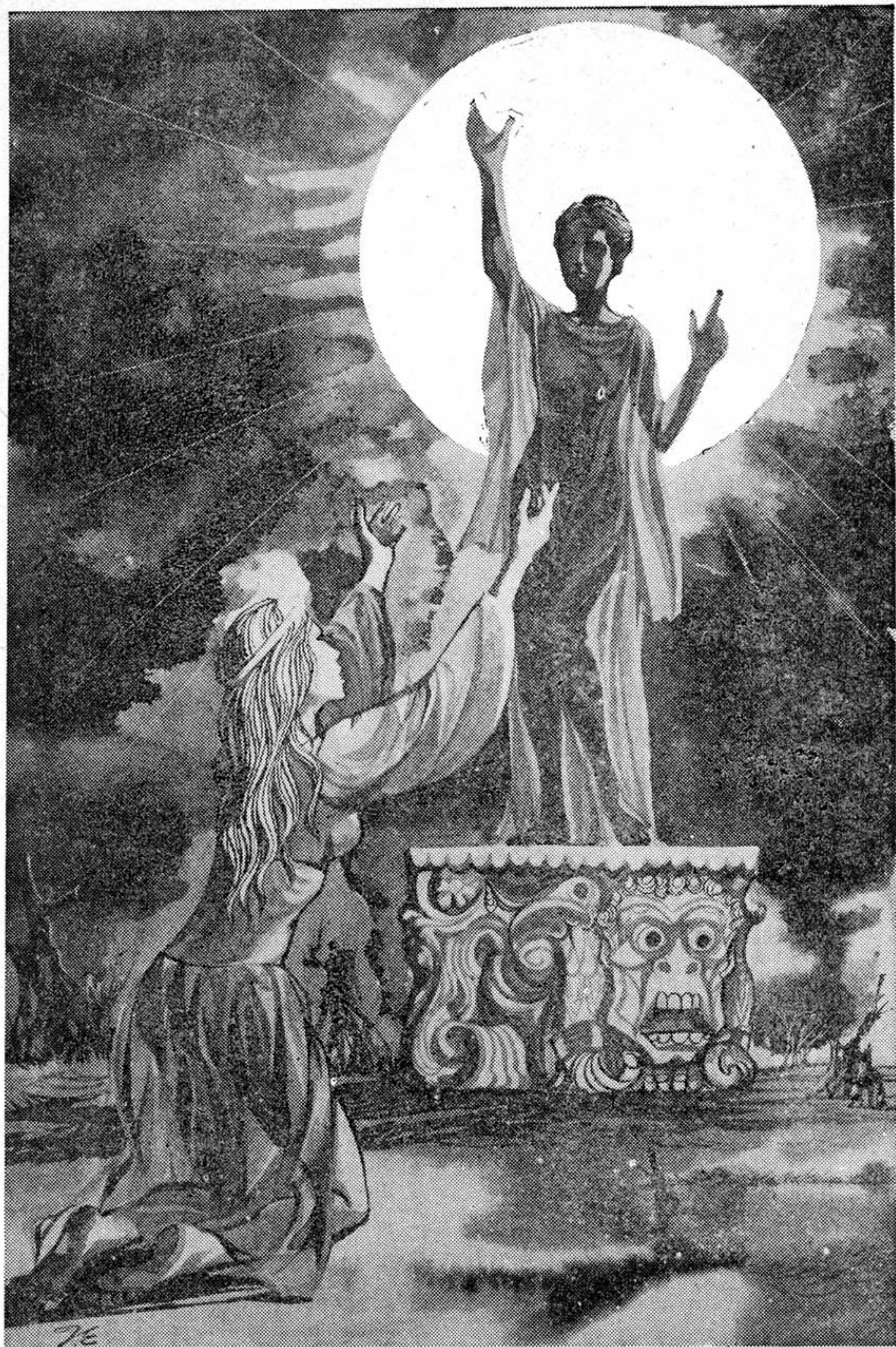
背後の暗黒の闇が二つに割れて、そこに大満月を思わすような水盤が現われた。タテにされた水盤の水は、不思議なことにこぼれようとはしなかった。満々と張られた水は、白銀の光を受けて、妖しく光った。

「皆の者、これを見よ」

観衆は、まるで暗示にでもかけられたように、舞台背後の水盤に視線を集中した。

そのとき、不意に場内の電燈がいつせいにつき、その水盤には、サツと一枚の黒い布がかけられた。一瞬の出来事であった。観衆は不意に夢から引きもどされた者のように、何事かしらと明るくなった場内を見回した。「皆さん、驚かせましてすみません。もう大丈夫ですよ」

マイクを片手に、風采の上がらぬ男が舞台



上からあいさつをしていた。中村教授であった。

「さっぱりわかりませんね、われわれには」
警視庁の一室で、中村教授は坂崎警部にせきたてられていた。八木、長沢刑事などの顔もそこに見られた。

「いや、問題はあの水盤の水ですがね」

中村教授は目を細めて、ニヤニヤ笑っていた。

「これを何と説明しましょうか、つまり手つとりばやくいうと、あの水水晶の水ですよ。

水水晶をご存知ですか。水晶はもともと我が国では山梨県が本物ですね。というより、奥多摩から奥秩父にかけての大山塊の中に、多く埋蔵されていますがね。その水晶に、当初からあの結晶の中に、水をたたえた水水晶というのがあります。水晶は十一の電気の照射の加減で、伸びたり縮んだりする性質があるのをご存知ですか。そうです。その性質を利用して、水晶は盛んに振動計などの工業用に使われていますね。ところが、もっと神秘的なのが水水晶の水なんです。あの水は、およそ三万年ほど前の水でして、その時間、じっと水晶の中で、息を殺していたわけですが、これが実は、水晶以上に、もっと激しい伸び縮

みの性質を内包してるんですね。縮むときはなくなってしまう。伸びたときは帯のように地球を巻いてしまう。いや、それほどではないですが、それでもその伸縮のもつ激しくしかも微妙な振動は、一つの霊気のように、われわれの脳波に訴えるんですね。脳波の中の記憶の部分ですよ。三万年前の記憶です。太古以前です。睡眠といいますがね。人間は一晚中、同じ調子でスヤスヤ眠るわけではない。眠りを調べるのに脳波を見ますね。目ざめているときは細かい波だが、眠るとゆっくりした大きな動きに変わります。ところが、深い睡眠の最中に、目ざめているときの脳波が現われるんですよ。つまり人は眠っているのに脳波は起きている。この奇妙な現象を「逆説睡眠」に掛けるに水水晶の振動、そこで人間は記憶の世界を逆にたどることになります。ここまでの理屈はわかるんですが――」

中村教授はせきを一つして、
「古い記憶の世界が、同時に新しくわれわれの中に今でも生きています。ほんのちよつとした波長のズレなんですね。それが反世界ですよ。」

「どうして事件は、奥多摩や阿蘇、それにキューバとかに限られたんですか。そうそう、サレアはサモア島の出身とかいうが、これも

関係があるのですか」

「いや、わかりませんな。これから科学的な調査が必要です。でも言えることは、地磁気と宇宙線の関係ではないかと思われることです。反世界が、この同じ場所で、銀座なら銀座の場所に、同じく同居している。その場所に居ながらその世界に入ることができない。しかし、どこかに袋のほころびというか、入口があるはずですよ。地磁気の関係でちょうどその一点につむじ風が起るぐあい、宇宙線のつむじ風というか、吹きだまりができる。その微妙な或る一点が、奥多摩や阿蘇を初め、世界の海上の処々方々にあるんですね。――」

わたしは、それでも十分にはっきりした意識を持っていた。それだけに人一倍の恐怖があった。わたしは既に、箕輪祥子の秘密を知っていたのだ。だから、彼女が司会者の指命を受けて、舞台上が上がってきたとき、思わず叫び出すところであった。彼女はきつとわたしを殺すに違いない。わたしは救いを求めたかった。だが観衆は、何事も知らずにこれ単なる余興と思って楽しんでいた。よしんばわたしが彼女に打ち殺されたとしても、ただ一匹のゴリラ男が殺されたくらいで、ことは

済んでしまう。

箕輪祥子は、恐しい目をしてわたしをにらんだ。女が権力者になったときの目があいう目だ。彼女はベルトを力いっぱい振り回した。激痛がからだ中を走り回って、わたしはのたうち回った。観衆は笑いながら見ている。もし、あの時、中村教授が飛び出してこなかったら、わたしは打ち殺されてしまっていただろう。

ああ、上島芙美子が、彼女らの真の女王であつたとは。こんな意外なことがあるうか。でも考えてみれば、そういう予感があつた。彼女に秘密があることは、前々からわたしにもわかつていた。むしろそうした秘密を、かばってきたのはほかならぬわたしだった。でも恐しいのはサレア、サレア、何という女だ。

目の前にサレアが居た。彼女は立ち上がってきて、われわれの方に手を差し伸べて言った。「いらっしゃるだろうと、お待ちしております」

「ほくらがくることが、わかっていたとおもおっしゃるのですか」

わたしを連れてきた上島氏が、わたしの横

の椅子にすわりながらそんなことを言った。

「そんなこと——」

といってサレアは笑った。鈴のような、余韻のある、澄んで美しい明るい笑いである。何ということだろう。何が起きているというのだろうか。この光景は、以前一度、わたしが通ってきた一つの記憶の中の部分ではないか。確実にわたしの横には上島氏が居る。わたしは夢を見ているのであろうか。それとも夢を見ていたのであろうか。そのどちらとも思えない。それは確かだ。

「あなた方は何にも知らない。わたしが全能の女王であることも、いずれわかる 때가 近いのですから——」

サレアは銀盆のグラスを差し出した。

「これはアマゾンのアコモヨという部落近くにある、バンジロウという果物の実から作ったお酒です。上島さんはお酒がお好きでしたね」

どうしたというのだろうか。何事も以前と同じ状態で進行しているではないか。

わたしは上島氏と連れ立って歩いている。何かを言い、それからのがれようとするが、それができない。そこは西荻窪の大阪商船の寮の前である。

上島氏は、わたしに芙美子を引き合わせよ

うとしている。

上島芙美子とわたしは、あいさつを交わした。以前、確かにわたしは、これと同じような調子で、彼女とあいさつを交わした。

わたしはわたしの全体を改めてながめ回した。わたしはわたしであって、ゴリラ男ではない。まして、箕輪祥子に打たれた傷など、どこにもあるはずがない。にもかかわらず、感覚の中では、あの苦痛がそのままに、確実に残っていた。

「上島さん、実はゴリラ男のことですがね」わたしは口を切った。

「ああ、あのゴリラ男、あれは有尾人の一種だと僕は思うよ」

さりげない言い方だった。

「ゴルドンの記憶とは、上島さん、何でしょう」

「わからんな。それは個人の中に、深く眠っている一つの記憶のカラクリなんだと思うけどな。でも、僕は大変興味があるね」

上島芙美子が横で艶然と笑った。それは誠にわたしにとっては、恐怖に価するものであった。

わたしは以来、回復しがたいほどの、強い女性恐怖症患者になったのである。

▼ゴルドンの記憶・終へ



読

者

コ

1

ナ

1



★すでにお読みになった方もあ
ると思いますが、中央公論「世
界の歴史」第一巻に、たいへん
ショッキングな話があるのでお
知らせしました。

漢の高祖は天下を統一して五
年目に死んだが、彼には八人の
子供がいた。上の二人は呂后の
子で、次は高祖が晩年もっとも
寵愛した戚夫人の子である。太
子は気が弱かったので、高祖は
おれに似ない鬼っこだと言って
これを嫌い、戚夫人の子如意は
おれによく似ているといって、
太子を殺して如意を立てようと
した事もあった。いつも軍に従
っていた戚夫人は、高祖に、泣
いて自分の子を太子にしてくれ
と頼んでいた。高祖が死ぬと、

好人物の太子が位につき恵帝と
なり、呂后が国政を左右した。
呂后はさっそく戚夫人を捕え、
その子の如意は召し出して斬殺
した。戚夫人の方は手足を断ち
目をつぶし、耳をそぎ、糞を飲
ませて声をつぶし、便所に置い
て人豚と名づけた。当時の便所
は豚を入れて人糞を食わせてい
たからである。数日たって、呂
后は恵帝を召してこれを見せた
ところ、恵帝はもとも気の弱
い人だから変りはてた戚夫人を
見て激しいショックを受けた。
恵帝はこの残酷な刑罪を止める
ことの出来ないわが身の不甲斐
なさ絶望のあまり、この日か
ら毎日酒を飲み、女にふけつて
まったく政治をかえりみず、つ

いに病氣となって七年目に死ん
だ。

さて、ここに当時の便所とあ
ります。小生は北支派遣軍と
して出征した時に、目撃しまし
た。野天に高さ三尺位の土塀で
囲まれた飼育場兼便所があり、
中はゆるい傾斜になっていて、
新しい人糞が入ると、高地で寝
ている豚が目覚めて、低地に
たまった人糞をブウブウ言いな
がら食べます。そして満腹する
とまた高地に戻って昼寝をする
のです。お互いからだを舐め
あうので、毛並みはツヤツヤし
ていました。北支では白豚は見
られず殆んど黒豚でした。戚夫
人もおそらく豚にまじって四つ
ん這いになって歩いて人糞が食

★このらの投稿はハガキで
結構ですからご自由にお書き
ください。

★今月掲載しました方には、
1月号および、S写真をお送
りします。誌上匿名は自由で
すが、住所、氏名はお書きく
ださい。（読者コーナー係）

べられるようにと、手は肘、足
は膝のところから斬ったと思わ
れます。また、まわりの豚はか
らだを舐めあうのできれいであ
り、豚の体温は高いので、豚と
豚の間に寝れば寒さを感じない
でしょう。北支は空気が乾燥し
ているので、厩の塀や地面はい
つも乾いており、人糞のたまる
低地だけが生々しい溜りで、他
は日本で想像するようなジメジ
メしたものではありません。だ
から呂后は、戚夫人がすぐ死ね
ば復讐を満足させられないので
相当期間生かして恥ずかしめを
続けた、と想像されます。

史記の翻訳をしたフランスの
史学者シャヴァンヌは、「タキ
ツスならば宮廷の悲劇の恐怖を
こんなふうには語らなかつたろ
う。彼なら、このあまりにも正
確な写真の代りに、陰惨にして
戦慄すべき絵画をもってしたで
あろう」と言っています。も
とは高祖の寵を一身にあつめた
戚夫人のこの絵画が、「裏窓」
に掲載されることをねがって止
みません。（東京・保科康三）
★読者に見捨てられなかった、
「裏窓」と喜びを分かち合いた
いくらいです。この本を守ろう
とする人々の誠意に、僕はなん

読者コーナー

とも言えないあたかみを感じます。十一月号では八巻令先生の「顔のない女」。これはすばらしいものでした。ことさら文芸雑誌とこの本の差異についてうんぬんする気持もありませんが、最近読んだ雑誌小説の中にも、これほどいいと思ったものはありませんでした。ご健闘を祈ります。(神奈川・狼伯爵)

★「裏窓」十一月号、ようやく手に入れ、拝見いたしました。最近、大阪地方では手に入れ難くなったので、毎号購入を終えると、ホッとします。そして、生き甲斐を感じます。表紙の感じが変わり、グラビアもオフセットも無くなりましたが、表紙なんか目立たなくてもよいと思います。とにかく、許される範囲でつづけて下さい。十一月号はグラビアは無くとも中身は充実、いままでにはない、すぐれた作品がのっているではありませんか。とくに現代の夫婦生活を扱ったもの「陰画」とか「顔のない女」とがよい。よくないものは「妖異蝙蝠城」とかいふ時代物。通俗といおうか、マンネリズムといおうか、とにかく作品全体に新しいアイデアがなくまたかという感じがして、読む

気がしません。しかし、雑誌全体としては、よく充実してじつくりと楽しめる内容となっていました。教会堂がこわされ、手をとられ、足をもがれても、信仰はいよいよ強くなるばかりだと思えます。

(大阪・黒田平一)

★十一月号！机の上に置いて、私は思わず頭を抱えていた。何と全く嫌な世の中になったものである。何と、この愛誌の変わり果てたこと——。折にふれ、この欄を利用し独りよがりの好き勝手な言い過ぎたようで、反省の意味も含めて少し慎しむつもりだったのに、自然に手が動き文字を書き始めた、という感じ。実は私も、最近の社会情勢に対応して「グラビア等を廃したなら」と以前から提案していた一人なのだが——。本誌の存続を願うという大義名文？がありながら、さて現実に対峙してみると、寒々とした寂寥を感じずにはいられない。そして、今日までの長い歳月、数葉のそのページの占めていた価値の偉大さを、しみじみと思い知っています。失望しながら期待しよう、と言った私なのに、発言と胸中が全く裏腹なのに自分でも

驚いている始末です。ここ二、三ヵ月、馴染むまではきつとこいう気持が継続するでしょうが、「裏窓」を愛していらつしやる皆さま、暫くは我慢しようではありませんか。私達は戦前戦後を通じて、度々耐える事を強いられてきましたが、今度もその一つなのでしよう。昔から格調高いと称せられる「評論文芸誌」は、挿絵というものがありませんでした。「裏窓」もその筋の権威者から、そういう高度芸術誌であると重要視？されてきた、と解釈し、誇りを持って行こうと私は思っています。

読者諸兄姉の批判も、恐らく今月が一番多いと思います。ただこのままでは私のような極致美愛好者は全く救われるところが無いので、本誌の代替物として耽美グラフィックなもの、「フォト集・絵画集」を、価格もなるべく多くの人に行き渡るように安価にして、ぜひ、継続刊行してほしい、とこれは編集部へお願いです。(京都・光谷東穂)

★初めてお便りいたします。私は本誌のファンになって満七年になります。私が初めて本誌を手にしたのは三十二年の夏の終りごろ、店頭でひよいと手にし

て以来病みつきになった次第。ところが最近気になることは、「S小説」が少なくなってきたいる事です。楽しみにしていた「パノラマ島秘譚」もなくなりました。例の公序良俗に……という事でしようが、つまらんことをごちゃごちゃ言うなあ、と残念でなりません。写真や絵もフェニクス商会のものが多くありますが、私は外国のものは好みません。S写真のモデルは日本の女性が身近に感じられて、とても楽しいのです。この場合時代物より現代風、特に「スリッパ」一枚で縛られているなんていうのがすてきです。私の住んでいる街には、どうした事か本誌が売られていません。それでいつも二十キロも離れた他の町へ「砂ほこり」をかぶって出かけている始末。いっそ通信販売を利用したらと思うのですが社宅に住んでいる都合上、私用郵便物等は全て文書係が配達します。ので、言いくいのですが本誌はあまり特殊な雑誌故他の連中に知られたくないのです。先日「耽美芸術グラフィック」を購入したが、あのように個人名で送付していただけたらと思っております。もしこの願いが可能なら

ば、本誌の片隅にでもこの旨を記していただけたらと思っております。よろしく願います。

(北海道・E生)

★お送りいただいた十一月号、手にしたときは一瞬、落丁品ではないか、とわが目を疑ったくらいです。金くたいへんな時勢になったものです。編集後記で編集長は反戦の立場をとっておられますが「自由の戦士」としてなら、私はその旗手たらんことを願っております。老人達がよく「古き良き時代」という言葉を使いますが、あれはうそで恐らく青春時代への懐古、と私は解しています。その意味で、今日から過去十年くらいが真の「古き良き時代」になることでしょう。「自由よ、さらば」なぜかそんな感懐が私の胸を去来してなりません。前おきが長くなりしましたが、十一月号の小説陣の充実が、わずかにその淋しさを救ってくれました。九十九十郎先生の「陰画」、八巻令先生の「顔のない女」等、いずれも甲乙つけ難い作品ですが、特に「顔のない女」はS小説中の白眉というべきでしょう。ただ惜しむらくは主人公夫婦の妥協で、千秋の心理の推移が今ひと

つ描き足りなかったように思えます。それさえあれば、おそらく大傑作となっていたのに、と残念です。安東泉先生の評論中「大別している」と保守派にSが多く……とあり、ちょっと引つかかるものもありますが、先生のこと、恐らく正確なデータにもとずいてのことと思いますし、私の知るSの人たちも、保守？と言えるかどうか、何か小意よくよくといった人たちが多いようですので、これは見送りましょう。「読者コーナー」のM氏のご意見ですが、私のようなマニアにとつては所詮、門外漢の感じで、作家のSM世界把握うんぬんはむしろコッケーです。ふた言めにマンネリと言いう言葉を耳にしますが、私はそれを「アカデミズム」と解釈しています。「妖異蝙蝠城」「煩惱縄」など、人がなんと云おうと私は喝采を惜しみません。前記「陰画」等が前衛派S小説ならこれらの作品はS小説の真髄というべきでしょう。サドの作品は個々の好みにもよるでしょうが、私には退屈以外の何ものでもなく、再読どころか一読にも堪え得なかったこと、付記して筆を置きます。(大阪・夢夫)

編集後記



▼写真と絵のページを減らした本誌については、読者のみなさまから、さまざまな反響がありました。

▼編集部の机にとどけられた読者からの賛否の数は、現在のところ五分五分なのですが、実際にはもちろん、ご不満と思われるかたのほうが多いことでしょう。つよくご不満のかたは、はじめからお買いにならないことと思います。

▼出版界全体の傾向としては読む雑誌から、見る雑誌へと移行しているのが現状ですが小誌では逆に、読む雑誌へと転換したわけで、それだけにやりがいがあります。

▼写真や絵でSMを表現することは、比較的やさしいのですが、活字だけでSMの真実を表現することは、これは、本物のS派でないと、絶対にできないことです。

▼いいかえれば、SMツけない画家でも、SMらしき絵は、一応は描けます。写真でも同じことです。しかし、小説、読み物の場合、本人にその傾向がなかったら、絶対にニセモノになります。こんなにはつきりと分離される文芸の分野は、他にありません。

▼これからの本誌に、ご期待ください。編集部一同、はりきっております。(飯田)



